

逃げるは恥だが鬼は死ぬ 《完結》

ラゼ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

絶対に戦おうとしない主人公が、なんやかんやで鬼殺隊と関わっていく話。回避力全振り。戦わないけど煽る。全力で煽る。

後日譚	後日譚	最終話	17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	
2	1																			
309	294	266	244	223	207	180	169	147	130	113	99	90	73	58	40	31	23	12	1	

目次

# 1話

『逃げ』とは悪いことだろうか？ 僕はそう思わない。戦うことが手段の一つだと言うならば、逃げることも立派な手段の一つだからだ。けして退いてはいけない時というものは、確かにある。しかしそれ以外の局面であれば、僕は逃げる。多少の損を押しでも、争いを避けたいからだ。

「逃げるな貴様ああ!!」

「逃げるに決まってるだろ！ バーカバーカ！ お腹空いてるならその辺の草でも食ってるバーカ！ もひとつおまけにバーカ！」

「こつ、の…… 必ず食ろうてやるぞクソがああ！」

争いが苦手——それは生来の性分であり、変える気も変えられる気もない気質である。とはいえただ逃げるのも腹が立つので、安全なところから煽るのもまた性分だ。それで争いごとが増えるなら意味ないじゃないかって？ 仕方ないじゃないか、悔しいんだもの。こつちは逃げてやつてるんだから、ちつぽけな自尊心を満たすくらい許されてしかるべきだ。

何から逃げてるかって？ 『鬼』だよ、『鬼』。そんなものがある筈ないなんていう突っ込みは聞き飽きた。僕も過去に生まれ変わるまでは、そんなの迷信だと思ってたさ。

なんの因果か明治時代なんか生まれ変わっちゃってさ……もう大正に変わったけど。いやまあ、それはいいんだよ。問題は僕の体質である。何故かは知らんが、昔から化物をよく引き寄せるのだ。

更なる大問題としては、それが原因で捨てられたことだ。そして最大にして最高の問題は、その体質のせいで人里に身を寄せ辛いことである。文明開化の音がぜんぜん聞こえてこないんですけど。

「ぐううう！ なぜ追いつけん……！」

「こちとら三才の頃からリアル鬼ごっこしてるんですうー！ ギリシャオリンピック出ようか考えたこともあるんですうー！」

身分も金もないから無理だったけどな！ それ以前に、当時六歳の子供が出れるわけなかったけども。しかし身体機能と肺活量、そして

体力が人間離れしているのは幸せなのか不幸なのか。もしそれが普通だったら、とつくの昔に死んでいたのは間違いない……が、この人生が幸せなのか不幸なのかは甚だ疑問である。

昔は男尊女卑の意識が強くて、風俗も乱れていた印象とかあるじゃん？ 簡単に可愛い女の子とお近づきになれると思うじゃん？ 意外とそんなことなかった。ぜんぜんそんなことなかった。

ついでに言うと鬼は夜に襲ってくるため、昼間は体力の回復に努める必要があるのだ。つまり僕は完膚なきまでに夜型人間であり、反して大正の人間は日の出てる内が主な活動時間だ。そんなとこだけイメージ通りにしないでいいんだよちくしょうめ。

「…… まずい、夜明けか——……っ!? しまっ……！」

朝日が顔を出し、ようやく命がけの鬼ごっこも終わりを告げる。日の出の時間が近くなると、さつきみたいに煽り散らかすのが基本である。鬼というのは、何故かは知らんが煽り耐性が非常に低いのだ。もちろん個人差はあるが、僕の目の前にいる鬼は見るからにそういう気質だ。

それを利用した地形的な罠を張ると、これが意外と有効なのだ。焦った彼が身を隠したのは、ぽつんと存在した大樹の影だ。というか、そこに行くしかないタイミングを図ってた訳だけど。実際問題、本気で逃げればあの程度の鬼を撒くのは訳もない。

「形勢逆転だねえ。ねえどんな気持ち？ いまどんな気持ち？」

「…… きつ、貴様……！」

「悪鬼滅殺……さきようなら鬼の君。お前もまた強敵だった……」

「バ、バカが……！ 近付けば即座に食ろうてやるぞ！ 鬼殺の剣士でもない貴様ごときに、儂が殺せるものか！」

……ん？ きささつの剣士？ 帰札……貴札……いや、『鬼殺』？ もしかして鬼を殺す専門の剣士とかいるのだろうか。しかし世は廃刀令の真っ只中であり、剣を帯びた人間など即お縄である。だいたいこんな化け物たち相手に、剣もクソもないだろう。あいつらは太陽の光でしか死なない、これ常識。

ヒテンミツルギスタイルでも存在するならともかく、人外相手には

剣より銃の方が有効に違いない。機関銃で挽き肉状態にでもすれば、再生にも時間がかかるだろう。まあ日没から夜明けまで撃ち続けるとなれば、弾の値段だけで屋敷が建ちそうな気もするけど。

「ふっ……人間の叡智を舐めるなよ鬼め！ 必殺！ 科学ビーム！」  
「ぎっ……!? ぐああああっ！」

苦し紛れに吠える鬼を目の前にして、懐から取り出したるは『太陽光線反射装置』……要はただの鏡である。角度を調整して鬼に光を当てると、これが効果覷面。当てた端から体が崩れていく様子は、ちよつとした恐怖である。苦しげに呻きながら滅んでいく様は、なんだか罪悪感を覚えるが……しかしさつきまで僕を食おうとしていた存在だ。情けなどかけられる筈もない。

「ふう……ん？ 何か残ってるな……おおっ！」

陽に当たった鬼は塵一つ残さず消えていくが、たまに持ち物を遺して死んでいく鬼もいるのだ。ドロップアイテム……などではなく、ただの持ち物だ。もつとシステムチックな感じだったら、僕も結構レベル上がってるだろうにね。しかし現実は厳しく、鬼を倒したからといって身体能力が上がったりする様子はない。

まあそれはともかく、今は彼が遺した財布についてだ。人間に紛れて生きる鬼も稀に存在するため、金を持つている鬼というのも居ないことはない。ほぼ人間のような鬼から、ガチの化物のような鬼まで様々だが——先程の彼はおおよそ人間の外見を有していた。故に上手く偽装していたのだろう。財布には結構入ってる。かなり入ってる。具体的に言うなら、遊廓で遊び散らかせるくらいには入ってる。

……経済というのは、金が回ることによって成り立っているものだ。ここで財布ごと朽ちて消えゆくのは、世の中にとって多大な損失である。なればこそ、正常な流れに戻してやることこそが正しい行動ではないだろうか——よし、理論武装完了だ。名も知らぬ君よ、この金は大切に使用させて頂きます。具体的に言うなら可愛い女の子のために使わせて頂きます。いやっふう！

文明開化、そして機関車。新幹線や電車に比べれば古臭い印象は拭えないものの、石炭の何とも言えない香りが、現代人の精神を捨てきれない僕の心を癒してくれる。およそ文化的とはいえない生活に強いられていた僕だが、先日手に入れたお金を使用し、身なりはそこそこ裕福な感じに整った。不潔な人間が嫌われるのは、どんな時代の風俗でも同じである。いざ列車に乗って、遊廓へ向かうとしよう。

：ん？　なんか猪の被り物をしたヤベエ奴が、列車にガンガン頭をぶつけているが——いや、ヤバすぎでしょ。鬼じゃないよね？　どうやら三人組のようだが、他の二人も割とヤバそうだ。というのも、こんなご時勢だというのに刀を差しているのだ。しかも一人はなんか金髪だし……どう見てもアジア系人種だから、地毛という訳でもないだろう。この時代に染める人とかいんの？

一本遅らそうかな……いや、でもそれだとかかなり待たされる。溢れる性欲の前には、多少のキチ案件など障害にもならない。ここも都会だし、そういう店がない訳でもないんだけど、やはりやるからには質を求めたい。あとあまり安いと病気が怖い。遊廓だつて危ないっちゃや危ないだろうけど、当たる確率は下がる筈だ。

三人組から離れるために車両を進んでいると、なにやら独特な髪型をした男性が弁当を食っていた。何箱食うとんねん。うまいうまいと叫んでいるが、そんなに美味しいのだろうか？　もしや駅弁会社の回し者で、あれは俗に言うステルスマーケティングなのではなからうか。あの目立つ髪型も、広告塔として目に止まらせるためということ

であれば、納得できる。

「弁当一つ」

「まいごー」

買ってしまった……あんだけうまいうまいと連呼していれば、それも仕方ないだろう。うむむ……割と美味しい。しかしどうにも、薄味感は否めないな。野宿が多い関係上、食事は野草や獣肉がメインなのだが——これがあまり美味しくない。臭いし苦いし、現代の品種改良の素晴らしさをことさらに感じさせられる。

それをどうにかするための秘訣が、味噌である。とにかく味噌で煮込めば、大抵のものは食えなくもない味になるのだ。塩分過多で腎臓が心配だけど。あと今回みたいに都会に降りてきた時、食事が薄く感じるのも困りものだ。

弁当を食べ終わると、催してきたので便所を探す。僕は食つたらすぐ出るタイプなのだ……まあ割とそんな人は多いだろう。食事により腸の運動が促進され、便意を催すメカニズムらしい。それはともかく、トイレトイレ……トイレ……あれ、ないな。

……もしかして列車ってトイレない感じ？ 嘘でしょ？ 到着まであとののくらいだろう。便意はともかく、尿意はきついぞ。ううむ……そうだ、最後方には外に出られる場所があった筈。この際、仕方がないだろう。列車内で漏らすよりはマシと思っていたどころ。

凄いい勢いで後方に撒き散っていくお小水を眺めつつ、暗闇の中流れていく景色に思いを馳せる。列車はやっぱり速いなあと思いつつも、よく考えたら僕の全速力より遅いことに気付く。あれ、いつのまにか人間やめてない？

……まあ鬼がいる世界だし、実は過去じゃなくて異世界とかそんな感じかもしれないな。先日のお鬼さん曰く、鬼を殺すための剣士もいるようだし、だとするとその人達だって化け物じみた身体能力を持つ筈だ。じゃないと鬼なんて狩れる訳がない。

「……寒っ！ そろそろ戻るかな……ん？」

みんな寝こけてるな。そんなに列車の揺れが気持ちよかったのかな？ ——いやいや、おかしいおかしい。もしかして睡眠ガス？ バ



トルロワイヤルでも始まるの？ いや、まさかだろう。完全にホラーと化した列車内を進むと、なにやら前方から激しい物音が聞こえてきた。

「シイツ——！」

「どわっ!？」

「むっ…！ 眠りに落ちていない者もいたのか。すまないが説明している時間はない！ 事が終わるまでそこを動かないでくれ！」

次の車両へのドアを開けようとしたら、炎っぽいエフエクトを纏った男性が剣を振りながら蹴破ってきた。すると壁のそこかしこから気味の悪い肉塊が飛び出してきて、眠っている乗客を襲い始めた。いやもう、なにこれ。悪い夢にしても限度ってものがあるだろう。

「ぬおっ！ てえい！ ——キモいキモいキモい！ なにこれ！」

「…！ 手助けは必要なさそうだな！ そのまま逃げ続けていてくれ！」

「いや、ちよっ」

バツサバツサと肉塊を切り落としていく男性は、凄まじい速度で後方の車両へと突っ込んでいった…：かと思えば、すぐに戻ってきてまた無双し始めたりと、忙しそうだ。というかこの人数を同時に守てるのか？ 凄すぎてビビるわ。

——つとと。このキモい肉塊だが、それなりに動きの制限はあるようだ。少なくとも全方位から圧殺できるほどの質量は持っていないし、人の襲い方もどうやらオートな感じである。慣れてくれば避けるのは訳ないが、しかしいつまで続けられたいことやら。

窓から飛び降りて逃げることはできるが、それは乗客を見捨てることと同義だ。『退くべき時』があるなら、それは今じゃない…：僕にながでできるとも言えないが、最低でも一人二人を抱えて逃げるくらいはできる。この車両から最後尾までは男性が守り続けているようなので、邪魔にならないよう前へ進むことにした。

…なぜか列車の中で雷鳴が響いていると思えば、乗客を肉塊から守る可愛い鬼がいた。どういう状況なの？ 不思議な力を持つ鬼がいることは知っているが、人を守る鬼がいるとは寝耳に水である。あと

金髪の少年は鼻提灯を膨らませながら戦ってるんだけど……情報量が多すぎて困るぜ。

まあ推測するに、彼等こそが『鬼殺の剣士』とやらなのだろう。しかしこの列車を襲っている鬼がいたとして、今まで僕が見てきた鬼とはかけ離れた実力だ。こんな大規模な力を行使する存在に襲われたことはない。不幸だ不幸だと思っていたが、意外と運が良かったのかもしれないな。

「——っ！」

更に前へ進むべきかと思案していると、凄まじい衝撃と共に列車が跳ねた。手が届いた一人だけを抱え、宙に浮く列車の窓から脱出したが——なんとまあ、阿鼻叫喚の絵図である。鉄の箱の中でシェイクされて、無事でいられる人間は少ないだろう。

しかし砂埃を上げている列車の内部を覗き込むと、怪我だけで済んでいる人が大半だった。あの肉塊が逆にクツシヨンの役目を果たしたのだろうか？ とにかく視界に入る限り、死者は出ていないように見える。鬼殺の剣士ばねえ。

前方の車両付近を窺うと、額に痣のあった少年が倒れ込んでいるのが見えた。服でよく見えないけど、お腹から血を流しているようだ。そんな彼に先程の男性が近付いていったので、僕もなんとはなしに付いていく。ちらりと僕を見た男性は、目を細めて少しだけ微笑んだ。あらやだ、かつこいい。カリスマってやつかしら。

息を荒げてお腹を押さえている少年の、その額に指を当てる男性……おおっとお。もしかしてそういう関係？ そういう関係なの？ 呆然としている少年と、ふわり微笑む男性。なぜか腹の血が止まったようだが、これも愛のなせるわざってやつだろうか。

——そんな彼らをワクワクしながら見ていると、なにやら轟音と共に鬼が降ってきた。どうやら今日の天気は晴れ時々鬼らしい。右目に『上弦』、左目に『参』の文字……イジメかな？ 瞳にタトウとか、拷問以外の何物でもないだろう。そうすると、体に刻まれた紋様も『罪人の証』の延長に見えてきて可哀想だ。

…そして唐突に始まる人外の攻防。いや、なんだあれ。鬼が再生す

るってのは知ってるけど、それは相応に時間がかかるものだ。弱い鬼なら、体をバラバラにすれば夜明けまでそのままなんてこともある。ピアノ線トラップで試したから間違いない。

だというのに、『猗窩座』と名乗った鬼は斬られた端から再生しているのだ。質量保存の法則はどうなっているのだろうか。もしかして鬼を食料にすれば、世界の食糧事情は解決するのでは……うえっぶ、想像すると気色悪くなってきた。

「……う、あ……」

「クソ、入れねえ……！」

凄まじい戦いの様子に、冷や汗をかきながら気圧されている少年……と、猪。いつの間に来たんだ。どうやら男性と彼らの実力には隔たりがあるらしく、下手な援護は邪魔になってしまいううだ。しかしそれならそれで、やれることはあるだろう。僕は二人に近付いて声をかけた。

「——動けないなら動けないで、やれることをしようぜ」

「え？ あ、えつと……あなたは……」

「何もできねえから動けねえんだろうが！ 剣も持ってねえ奴が出しゃばってんじゃねえ！」

少し体を震わせてすらいる猪に、僕はため息をつく。まったく、子供はこれだから。しかし痣の少年はなにかに気付いたようで、感謝するように僕の瞳を真っ直ぐに見つめてきた。うむ、やっと理解してくれたか。

「やるべきことは解ったかい？」

「はい！ ……伊之助！ 今の俺たちじゃ力になれないけど、応援くら——」

「そう、あの鬼を煽るんだ！」

「——いはできる、って、えええ……」

バスケの応援然り、サッカーのフリーガン然り、『野次』というのはことのほかメンタルにダメージを与えるのだ。本拠地での試合か敵地での試合かが勝率に影響を及ぼすのは、実際に数字として表れる。種族は違えど同じ言語を使用しているんだし、罵倒だって効くだろう

……というか今までの鬼は効いてきた。

「へいへいへい！ ピッチャービビってるうー！ 武の道極めるとか言ってるけど、人間だったら何回死んでるのおー！ 再生頼りの猗窩座！ へーいー！」

ビキリと殺気がこちらに向かった——怖つ。しかし一瞬の隙が勝敗をかけるような状況で、それは悪手だろう。男性から放たれた鋭い斬撃が頸へと奔り、薄皮よりやや深く表面を裂いた……ん？ 頸への斬撃を必死に避けた……ってことは、そこが弱点なのか？ いやでも、それだつて試したことはある。頸を切り落としたつて、鬼は死なない筈だ。なにか条件があるのかもしれないが、とにかく今は『煉獄』と呼ばれた彼の勝利を祈ろう。

「ほら君たちも！」

「え、い、いや……」

「死ぬオラアア！ ゴミ虫毛虫のこんこんちきが！ ボケエ！」

「君、筋がいいね！」

「おうよ！ 任せろ！」

「え、え……頑張れ煉獄さん！」

「君は筋が悪いね」

「う、う……」

「う・う・うつで切れたー！」

「腕切れやがった！」

「はい！ はい！ はい！ 人間だったら何回死んでるのー！」

「ゲハハハ！ 百回は死んでるぜ！」

「へい、へい、へい、へい、猗窩座！ おーまえーが男なら！ ここで一発ぶつとばせ！ へい！ 一発だけでもぶつとばせー！ ウオウオウオウオウ！ え？ 無理？ 知ってた！」

オタ芸を併用しながら煽りまくる。猗窩座さん、顔に血管が浮き出すすぎて、狂経脈みたいになってて草。しかしこちらへ意識を向けようものなら、煉獄さんの刃が彼を仕留めてくれるだろう。安全なところからの野次とは、すこぶる気持ちがいいものである……ん？

「——貴様から殺す……！」

憤怒を超えた憤怒を更に超えた憤怒の表情でこちらへ突進してくる猗窩座さん。ちよつ、煉獄さんなにやってんの！ やめてこないでちよつとしたジョークだったんだ可愛い嘘ってやつさあばばば！

「ぎいやああ!!」

「殺す、殺す殺す殺す…!」

「——速い…! 追いつけん…!」

「煉獄さんが追いつけない猗窩座が——追いつけないあの人って…」

「俺にはわかるぜ! アイツは『煽り神』だ!」

「そんな崇り神みたいな…」

へ、へーい、お、鬼さんこちつ、ダメだ煽る暇もない。いや、いま煽っても意味ないけど。しかし、しかしだ。夜明けまでの鬼ごっこを何度も繰り返してきた僕にはわかる。もうじき陽が昇る…:時間にして一分もないだろう。なんのてらいもなく、これだけは言つてやる——逃げ足で僕に敵う奴は、存在しない。

「…貴様の顔——覚えたぞ…!」

「え? 尻尾巻いて逃げるんですか猗窩座さん! あとちよつとですよ! 手を伸ばせばすぐそこに!」

「…次は殺す」

くつ、存外に冷静だ。見るからに脳筋っぽいのに、白む空を見止めると踵を返して森に消えていった。まあ日本は広いし、僕がことさらに居場所を喧伝しなければ、二度と会うこともないだろう。今までの経験からして、鬼同士にネットワークがあるようにも見えないし。

「…助けられたな。あのままでは負けていた可能性の方が高かった」

「そうなんですか?」

「おそらくな——だが! 負けたままでいるつもりはない! 俺はまだまだ強くなる…:そして! ここ上で上弦の強さを確かめられたことは、何より大きい。戦い方一つ知っているかどうか、勝敗の決め手になることもある。礼を言わせてくれ…:ああ、そう言えば名前も聞いていなかったな。俺は『煉獄杏寿郎』だ」

「匿名希望です」

「『希望』か! 良い名前だ!」

「なにその天然」

「いや、冗談だ」

「分かりづらっ！」

「よく言われる！」

カラカラと笑う彼につられ、つい笑顔が零れる。遠目に金髪の少年が見え、やたらと大きい籠を担いでいる様子が見て取れた。それを見た少年二人が、彼の方へ向かって走っていく。なんというか、まあ……あんな子供たちでも鬼殺の剣士というのだから、頭が下がる思いだ。

優しげに彼らを見ている煉獄さんに手を差し出して、僕は——本当の名を告げた。

## 2話

さてさて、戦いに際して乗客も怪我人だらけではあったのだが——鬼殺の少年たちの方も、これまた満身創痍であった。しかし杏寿郎はというと、あれだけ激しい戦いだったというのに大した支障はないらしい。『上弦の鬼』の情報共有ということで、柱合会議とやらの召集をかけていた。『よもやこの短期間で』などと呟いていたが、いまいち意味はよくわからない。

しかし『上弦の鬼』か……なにやら日本には超強い鬼が十二体もいるらしく、『十二鬼月』などと呼称されているとのことだ。猗窩座さんは上から数えて三番目らしいが、あれで三番手とは戦々恐々である。彼との鬼ごっこはギリギリ僕の勝ちだったが、あれより速い鬼がいるとか不安しかないんですけど。

いやまあ、それはともかく——聞いてくれ、実はかくも素晴らしき朗報があるんだよ。僕の体質についてなんだが、彼ら『鬼殺隊』にとってはなんと既知のものであったのだ。『稀血』などと呼ばれているらしいが、要は鬼にとって非常に美味そうに見える人間であり、なおかつ食べばパワーアップも見込めるレアモノなのだ。

自分がメタルスライム扱いされるとは思ってもみなかったが、しかしなんと、なんとなんと、それを中和するアイテム……鬼を寄せ付けないアイテムが存在するらしいのだ。

ただ一つ問題があつて、彼ら曰く、僕ほどの頻度で鬼に襲われる例は早々ないらしい。それが意味するところは、『稀血』としての純度の高さだ。『純度の高い稀血』——めっちゃカッコいい響きだというのに、特殊なスキルは皆無である。餌としての価値が高まるだけとか、なんて酷い転生なんだ。

鬼避けのアイテムは、基本的に隊員付きの『烏』が常備しているらしいが——僕には効果が薄いかもしれないそうなので、毒や薬の専門家である『胡蝶しのぶ』さんの屋敷へと向かっているとところだ。

『蝶屋敷』と呼ばれているそこは、怪我人の治療などもしているらしく、炭治郎少年たちも一緒に向かっている。

背中に『隠』と書かれている、ぜんぜん隠れていない人たちに案内されてそこへ向かっているのだが……めっちゃ目立って仕方ない。忍ばない忍者なみに、隠れていない『隠』である。

「ひゅーー！　これで原始的な生活ともオサラバだぜー。人生バラ色どどめ色！　ありがとう鬼殺隊ー！」

「どどめ色ってどんな色なんですか？」

「『定義のない色』さ。『自分の色は自分で決める』……カツコよくないつ？」

「はい！　すごく良いと思います」

うーん……これほど裏表がなく素直で優しい少年も珍しい。シヨタ趣味もホモ趣味も一切ないが、何かに目覚めそうな気分である。額の痣が気にならないほど、見ていて気持ちのいい少年だ。あと猪の少年は、被り物を脱いだら美少女顔だった。何かに目覚めそうな気分である。

「あ、そういえば千里せんりさんに聞きたいことがあったんですけど……」

「なんだい？　今なら安くしとくぜ」

「はい、えつと……ええつ?!　い、今いくら持ってたつけ……」

「冗談だよ。それで、なんだい？」

「あ、あはは……ええと——そうだ、千里さんの人間離れした速度の秘訣というか、どういう理屈なのかと……」

「ああ、それは……んー……『特殊相対性理論』ってわかる？　八年前に『アルベルト・アインシュタイン』が提唱した、等速運動とか慣性系の原理から導き出された理論なんだけど……」

「へ？　えつ、え……」

「いわゆる『ニュートン時空』的に信じられていた天体はね、ガリレイ変換を考慮した一部の場合においてローレンツ変換が正しいことを示したんだけど……つまり時間と空間に関する相互間の変換は……」

「あ、あう……」

「まあそれはぜんぜん関係ないから置いといて、足の速さの秘訣は普段の走り込みさ」

「関係ないんですか!？」



ショックを受けたように目を見開く炭治郎少年。伊之助少年と善逸少年も、思わずといった風に突っ込みの声を上げている。というか『隠』の人も突っ込みできた。そのせいでおぶさっていた炭治郎少年が放り出され、コミカルな悲鳴を上げながらのたうち回っている。

「スポーツ、格闘技、剣術……なんであれ、鍛えるためには走り込みさ。目的のためだけに特化させた筋肉つてのは、長時間の動きに対して脆い部分があるわけ。『動作』つてのはどうしたって全身運動になる……満遍なく鍛えたほうが良い結果が出やすい——特に走り込みによる下半身全体の強化は有用だろうし。君ら鬼殺の剣士なんかだと、敵が無限の体力持つてるようなもんだろ？ 継戦能力を鍛えるに越したことはないんじゃないかな……まあ素人がどうこう言うのもアレだけど」

「なるほど……」

うんうんと頷く炭治郎くんを見ると、真面目な部分に感心する反面——こんな子供が鬼を殺すため、真剣に考えている事実が物悲しくなってくる。『隠』のマークの方々も、顔は見えないが明らかに若そうだ。若い身空で、なぜこんな危険な職業に就いているのやら。

「炭治郎くんはなんで鬼殺隊に入ったの？」

「あ、ええと……」

ふむふむ、家族が皆殺しにされて……唯一残った妹も鬼になって……ほうほう……禰豆子ちゃんを人間に戻す方法を探しつつ、鬼の被害にさらされた人たちを助けて……ははあ……鬼の大元『鬼舞辻無惨』を倒すために奮闘していると。

……あれ、僕の不幸とかぜんぜん不幸じゃなくない？ なんて笑っていられるんだこの子は。メンタルやべえ。なにかしてあげたくなる人間つてのは、こういう子のことを言うんだろう。とりあえず、懐に忍ばしておいたべつこう飴をあげた。

「あー……うん、頑張つてね。僕にも手伝えることがあったら、遠慮なく言っておいで」

「ありがとうございますー！」

「……善逸少年も、そんな感じ？」

「え、いや俺は…」

ふむふむ、悪い女に騙されて……唯一残ったのは借金のみで……ほうほう……借金を肩代わりしてくれた師匠に無理やり送り出されて、いつ死ぬかビクビクしつつ任務を……ははあ……禰豆子ちゃんが人間に戻ったら、毎日一緒にうなぎを食べてキャツキャウフフと過ごしたい？

…あれ、彼の不幸って割と自業自得じゃない？　なんで笑っていられるんだこの子は。あとメンタル弱え。無理やりなにかやらせたくなる人間ってのは、こういう子のことを言うんだろう。とりあえず、懐に忍ばせておいたべっこう飴をあげた。

「ふむふむ、合計七人の女に騙されたと……あのさ、頭の中身までまっきんきんなの？」

「そこまで言う!?!」

「まったく、親の顔が見てみたいぜ」

「——捨て子だよちくしょう！　名付けられた覚えもねえよ！」

「へえ……まあそんな感じの顔してるよね」

「うおおお！　侮辱にしてもひどすぎる！　——そういうアンタはどうなんだよー！」

「僕？　僕もまあ捨て子だけど」

「ぷぷつ、そんな感じの顔してるもんな」

「——喧嘩売ってんのかテメエ……！」

「自分が言ったこと覚えてる!?!」

ギャーギャーと情けなく喚いている善逸少年だが、しかし列車での大活躍を僕はすっかり見ている。斬り込む時の速度だけなら、杏寿郎に勝るとも劣らない速さだった。何もできない何も成せないと嘆いているが、少なくとも何十人かの命を救ったのは彼だ。それを指摘すると、なぜか不思議そうな顔をしていたけど。

そんな風にお喋りに興じつつ歩くこと数時間……炭治郎少年の顔色がいよいよ悪くなってきたところで、目的地が見えてきた。善逸少年曰く、可愛い女の子たちと過ごせる夢の館——『蝶屋敷』だ。

——屋敷の主『胡蝶しのぶ』さんは柱合会議へ向かっているとのことで、僕の体質に合わせた薬香の作製は、少しばかり待たなければいけないようだ。しかし毒と薬と薬と医術に精通し、剣においても組織の最上位とはなんたる才女であろうか。それでいて見た目も美しいと善逸少年が太鼓判を押していたので、もはや神の寵愛を受けていると思えないぜ。

…と言いたいところだが、鬼殺隊に所属している人間は大抵の場合『被害者』らしい。鬼によって大切なものを殺された、奪われた、あるいは人生を捻じ曲げられた…そんな人間が多数を占める。それ以外にしても、食い扶持のためや、みなし児故に行き場なくしてと、基本的に幸薄い人間が多い。胡蝶しのぶさんの経歴に関しても、炭治郎少年が言葉を濁していたのでなんとなく察することができた。

鬼殺隊の人に対しては、不用意に過去を聞くような真似は慎んだ方がよさそうだ。しかし『鬼舞辻無惨』…あまりに非道だ。彼が仕出かした行為の、ほんの一部分でさえ聞くに堪えない凄惨さである。もし僕の目の前に現れたならば、あらん限りの罵声を浴びせつつ全力で逃走してやろう。

…しかしさつきから騒がしいな。一番傷が深かった炭治郎少年の処置も終わり、にわかにあつた慌ただしさも鳴りを潜めていたんだけど。

「ダメですー!」

「ダメー!」

「治ったわけじゃないんです! 動くとも傷が開きますよ!」

「…」

縁側でお茶をすすっていたんだけど、外から回り込んで声の方へ向かうと——ハーレムを形成している炭治郎少年の姿が見えた。幼女が三人、少女が二人。

進もうとする炭治郎少年を掴んで引き留めようとしている。ストップ高だった炭治郎くんへの好感度が、ここへきて遂に下降に転じた。マックスを百として、今九十三くらいである。モテる男へのやつかみは、男の本能なので仕方ない。

「騒がしいけど、どうしたの?」

「っ、千里さん…」

「煽りちゃんも言ってたけど、動くと傷に障るぜ」

「アオリじゃなくてアオイです!」

「だけど…一刻も早く煉獄さんの家へ行きたいんです!」

「杏寿郎の家?」

「はい、きょう…って、ええっ!」

え? いつの間にか下の名前で呼ぶ仲間になったんだって? 僕って割とコミュ力高い方だからさ。ついでに言うと彼は二十歳で、僕が二十三歳だからだ。

君にとってはお偉いさんの存在かもしれないけど——鬼殺隊の人間じゃない僕からしたら、対等に接して何か問題がある訳でもない。あんだだけ熱い握手を交わしたら、そりゃ友達にもなるってもんさ。

「——あ、勘違いしなくても大丈夫だぜ。君から杏寿郎を奪うような真似はしないさ…そういえばどっちが受けなの?」

「言っている意味が一ミリも理解できないんですが!」

「恋人なんだろう?」

「ぶふううっ!!」

「…っ!」

「えっ…」

ん? …ほほう、少女二人の動揺から淡い恋心が垣間見える。逆に三人娘の方はというと、ボーイズなラブにキヤイキヤイ黄色い声を上

げている。どれだけ時代が変わろうと、やはりそこには一定の需要があるらしい。

——ちなみに自分で言うのもなんだが、僕は人の心の機微に聡い。『煽る』とはすなわち、対象が何に怒りを覚えるのか、短時間の内に押し量らねばならないからだ。

つまり炭治郎さんと杏寿郎がそのような関係でないことは当然把握しているが、しかし女性まみれになっているうらやまけしからん少年には丁度いい燃料投下だろう。

「まあそれは置いといて、傷が開くといけないから病室に戻ろうね」「わわっ、つと……じゃなくて！ 置いとかないでほしいんですが！ そんな関係じゃないですから！」

少女たちをペツペツと剥がし、炭治郎くんを担ぐ。一昼夜逃げ続けられる体力を持った僕の体は、それ相応に体格にも恵まれている。お腹には当たらないよう持ち上げて、そのままベッドへと担ぎ込んだ。「なんだってまた杏寿郎の家？」

「…歴代炎柱の手記がそこに遺されていると——夢を見た時にそれを出したと、煉獄さんが言っていたんです。もしかしたら、そこにヒノカミ神楽の秘密が記されているかもしれない……」『いつでも訪ねるといい』と言ってくれたので！ 居ても立っても居られなあゝあゝ ああ！」

「落ち着け少年」

「お、おちっ、おぐう……！」

やべっ、少し強く押しすぎたか。締められた鶏のような声が、炭治郎さんの喉から絞り出された。しかし愚直と言うかなんというか……もし杏寿郎が死んでもいたら、たとえ這ってでも家に向かっていたんじゃないだろうか。

「いつでも来ていいって、傷を押しでもってことじゃないと思うけど。半死半生の人間に來られたら、あっちも困るでしょ」

「はうっ……！」

「傷が治るまで待てないんなら、僕が行って貸してくれるように頼むからさ。しばらくは安静にしときなよ」

「それは、でも……千里さんに申し訳ないです」

「遠慮しないでいいって。拾円じゅうえんでいいぜ」

「絶妙に高い！」

『世界最速の飛脚』を謳ってる、千里便で御座います。あ、銀貨なら半額でいいけど」

しよぼくれた顔の炭治郎くんに『冗談冗談』と笑いかけながら、頭を撫でる。まあ飛脚をやっているのは冗談じゃないけどね。とはいえ、流れの飛脚など信用もクソもあったものではない。足元見られまくるし、そもそも頼まれる機会もほとんどない。それでも、人里へ長居したくない僕にとっては都合の良い職業なのである。最低限度の小遣いさえ稼げれば、あとは自給自足だ。

——さて、それはともかく……日の出てる内に動くとするか。どのみち胡蝶さんは日を跨ぐ可能性の方が高いらしいし、全力で走れば、彼女が帰還するまでに僕も帰ってこれるだろう。



ふー、到着つと。住所は教えてもらっていたが、現代のように詳細な地図やら親切な案内板はない。近くまできたら聞き込みと勘を頼りにするのが、この時代の常識である。まあ人と人との距離が近いので、未来に比べればずいぶん親切に教えてくれる人が多いけどね。

立派な門構えのお屋敷——その真ん前でお掃除をしている、ミニ杏寿郎。シヨタ寿郎とでも名付ければいいのだろうか？ 限りなく百パーセントに近い確率で、杏寿郎の弟だろう。兄よりは覇気が薄いも

の、そのぶん穏やかな雰囲気を纏っている。そんな彼をじつと見てみると、はてな顔で声をかけられた。

「…？ あ、あの、家に御用ですか？」

「いえ、特には」

「そ、そうですか…えつと…じゃあなぜ立ち止まってらっしゃるんですか？」

「ええ、少しこの家に用があつて」

「どつちですか!？」

うーん、性格は意外と似ていないようだ。杏寿郎なら『そうか！

歓迎しよう!』くらいは言いそうなものだけど。とりあえずシヨタ寿郎こと千寿郎くん<sup>に</sup>事の経緯を伝え、歴代炎柱の手記を持ち出させてくれないかとお願ひする。

鬼殺隊の技術やらなんやらは別段隠すようなものではないらしいし、快く貸してもらえろと思つていたが——少し感触が悪い。大事なものだから、持ち出しは厳禁なのかな？ それなら内容だけでも確認して、炭治郎くん<sup>に</sup>に伝える形でもいいのだが…：：：そう言おうとしたところで、屋敷の中から誰か出てきた。

酒が入っているっぽい瓢箪を片手に、不機嫌な表情でこちらを睨みつけてくるオジ杏寿郎。パパ寿郎とでも名付ければいいのだろうか？ 限りなく百パーセントに近い確率で、杏寿郎のお父さんだろう。どうなつてんだ煉獄家の遺伝子は。

「誰だお前は、さつきから騒々しい…!」

「お初にお目にかかります…：：：飛鳥千里と申します。訳あつて歴代炎柱の手記をお借りしにきました、パパ寿郎殿」

「誰がパパ寿郎だ! —— だいたい、炎柱の手記だと？ あんなものになんの用がある!」

「私も詳しくは。ですが『ヒノカミ神楽』という舞が、鬼に有効な手立てとなる可能性があり——炎柱の手記に、それにまつわる何か書かれてるかもしれない…：：：とのことです」

「…バカバカしい。そもそも炎の呼吸如きに——いいや、それどころか水も岩も…! 風も雷も! そんなまがい物の呼吸なんぞに答え

を求めること自体、愚かの極みだ！」

「まあそれは置いといて、貸してもらえますか？」

「置くな！ お前、話を聞いていたのか!？」

「いや、私に言われても困るので。それにまがい物と仰いましたが、杏寿郎の力は本物でしたよ。上弦の鬼相手に一步も退かず、全てを守り通しました」

「上弦の鬼と戦った——それがなんだ！ 百年以上倒すことが叶わなかった上弦の鬼……ん？ 上弦の鬼と、上弦の鬼が、上弦の杏寿郎と戦っただと…!？」

「あの、酔ってますか？」

次第に呂律が回らなくなっていくパパ寿郎さん。杏寿郎の父親とは思えないほど、情けなさが滲みでている。そしてそのまま床に突っ伏して寝てしまった。千寿郎くんが申し訳なさそうに彼を運び、そのまま居間へと案内してくれた。なにやら『炎柱の手記』に心当たりがあるらしく、持ってきてくれるとのことだ。

…しかしながら、一冊の本を待つて戻ってきた彼の表情は芳しくない。その疑問は、開かれた本の中身を見て氷解した。ガッツリ破れまくりで、とてもじゃないが読めたものではなかったのだ。

「父がすみません…」

「ううん、今日は日が悪かっただけさ。もしかしたら生理だったのかもしれないし」

「父上は男ですが」

「一応、生物学的には男だって生理はあるよ」

「えっ…！ ほ、本当ですか!？」

「ううん、冗談」

「ええ…」

「じゃあまた日を改めて来ます……パパ寿郎さんにもよろしくね」

「ちよつ、え、ええー…?」

あまり長居すると日が落ちるかもしれないし、今日のところは諦めるとしよう。それに中身を破ったのがパパ寿郎さんだとしたら、内容を知っているのは彼自身に他ならない。酔いが醒めるまで中身を知



る方法はないだろうし、そもそも今のままじゃ教えてくれなさそう  
だ。

炭治郎少年の怪我也一日二日で治るようなものじゃないし、しばらくは夜討ち朝駆けで訪ねるとしよう……いや、夜はダメだな夜は。朝駆けしまくろう。

### 3話

パパ寿郎さんの家を訪ねること三度目……お土産のアイスクリームが効いたのか、いつもは瓢箪が飛んでくるところ、本日はおちよこが柔らかく飛んでくるだけにとどまった。千寿郎くんにもおすそ分けすると、花が咲いたような笑顔を見せてくれた。甘いものは嫌いじゃないようだ。

アイスクリームが売っている浅草から、この駒沢村までは二十キロ近い。溶ける前にお土産として持ち込めるのは僕くらいのもものだろう。稀少性というのは、それだけで贈り物に価値を与えるのだ。まあそれ以前に、この時代だとガチの高級スイーツだけだ。着物代に散髪代に食費に今回のスイーツがトドメとなり、もはや遊廓で遊ぶ計画は終了のお知らせである。女性の肌が恋しい。

——そんなこんなでいつもより長居してしまい、帰る頃には日が暮れそうになっていた。千寿郎くんが宿泊を勧めてくれたものの、僕の体質が鬼を惹き寄せる可能性もあり、惜しみつつも辞退した。パパ寿郎さんは元柱らしいけど、今はただの飲んだくれ親父である。あまり期待しすぎるのも酷だろう。蝶屋敷のように鬼避け対策をしている場所ならともかく、煉獄家はそうでもないようだし。

普段のルートを避け、ぐるっと北へ大回りして蝶屋敷へ向かっていると——運の悪いことに鬼とかち合ってしまった。まあ人気を避けると、どうしてもそうなりがちなのは仕方ない。基本的には、奴らも人目を避けて行動しているのだ。

弱点を突かれる以外では死なない鬼と言えども、数の暴力に敵わないことはある。猗窩座さんのような強大な鬼であればともかく、普通の鬼はあんなにニユルニユルと手足を再生できたりはしないのだ。『鬼』という化物に恐怖し、暴徒と化した集団に朝まで嬲られ続ける可能性は無視できないだろう。弱い鬼なんかだと、そのへんの力自慢以下ってことも十分にあるし。

「稀血…… 稀血じゃ稀血じゃ……！　なんと濃く芳しい匂い……！　貴様は俺のものぞ……！」

うーん、確かによく聞いてみると『稀血』と言ってるな。たまに『マレチー！ マレチー！』と叫んでいる鬼がいたのはそういうことだったのか。『しげちー』とか『みかちー』とか、そういう系のアレかと思ってたわ。わたしってそんなにマレフィセントに似てるかしら、なんていう長年の疑問が晴れたぜ。

しかし十二鬼月と比べれば、なんとも迫力に欠けた鬼である。猗窩座さんのやべえ形相を見た後だと、何を見ても菩薩に見えてしまうな。

「あーあ、緊張感の欠片も出ないな。自分、鬼に恐怖してたあの頃に戻りたいっすわー」

「…っ！ 餌ごときが調子に乗りおって…！」

「…え？ …あ！ 声に出てた？ 無意識だったわー、完全に無意識だったわー」

「ふざけるなあああ!!」

苛立ち度が……十段階で言うと、いま三くらいかな。少し試してみたいこともあるし、今日は撒かないでおこう。割と気性の激しいタイプみたいだし、検証相手としては丁度いいだろう。

少し速度を上げ、距離を取る。あの鬼は鼻がいいみたいだし、多少離れたとしてもしつかり追いついてくれるだろう。奥多摩付近の山には、既にいくつか罫を仕込んでいる……ここからだど落とし穴が近いか。あれだけ僕に執着しているんだし、頑張っつて追ってきてくれる筈。

「ふー……追いつかれるまで五分くらいかな？」

…額に水を垂らして、と。髪を手でワシヤワシヤにして、振り乱した感じを演出する。後は……必要ないと思うけど、一応べっこう飴も舐めとこう。糖分は吸収されるのが早いので、体力を回復させるにはもってこいなのだ。

冬至あたりになると、日没から夜明けまで十三時間近くになることもある。半日以上逃げ続けなければならぬ可能性も、絶対には言えない。故に糖分、水分、そして栄養価が高く携行しやすい食品は必須である。クルミなんかは山でも採れるし、カロリーも高いしで

オススメだ。

——おつ、きたきた。息を荒げつつ肩を上下させて、と…

「…はあ……はあ……くそ、追いつかれたか…」

「はっ、はは…！ 多少足が速かろうとも、所詮は人間よな。どうした？ 疲労で動けんか？ くくつ、先程の威勢はどこへ行つたのやら」

「やつ、やめてくれ！ 来るなああ！ 食わないでくれええ！」

「くつ……ははは！ なんと無様なことか——つあ、あ、あああつ！？」

「うーん、なんと無様なことか」

かなり深く掘ったから、あの程度の身体能力しかない鬼だと、出るのは一苦労だろう。この辺は土質が柔らかいから、取っ掛かりがないのだ。そのぶん穴も掘りやすかつたしね。

「はあ……はあ……信じられない幸運だ…！ こんなところに天然の落とし穴があるなんて…！」

「あつてたまるか！ クソゴミがああ!!」

「ぶつくく、『あ、あ、ああ!!』だつて、『あ、あ、あああ!!』。ねえねえ、もつかいやつてよ『あ、あ、あああ!!』」

「こつ、かつ、かか、カス虫がああ…！」

苛立ち度……六……七……八……うーん、あとひと押しかな。まあ最高潮に達したところで、目論見通りになる確率は低そうだけど。でもやってみないことには始まらないし、有効なら有効で手札が増えるしね。さてさて、更に神経を逆撫でしそうなものは……おつ！

「あれ、君つて……上から見ると……少しハゲてるね」

ぶちり、と音が聞こえた。もちろん髪の毛の抜けた音ではなく、更に怒りが増したただけだろう。一般的に見てハゲているとまでは言えない彼の頭皮だが、実のところ『ハゲ』という言葉は、ガツツリハゲている人にはそこまで効かない。『もしかして…？』と思い始めてそうない人に言うと、これがもつとも心を穿つのだ。

「かつ、か、ぐがっ……！」

「鬼つてずつと姿が変わらないんだよね？ つまり頭皮も一生このまま……おお！ 神よ！ なぜあなたは彼に斯様な試練をお与えに

なつたのですか！ …髪だけに、ぷっ！」

「ぐぎいいいい!!」

「あ、そういえば——落ちた時、大丈夫だった？」

「な、なにっ…?」

「ああ、鬼なんだから大丈夫に決まってるか。けがなくてよかつたね」

「——クソがあ、あ、あああ！ 殺す、殺す殺す殺す！ 貴様だけは絶対に殺す！」

む…！ 体が大きくなって…? おいおい、怒りで覚醒するのは主人公だけの特権だろうが。しかも身体能力まで上がったようで、あの深さの穴を跳躍だけで抜けてきた。しかし勢いよく飛び出すとタライが落ちてくるトラップを仕掛けておいたので、もう一度地の底に沈んでいった。草生える。

「っ、がっ、がああああ!! ふっ、ふざっ——ふざけるなよ貴様ああ!!」

「おーにさーんこーちらー!!」

「はがっ、はぐううう!!」

「ん? いまハゲって言った？」

「こゝろ、すうう!!」

よし、苛立ち度マックスだ。あとは付かず離れず……うん、こんなところかな。

「しっかし下っ端がこの程度じゃ、主人も大したことなさそうだねえ。なんだっけ? えーっと……ああそうそう、ビチ糞下痢太郎だ」

『鬼舞辻』様じゃ痴れ者がああ!!」

「あ、それぞれ。でも口にしていいのかい？」

冷ややかな声で失態を指摘すると、彼は凍りついたように動きを止め、呆然と天を仰いだ。しかし『呪いの言葉』を口にした過去は動かず、彼は瞬く間に人の形を失っていく。

「っ、あ…！ あ、ああ——ち、違います、違います！ 俺にそんな意図は！ お、っ、おゆるじぐあ——」

うええ……恐ろしい。しかし、目論見は成功と言えるだろう。炭治郎くんに聞いた『鬼の呪い』の話……鬼舞辻無惨は、配下に『鬼舞辻』の名を吐かせることすら許さないそうなのだ。それを利用して鬼を

殺した者がいたそうで——詳しくは濁されたが——僕も試してみたというわけだ。ただしそれは、特殊な術によつて精神状態を不安定にさせることが肝らしい。もちろん僕にそんな特殊能力はないので、自分なりのやり方で試してみたのだ。

鬼の性格に左右はされるが、これなら日の出までの時間も短縮できるし悪くないだろう。戦えない者にも鬼を攻略する手段を与えてくれるとは、鬼舞辻無惨とやらは頭も無惨なのかな？

——しかし今までは鬼という『食人種族』を相手にしていると聞いてこんでいたのだが……全て元は人間だったと聞くと、少し気分も落ち込んでくるな。もちろん可能性としてはなくもないと思っていたが、断定されるとやっぱりね。

「…」

ま、だからといって大人しく食われてやる義理なんぞ欠片もない。彼らが弱肉強食を是として僕を襲ってくるなら、こつちにだって反撃する権利がある。僕を食つていいのは、煽られる覚悟のある奴だけなのだ。せめてもの供養として、手を合わせるくらいはしてやろう。

「——お見事ですすね」

「…」

目を閉じて黙祷していると、上から声が降ってきた。高く柔らかな声が、静寂な木々の中で異質に響く。思わず首を上げると、樹齢もずいぶん古そうな木の上に——静かに微笑む女性が佇んでいた。

鬼殺の剣士を示す隊服と、月明かりに映える鮮やかな羽織を纏った美しい女性だ。僕と目があつたその女性は、くすりと声を漏らし……そのまま舞い降りるように、大木から身を投げた。

「危なあああい！ いま助けるぞおお！」

「へっ？ いや、ちよつ——どいてくだつ、さきやあああつ！」

九割九分九厘大丈夫そうではあつたが……木登りをして降りられなくなった女性が、たまたま足を滑らせた可能性も考慮し、助けに入る。落下の衝撃を柔らげるため、真横から抱きしめるようにタツクルをかました。いい香り。

「ご無事ですか？ お嬢さん」

「…そう見えますか？」

「おつと失礼。ご無事ですか？ おばさん」

「だ・れ・が！ 年齢の方だと言いましたか！」

「ぐえええ！ ギブギブ！」

へ、ヘツドロック！ 前世も含め、女性にそんな技をかけられたこととは…なんてアグレッシブな女性なんだ。しかしおっぱいが当たって気持ちいいのも事実である。ぱつと見は細身でたおやかな印象だったが、携えた双丘に関してはその限りじゃないらしい。

「はあ…聞きしに勝るひょうきん者ですね」

「え？」

「——飛鳥千里さんですね？ 煉獄さんから話は聞いています」

「いや、ぜんぜん違いますけど」

「えっ…？ あ…し、失礼しました。早とちりをしてしまったよう  
で…」

決め顔で人の名前を断定したのに、ぱつさりと否定されて恥ずかしかつたのか——頬を染めながらパタパタと手をあおがせる女性。言動からして、おそらく胡蝶しのぶさんに間違いないだろう。しかし月下の美女とは、かくも美しいものだ。

「そもそも、貴女はいつたい？」

「あ、ええと…申し遅れました。私は胡蝶しのぶと申します」

「ご丁寧にも。私は飛鳥千里と申しま——ぐえええ!!」

「あ・っ・て・る・じゃ…ないですか…！」

「そつちは、まがつ、曲がつちやいけない方——あだだだつ！ 冗談でしたごめんなさいごめんなさい！」

謝罪を何度も繰り返し、ようやく美女の拘束から逃れることができた。怒りの表情で身だしなみを整えていた胡蝶さんだが、ふと我に返ったような仕草をしたかと思えば、その表情に笑顔を貼り付けた。まさに仮面といった風だが、どういう理由からだろうか。

『他人の心情を推し量る』ってのは、僕に関して言えば第六感寄りの技能である。ともすれば当てずっぽうに近いものではあるが、しかし今まで外したことはない。

その感覚を信じるなら、あれは——怒りを隠すための笑顔といったところだろうか。さっきまでの衝動的な怒りではなく、心の底で泥のように渦巻く怒りだ。たぶん、僕に向けてのものですらない。

「まったく……あまり悪乗りが過ぎると、お薬を作ってあげませんよ？」

「——脅しには屈さんぞー！」

「どこが脅しですか！　どこが！」

「ほらほら、笑顔が崩れちゃってるぜ。仮面被るなら被るで、上手くやらなきゃね」

「っ……」

苦虫を噛み潰したように、表情を曇らせる胡蝶さん。装ってはいるが、もともと感情の起伏が大きいタイプなのだろう。勘のいい人間には気付かれるレベルだし、たぶん炭治郎くんの鼻や善逸少年の耳でもなんとなく解るんじゃないだろうか。この三日間一緒に過ごして理解できたが、あれはもはや超能力とかそっち系の類だ。

「…あなたと会話していると、調子が狂います」

「よく言われます」

「言われないようにしてください！」

「善処します」

「…」

ずずいと顔を近付けられ、じつと睨みつけられる。心なしか唇が尖っているような気もするが、キス待ちと受け取ってもいいのだろうか？　そのまま数分、半目でジトツと見続けられたため、さすがに根負けして両手を上げた。

「…がんばります」

「お願いしますね？　飛鳥さん」

「はい……あ、それと呼び捨てか『千里』で大丈夫ですよ。僕のほうが年下ですし」

「え？　二十三歳と伺っていましたが…」

「…？　ええ、ですから——あっ……うん、『飛鳥さん』で頼むよ。僕のほうが年上だからね」



「ええ、わかりました。千里さん」

「ほらほら、ちよつとした勘違いじゃん。厭味いやみつたらしい女は嫌われるぜ、しのぶちゃん」

「いえいえ、どうせ私は老け顔で性格も悪い女ですから。どうぞ胡蝶とお呼びください」

「じゃあ間をとってチヨーさんで」

「……………しのぶで結構です」

呆れたような疲れたような表情で、ため息をつくしのぶちゃん。美女はどんな表情でも美しいと、再認識できた素晴らしい機会である。おっと、それはともかく……………大事なことを言い忘れていた。

「あのさ、しのぶちゃん」

「…なんですか?」

「薬香袋の件、よろしくお願いします」

僕が深々と頭を下げると、しのぶちゃんは面食らったように目を丸くする。しかしすぐさま正気に戻ると……………ふわりと微笑んで、軽く頷いた。

——ああ、これは本当の笑顔だ。とても美しい。

## 4話

しのぶちゃん、炭治郎くんの体を隅々まで探っていく——蠱惑的な美女が純真なシヨタと絡んでいると考えれば、中々に尊いシチュエーションである。しかしまあ、数日前に腹部を刺されたということに、もう治りかけている回復力には脱帽だ。『呼吸』が関係しているとのことだが、人の体って凄いな。

ベッドで上体だけ起こしている炭治郎くんと、その横に椅子を置いて診察しているしのぶちゃん。ちなみに僕はというと、ベッドの端に腰を下ろして、パパ寿郎さんとのアレコレを報告していた。

「……って感じで、多少はお喋りしてくれるようになってね。炭治郎くんが気にしてた『炎の呼吸を火の呼吸と呼んではならない』ってのは、『日の呼吸』と間違えないようにってことらしいよ」

「日の呼吸……」

「もしかしたら、ヒノカミ神楽ってやつと関係してるのかもね。ただ……慎寿郎さん、その言葉に聞き覚えなさそうだったから手記には載ってないと思う」

「そう、ですか」

「避<sup>ひ</sup>の呼吸とか卑<sup>ひ</sup>の呼吸なら、僕も教えてあげられるんだけど……」

「いえ、お気持ちだけで」

「あっはい」

なんだか心ここにあらずといった風だ。あれだけの怪我でも行こうとしてたんだから、かなり期待してたのかもしれない。とはいえ、別に力の素性がどうあれ、有効なら使えばいいだけの話ではないのだろうか。励ますように肩をポンポンと叩きつつ、そのあたりの事情を聞いてみる。

「……父は一晩中ヒノカミ神楽を舞い続けることができました。『どれだけ動いても疲れない呼吸の仕方』があると……正しい呼吸ができればずっと舞えると、そう言っていたんです。だけど俺は、ヒノカミ神楽を使うとすぐに動けなくなってしまう……!」

「そうなんだ……あ、舞といえはオタ芸なら僕にも教えられるぜ。ほ

ら、猗窩座に使ってたやつ」

「いえ、お気持ちだけで」

「あっはい」

「炭治郎君は真剣に悩んでいますから、茶々を入れるのはやめてくださいね」

「いや、僕も真剣に相談に乗ってるんですけど」

「避の呼吸とやらの、どこが真剣なんですか？」

「うん。血中の酸素濃度を意図的に上げて、運動能力と体力、それと水分の保持能力を大幅に上げてのさ。普通、人間は水分を摂りすぎると低ナトリウム血症に陥るわけだけど——この特殊な呼吸術によって、その許容が文字通り水増しされるんだ。『ラクダ』って動物は知ってる？ 一回の水分補給で百リットル以上摂取できて、数週間水なしで生きられる神秘の体質を持つてるんだけど、あれを参考にして……」

「え、あ……そ、そうなんですか……失礼しました……」

まあそのせいで、走ってない時はトイレが近いんだけど。列車で放尿した一件は、けして出発前に行き忘れたわけじゃないのだ。なんでそんな呼吸法知ってるんだって？ ほら、ダイバーとか海女さんがやってる血中ガスの意図的な操作法——を試行錯誤して真似てたら、いつの間にか昇華されてたというか。年がら年中走り続けてただけで列車より速くなる体だし、そりや色々試すよ。

「——伊之助君や千里さんのように、特殊な環境が独自の『呼吸』を作り上げることは稀にあります。もしかするとヒノカミ神楽も、それに類する呼吸なのかもしれませんね」

「環境かあ……炭治郎くんのお父さんは何やってる人だったの？」

「父は……というより、家は代々炭焼き職人です」

ふむふむ、炭焼き職人という環境が生み出した呼吸か……うーん……炭……コキュ……あ、バーベキューとか？ ……口に出したらま

たヘッドロックくらいそうだし、内心に留めておこう。そもそもこの時代に通じる用語かわからないけど。というか、卑の呼吸の方には触れてくれないんだ。その気持ちわかる。

「まあ急がば回れって言うしね。逸る気持ちはわかるけど……それ

ばっかり気にして、他がおろそかになっちゃ本末転倒だぜ。ほらほら、少し肩の力抜いてさ」

「あ……はい、えっと……あつ！」  
「ん？」

「こんなに尽力してもらってるのに、さっきから自分のことばかりで！ ……ほんつとに！ ありがとうございます！」

ベッドに顔を埋めるレベルで、深々と頭を下げてきた炭治郎くん。思わず女になって嫁ぎたくなってしまう。いや、女の子になって嫁いできてほしいレベルだ。これだけ感謝してもらえると、財布が軽くなった事実以上に、心が軽くなるってもんだ。

「そういえば千里さんは……その、ええと……」  
「うん？」

「…戦つたりは、しないんですか？」

「ん……剣を振るとか槍を握るとかって意味でなら、しない。人には向き不向きつてのがあからね。僕は誰かを守るのは苦手だけど、そのかわり誰にも守られなくて済むように逃げ足を鍛えてるのさ。それを笑いたい奴は勝手に笑えばいい。これが僕のやり方だし、守ってくれなんて誰にも頼まない」

「笑つたりなんかしません！ ……でも、もし千里さんが逃げられなくなつたら——」

「……？」

「俺の後ろに隠れてください！ 絶対に守りますから！」

やだ、カッコいい。やめてほんとそっちの気ないから僕、ほんとやめて。しのぶちゃんも、スゴイほっこりしてるのが伝わってくる。いったいどう育つたら、こんな綺麗な心の持ち主になるんだ。なんだかむず痒くなってきたので、話題を変えよう。

「そういえば、しのぶちゃんってどんな呼吸使うの？」

「私は……基本の型から少し外れた呼吸——『蟲の呼吸』を使います」  
「虫の息つてこと？ そりやまたすぐ死んじやいそうないだだだっ

！ み、耳つて、すぐ千切れちゃうんだよしのぶちゃん！」

「あなたという人は……ほんつとくに……！」

「あ、あはは…」

そんな怒ることないじゃんかね。まあこれが彼女の素というなら、仮面を被っていないという意味においては、良い傾向なんだろう。

昨晚鬼を退治した後、二人で帰る道中——それなりに心の裡を話してくれたように思う。姉君が亡くなる前のしのぶちゃんは、どうやらアオイちゃんのような性格をしていたらしいのだ。しかし姉君の遺志を自らが体現しようと、らしからぬスタンスを取り続けているそうだ。

鬼殺隊士でもない人間に零す愚痴でもないな——と、寂しそうに自嘲していた。姉の理想を託せる人物が現れたせいで、口が緩んでしまったのかもしれない、とも。それが誰なのか、あえて聞かなかったけど……まあ聞くまでもないか。

「鬼を嘸し立てることの有用性は、昨日の一件で理解しましたが……人を相手にそれをするのは、どういう料簡りょうけんなんですか」

「趣味」

「しゅみつ!?!」

「——もう少し言うなら、精神を乱した人の心は読みとりやすいから。まあでも、人を不快にさせないラインは心得てるさ」

「…私はいま非常に不愉快ですが」

「またまたー。ちよつと楽しいとも思ってるだろ？ 僕そういうのわかるから」

「…」

「人は『落差』に弱いのだ。上げてから落とすと余計にイラツとくるだろ？ 逆もまた然り……さっきしのぶちゃんを貶めたのは、最高に喜ばせるための布石みたいなもんだよ」

「それを聞かされて、まだ喜べる人間がいるとは思えません」

「ネタばらしはハードルを上げる行為だと思うじゃん？ 僕にとつてはそうでもないのだ」

「…大した自信ですね。そこまで言うなら、ぜひとも喜ばせてもらいましよう——できるものなら、ですけど」

「もし喜んじやったら？」

「どんな申し出でも受けて差し上げます。ただし達成できなかった場合……私からも一つ頼み事があるのですが、それを聞き入れていただくという形でどうでしょう」

「オーケー、受けて立とう」

ん？ いまなんでもするって……まあ僕なら変なことにはしないと踏んでいるんだろう。なにせあまりに嫌われるようなことをすると、薬香袋を作ってくれなくなるだろうし。くっ……なんて卑怯なやり方なんだ。それさえなければ色々したかったものを。いや、まず喜ばせなければ話にもならないけど。

絶対笑ってやらないもん！ って感じで真顔を維持するしのぶちゃん。ハラドキしながらそれを見守っている炭治郎くんだが、彼だってしのぶちゃんが本気で怒ってる『匂い』は感じていないだろう……：：：：：そういえばあれだけ鼻がいいと、女性の周期もすぐわかつちゃうんだろうな。いったいどんな気持ちなんだろうか。

——なんて下品なことを考えていると、病室の扉が勢いよく開いた。そこから姿を現したのはポンポン顔のアオイちゃんと、無表情のカナヲちゃんだ。後者からはなんとなく心配の色が窺える。炭治郎くんの容態に関してかな？

「またあなたですか！ 病室で騒ぐなんていい加減になさってください！」

「…なんで僕？ まあ日頃の態度ってもんがあるからさ、疑われるのは解るよ。けど見てもいないのに決めつけるのはどうなんだい？

——僕だって怒ることはあるぜ」

「えっ……あ、う……ごめんささい。でも、じゃあ誰が騒いで……」

「そりゃあ僕だけど、問題はそこじゃないぎぎぎっ!? つ、抓るにしても加減つてもんあぎやっ——」

太ももの外側を、しのぶちゃんに思い切り抓られた。非力つて言つてたのに、肉が千切られそうだと思う涙が出かける。そんな僕を見たアオイちゃんは、呆れて物が言えないため息を一つ吐いた。古き良きツンデレの、見本のような少女である。まあデレ要素皆無だけど。「しのぶ様、大丈夫ですか？ この男になにかされていませんか？」

「ええ。むしろこれから私を喜ばせてくれるそうで……丁度よかったです、みんなで見物することにしましょう」

「ええ……」

更にハードルを上げてくるしのぶちゃん。流石である。しかしどうしたのか……大言壮語を吐いたはいいものの、実は何も考えていない。どうか今すぐ喜ばせるって難易度高くない？ ちらつと考えていたことと言えば、お菓子かなんか買ってくるくらいなだけ。饅頭に歌舞伎揚にアンパンに……この館は美味しいお茶請けが多い。きつと当主である彼女も、スイーツは嫌いじゃない筈だ。

…じつと僕に視線が集まる。うーん……喜び……幸せ……うむむ……よし、ここはあの有名なフリーズに頼ろう。この時代ならきつと斬新に感じてくれるに違いない。

「じゃあしのぶちゃん、少しお手を拝借」

「……？」

差し出してきた小さい手を掴む。そして自分の手のひらと手のひらが向き合うように角度を調整してもらい、そのまま合わせてもらった。いわゆる合掌のポーズである。とはいっても『祈って幸せになるうー』などと言うつもりはない。手が合わさったことに意味があるのだ。

「お手々のシワと——」

「——シワを合わせて、シワあわせ 幸せ……なんて言うつもりはありませんよね

？ むしろ指の節ふしが合わさって、フシあわ 不幸せですが」

「……」

「……」

「……まさか、そんなつまらないこと言う訳ないだろ？ これは僕がしのぶちゃんの手を握りたかっただけさ」

「そうですか。では、どうぞ続けてください」

「……」

(物凄く悩んでる匂いがある……)

なんて頭の回転の速い女性だ。落語でも世界を取れるに違いない。しかし今はそれどころではない……暴力が関わらない戦いで負けを

認めるのは、僕としても悔しいところである。

なんとしてもしのぶちゃんを笑わせたいが、笑うもんかと構えている人間にそれをさせるのは、至難の業だ。うーん……しかし柔らかいお手々である。むしろ僕が幸せだなこれは……おっ！ よし、考えついた。これでいこう。

「しのぶちゃん、君はとても優しい女性だ。人の悲しみに共感し、人の喜びを自分の喜びにできる。だから——」

「いえいえ、私はとても厭味いやみつたらしい女ですから。たとえばあなたが幸せでも、別に喜んだりしませんよ」

「…」

「…」

くっ、根に持つてやがる。ことごとくを防ぎ、僕の選択肢を削いでくる。いったいどうすればいいんだ……ん？ 待てよ、そういえばここは医療施設だ。ずっと昔から現代まで使用され続けている『アレ』がある筈。僕は周囲を見渡して、それを探し始めた。

「ちよつとだけ待つてねー」

「…そこは薬品棚です。あまり不用意に触らないでください」

「ちよつとだけちよつとだけ……ん……お、あつたあつた。モルヒネ！ ちよつとチクツとするかもだけど、しのぶちゃん腕出して——ぐふうっ！」

「それが必要になるまで痛めつけてあげましょうか？」

「ぐうう……いや、待つんだしのぶちゃん。僕も多少は医療の心得あるからさ、多幸感で満たされるギリギリの量を見極めて投与するし——ええと、君の体重は……五十ちよいってところか。適正量は……」

「私は三十七キロです」

「…ええと、じゃあ三十七キロと仮定して——」

「三十七キロ、実測値です」

「え、でも……」

「なにか？」

「なんでもないです——あががあつ！ なんでもないって言ってるじゃないか！」



「目は口ほどにものを言うってご存知ですか？」

『嘘だ、木の下で受け止めた時はもう少しあつた筈』……という考えが顔に出てしまっていたのか、今度は頬を抓られてしまった。目の端に涙を滲ませながら、炭治郎さんに助けを求め。あわあわと口を開き、あたふたと腕を泳がせる様子は、なんとかしたいけど何もできないという困りっぷりを表していた。アオイちゃんは絶対助けてくれないだろうから、カナヲちゃんの方へ振り向くと――

「ぶふっ……」

――両手で顔を覆って、小刻みに震えていた。普段平静な人は、変なところにツボがあるって本当らしい。僕もカナヲちゃんの心はすぐく読みにくかったけど、彼女が炭治郎さんと話すたびに、扉が開いていくような感触は覚えていた。それがここにきて一気に開いたのかも知れない。きつとしのぶちゃんの重みが鍵だったのだろう。

「カ、カナヲが……」

「吹き出した……」

そしてそれがあまりに予想外だったのか、あんどりと口を開けるアオイちゃん。彼女ほどではないが、しのぶちゃんも驚愕を露わにしている。そんな二人の視線に気付いたのか、カナヲちゃんはカッと頬を染めて立ち上がり、逃げようとした――が、動揺していたせいか足をもつれさせる。体勢を崩した彼女が倒れ込んだのは、ベッドの方向……炭治郎さんの腕の中であつた。やだ、生ラッキースケベだわ。初めて見ちゃった。

「……ッ、ッ、ごめ……」

「俺は大丈夫！ カナヲは足を捻ったりしてない？」

「……っ！」

朱に染まっていた頬が更に紅潮し、カナヲちゃんは慌てて立ち上がる……そしてそのまま退室していった。右手と右足が同時に出ていたが、うーむ……まるで恋愛感情芽生えたての小学生である。アオイちゃんも慌てて追いかけて行ったので、部屋には元の三人が残るのみであつた。炭治郎くんはハテナマークを浮かべているが、『恋の匂い』とかつてののではないのかな？ 鈍感系主人公なのかしら。

「ふふっ…」

一連の流れに対してか、あるいはカナヲちゃんの成長に対してか……思わずといった風に笑いを零すしのぶちゃん。僕はそんな彼女の手を取り、まっすぐに瞳を合わせた。

「…笑ったね?」

「——はっ!」

「その笑顔で『喜んでいない』は無理があるぜ」

「くっ……ええ、私の負けのようです。どうぞ何なりと申し上げてください……私にできることなら、できる限りお受け致します」

やったぜ。じゃあキスしていい? ……とか言ったらぶっ飛ばされそうだしな………どうしたものか。信頼を損なわず、しかし僕にとってメリツトのあるもの。お金は流石に直球すぎるし………性欲をストレートにぶつけると、右ストレートが返ってくるだろうし………こう考えると、意外と選択肢がないな。もしや、しのぶちゃんそれが解つて勝負を誘ったんじゃないだろうか。

「じゃあ……うーん……」

「…」

「——うん、決めた。僕を呼ぶ時、敬称は無しで頼むよ」

「…えっと、それだけですか?」

「え、もうちよいイけた? じゃあもしかして夜伽なんかでも——痛い痛い痛いっ!!」

「調子に乗らないでくださいね、千里」

「は、あがつ、は、はい……」

そういえばしのぶちゃんの方のお願いってなんなのかな? そもそもこれだけ世話になってるのに、それを聞き入れないという不義理はしたくないんだけど。薬香袋にしても、ここにいる間の滞在費や食費についても、気にしなくていいとまで言われているのだ。

だからこそ炭治郎くんのために奔走もすれば、散財を惜しむこともしていない。鬼殺隊そのものに、僕は恩がある。

「…千里。お館様が、あなたと話してみたいと仰っています」

## 5話

竹を口に啞えた美少女——彌豆子ちゃん。今は箱に収まるサイズの大ききで、僕の目の前に座っている。彼我の距離は一メートルとあったところだろうか。慎重に近付き、そろそろと手を伸ばして頭を撫でてみる。キョトンとした丸い瞳が、実にキュートだ。顔立ちもどこか炭治郎くんを思わせ、優しい雰囲気を感じられる。

ちなみに何をしているかというと、僕の体質をどれだけ抑え込んでいるかの確認だ。通常の『稀血』は藤の花の香袋を持てばそれで事足りるのだが……僕の血はやはり少し特殊らしい。そもそも稀血そのものが、個人個人で多少は異なっているらしいのだ。

『柱』の中にも『鬼を酔わせる稀血』を持つ者がいたり、その効果は千差万別らしい。僕の場合は『強烈な誘引効果』というものらしく、ただでさえ鬼を惹き付ける稀血の匂いが、更に強化されているのとことだ。多少の興奮作用もあると言っていたから、鬼がうまく煽りに乗ってくれるのはそのおかげだったのかもかもしれない。

当初は香袋の調整でなんとかしようとしていたしのぶちゃんであつたが、どうにも上手くいかず——香りで誤魔化すことは諦めた。そして今度は真逆のアプローチ……鬼を誘引する成分を吸着させる素材を開発し、それを首飾りとして渡してくれた。天才かな？

消臭剤の開発会社とかが『製薬会社』を名乗ったりしているのは、常々不思議であつたが——なるほど、分野としては間違っていないらしい。それと彌豆子ちゃんにも感謝だ。実験台のようで申しわけないが、彼女がいればこそ細かい調整が短期間で進んだのだ。いちいち鬼を探し出して、どれだけの効果が見込めるか確かめるわけにもいかなかったし。

ちなみに香袋を持った状態で彌豆子ちゃんに近付いた時は、うんこまみれのステークを見るような度し難い表情で迎えられた。僕が何をしたというんだ。

まあそれはともかく、これでようやくまともに彌豆子ちゃんと接することができるわけだ。不用意に近付くと刺激しかねなかつたので、

ずっと避けていたのだが——こんなに可愛い娘とお喋りもできないって、中々に寂しい。会話のキャッチボールはできなくとも、無反応という訳じゃない。人間関係に飢えていた僕としては、頷いてくれたり見詰め返してくれたりするだけで充分である。

消臭の効果が証明されたので、調子に乗って禰豆子ちゃんのほっぺをぐにぐにしていると……竹を咥えた口からヨダレがだばあした。おおっとお。

「そこまでです。体臭そのものが消えた訳ではないんですから、気を付けてくださいね」

「あいさー」

協力してもらっているとさえ聞こえはいいが、要は極限ダイエツト中の女子にごちそうを見せつけるレベルの、残酷な行為である。僕が離れると、強力な自制心により自ら箱へ戻った禰豆子ちゃん。ううむ、本当に申しわけない……彼女が人間に戻った暁には、盛大なお祝いをするとしよう。

——さて、これで僕にも人並みの生活ができる基盤が整ったわけだ。感謝感激雨あられである。後は産屋敷さんの家へ訪ねる用事を残すのみだ。お館様とやらが僕になんの用かは知らないけど、呼んでいるというのなら会いに行こう。それだけの義理は、間違いなくある。

面倒事じゃなければいいな……なんて考えていると、扉の外から妙に切ない嘆き声が聞こえてきた。おそらく、怪我がほぼ完治した善逸少年が、機能回復訓練を嫌がっているのだろう。まだ治ってないまだ治ってないと、半泣きで叫んでいる。

「あんなに強いのに、やっぱり鬼は怖いんだねえ」

「彼の強さは少し特殊みたいですから」

「ふうん……」

「……とはいえ、女性がいないとやる気を出さないというのは——少し困りものですね」

「そうなの？」

「前回、彼らがここに来た時は……基礎的な面で教えることが多々あ

りました。アオイも訓練を手伝いましたが、既にその課程は修了して  
います。もう柔軟以外で付き添わせる意味もありませんし…」

「なるほど。やだやだ、スケベな男って。炭治郎くんが善逸に出会っ  
た時も、なんか初対面の女の子に抱きついてたらしいし」

「……………ええ、そうですね。初対面の女性に抱きつくなんて、常識を疑  
います」

「ほんとほんと。木の上から落ちた女性を助けるためとかならともか  
くさ」

「…」

じつとりと僕の顔を睨めつけるしのぶちゃん。しかし僕に疚しい  
ところはないので、しつかりと見つめ返す。あれは『かもしれない運  
転』ならぬ、『かもしれない救助』だったのだ。自分から飛び降りたつ  
ぽいから大丈夫だろうなんて、そんな樂觀視をして——目の前で『全  
身を強く打って死亡』なんてことになったら怖すぎるし。

「まあでも、そうだね…………やる気の問題で、結果的に死んじやったりし  
たら悔やみきれないよね。友人として、僕が発奮させてあげようか  
な」

「…それは結構なことですが、そう簡単にいくとは思えません」

「もしできたら？」

「またそれですか……………ええ、結構ですよ。柱として、隊士の成長を優先  
するのは当然のことです。お受け致しましょう——達成できたなら、  
どんな申し出も受けて差し上げます」

「いいのかい？　もう鬼避け道具は貰っちゃったし、遠慮しないかも  
しれないぜ」

「お好きにどうぞ」

うーん…？　この感じは…………『余裕』かな？　はて、僕が変なこと  
を要求しないとか、そういう信頼ではないな。でも達成できないと確  
信してる訳でもない。妙な心の動きである。いまいちよくわからな  
いけど——好きにしているというなら、そうさせてもらおう。いや、  
もうこれ好きにしているというサインでは？

「とりあえず善逸をこっちに呼ぼっか」

「修練場から呼んでも、余計に嫌がるだけでは？」

「善逸はね、凄く耳が良いんだよ」

「…？」

小首をかしげるしのぶちゃん。可愛い。まあそれはともかく、善逸少年の可聴域と範囲はとんでもないのだ。耳をすまさなくとも、かなりの広範囲をカバーしている筈。

しかし人間の脳がその全てを処理できるかと言えば、確実に否だ。故に普段は『聞こえてはいても聞いてはいない』という状況にある。つまり無意識下で脳が重要案件だと判断したならば『聞こえる』訳だ。『こほんっ……んんっ。』へへ……おらっ、大人しくしやがれ禰豆子！』『むー！ むー！』『テメエもだしのぶ！』『イヤああ！ ヤメテええ！』……どうだった？

「申しわけありませんが、頭の病気は専門外です」

「似てたかどうか聞いてるんですけど」

「ああ、それでしたら……ええ。どれもホモ・サピエンスそっくりでしたよ」

「はは、それだとまるで僕を人間扱いしてないみたいじゃないか——  
おっ、きたきた」

「——禰豆子ちゃんに何してんだゴラ」アアア「アアア！」

「残念、しのぶちゃんは心配されてないね」

「柱ですから」

凄まじい速度で追いかけてくる善逸少年を、ひよいひよいと躲しながら軽口を叩く。炭治郎くんもようやく追いついてきたところで、事情を説明した。禰豆子ちゃんの無事を確認し、興奮が冷めた善逸少年に『それだけ動けるなら任務もバッチリだね』と言ったら、ガクリと項垂れていたのが印象深い。

「ほらほら、そんな情けない姿を晒すからモテないんだよ君は」

「いきなり辛辣すぎない!？」

「結局さ、なんだかんだでやるんだろ？ だったらもつとキリツとし

とけば、カツコよく見えるぜ」

「うう…」

「まあ言われただけで出来るなら、人間誰しも悩まないよね。だからさ、善逸。僕が君のやる気を引き出そうじゃないか」

「…なにすんの?」

「ズバリ、モテる秘訣ってやつを教えてあげよう」

「余計にモテなくなりそうなんだけど」

「はは、僻むな僻むな」

「どっただけ自惚れてんの!?!」

「ふう……現実を見てみなよ。蝶屋敷にいる期間は君の方がずっと長いけど、なほちゃん達とは僕の方が仲良いぜ」

「お菓子で釣ってるだけじゃん」

「君さ、アオイちゃんの好感度が地を這ってるの気付いてる?」

「あんたは地面突き抜けてんだろが」

「ああ言えばこう言うなあ」

「鏡見て言えや!」

うーん、雷の呼吸を使うだけあってキレの良いツツコミだ。しかし恋愛において、僕が彼に劣るということはないだろう。なんせ初対面の女性に求婚するような勘違い少年だ。いくら非常識な僕とさえども、さすがにそんなことはしない。さすがに。

「それに、僕としのぶちゃんを見てみなよ。既に下の名前で呼び合う仲だぜ」

「…っ! た、確かに…!」

「経緯」

「やだな、しのぶちゃん。過程はどうあれ、重要なのは結果さ。いま君は僕を千里と呼んで、僕は君をしのぶちゃんって呼んでる。そこは否定できない事実だろ?」

「それはそうですが…」

「だったらそれが全てさ。ほら、どうする? 教えを請いたいなら、僕を師匠と呼ぶんだ」

「師匠!」

「よーし、では恋愛の秘訣を伝授してあげよう」

神速の動きで僕の前に正座した善逸少年。けれどあまりにくだら

ないやり取りだったせいか、しのぶちゃんがため息をつきながら立ち上がる。結果だけ見ればいいとの判断かもしれないが……しかし。開きっぱなしだった修練場の扉から、カナヲちゃんの顔が覗いていることに気付き、ピシリと動きを止めた。

いつの間に任務から戻ってきたのかは知らないけど、やはり彼女も恋する乙女。『恋愛の秘訣』などという甘い誘惑に抗うことはできなかったのだろう。しかしこのまましのぶちゃんが外へ出ようとすれば、カナヲちゃんはそそくさと逃げるに違いない。

——数秒ほど逡巡した後、しのぶちゃんは諦めたように腰を下ろした。やはり弟子に甘い女性である。炭治郎くんも空気を読んで正座してくれたので、僕は肅々と恋愛のなんたるかを語り始めた。

「まず、善逸は線引きを覚えようね。初対面の女性に『結婚しよう』なんて言うのは、はつきり言っただけだぜ」

「なんで知ってるの!？」

「炭治郎くんに聞いた」

「なんで話してんの!？」

「えっ？ 善逸と出会った時の話になったからだけど……」

「話されたくないことってあるじゃん！ 話されたくないことってあるじゃああん！」

「でもあれは善逸が悪いと思う」

「うおおおん！ 何も言えない……!」

善逸を見るしのぶちゃんの目が、心なしか冷たくなった気がする。まあ僕のせいとは言えないだろう。過去というのはどれだけ否定したくとも、ついて回るものだ。やってしまったことを無かったことにはできない。まあ失敗のない人間なんていないんだから、くよくよ悩む必要はないって。善逸少年の肩をポンポンと叩き、励ます。あつ、振り払われちゃった。

「それはともかく、そう……『線引き』だね。自分が誰にどのくらい好意を持っているか、他人が自分にどのくらい好意を持っているか……恋愛じゃなかったとしても、重要なことさ。それを履き違えると、人間関係にヒビが入るのも珍しくはない」



他人の認識を量るのは中々に難しいが、しかし自分の心の方も、これが意外と自覚できないものだ。無意識、無自覚に人を傷付けることもあれば、その逆もある。きつかけがないと自分の恋心すら自覚できないピユアな人間も、いるところにはいるのだ。

「人によって『自分』を使い分ける必要つてあるよね。恋愛に関しては、特に」

「ええと…」

「特別なことじゃないだろう？ たとえば……善逸はさ、炭治郎くんと僕ならどつちが好き？」

「そりや炭治郎だけど…」

「うえつ、男色家だったのかよ」

「おかしくない!？」

「まあそれは冗談だけど、要は『相手との距離』をしつかり測れつてことだよ。仮に僕がさ、善逸の腕をとつて『相棒!』とか言い出したら『はあ?』つてなるだろう?」

「そりやまあ……うん」

「碎けて喋つていいか、気安くボディタッチしていいか、そのへんの――」

「ぼでいたつち?」

「あー……肩に触れたり、手を握つたりとかさ。特に女の子なんかは、好意の有無によつて、身体的接触に対する嫌悪感……その高低差が激しいもんさ。アオイちゃんに抱きついてボコボコにされた君ならわかるだろう?」

「だからなんで知つてんの!？」

「炭治郎くんに聞いた」

「なんでそんなペラペラ喋つちゃうの!？」

「千里さんつて聞き上手だから、つい……でもあれは善逸が悪いと思う」

炭治郎くんのお喋りは非常に楽しい。素直だし、からかった時の困り顔も面白いし、なにより否定的なことをあまり言わない。他人の感性が自分と違つても、それはそれとして受け入れようとするのだ。

悪口や陰口が好きな人間からすると、たぶん喋り甲斐がないタイプだろうけど。

「恋愛は浪漫でもあるけど、戦いでもあるよね。自分から相手への好意は悟られたくない……けど悟られたくもある。相手から自分への好意は、気にもなるし知りたくもなる。善逸に関しちや、まずそのへの駆け引きを知ることが第一歩じゃないかな」

「駆け引き……」

「さり気ない会話から推測したり……相手が自分という時の所作、他人という時の所作、その違いなんかも見るといいよ」

難しい顔をしているが、君なら音でわかるんじゃないの？ 心音、脈拍、動悸、呼吸の乱れ……相手がどういう時にどういう変化をするか、ずつと聞いてきたんだろうに。それとも案外わからないもんなのかな。しかし教えると言ったからには、理解できていない生徒にわかりやすく説明すべきだろう。

「じゃあ僕がやってみるから、参考にすればいいよ。重要なのはさり気なさで観察力、そこに注目だぜ」

「やってみる……?」

「ゴホン。ねえしのぶちゃん、僕のこと好き?」

「いえ、それほど」

「とまあ、こんな感じで……」

「いまさり気なかった?」

「さて、諸々を観察して判断したところ、今のは照れからの否定と判断できます」

「前向き!」

「次に身体的接触の方ですが……これは初対面時の抱擁から始まり、先日手を繋ぐところまで一通りやっていますのでただだっ!? ——

や、やっていますのでっ! これこのようにしのぶ、ぶちゃんからもっ積極的に触ってくれますが、あ、あああっ! 痛いです冗談ですごめんなさい!!」

「言い切った根性だけはすげえ……」

ア、アームロック! いや、古武術だろうか? 前に押しても後ろ

に引いても痛い。しかもこの態勢だと密着もしないし、何一つ良いことがない。なんて技を考えたんだこの娘は。ミシミシと嫌な音を響かせる関節……その状態で謝ること数十秒、ようやく解放された。

「ふう……ま、僕から伝えられるのはこんなところかな」

「なにも伝わってこなかったんですけど」

「ええ？ 仕方ないなあ……よし。ちよつとこつちにおいで」

僕は善逸少年を修練場の隅に引き寄せ、真面目な顔で肩に手を置いた。いわゆる『やる気』というものは、何か目指すものがあれば出やすいものだ。彼は鬼との戦いを恐怖しているものの、女の子が絡めばその限りではない。特に禰豆子ちゃんに懸想けそうしているようだし、そのへんをつつけば自ずとやる気は出るだろう。

「善逸は禰豆子ちゃんが人間に戻ったら、求婚するつもりなのかい？」

「なつ……なな、なんだよ急に……！」

「いやさ、恋愛って個人個人で主義主張が変わってくるもんだけど……たとえば僕の女性の好みは、一緒にいて楽しい人なんだよね。ボケたらすかさず突っ込んでくれる人とか」

「それ恋人じゃなくて相方」

「だから人それぞれって言ってるじゃん。でもさ、善逸は禰豆子ちゃんのどこが良いわけ？ 今の彼女って、言ってみれば本当の禰豆子ちゃんじゃないよね。自我もあんまり無い状態だし、容姿だけに惚れたの？」

ボケとか突っ込みとか相方とか通じるあたり、善逸少年が都会派だと言っていたのは事実らしい。現代風の漫才は、この時代だとかかなりハイカラな趣味だ。しゃべくり漫才など、大阪や浅草のごく一部でしか流行していない。

「だって禰豆子ちゃんは俺の話をちゃんと聞いてくれるし、花も受け取ってくれたし、手を握っても嫌がらないし、可愛いし……」

「……」

「憐れみの眼っ!!」

「いや、自分を受け入れてくれる人を好きになるって正常だよ。問題は禰豆子ちゃんの方が正常じゃないってところだけだ」

「ぐうう…！」

「いいかい？ 彼女が元に戻ったら、鬼だった時のことを覚えてない…なんてことも充分ありえる話だぜ」

「…っ！」

「そんな時こそ、僕の出番だと思わないかい？」

「ど、どゆこと？」

「僕は口が達者だろ？ 詭弁を弄するのも得意だし」

「うん」

「はあ…そこで『そんなことないよ』って言えないからモテないんだよ、善逸は」

「そんなことしか言わないよな、千里は」

「やだっ、善逸さんが遂に名前で呼んでくれたわっ！」

「キシヨい！」

「まあそれは置いといて、要は『人物評』ってのがどうやって形成されるかって話さ」

「…？」

「自分から『僕は良い人間です』なんて言ってくる奴を、君は信用するかい？」

ぶんぶんと首を横に振る善逸少年。スレているようでスレていないこんな所作が、意外とチャームポイントである。まあ気弱な印象は拭えないけども。男尊女卑もまだまだ根強い時代だし、男は『男らしさ』を、女は『女らしさ』を求められる息苦しさがある。

それを前提にしてみれば、善逸少年がモテないのもある意味で当然なのかもしれない。背は高くないし、一見気弱だし、頭も中々にファンキー色をしてらっしゃる。優良物件とは口が裂けても言えないだろう。しかし気弱でありながら尚、人を守ろうとする精神は、ともすれば勇敢さよりも遥かに尊いものだ。

「だろ？ 人の評価ってのは、まず自分の目で判断して——次に周囲の人間の人物評が参考になる。会ったことない人でも、友達とか家族が絶賛してれば悪い印象は受けられないよね」

「うーん…」

「あとは、そう……自分で自分の偉業を口にする奴は、碌な奴じゃないことが多い。そもそも自画自讃ってのは大抵の場合、鼻につくし」

「あ、それは確かに」

「だからね、善逸。禰豆子ちゃんが人間に戻って、もし記憶がなかった時は……僕が語り部になろう。どれだけ善逸が活躍したか、禰豆子ちゃんのために頑張ったか」

「…師匠！」

「おお、我が弟子よ！」

「ははは、こやつめ。僕にそっちの趣味はないから抱きつくんじやない——つてう、わっ！ 鼻水が羽織に……高かったのに。まあいいや、兎にも角にも善逸少年はやる気を出したのだ。気炎を上げながら修練場を飛び出し、凄まじい速度で館の周りを走り始めている。炭治郎くんも喜び勇んで、負けじと走り始めた……ついでにカナヲちゃんも。若いっていいね。」

「お見事」

「それほどでも……さて、約束は覚えてるよね？」

「ええ、もちろんです」

「本当になんでもいいの？」

「約束ですから」

「おお、これはもう据え膳食わぬはなんとやらつてやつだろう。いつたいつの間に関係度が上がったのかは不明だが、女性にここまで言わせて何もしないのは、男がすたる。期待にドキをムネムネさせながら、しのぶちゃんをエスコートする。片腕を取り、腰に手を回し——

「あ、一つ言い忘れてましたが……」

「ん？ なに？」

「首飾りは週に一回、交換する必要がありますので。忘れないように気をつけてくださいね」

「え……」

「あれは元々、稀血の方のために試作段階までは出来ていたものでして。ただ定期的に支給し続けるのは現実的に無理があったので、お蔵入りになったものを引っ張り出してきただけです」

「そう……なんだ」

「ええ、そうなんです。ところで——腰に手を回して、何をなさるおつもりですか？」

……まあ無限に使い続けられる消臭剤なんか、存在しないよね。すつごい首輪握られた感。というか、これがあつたから余裕を感じたのだろう。しかしこのままやり込められるだけというのは、非常に悔しい……なにかしのぶちゃんをギャフンと言わせられるお願いはないものか？

「…」

「…」

「…ひざ枕くらいならいい？」

「ふふっ、『何でも』と約束したのに——千里もずいぶん謙虚になりましたね」

「——教えてもないのに卑の呼吸を…！」

「残念残念。ああ、いったい何をされてしまうのかドキドキしていたのに…」

むっ…！ 僕を相手に何度も煽るとは——少々驕りが過ぎるのではないだろうか。僕の性格は、この世に生まれる前からの筋金入りだぜ。しのぶちゃんの煽りなど、所詮は付け焼き刃だ。僕が本当のおちよくり方というのを見せてやろう。

「じゃあ今から四半刻、ひざ枕ってことで」

「それ以上のことはしませんし、させませんよ？」

「もちろんさ。じゃあ失礼して——ぐああっ!？」

「仰向けでお願いしますね」

くっ、あわよくば頬でフトモモの感触を味わいたかったが……っつて  
うかやりすぎじゃない？ 膝で顔面はやりすぎじゃない？ 鼻骨とか折れてないよね。まあしのぶちゃんがそのへんの加減を間違えるとは思わないけどさ。

「四半刻。ちゃんと約束は守ってね？」

「そちらが変に動かなければ、私も動きませんよ」

「絶対？」

「二言はありません」

「オーケーオーケー、そんならいいのさ。いやあ、しのぶちゃんの膝は極楽だね」

「それはどうも」

「ふうー…」

「…?」

「——炭治郎くーん！ カナヲちゃん！ 善逸ー！ ちよつとこつちにおいでー！」

「なっ…！」

「おおっと！ 動くなよ？ 僕は微動だにしてないぜ」

「なっ、くっ…！」

「年季が違うのさ、年季が」

ふはは、仲の良さをみんなに見せつけてやろうじゃないか。どれだけ言い訳を重ねようとも、全ては一見に如かず。視覚的效果というのは、人間にもっとも影響を与えるのだ。

いやあ、人前でのイチヤイチャとは気持ちの良いもんだぜ……ん？

あれ、体が動かない…？ なのに意識だけが冴えて——あ、しのぶちゃんが頸動脈を押さえているのか……おっと、なんだか体が魚のようにはびくんびくん跳ねている。だというのに、まるで他人事のようにそれを冷静に見ている僕がいる。

——あ、視界が真っ暗に…

目が覚めたら、知らない場所にいた……そんな体験をした人間は、いったいどのくらい存在するのだろうか。柔らかなフトモモの感触、甘い香り、暗転——まったく、人が気絶するのって結構危ないんだけどな。まあしのぶちゃんやんの医療技術って、現代医学を超越してるところがいくつかあるから、一概には言えないかもしれないけど。というか呼吸だの鬼だのと、人間を超越してる部分も多々あるし。

——さて、頸動脈を圧迫されての失神ということなら、目覚めるまで大した時間は経っていない筈だ。というか時間がかかってたら色んな意味でやばい。幸い、特に異常はないようだし、蝶屋敷のどこかなのは間違いないだろう。やたらと上質の布団から這い出て、衾を開けてみる。なんかスゴイのいた。

「…」

「…」

「失礼しました」

「失礼すんじやねエ」

「すみません、任侠の方とは関わるなと祖母の遺言で…」

「誰がヤクザだボケエ……」

あ、この時代でもヤクザって通じるのか。まあオイチヨカブが語源らしいし、そもそも言うほど昔じゃないしね大正時代って。西暦二千年頃なら、大正生まれのお爺さんやお婆さんは普通に生きてた訳だし。

しかしなんというか、顔面傷だらけの彼は、明らかにカタギじゃない感。目つきの悪さも相まって、完全にアウトローな雰囲気だ。しかも、まるで誘っているかのように服の前面をガバリと開いている。ヤーさんじゃなくともホモなのは確定的に明らかだろう。

「それはともかく……どちら様ですか？　というか、ここは……？」

「ハッ……！　聞いたらなんでも返ってくるなんてのはなア、ガキの頃までなんだよオ……！」

「それと、あれ——僕の名前……えつと……あれ、なんだっけ……」

「…っ!?　オ、オイ、本気で言ってるのか……？」



「うえーい、うっそでーす——うぎやあああつ!? 僕一般人なんですけど!」

「一般人に俺の剣は避けられねえなア……!」

「避けなかったらどうするつもりだったの!」

「そんなときやそんな時だろうがア。次は動くんじやねえぞ」

「わかりました! 謝る! 謝ります! 申し訳ありませんでした!

そ、そうだ、自己紹介でもしませんか? お互いを理解し合える余

地はあると思いますので!」

「…不死川実弥だア」

「飛鳥千里と申します。年齢は二十三歳です……ええと、そちらは……」

「…二十一だア」

「なんだ、年下か。今回は許してやるから、もう少し礼節を弁えろよ—

—おあ、あああつ!? 死ぬつ、ほんとに死ぬからつ!!」

「巫山戯た奴だなオイ……!」

ここまで剣を振り回しても、室内には傷一つ付いていない。彼の技量が窺える。ジリジリと部屋の端に追い詰められていくが、まあそろそろ真面目に会話をすることにしよう。肩を竦めながらスタスタと彼に近付いていく……もちろん剣を振りかぶられたが、特に構わず歩を進めた。

「……っ!」

「あ、どっかで聞いたことある名前だと思ったら……稀血仲間の実弥ちゃん! 女の子だと思ってたけど、違ったのかあ……」

「平気で前に立ってんじやねえよ」

「だって僕、人間だし。斬らないでしょ?」

「……ちっ」

鼻先数ミリというところで、完璧に止められた刃。正に達人といったところだろう。本気で斬るつもりがないのは見て取れたので、目を瞑って近付いた所存である。鬼殺隊は鬼を狩り、そして人を守る組織だ。こんなことで本当に人を斬る者が、柱になどなれる筈もないだろう。

「ほら。友好の握手、握手」

「ウゼエ！」

「じゃあハイタッチ」

「んだそりやア…？」

「え、ハイタッチだよ…？ 本気で知らないの？」

…という風に言うのと、相手は自分が常識知らずなのかと焦ることになる。現に彼も苛立ちが多少収まり、少しの困惑に囚われた。

やり方を示すように、ジエスチャーで両手を前に突き出し、やや上に向けて、彼もそれを真似た。あら、意外と素直。そこに目掛けパチンと手を打ち鳴らし、笑いかける。鳩が豆鉄砲を食らったような表情が、少し面白い。

「いえーい、じゃあこれで僕たち友達だね」

「あア？」

「ハイタッチは友達の証みたいなどこあるから。知らないなんて言い訳は聞かないぜ」

「聞けや」

「なんだい？ 友よ」

「デメエ…！」

「まあまあ、そんなに恥ずかしがることないじゃないか。友達なんてとりあえず作つとくもんさ。その中で気が合えば親友にもなるし、気が合わなけりや疎遠になるだけだろ？」

「…」

「という訳で、よろしくね実弥」

「…気が合いそうにねえなア」

「納豆だつて食べるまでは臭いもんさ」

「くっ——なんだそりやア」

おっ、ようやく笑顔がちらつと。まあどんな人間でも、ひたすら仲良くなろうとする人間を無視し続けるのは、意外と難しいものだ。当人が善人であればあるほど、罪悪感というものは募っていく。実弥は顔こそ怖いけど、なんとなく優しい感じはするもんね。野良犬に餌とかあげてそう。

「ところで、ここはどこなの？」

「お館様の屋敷だア……あの糞ガキといいテメエといい、気絶した奴を運び込むのが流行ってんのかア？」

「お館様……ああ、産屋敷さんの！ ……ん？ 蝶屋敷の近くって訳じゃないよね？ 僕ただけ気絶してたの？ え、マジで障害とか残ってないよね？ なんかおかしいとことかない!?!」

「…ああ、そういや確かにおかしいなア」

「えっ！ ……どこどこ？」

「頭だろオ」

「ああ、そこは元からだよ。心配してくれてありがとね」

「皮肉だボケエ！」

知ってるよつと……しかし妙な語尾は癖なのだろうか？ 流石に厨二病なんてことはないだろうが、言語障害の走りだとしたら少し心配だ。なるべく言動に注意しておくとしよう。

しかし気絶している間に運び込むとは……しのぶちゃんめ、少し僕の扱いがぞんざい過ぎではなからうか。そんな風に少しばかり憤っている、衾が開いて彼女が姿を現した。可愛いから全てが許せそうである。美人ってお得。

「起きたみたいですね、千里。お館様がお呼びです——不死川さんと話していたんですか？」

「うん、いま友達になったとこ」

「そうですか……はい？ えっ……!」

否定しない……!? って感じで目を丸くして実弥を見るしのぶちゃん。おはぎをバクバクと食べている姿は、照れ隠しなのか素なのか。あんなに熱いお茶を一気飲みして大丈夫なのだろうか？ 湯呑が空になったところで、立ち上がって部屋を出ていこうとする実弥。どうやら産屋敷さんと何かしら話した後、お茶でも飲んで行きなさいと勧められた後だったらしい。

「じゃねー、実弥。また今度」

「…ああ」

振り返らず、手も振ってはくれなかったが、多少は打ち解けられたように思う。まあ出会いとしては上々だろう。十数年とボツチだっ

たのに、ここ最近は友達がいっぱい凄く嬉しい。

誰かと仲良くなりたくても、その人が僕のせいで死んじゃったらと思うと、どうにもできなかつた今まで。だけど鬼殺隊の人達なら、なんの憂いもなく接することができるのだ。それが何よりも幸福で、十何年分かの埋め合わせをするように、グイグイといってしまふ。

——ああ、産屋敷さんとも友達になれば嬉しいところだ。

## 6話

通された部屋には、一人の男性が座っていた。事前にしのぶちゃんから聞いていた名前は『産屋敷耀哉』さん。失礼のないようにとさんざっぱら念を押されたが、彼女は僕をなんだと思っているのだろうか。TPOを弁えるべき時は弁えているし、敬意を払うべき時もちやんと払う。ただ『べき』の部分が、他人と少し違うだけなのに。

——しかし……産屋敷さん、酷い痣だ。顔の半分近くが痣に覆われ、おそらく目もほとんど見えていないんじゃないだろうか。これは問われる。繊細な言動が問われる。何も気にしていない素振りを貫くべきか、心配の念を表面に出してもいいか。実にデリケートな問題である。

「…そんなに気になるかい？」

「あっはい」

しまった、考え過ぎてガン見しっぱなしになってしまった。失礼に思われてしまっただろうか。しかし彼は柔らかく微笑むばかりで、気にした様子はない。優しい。その雰囲気もさることながら、声の音調が独特で非常に心地良く感じる。声質、そしてそのリズムが、人間を安心させる間隔に自然となっっているのだろう。

「ああ、そういうえば医療の心得があると言っていたらしいね」

「そう大したものではありませんが……申し遅れました。飛鳥千里と申します」

「産屋敷耀哉だ。招待を受けてくれたこと、感謝しているよ——それと、碎けて話してもらって構わない。しのぶや杏寿郎からは、良い意味でも悪い意味でも気安い人間だと聞いていたんだけどね」

「そういう訳でもありませんが……今まで会った鬼殺隊の方は、ほとんど年下でしたから」

「年齢は二十三歳と聞いているよ。なら私と同一年だ」

「ざりとて、産屋敷様は鬼殺隊の中心と存じ奉る。たてまつ某、それがし年若くして重責を担うお館様に敬服する身なればこそ、そのように馴れ馴れしく接することなど致しかねます」

「…それは残念だ」

「そう？　なら仕方ないか。よろしくね、耀哉」

「ああ。よろしく、千里」

むっ、動じないだっ…！　なんとも美しく穏やかな海を思わせる、落ち着いた心だ。しのぶちゃん曰く、曲者揃いの柱たちの、その誰もが彼を敬っているらしいが——納得の雰囲気である。炭治郎くんは『何かをしてあげたくなる』子だが、耀哉は『彼の役に立ちたい』と思わせる印象がある。ちなみに僕は『何も言いたくなくなる』とよく言われる。

「痣が気になっていったようだけど…：…よかつたら君の所見を教えてくださいるかな？」

「や、流石にパツと見ただけじゃなんとも…」

おいでおいでされたので、近付いて触診してみる。皮膚に痛みはないようで、見た目からしても、皿度まで及んだ火傷に近い印象を受ける。しかしそういった事故があった訳でもないらしく、現代医学で言うなら奇病に位置すると判断できた。心肺機能と内臓機能の低下も年々酷くなっているようで、『もう長くないだろう』と、事も無げに言う様が少し痛々しい。末梢神経障害の程度を確認するため、手や足を触っていると——少しボヤクように、彼は疑問を投げかけてきた。

「千里は、この世に神や仏がいると思うかい？」

「んー…：…いると思ってる人にはいるだろうし、いないと思ってる人にはいないんじゃないかな。ただどっちにしても、物理的に何かしてくれる存在ではないと思うけど」

「…面白い考え方だね」

「耀哉はどうなんだい？」

「私は…：…存在すると思ってるよ。だけどそれはとても薄情で、理不尽で、力無いものだ」

「うーん…？」

「鬼舞辻無惨は、私の一族の祖先にあたる。鬼と成り果て、今も人々を苦しめ続け…：…その咎が、産屋敷の血筋に代々の短命を宿命付けているんだ。けれど、当の本人は今もなお健在だ。神罰も仏罰も、一向に

くだる様子がない——とても理不尽じゃないかい？ あの男を罰する力が無いからこそ、只人ただひとである我が一族を苛みさいな、復讐に駆り立てている……たまに、そんな風に思ってしまう時があるんだ」

「ふーん……そんなことも……ある、のかな？ それはそれ、病気は病気って気もするけど……」

「神職の者にね、先祖がそう言われたと聞く。鬼舞辻無惨を滅ぼすことに心血を注げと、それこそが一族を絶やさぬために唯一できることだ。代々神職の家系の妻を娶ることで、かつてよりは寿命も伸びてきているが……それでも三十と生きた者はいない」

「そっか……ちなみに産屋敷の一族って、昔から家格が高い感じ？」

「……？」

「高貴な血筋には偶にあることだけど、近親婚を繰り返すと遺伝子異常の確率が高まるんだよね。だいたい五世代も続けば顕著になってくる。二、三百年前に滅んだハプスブルク家なんかが有名だけど……近親交配による先天的な遺伝子疾患は、その一族においては共通するけど、別の系譜を参照するとまったく別の症例が現れるのも珍しくはないんだ」

「それは……」

「神職の血筋を娶ったってことは、外の血を取り入れたってことだよな？ それで緩和されたのなら、さっきの理論でも説明はできるかなって……まあ鬼だの呼吸だのと、それこそ神の奇跡みたいな現象も多いから、呪いも否定はしないけどさ」

メンデルの法則が信用され始めてから、まだそんなには経っていない。遺伝子がどうのと言っても理解はしてもらえないかもしれないけど、可能性としてはそれが高いような気がしないでもない。ただどちらにしても、彼の寿命が尽きるまで、そう遠くないのは確かだろう。

「…千里。君は三歳頃から、ほとんど野山を家にして育ったらしいね」

「…？ うん、そうだけど」

「しのぶが言っていたよ。『ハードルを上げる』なんて、とても面白い表現だよ。ハードル競技は、いくつか前の……アテネオリンピックで初めて開催された競技だったかな？」

「…? うん」

「言葉の端々で、当たり前のように英語を使っているとも聞いた」

「…? うん」

「蝶屋敷にある薬品は大部分がドイツ語表記だそうだね……もちろんモルヒネも」

「…? うん」

「君は三歳頃から、ほとんど野山を家にして育つたらしいね」

「…? うん」

「…」

「…」

「…」

「…ええと、そんな逃げ道塞ぐような言い方しなくても、僕は聞かれたら大抵のことは話すけど」

「…そうなのかい?」

「そうなのです」

「ごめんね、と苦笑気味に謝罪する耀哉。まあ権威も権力も財力もあるお家柄だし、腹芸が必要な場面も多いんだろう。どうせしのぶちゃんのことだから、僕のことを『厄介』とか『一筋縄ではいかない』みたいな感じで伝えていたに違いない。こんなに素直なのにね。」

「じゃあ率直に言わせてもらおうか。君の教養や知識は、いつたいでこで学んだものなんだい?」

「僕には前世の記憶があるから、大体はそこからだね」

「…」

「…」

「…なるほど。話すとは言ったが、嘘を吐かないとは言っていないかったね」

「いや、ほんとなんだけど」

「本当かい?」

「本当だよ」

「見えていない瞳を少し閉じた後、耀哉は僕に向かって手を伸ばしてきた。差し出された手を掴むと、両手で覆うように握りしめられる。」



「産屋敷家の当主は、代々直感に優れているんだ。もはや異能の域にあると、畏れる者さえいる」

「へえ…」

「だけどね、本当に大したものじゃないんだよ。鬼舞辻無惨の居場所もわからないし、上弦の鬼の居場所もわからない。隊士の命ことさえ救うことはできない」

「…」

「…君には、本当に前世の記憶があるのかい？」

「うん、神に誓って」

「さっきいらないと言ってなかったかな」

「いないとは言っていないよ。信じるかどうかは自分次第って言っただけさ」

話すにつれ、少しずつだが心の動きも読めるようになってきた。今まで出会ったどんな人物とも違うせいかな、話していてドキドキするとか、フワフワするとか。カリスマと言うには少し違うような…：…なんて言ったらいいんだろう。間違えて『お父さん』とか言っちゃいそうな雰囲気だ。

「あのさ、耀哉。それを信じようが信じまいが意味はないと思うんだ。僕はどこにいても僕だし、どんな場所だってやっていける自信がある。重要なのは背景よりも僕自身だから、君は見たままを判断すればいい」

「…そうだね。だけど——」

「…？」

「私は信じることにするよ。千里、君自身を」

「直感かい？」

「ああ。とは言っても、千里の言葉に対するものじゃないけれど」

「どゆこと？」

「君を信じると、なにか良いことがある気がするんだ」

「…体だけを目当てにされてる女性の気分だけ」

二度目の『ごめんね』をされつつ、耀哉が咳き込み始めたので背中を擦る。少し喋りすぎてしまったようだ。というか、本題に入る前に

僕が話を逸らしまくったせいかな。謝罪をすると、久しぶりに楽しいお喋りができたから大丈夫などと言われてしまった。嬉しいような、心苦しいような。

「それで、僕への用つてのはなんだい？」

「——杏寿郎を助けてくれたことに、お礼を言いたかったんだ。呼び付ける形になってしまつて、本当に申し訳ないのだけれど……ありがとう、千里」

「うん、どう致しまして。僕の方こそ、体質の面ですいぶんお世話になりました。ありがとね、耀哉」

「ああ、そのお礼はしのぶに言つてあげてほしい」

「もちろん言つたけど、元を辿ると君にだつて言うべきさ。こう見えても義理堅いんだぜ」

「そうか……では受け取つておこう」

「用件はそれくらい？」

「そうだね。後は——鬼殺隊専用の飛脚になつてほしい、というお願いくらいかな」

「それ一番重要じゃない？」

「かもしれないね」

「とうか『隠』の人もいるし、僕つて必要？」

「かすがいがらす鏝 鴉よりも遥かに速い伝達手段は、とても貴重だ」

「うーん……」

「それに小さな鴉と違って、君なら荷物も人も運べる」

「荷物はともかく、人……『隠』と同じ仕事つてことでもいいのかな？」

「近いね。ただし人を運ぶとすれば、それは『柱』の子たちになると思う」

「……ん？」

「杏寿郎の時もそうだったけれど、誰かが十二鬼月と遭遇した時——柱を救援に向かわせても、間に合わない場合が多いんだ。それに持ち場から現場まで全力で走るとなれば、いざ対峙した時、既に体力を消耗した状態になる」

「ははあ、なるほど……ん？ それだと僕も鬼のところに向かうこと

になるのでは…」

「そうだね」

「ええ…」

「給金は言い値で払おう」

「…月に百円でも？」

「もちろん、望むなら千円でも」

「うむむ…」

「最近郵便局の体制も整ってきたし、飛脚の仕事も少ないだろう？」

確かにそうだけど…：うーん…：いや、危険手当と考えれば…：危険すぎるけど。鬼とちくり合う生活とオサラバかと思ったら、結局鬼と関わるお仕事ってどうなの？ 命あつての物種だし、普段なら迷わずノーだけど、やはり義理と人情がそこに待ったをかける。

鬼殺隊の階級はいくつかにわけられているらしいが、一番下の階級だと、現代換算で手取り二十万ほど。逆に柱はというと、求めればいくらでも貰えるらしい。つまり耀哉は、僕の脚にそれだけの値段を付けたということになる。ちよつと嬉しい。

しかし十二鬼月というと、あの猗窩座さんも含まれることになる。しかも更に強いのが二人…：鬼舞辻無惨も含めると三人いるかもしれない。ヤバくない？ しかし一週間置きにしのぶちゃんのところへ訪ねるといふ事情もあるし…：うーん…：揺れるっ…！ 義理と人情とお金と現実と命の間で、決心が揺らぎまくっている。

なにか一つ、決め手でもあれば…：ん？ 待てよ、柱を運ぶということは——しのぶちゃんを背負うということでもある。体重三十七キロの内、下手をすれば二%くらい占める豊満なバストが、それなりの時間密着するのではないだろうか。

「——やります！」

「ああ、急に使命感に溢れた顔に…」

…なんてまあ、色々と理屈を捏ね回してみたけども。友達が常に命をかけている状況で、のほほんと暮らすのもなんか嫌だよな。というか僕の性格を考えると、煩悶し続けることになりそうだな。それならまあ、こんな選択もなくはない。彼らみたく赤の他人のために命をかけ

ることは難しいけど、大切な友人のためならきつと頑張れる。

「立場的には……外部協力者みたいな位置付けになるのかな？」

「うん、そうだね。申し訳ないけど、日輪刀を持たない人間を上立場にすることはできない」

「ううん、大丈夫。外様ってことは、誰に対しても対等でいいってことだよな？ ならそれが一番いいさ。誰かにかしずず傅くのは苦痛じゃないけど、傅かれるのって苦手なんだよ」

さて、これで話も終わりかな？ 耀哉の体調も心配だし、お暇するべきだろう。仕事内容の詳細、その他は鴉を通じて伝えるとのことだ。というかずっと気になってたんだけど、鎧鴉ってどうなってんの？ なんか陰陽術とかそういうアレなのかと思ってたけど、普通の鴉が訓練してこうなってるだけらしい。やっぱ過去じゃなくて異世界な気がしてきた。

「……っただけ、これは好奇心なんだけど……」

「ん？ なに？」

「千里の前世はどんな人だったんだい？」

「僕は僕さ、それ以上でもそれ以下でもない。家庭は少し普通じゃなかったけど……代々医者の家系でね。父さんも姉さんも母さんも、みーんなお医者さん」

「そうか……だから君も……」

「……うん。ダイビングのインストラクターと、ユーチューバーの二足のわらじだった」

「医者は」

「や、向いてなかったから」

おっ、初めて耀哉の心が揺らいだ気がする。軽いガッツポーズをしつつ、聞き慣れない職業に首を傾げる彼を尻目に退室した。してやったりな雰囲気を感じ取ったのか、最後にちらりと見えた表情は、やっぱり苦笑交じりだった。衾を閉じかけ——ああ、そう言えば一つ聞き忘れていた。

「……鬼舞辻無惨が消えたら、耀哉の病気は治るのかい？」

「さあ、そればかりは——正に神のみぞ知ると言ったところかな」

「…そっか」

ならまあ——死なない程度に頑張ってみるとしよう。新しい友達のために。



僕が鬼殺隊の専属飛脚になって、四ヶ月近くが経った。その間に十二鬼月が現れたという情報もなく、覚悟を決めた割にやっていることはパシリのそれであった。というか猗窩座さんのような上弦の鬼は、非常にレアなモンスターらしい。目撃情報も極端に少なく……少ないというか、柱以外が出会うと瞬殺されるせいで情報が出回らないのかもしれない。

この期間、僕もそれなりに自身を鍛え直した。今までは持久しきゆうに重きを置いた逃走を主軸にしていたが、それは鬼を殺す手段が太陽しかないと思っていたからだ。今の僕が鬼と出会う時、横には人がいる。鬼を滅する刃を振るう、誰かがいる。夜明けまで待つ必要がないのなら、逃げ方も見つめ直すべきだろう。

すなわち鬼をこれまで以上に苛立たせ、おちよくるための動きだ。敵が怒りで注意散漫になれば、隊士の勝率や生存確率も格段に上がる。そこで参考にしたのが、蚊やゴキブリなどの害虫たちである。耳元でプーンと動き回るウザさ、素早くカサカサと逃げ回る鬱陶しさは勉強になる。

これも一種の蟲の呼吸だし、しのぶちゃんに『お揃いだね!』と言ったら物凄く嫌そうな顔をされた。自分だつてムカデのなんちやらか使つてんだから、酷い差別だ。ゴキブリだつて蚊だつて頑張つて生きてるのに。

まあそんな訳で、長く走り続けるより瞬発力を意識した結果、猗窩座さん戦の時よりは格段に速くなったと思う。あの時はおちよくる余裕がほとんど無かったけど、今ならたぶん大丈夫だ。彼より上であろう三人も、よほどじゃなければ問題ないだろう。それに潤沢な資金が確保できたため、色んなサポートアイテムも自作できるようになった。

当てると異臭を放つ肥やし玉や、足引つ掛け用の投げ縄、ゴキの詰め合わせ弾け袋と、他にも沢山作つてみた。一度蝶屋敷で弾けてしまひ、しのぶちゃんにボコボコにされたこともある。まったく、蟲の呼吸使いの風上にも置けない女性だぜ。

ちなみに、鬼殺隊の関係者ということでも未だに蝶屋敷へ居候している状態だ。一応現代医学の知識はそこそこあるし、多少はしのぶちゃんの研究の役にも立っていると思う。炭治郎くんたちもあそこを拠点にしてるから、彼らは攻撃を当てる練習、僕は回避の練習ということでも上手い具合に高めあえている。

しかし上弦と会わないまま引退した柱もそれなりにいるそうで、案外このままの生活が続くんじやないか説。それに現れたとしても、僕が丁度いい位置にいないとそもそも要請すらないわけだし。情報をいち早く届けるという仕事で役に立ってはいるけど、ちよつと無駄飯食い感。会いたいわー、上弦の鬼に会いたいわー……なんつって。

「カアアアー！ 吉原遊廓ニ『上弦の陸』出現ノ報セアリイ！ 江戸川下流ニテ蛇柱『伊黒小苞内』ト合流シタ後イ！ 急行セヨオオオ！」  
「…はい」

フラグ回収早いよ。つーか江戸川下流つて範囲広くない？ …まあこの子たち鴉の癖に、鳥目どころかめっちゃ眼いいしな。着いたら空飛んで探してくれるだろう。ギャーギャー騒ぐモフツとした黒い塊を懐に入れ、全速力で走る。最近の僕の速度は、人間やめると言

うより生物の範疇を超えそうである。とはいえ、柱たちの戦闘力も明らかに全生物最強クラスだ。きつとそういう世界なんだろう。

砂煙を上げながら疾走していると、目的地が近付いてきた。鴉たちの地理感覚は化け物じみており、方向がズレると都度修正してくれる。パない。

「ふー……この辺かな？ 近松、上から見といて」

「任せろオオー！」

懐から飛び立った鴉を眺めつつ、息を整える。伊黒さんの脚を止めさせては本末転倒だし、僕の方が早く到着するように調整されている筈だ。直接会った柱は未だに蟲と風と炎のみだが、蛇さんはいったいどのような人物なのだろうか。不謹慎ながらも、新しい出会いにワクワクしている。

…ん、アレかな？ 夜にあれだけの速度で走る人間など、早々ない。近松も降りてきて嘴で指し示したから、まず間違いないだろう。手を振って迎える。

「伊黒さんで合ってる？」

「…そうだ」

「じゃ、背負うからどうぞ——舌、噛まないようにね」

「なに？ …——っ！」

詳細は鴉に聞いていたのか、大人しく乗ってくる伊黒さん……まあ鬼殺隊士であれば『隠』に背負われる機会は多いし、慣れているのだろう。こちらとしてもその方がありがたい。なんとも独特な容姿をしており、口は包帯で隠され、左右で瞳の色が違うオッドアイだ。主人公かな？

「あ、僕の名前は——」

「いらん。無駄口を叩く暇があれば一秒でも速く走れ」

「——飛鳥千里って言うんだ、よろしく。あとこれ以上は速く走れないから、喋っても大丈夫さ。その蛇は君が飼ってるのかい？ 可愛いねえ。名前はなんて言うの？ あ、せっかく知り合ったんだから小芭内って呼んでもいい？」

「鬱陶しい。煩わしい。お前の様に馴れ馴れしい人間は信用しない。

それと誰が名を呼んでいいと言った」

「わー……性格悪いって言われたい?」

「黙れ」

「でも大丈夫さ。僕はネチネチした人でも好きになれる自信があるから」

「黙れと言わなかったか?」

「仲悪いより仲良い方がいいだろ?　なんでそんな敵を作るような言動するのさ」

「…」

「小芭内って友達いなさそうだよね——うぐっ……おおっと!　今の一秒は遅れたぜ。あと首は呼吸が乱れるからやめてね」

「…」

「だからって髪の毛抜くのやめてくれない!?　や、やめっ——ハゲる!　ハゲるから!」

ネ、ネチっこい……!　一本ずつプチプチ抜いてくるところがネチっこい。だが無関心よりは、手を出してくれる方がまだいい。到着が先か、ハゲるのが先か、仲良くなるのが先か。僕のコミュニケーション能力が問われる場面である。

さて、人間関係において仲良くなるコツとは?　ずばり恋バナである。小中高大、成人、中年、老人まで、この手の話は話題が尽きないものだ。秘密を共有することで親密さがアップすることも良くある。「小芭内は好きな人とかいるの?」

「黙れ。上下関係の把握くらいしておけ。柱には『様』を付ける」

「オバ様は好きな人とかいらっしやるの?　——いっつたああっ!?　いっ、いま!　十本くらい纏めて抜いた!」

「二十本だ」

「余計に悪いんですけど!」

くっ、難敵だ。めっちゃ人見知りの激しい子だ。しかも一部分を集中的に抜いてやがる。ぬうう……!　パーソナルスペースが広い人間でも、こうやって密着していれば仲良くなりやすいものだが……いや、諦めるな僕。『好きな人とかいるの?』には少し反応していた。そ



の辺りを突いてみよう。

「僕は外部協力者だから、隊内の階級と規律は関係ないもんね。耀哉にもそれでいいって言われてるし……さ、そんなことよりお喋りの続きしようよ。好きな人は一般の人？ 鬼殺隊の人？」

「うるさ煩い」

「ああ、鬼殺隊の人なんだ。部下の人？ 柱？ …へえ、柱なんだ。もしかしてしのぶちゃん？ んー……おっと、違うのか」

「…っ!？」

「後は…」

…ん？ そういえばちよつと女の子っぽいところあるよねこの人。そして風柱である実弥は、いつも胸元をアピールしているスケベな男……なるほど、繋がった。いや繋がっているのは彼等か。僕はそつちの趣味はないが、否定はしない。恋愛など当人達が良ければ何も問題はないのだ。

「…そっか、小芭内は実弥が好きなんだね——ホアアアツ!? ブチブチブチって音したよ!?! やめなよやめてよやめるんだ!」

「…」

「つたくう……なんでそんなに頑なのさ。仲良くした方がみんな幸せじゃん」

「…その能天気さが羨ましいな」

「あはは、僕ら二人足して割れば丁度いいかもね。つまり友達になれば全部解決さ」

「何故そこまでこだわる」

「んー？ なんか鬼殺隊の人って……うーん……崖に突っ込んでいく猪みたいと言うか……友達でもできたら、少しくらい未練ができるかって。人を守るために死ぬなどは言わないし、復讐が悪いことだとは言わないけど——全部の鬼を倒し終わった後、どうするか考えてる人ってあんまりいないんじゃない？」

「…」

『「ここで死んだらもう千里に会えない!」……なんて感じで踏ん張ってくれたら、友達冥利に尽きるよね」

「俺は全ての鬼を滅するまで死ぬつもりはない。故にお前も必要ない」

「わお、僕も友人を失うのは凄く嫌なんだ。絶対死なないなんて、理想の友達だよ」

『…鬱陶しさも、ここまでくると清々しいな』

「爽やかな好青年とはよく言われるね」

まったく、柱が曲者揃いとはよく言ったものだ。彼と打ち解けるにはまだ時間がかかりそう。なんかこう…色々抱えてるのかな？

中々警戒心を解いてくれない。あとは、なんだろうこの感じ。自分があんまり好きじゃないみたいだ。僕は自分が大好きだから、まるで正反対。

「小芭内は喋るのが苦手みたいだねー。よし、じゃあ僕がお手本を見せてあげよう」

「…?」

「僕がお喋りしつつ、君の代わりに僕が務めるんだよ」

「それはただの独り言だろう」

「じゃあいくぜー…小芭内はさ、柱に仲の良い人とかいるの?」

「俺は恥ずかしがり屋なんだ。まあ好きな人はいるんだが」

「お、誰々?」

『秘密だ。もう少し仲良くなったら話してやろう』  
「…」

「ほらほら、僕達つてもう充分仲良いじゃないか。教えてよー」

『あらあら、伊黒さんを困らせてはいけませんよ。千里』

「おい、増やすな」

『うむ! 友人とは互いを思いやる心あってこそだ!』

『おはぎウメエ…』

「待て、お前の中の不死川像はどうなっている」

意外と突っ込みを入れてくれる小芭内。しかしこれ以上の柱は知らないから、後は想像で行くしかない。まあ自分の属性の名を冠しているわけだし、性格もそれっぽい感じだろう。たぶん岩柱は岩のように寡黙で、恋柱はキョンキョンしてるに違いない。あとは…水柱

……水……うーむ。

「それもそつか。ごめんね小芭内、もう少し仲良くなったら教えてね」  
『ああ』

『へーい！ 水も滴るいい男、水柱が小芭内と仲良くなる秘訣を教え  
てやろう！』

「…っ!? く、ふっ…!」

「お、小芭内？ どしたの？」

「…ふ…うっ…!」

めつちや笑いこらえてる。なに？ そんなに実際の水柱とかけ離れていたのかな。しかしようやく笑いを提供できたかと思うと、中々に感慨深い。水柱さんに感謝だ。ここぞとばかりに水柱ムーブを続けるのと、髪の毛を思い切り引つ張られた。大笑いする姿を見られるのが恥ずかしいタイプらしい。

「そろそろ到着だぜー…ねえねえ、小芭内」

「…なんだ」

「今からの戦いでどっちも生き残ったら、友達になろうよ」

「…刀も持っていない人間が戦う気か？」

「戦いには色々あるのさ。きつと役に立つぜ」

「…生き残ったら、知り合いくらいには置いてやる」

「え、ちよ、じゃあ今なんなの？」

「…」

ぬう…いいさいいさ。知り合いから友達なんて、釜でお米を炊く如きだ。お焦げができちやうこともあるけど、それもまた楽しめる。さ——頑張りますか。

## 7話

酷い……酷すぎる。愛憎渦巻く、男の夢が詰まりに詰まった遊郭がボロボロだ。というか上弦の鬼つて、ここまで広範囲に渡って破壊できるのか。猗窩座さんは徒手空拳が主な攻撃手段だったから、その破壊力は見えにくかったが——これはヤバい。家とか真つ二つになつてんの。よく見たら人らしきものも真つ二つになつてたりするし、本気で恐ろしい。

「戦いの音は——あっちからだね」

「……急ぐぞ」

ひらりと僕の背中から降りた小芭内は、軽やかに建物の屋根へと跳んだ。僕もそれに続き、音の方へ向かうと——物凄くエロい格好をした美女が、遠目に見える。下半身は紐パンと和風ニーソのみ、上半身は帯でおっぱいを隠しているのみ。遊郭とはいえ、少々下品である。だがそれがいい。

——なんて言ってる場合じゃないな。炭治郎くんと善逸と伊之助が、綱渡りのようにギリギリの状況で戦っている。というかあの子達も来てるって聞いてないんですけど。良かった、死んでなくて本当に良かった。間に合つて本当に良かった。

しかしあの鬼が上弦だとすると、明らかに猗窩座さんより威圧感が薄い。参と陸……数字が三つ違うだけで、それほどに格が落ちるのだろうか。だとすると壺と式、そして鬼舞辻無惨の強さは想像しているよりも遥かに上なのかもしれない……うーん、就職先を間違えた感。「下だ」

「ん？ ……うわ、肌がピリピリする——あっちが上弦か」

僕の位置からは見えなかったので、小芭内の方に少し近付く。そうして見えたものは、屋根の上の攻防よりも遥かに高次元の戦いだ。目まぐるしい戦いが繰り広げられている——いや、繰り広げられていた。ぐらりと体を傾かせた男性の、その左腕を目掛け鎌が振り下ろされ……今にも決着が付きそうである。

しかしその刹那、二人の間にぬるりと入り込む小芭内。まるで蛇の

ような動きに、ぎよつとする上弦の陸……奇襲成功かと思いきや、しかし刃はなんなく受け止められた。

ただ隙は充分できたし、倒れかけている男性の回収は成功だ。あと一秒も遅ければ危なかっただろう……いやほんと、髪を抜かれた時に脚を止めなくて良かった。髪のせいで助けられなかったとか、筆られても文句は言えない。

——筋肉ムキムキの男性の様子を見るに、おそらく血鬼術による毒に侵されているのだろう。そういった手段を持つ鬼は意外と多いらしい。僕は懐からお注射セットを取り出し、解毒剤を打ち込む。

鬼の毒とは、よほど特殊な血鬼術でもない限り共通した部分が多い。もちろん完治させるにはしっかりと毒の成分を調べ、それに適した薬を調合する必要がある。しかし進行を遅らせる程度ならば、しのぶちゃん印の汎用解毒剤で充分だ。

注射器で注入することによってすぐに効果は表れるが、経口摂取もさせておけば後でジワジワ効いてくる。飲み薬の方を男性の口に充てがうが——苦しげに呻いている状態ではむせてしまうかもしれない。

「薬、飲み込める?」

「…っ、ぐ、う」

「キツイか——仕方ない、口移しで…」

「やめろ。飲めるからやめろ」

四ヶ月も蝶屋敷で過ごしていれば、しのぶちゃんほどではないにしても、ある程度の知識は詰め込める。鬼と直接戦う気がないなら、しっかりと隊士をサポートできるよう腐心するのが務めだ。

向いてなかったとはいえ、医師免許はちゃんと持ってる……人体の扱ひも薬の扱ひも、普通の人よりは適正があるだろう。そのくらいは前世で勉強してきた。

「呼吸はできる? 手足の痺れはどう?」

「ああ、問題ない。悪いな、助かった——そうだ、アイツらは…」

炭治郎くんたちの方へ向かいたいのをぐっと我慢して、治療を優先したが——彼等の方向を向いた男性が喜色混じりの声を上げたため、

僕もつられて振り返る。するとそこには、みごと鬼の頸を斬り落とした三人の姿があった。

そして更なる追撃で、体の方も横に真つ二つだ。合計三分割された鬼のパーツ……炭治郎くんが頭を抱え、伊之助が上半身、善逸が下半身を受け持つて、散らばる様子が見える。グロい。というか頸を斬つたんなら決着はついたんじゃないの？

「助けてえええ！ お兄ちゃん、助けてよお！ また頸斬られたあああ！ うわあああん！」

「ぐううう……！ 糞が、気持ち悪い太刀筋しやがつてよおお……！」

「あれ、あの娘……頸を切られてるのに死んでない……？」

「二人同時に斬らなきゃ死なねえらしい——良くやったお前ら！ そのまま逃げ続けろ！ ……そんでもって、宇髄天元様ここに復活だあ！」

待たせたな伊黒！」

「動けるならさっさと戦え」

小芭内なりの叱咤激励……なのだろうか？ 意外と余裕があるのは、彼と対峙している鬼が意識をそぞろにしているからか。『お兄ちゃん』と呼ばれてたつてことは、バラバラになっている女性は妹なのだろう。鬼といえども兄妹の情はあるのか……うん、すぐくやりにくい。

しかしそれで情をかけられるような相手ではない。仲間には優しいなんて、人間の悪党でもいっぱいいる。そんな事実が被害者にとつてなんの救いにもならないのだ。故に必ず滅ぼさなければならぬ……とかカッコいいこと言っても、やるのは小芭内とムキムキさんの二人だけだ。

長時間一人で戦っていたということとは、つまりそこまで戦力差はないということだろう。ならば柱が一人増えてしまえば、決着はついたようなもの。

きつとすぐに勝つてくれる筈……いけいけ……あれ、ちよつと苦戦してるな……むしろかなり苦戦してるな……うん、めちやくちや押されてるな。どうなつてんだおい。一十一が一以下になつてないかあれ。

「ひひっ…！ 連携ぐちやぐちやなんだよなあ…！ お前ら一緒に戦ったことねえだろ」

連携もそうだが…小芭内の動きがすごく悪い。具体的に言うとう、ムキムキさんが戦いに加わってから物凄く悪くなった。むっ…！ まずい、顔を斬られた。頬から鮮血が飛び散り、包帯も破れる——かすり傷とはいえ、おそらく鎌から滴っているのは毒だろう。一旦退いてもらわなければ。

追撃をムキムキさんが逸らした瞬間を見計らい、小芭内を戦線から無理やりかつさらった。このまま激しい動きを続けると、一気に毒が回ってしまう。すぐに解毒剤を打てば、そこまで支障はきたさないだろう……ん？ かすり傷だと思つてたら口まで裂けて…っ!?

「小芭内っ!?! 口が、さ、裂け——さけ…サケ一匹、まるごと頬張れそうだねぐべえっ!」

「…」

「あ、よく見たら古傷か……そっちは後で治すとして、とりあえず今は毒を…」

「…っ」

この時代の注射器はガラス製で、使い回しが基本である。つまりムキムキさんが性病持つてたら、小芭内にも伝染するということになる……まあ大丈夫と信じよう。なにせ数を持ち歩くわけにもいかないから、全てにおいて完璧とはいかない。飲み薬を渡しつつ解毒剤を注入していると、小芭内が小さな声で呟いた。

「…治るのか?」

「そりやもう、外科手術ならしのぶちゃんより得意だし。任せてよ」

というか、現代的な『外科』という技術はまだまだ浸透していない。外科手術の設備がある施設も、国内だと片手で数えられるくらいだろう。大正の歴史など事細かに覚えていないが、たぶん国内初の整形外科施設が数年前とかそのへんだった筈。

小芭内の傷は裂けてから一旦治ってしまったため、三次縫合が必要なパターンだ。成人してからの口唇裂手術に近いものがある……まあそこまで大した手術じゃないし、なんとかなるだろう。ペニ

シリンがまだ開発されてないのが痛いけど。

しかしこと鬼殺の剣士においては、設備が整っていない状況でもかなりの大手術まで可能だ。なんせ腹が破けたくらいなら、ギョツと意識を集中すれば自力で塞げる意味不明な人間……人間？　たちである。

抗生物質最強の名をほしいままにするペニシリんさんは、術後の経過にこそ真の力を発揮するのだ。その部分が自力でなんとかなら、多少切り刻んでも問題はない。

「それにしても——動きが悪かったけど、何かあったの？」

「…俺は生まれつき視力が弱い。特に右目はほとんど見えない」

ふむふむ、つまり視力以外の感覚に頼る部分が多いってことか……：そういうえばあのムキムキさん、剣を振るとなんか爆発するもんね。目の次に感覚の比重が大きいのは聴力だ。あの規模の爆発とはいえ、間近でポンポン爆ぜると鼓膜に響くだろう。

「普段なら鎚丸かづらまるが敵の動きを俺に教えてくれるが……」

ほうほう、ただのペットじゃなかったのか……：というか鬼の動きを見切る蛇ってスゴイ。鴉に雀に蛇と、有能な生物多すぎ問題。しかし、それなら何故あかも苦戦してるんだろう。

…あ、そういうえば蛇って視力弱いんだっけ？　サーモグラフィみたい体温感知して周囲を把握するって聞いたことがある。あんなに至近距離で爆炎撒き散らされたら、たまったもんじゃないだろう。柱同士の相性悪すぎで草生えそう。

「…合同訓練とかないの？」

「…この戦いが終わったら、お館様に提言するつもりだ」

治療はひとまず終わった——が、予想以上に毒の回りが早い。ムキムキさんがそこまででもなかったから、毒としては大したものじゃないと思っていたが……：あれはどちらかと言うと、受けた側の体質がおかしかったのかもしれない。

しかしこのまま小芭内が割って入ったところで、先程の焼き直しにしかならないだろう。ここは卑の呼吸の出番だろうか——むっ、上弦の鬼の体から竜巻のように血が吹き上がった。おおっ！　スゴイ技



だムキムキさん……と思ったたらあっち側の攻撃だったらしい。めっちゃ紛らわしい。

ううむ、技一つで周囲の家屋がバラバラになった……怖すぎるんですけど。ムキムキさんは既に効果範囲を見切っていたのか、ギリギリを見極めて下がっている。しかし鬼の方はそれを織り込み済みだったようで、距離が取れたのを見て取ると、後ろに向かつて走り出した。「……っ！ 待てやコラアア！」

「ひひ、言われて待つ奴なんかいねえんだよなあ……！」

——そうか、さつきムキムキさんが『同時に頸を斬らないと死なない』って言ってたな。再生可能な命綱なら、先にそちらを優先するのは当たり前だ。慎重な気質じゃなくとも、誰だってああするだろう。妹を助けるのが先という気持ちもあるのかもしれない。

頭を持つている炭治郎くんを標的に決めたらしく、彼目掛けて凄まじい速度で駆けていく。ムキムキさんの方もそれを追いかけるが——意表を突かれたせいで初動が遅くなり、差が縮まらない。ちなみに何故これほど事細かに実況できるかというのと、既に僕が鬼を追い越しているからだ。

「炭治郎くん！ パスパス！」

「千里さん！ ……ええと、『ぱすぱす』ってなんですか！」

「頭こつちに頂戴！ それ持つて逃げとくから……適材適所つてやつさー！」

「——はい！」

後ろから脅威が迫っているのに気付き、素直に放り投げてくれる炭治郎くん。単純に、鬼こつこなら僕の方が圧倒的に有利だと理解しているんだろう。しかし振り返って鬼と対峙するのは——え、大丈夫なの？ 妹鬼との戦いと、上弦の鬼VSムキムキさんの戦い、比べた感じ……炭治郎くんだと少し厳しいのではないだろうか。

一瞬だけ考えた後、逃げる方向を真横に変更した。見せびらかすように頭部を掲げると、お兄ちゃんの方も進路を変えてくる。炭治郎くんに対して失礼かもしれないけど、それでも彼が死ぬのは見たくない。それに、上弦に対抗できる柱が二人もいるんだ。命を張らなきや

いけない時つてのはあるんだろうけど、少なくとも今じゃないと思う。

「千里さん！」

「悪いけど炭治郎くん、今は——」

「そうじゃなくて、髪っ、髪が……！」

「いま言う!? 色々あつてちよつと減ってるだけだよ！」

「いえ、そうじゃなくてっ——」

そんなに目立つほど抜かれてたの？ 毛根から根こそぎだったらどうしよう……ん？ あれ、なにやら髪の毛が体中に纏わりついて……っ!?

くっ——妹鬼の髪がやたらめつたらに伸び、それに絡まって思いきり転んでしまった。とはいえ大した力を出せないらしく、簡単に引き千切ることはできそうだ。

できそうだけど……ううん、なんか世界がスローモーションな感じ。いや、理由はわかつてる。この体勢から復帰する前に——髪を引き千切るより前に、鎌で切り裂かれてしまう事実が、どうしようもなく理解できたからだ。

走馬灯ってほんとにあつたんだ……なまじ動体視力もずば抜けているから、どうにもならないことがわかる。炭治郎くんが割つて入ろうとしているが、どう見ても間に合わない。

え、こんなあつけなく死ぬの？ 二度目の生を受けた意味つてあつたのだろうか。親に捨てられて、鬼からただただ逃げ続ける生活……そんな状況からやつと抜け出せて、やつとまともに生きられると思つた矢先だぞ。こんなのあんまりじゃないか。

絶望に沈む時間すらなく、ただ恐怖に目を瞑る。ああ、きつと鬼殺の剣士たちはこんな状況でも最後まで抗うんだろう。戦うことを選ぶか、逃げることを選ぶか……そもそも最初から篩ふるいにかけられているのだ。僕の言う『向き不向き』というのは、正にそれを指している。

戦う力はあるかもしれないけど、やっぱり絶望的に向いてない。そんなの解りきつてた——だけど、少しでも力になれないかと思つてしまったのだ。だから後悔はない……わけないだらちくしょう！ 誰

か助けてえええ!!

：ガキン、と硬質な音が響いた。目を瞑る前に見た最後の光景は、僕の首を狩るような鎌の動きだった。もしや土壇場で体の硬質化能力でも手に入れたのだろうか？ 恐る恐る目を開いて見ると——市松模様の羽織が、僕を守るようにはためいていた。

「——約束したんだ！ 俺が守るって！」  
「……!?!」

間に合う筈のなかった炭治郎くんが、確かに目の前で僕を守ってくれている……前に約束した通り、僕を背中に隠してくれている。柱の猛攻すらなんなく捌いていた上弦の鬼が、炭治郎くんの斬撃で腕を落としている。

危なっ……！ いま、墮とされかけた。誓ってシヨタコンではないが、ちよつと惚れそうになった。僕が男だったから我慢できたけど、女だったら我慢できなかった。そのくらいカッコいい。

いや、それはともかくさつきと抜け出さねば。絡まった髪を引き千切り、妹鬼の口に肥やし玉を放り込む。そのまま下顎を思い切り叩くと、彼女はこの世のものとは思えない悲鳴を上げた。

「ウエ、エ、エエツ!? お、おげっ——うええっ……！」  
「うわっ！ 君、口臭いなあ」

「ごっ……殺す、絶対に殺してやる」うウ、おえ……！  
あまりの臭さに、髪の制御など彼方に飛んでいってしまったのだろう。十倍濃縮ウンコとでも言うべき肥やし玉は、正しく真価を發揮したようだ。腕に絡まっていた髪は自分で千切ったが、足の方はそうするまでもなく解けていた。

同じ轍を踏む訳にはいかないので、彼女の頭部を縄でグルグル巻きにする。頑丈な荒縄だし、隙間なくギチギチにすれば大丈夫だろう。僕を絞め殺す力が出せなかった時点で、彼女の力はたかが知れてる。頸を斬られても死なないとはいえ、大幅に弱体化はするらしい。

——追いついてきたムキムキさんが、炭治郎くんと共闘し始めた。小芭内との酷いコンビネーションとは違い、上手く動いている。というか、炭治郎くんの動きが凄く良くなっている……ん？ 額の痣が黒

く大きくなっているような…？

「『譜面』も完成したぜえ！　合わせろ竈門炭治郎！」

「はいー！」

「…」

「伊黒！　テメエは不協和音になるから入ってくんじゃねえ！」

ひどい。小芭内落ち込んだ。しかし言っていることはド正論なので、どうしようもない。というか耀哉、もう少し柱の持ち場を考えた方がいいんじゃないだろうか。

増援に際して小芭内が一番近かったことは、そもその持ち場が隣り合っていたのは間違いない。そして彼等は、一緒に戦うとなれば最悪の相性だ。

「小芭内、これ持ってて」

「…どうするつもりだ」

『譜面』というのが何を意味するかは不明だが、先程の攻防とは違い、ムキムキさんの動きが良くなっている…いや、動きが良くなっているというより、鬼の動きを先読み出来ると言う方が正しいだろう。加えて謎のパワーアップを果たした炭治郎くんの援護もある。

——それでいて尚、戦いの趨勢は鬼に傾いている。一つは毒の存在…ムキムキさんの体質に誤魔化されていたが、たぶん解毒剤が想像以上に効いていない。毒に対して耐性が高いということは、つまり薬の効きも悪いということだ。注射した分はともかく、飲み薬の方はほとんど効果が出ていないように見える。

そして炭治郎くんの方も、明らかに限界だ。元々肩に傷を負っていたようで、限界以上の動きがそれを悪化させている。というか血が吹き出している。あと十秒か二十秒も戦闘が続けば、失血性のショックで倒れるだろう…最悪、失血死までありえる。気絶して『呼吸』が維持できなければ、塞ぐことも叶わない。

「ぐっ——くっ……！」

「ひひっ……！　お前らどっちも限界だよなあ……！　——なああああ！！」

極限状態の二人の心が見える。『一瞬の隙がほしい』と。そしてど

ちらもがそれを感じ合い、どうにか隙を作り出そうとしている。二人とも理解しているんだろう……今この局面で決めなければ、十数秒後には己が倒れてしまう。

息の合った二人でようやく抑え込んでいる現状、小芭内がムキムキさんの立ち位置が変わるのは悪手——だから小芭内は、二人の限界を見極めてギリギリのタイミングを図っている。二人がかりより三人がかりの方が弱体化するなんて、酷い話だ。

しかし小芭内が一人で勝てるかと言えば、厳しいと言わざるを得ない、しのぶちゃん曰く、上弦の鬼は、少なくとも柱二人か三人分の力があるとのことだ……だからここで決めないといけない。『一瞬の隙』を作れば——必ずどちらかが決めてくれる。

僕は身体能力だけなら……特に脚力については、どの柱も凌いでいるだろう。しかし壊滅的に『戦闘』のセンスがない。剣の才能も格闘の才能も絶望的だ。だから攻撃は仕掛けない。たぶん二人の邪魔になるだけだろう。だから『驚かせる』のだ……上弦の鬼ですら『ありえない』と思わせる、たった一つの技を以って。

竜巻のような激しい攻防が飛び交う屋根の上。そこに跳び乗り、タミングを見計らって突撃する。ムキムキさんはともかく、炭治郎くんとは何度もトレーニングをしている。きつと合わせてくれるだろう。

「剣も持たねえ人間が来たところで——意味ねえんだよなあああ!!」

ムキムキさんが『バカ野郎』とでも言うように視線を超越した。まあ死ぬ可能性も充分あるから、その通りと言えはその通りだ。しかし先程のように神を呪う気はない……自分で決めたのなら、そして炭治郎くんのためなら命をかけられる。僕のこの力——たった一つ、誰よりも誇れるこの力なら、きつと上弦の鬼にも通用するから。

「——『血鬼術』」

「……!? なっ……!」

振るわれる鎌を気にせず、右腕を鬼の前に持っていく——そして『血鬼術』と言葉を紡ぐ。そうだ、ただの人間が血鬼術など使えるものか。だからきつと驚いて、ほんの一瞬の隙くらいはできる……まあ実

際血鬼術なんて使えないけど。

「…が僕にも使えたらいいのになー」

「——だあああつ！ テ、テメツ、ふぎけ……がっ!？」

一瞬どころかだいぶ大きい隙ができたその瞬間、ムキムキさんが彼の腕を両断する。そして僕が必ずやり遂げると信じてくれていたのか……炭治郎くんは、全霊の力を込めて構えをとっていた。まるで太陽の輝きと見紛うような一撃が煌めき——鬼の頸を一閃した。

「ふ……ぎけん……なよなああ……!」

「ま、ふぎけるのが僕の武器なんでね」

まさか死因がズツコケとは、長い時を生きただであろう彼も想像していなかったに違いない。生首が地上へと落下し、ドサリと無情な音が響く。それで何かを察したのか、小芭内がぶら下げていた頭部がモゾモゾと動きだし、口元にはほんの少しの隙間ができた。

「ねえお兄ちゃん！ 嘘でしょ!? あんな奴らにやられてないわよね!? ねえ！ ねえつたら——お兄ちゃん！ お兄ちゃ——ぎやつ!？」

信じたくないとでも言うように悲鳴を上げる妹鬼だが、小芭内が鬱陶しそうに蹴り飛ばしたため中断される。衝撃で縄が解け頭部が露わになったが、端の方からジワジワと消滅していく様が見て取れた。上弦の鬼ともなると、消える時間も少しばかり長くなるらしい。

しかしそんな末期まっごの時間も許さないとばかりに、小芭内は刀を抜き頭部を斬り刻もうとして——炭治郎くんがそれを刀で止めた。大した力は込めていなかったのだろうが、炭治郎くんは既に満身創痕だ。衝撃だけで肩から血が流れ落ちる。

「…なんのつもりだ竈門炭治郎」

「痛っ、ぐっ……! ……もう……消えます……これ以上は必要ないでしょう……!」

鬼に情けをかける炭治郎くんに、小芭内は剣呑な雰囲気を感じそうともしない。しかし対峙してる時間も惜しいとばかりに、炭治郎くんは妹鬼の頭部を持ち上げ、消えかけている兄鬼の頭に寄り添わせた。『お兄ちゃんお兄ちゃん』と嘆く様子は、まるで幼子が泣き叫んでいるようだ——そしてそのまま、塵のように消えていった。

…小芭内が邪魔をしなかったのは、自分が何もできなかつたからだろう。元からあまり炭治郎くんの良い感情を向けていなかったが、それはそれとして、上弦の首をとつたのは間違いなく彼だ。ムキムキさんの力が大きかったとはいえ、炭治郎くん無しに討伐が成ったとは、小芭内もきつと考えていない。

炭治郎くんの優しさにちよつと涙腺が緩くなりつつ、鴉に耀哉への言伝を頼む。百年以上ぶりの上弦撃破だ、きつと喜ぶだろう。僕の方は、急いでムキムキさんと小芭内を蝶屋敷に運ばないと。

柱の犠牲無しに倒したけど、毒で死んじゃいましたとか洒落にならない……ん？ あ、ムキムキさんがヤバい感じに倒れてる。間に合うか？ いや、間に合わせねば。

——なにやら退魔忍のようなエロい格好をした女性三人が、ムキムキさんに群がっている。谷間チラチラ、フトモモムチムチの丸出しで、もはや痴女である。物凄く気になる存在だが、今はお近付きになる余裕もない。

「失礼、お嬢さ——」

「いやああ天元様あぁー!! 死なないでええー!!」

「ちよつとどい——」

「ちよつと黙りなさいよ！ 天元様が喋ってるでしょ！」

「いやあの運ぶんで——」

「神様ああ!! なんでこんな酷いこともががあがつ!？」

「黙りなさいって言ってるでしょ!? いい加減にしないと口に石詰めるわよ！」

「げほつ、詰めてから言わないでください〜！」

ええい、もう無視だ無視。付き合ってる時間はない。小芭内の方はまだ余裕があるから、悪いけど先に彼だけ運ばせてもらおう。ギャーギャーと騒いでいる女性たちを押しつけて、ムキムキさんを背中に担ぐ。全速力を出すために深く『呼吸』をして——ゲホツ……ん？ なんかめっちゃ苦しい。

「…彼は蝶屋敷に……連れて……行くから——ゴフツ……！」

「キヤーーツ!？」

「ちよつと、あなた大丈夫!？」

え、なんで僕も毒食らつてんの？ 攻撃に当たった覚えなんか……はっ！ 腕にちよつぴり傷が！ 掠つてたの!? げ、解毒剤、解毒剤……あ、注射器割れてる。もしかして転んだ時？ だからガラス製は嫌なんだよ——いや、ちよ、え、これ死ぬ？ もしかして死ぬ？ 嘘でしょ？

「ぐっ、ごほっ……ぐ……」

「だ、大丈夫？」

「うわああん！ 天元様もこの人も死んじゃううー！」

「くっ……死ぬならせめてその柔らかい胸の中で！ ——ゲフウツ！」

「人の嫁になにしてんだテメエ……！」

「ゴフツ……き、既婚の方でしたか……失礼。じゃあそっちのお嬢さんっ——あががっ！」

「全員俺の嫁だ」

「おいおい、死んで当然かよ」

「天元様になんてこと言うんですかああー!!」

「あだだっ！ ——いや、僕も死ぬ寸前だからね!？」

今日何回死にかけるの？ 死にかけるっていうか、もう死ぬ。マジで死ぬ。せめて可愛い女の子の腕の中で死にたかった。というかムキムキさんと退魔忍たちに殴られたせいで、症状が早まった感あるんですけど。

訴訟、これ訴訟……あ、三途の川が見えてきた……幼女形態の禰豆子ちゃんが手を差し出している。思わず縋り付くと、体が炎に包まれた。笑止っ……いや、焼死か。

「……ん？ あれ、毒が消えて……」

……どうやら禰豆子ちゃんの血鬼術は、鬼や鬼の術、それどころか鬼の毒にまで効果を及ぼすらしい。何が凄いつて、人体には無害つてところだろう。感激して命の恩人に抱きつくと、頭の上にヨダレがダバダバ流れ落ちてきた。おおっとお。

「禰豆子ちゃん、ムキムキさんにもお願い」



「誰のことだオイ」

「禰豆子ちゃん、ガチムチさんにもお願い」

「そこじゃねえよ!」

ムキムキさん……改め宇髄さんが炎に包まれると、黒く染まっていた肌がすつきり艶を取り戻した。後は小芭内にもやってもらえれば、もう毒の心配はしなくて済むだろう。僕が何を言わずとも、彼の元へひよこひよこ向かった禰豆子ちゃん——しかしその小さな手は振り払われた。

「…鬼の施しなど受けん」

「いや、万が一ってあるから。やってもらいなよ」

「いらん」

ううん……すつごく鬼嫌い。鬼殺隊では珍しくもないが、命がかかっている状況でそれはどうなんだろうか。いやまあ、小芭内だけはまだ猶予があるし、蝶屋敷に連れて行く時間も充分にある。

しかし容態が急変しないとも限らないし、なにより彼はオッドアイだ。ヘテロクロミア……先天性の遺伝子疾患という可能性も否定できないし、そういった人間は得てして病弱だ。柱である以上、身体機能は問題ないにしても、免疫機能が弱いということはある。

…しかし素直に禰豆子ちゃんの世話にはなってくれないようだ。故にここは無理やり行くべきだろう。鬼の体が崩れ去ったことで、伊之助と善逸も戻ってきた。ここは何日にも及んだ連携訓練の成果を発揮するところだ。

「伊之助!・善逸!・フォーメーションB!」

「えっ?」

「なにやっつてんだお前」

うん、まったく意図を理解してくれなかった。結果的に僕が小芭内の左腕を掴んでいるだけだ。体も押さえつけようとしているのだが、まるで蛇のようにクネクネして捉えられない。この子つたらなんてワガママなのかしら。

「ガチホモさん! エロ忍者たち! 小芭内を押さええてくれ!」

「宇髄つつつてんだろうが!」

「エロ忍者!?!」

僕に突っ込みながらも、小芭内に殺到する四人。あれ、ちよつと立ち位置を変わりたくなってきた。少なくとも三人のおっぱいが密着しているのだ。しかも三割ぐらい露出しているので、生乳も触れていることだろう。

そしてようやく意図を理解したのか、伊之助と善逸も群がってきた。計七人がかりでもみくちやにホールドされた小芭内……いくら柱とは言え、これなら動けないだろう。ちなみに炭治郎くんは怪我が心配なので、僕が視線で制した。

「今だ！ 殺れ！」

「殺るなド阿保！」

「きやあああ！ 誰!?! 今おっぱい触ったの誰！」

「コラッ、善逸！ どさくさに紛れてなんてことを！」

「ぬれぎぬ着せてんじやねえ!!」

「ゲハハハ！ コイツを倒せば俺様が柱だぜえ！」

わちやわちやのシツチャカメツチャカになつているところに、禰豆子ちゃんが炎を浴びせる。その効果は正しく発揮され、小芭内を蝕んでいた毒は消え去ったようだ。苦々しげに顔を歪ませているが、こればかりは我慢してもらう他ない。つまらない意地で命を落としては、耀哉だつて悲しむだろう。もちろん僕も。

「よーし、そのまま胴上げだ！ ワーツシヨイ！ ワーツシヨイ！」

「ワハハハ！ 祭りの神の力を見せてやろう！」

「山の王の力も見せてやるぜ！」

「アホしかいねえ……」

そのまま小芭内を胴上げて、上弦の鬼撃破を祝う。しかし三度目に放り投げたところで、彼は空中で身を振り——脚による高速の四連撃を繰り出した。

「——おっと」

「——危なっ」

「ぐぼあっ!?!」

「いぎやっ!?! とぼっちり！」

僕と宇髓さんはさらつと避けたが、伊之助は腹に膝がめり込み、善逸は脳天に踵落としを食らった。殺意の波動に目覚めた小芭内のオーラは、めっちゃ怖い。学校における怖い先生ズの、十倍くらい怖い雰囲気纏っていらつしやる。しかし自分から人と仲良くなるうとしないタイプは、こうでもしないと人間関係が広がらないのだ。

「しつかし……くくつ、お前……あの状況で『血鬼術が使えたらな』は——面白すぎんだろ」

「効果抜群だったっしょ？」

「まあな……そういやお前はなんなんだ？ 隊服でも『隠』の服でもねえが」

「僕はハシラと同格の外部協力者——」

「…あん？」

「——その名もパシリ」

「使いつぱしりじゃねえか」

「鬼殺隊専属の飛脚みたいなもんさ。今回みたいに他の柱を運んでくることもあるし、君を運ぶこともあるかもしれないから、よろしくね。

名前は『飛鳥千里』」

「飛鳥か……ああ、よろしく頼む」

「千里でいいよ。僕も天元って呼んでいい？」

「おう、いいぜ」

おお、素直に仲良くなってくれるのは杏寿郎に続いて二人目だ。見たまんまのイケメン陽キャらしく、ニヒルに笑っている。しかしエロい美女を三人もお嫁さんに行っているとは……羨ましい。物凄く羨ましい。というかこの時代って重婚オツケーなの？

「おい、人の嫁に助平な目向けてんじゃねえよ」

「いや、でも……こんだけ露出が激しいと視線いつちやわわない？ 仮に彼女たちが汚いオツサンだったとしても、露出に目が行くのは人間の本能だよ」

「汚いオツサン!? うわああん、ひどいですうー!」

「例えばさ、天元。君が実弥と会った時、まずどこに目が行くかって言ったら、ガバガバに開いた胸元だろ？ そういうことだよ」

「どういふことだよ」

まったく興味の無いオバさんのパンチラでも、つい目が行ってしまふことはあるだろう。本来隠されるべきところが隠されていないと、エロ関係なく目が行くのは人間の性だ。だから僕は悪くない……というようなことを懇切丁寧に語ると、腹パンされた。

「ま、なにはともあれ上弦の鬼が一人減った訳だし……この調子で鬼舞辻無惨も倒しちゃって、鬼殺の剣士総無職化計画を進めようぜ」

「嫌な言い方しやがる……お館様なら、そのへんの面倒は見てくださるだろうよ」

鬼の大元はまだ存命だが、それでも確実に一歩進んだ。東の間の喜びくらいは許されるだろう。天元が嫁さんたちに『まだ鬼殺隊は離れられない』と謝っているが……どういう意味なんだろう？ 気になるけどプライベートな問題っぽいから、少し距離を取る。ふと後ろを向くと、伊之助と善逸がボコボコにされて正座をしていた。

とぼつちりを受けるのは怖いので、少し離れて休んでいた炭治郎くんのところへ向かう。肩の傷は既に表面が塞がって、血も止まっている。

色々考えることがあるのか、夜空を見上げて物思いに耽っている様子が、彼にしては中々珍しい。あまり邪魔をするのも悪いので、たった一つ言いたいことだけ伝えよう。

「炭治郎くん」

「……………んがっ！ ……あ、千里さん。どうしたんですか？」

呼びかけると、ビクンと体を震わせる炭治郎くん。ん？ もしかして寝てた？ まあ体力もすっからかんだろうし、人間の体としてはむしろ正常か。黒くなっていた痣も、今は戻っている。あれも地味に気になるが、やっぱり今は一つだけ。

「——守ってくれて、ありがとね」

『はい』と、優しさに溢れた笑みで返事をする炭治郎くん。こんなに優しい少年が鬼を狩っている事実が、少しでも物悲しい。うとうとと頭をふらつかせる彼を支えて、僕も夜空を仰いだ。

——お疲れ様、炭治郎くん。

## 8話

上弦の鬼を相手に柱が一人で戦い、生き残る確率……それはこの百十三年の間、完膚なきまでに零だった。鬼殺隊最強を誇る精鋭達ですら、一世紀以上勝ち星を上げることが叶わなかったのだ。

しかしその敗北の歴史に終止符を打った剣士——天元と炭治郎くんたちは正に英雄である。特に階級『かのえ庚』が上弦の頸を斬ったというニュースは実にセンサーショナルであり、鬼殺の剣士全員に衝撃が走った……なんてことはなく、割と平常運転である。

鬼への情報拡散を防ぐため、鬼殺隊というのは兎角秘密主義なのだ。柱でも知らない情報は結構ある——それは先の戦いを思い返せばわかるだろう。多少なりとも戦い方を共有しておけば、あそこまで苦戦することはなかった筈。それを改善するためか、ここ数ヶ月で柱同士の稽古が何回かあったようだ。本当に数えるほどだけだ。

やはりと言うべきか、柱というのは中々に忙しい。どれくらい忙しいかと言うと、小芭内が整形手術を拒否するくらいには忙しいのだ。裂けた部分の縫合は既に処置を終えたが、痛々しい傷痕はそのままである。あれは皮膚移植が必要になるため、少し複雑な手順になってしまうのだ。

ケツから皮膚を引っ張ってくるか……と呟いていたせいで拒否された可能性もあるけど。とにかく、柱の馬鹿げた回復力をもってしても、皮膚の定着にはそれ相応の時間がかかる……可能性が高い。

呼吸による回復機能のメカニズムは、知覚から始まる能動的なものであり、機器に寄らないバイオフィードバックとでも言うべき能力から始まっている……というのが僕の所見だ。

そう考えると、移植手術に関してはむしろ悪影響を及ぼす可能性がある。『修復』とは元に戻ろうとする力だが、移植とは『異物』を馴染ませる行為に近い。たとえ自分の皮膚であろうと、毛細血管すら繋がっていない状態では認識できないだろう。

つまり異常な回復力の恩恵には、おそらく与れない……ということ  
は相応に時間もかかる。

縫い合わせるだけの傷とは違い、皮膚を移植した後は激しい動きなど厳禁だ。しかしそこまで長く現場を離れられないとのこと、そのうちの手術はお流れになった。使命感パないの。

とはいえ口を切り裂かれてからこっち、彼の食事はほとんどが流動食だったそうで、ようやく固形物が食べられると喜んでくれた。

そう——あの傷は彼がまだ幼い頃、鬼の戯れによつてできたものらしい。そこまで深く踏み込むつもりはなかったが、手術の代金代わりにと昔話をしてくれたのだ。

やっぱり鬼殺隊の剣士は、誰も彼も辛い過去がある。話してくれたことに嬉しさを感じつつも、申し訳ない気持ちもまた湧き上がる。ちなみに僕の方も昔話をしたところ、『そうか』で終わった。なんか信じなくてない気がするんですけど。

——とまあ、そんなこんなで二ヶ月ほど。相変わらず蝶屋敷で居候生活を続けているが、それは炭治郎くんたちも同じである。基本的に任務が終わればここに帰ってくるのだ。三人一緒に任務へ赴くことこそないが、帰る場所はここだと認識しているんだろう。

ちなみに上弦との戦いで刀を刃こぼれさせた炭治郎くんは、わざわざ鍛冶職人さんが住む里へ足を運んで謝罪しに行つたそう。誰に対しても配慮を忘れない、そんな徳の高さが良い運命を引き寄せたのか——なにやら凄い刀を手に入れたと、興奮気味に教えてくれた。炭治郎くんにもそんな一面があつたのかと目を丸くしたら、変な声を出して赤面していたのが印象深い。

それと彼に浮き出た痣については、耀哉の奥さんであるあまねさんから詳細を教えてもらった。曰く、始まりの剣士たちにもあつたとか、浮き出るとめっちゃ強くなるとか、そんな感じらしい。問題があるとすれば、痣が発現すると長生きできないという部分である。

：いや、大問題すぎるだろう。というかどうかというメカニズムなの？ 鬼もそうだけど、現代医学と真つ向からプロレスしないよね。『痣が出たら長生きできない』だけなら奇病かなんかかもしれないけど、それで大幅パワーアップってなんぞや。

とりあえず、歴代柱の手記にもそう詳しくは記されていないらしい

い。どこまで信憑性があるのかは不明だが、そんな訳のわからん病気が喧嘩を売ってくるなら、僕が買ってやろうじゃないか。きつちりさっぱり説明して、炭治郎くん到天寿を全うしてもらおうとしよう。

復讐に命をかけている人も多い中、彼は妹のため、人のため、そして自分のために戦い続けている。ちゃんと未来を見ている。だってそれを手伝うことが、命を救ってもらった恩義に報いる、何よりの手段と言えるだろう……耀哉にも言ったが、僕は義理堅いのだ。自分の命に高値を付けているからこそ、それを守ってくれた炭治郎くんには相応のものを返さなければならぬ。

そんな感じで、一度は捨てた医者之道を再開したのだが——しのぶちゃんの研究室やら資料やらを借りている内に、気付いたことがある。彼女は自分の体を対象にして、多量の毒を仕込んでいるのだ。藤の花の毒は、人間が摂取してもそうそう死ぬことはないが……何事にも限度というものがある。

全身を毒の塊にして鬼に食わせようなどと、もはや狂気に近い。それ程までに鬼を憎んでいるということなのだろうし、そこまでしないと上弦の鬼は倒せないと考えているのだろうが、あまりにも自分を省みないやり方だ。もちろんその強固な意思を否定するつもりはないし、僕に口出しする権利はない。

…権利はないが義理はあるので、彼女が日常的に摂取している毒はすり替えておいた。ただのビタミン剤やサプリメントのようなものだが、見た目は似せてあるのでしばらくは気付かないだろう。そのへん色々揃えるにしても、かなりお金がかかってしまったが——いくらでも使えるって素敵。

彼女の覚悟を踏みにじる行為だと言われれば、なるほどその通りだろう。しかし『命をかける』のではなく、端から『命を捨てる』やり方は、近しい人の好意を踏みにじってはいないだろうか……とまあ色々考えたけど、要はしのぶちゃんに死んでほしくはないという、それだけの理由だ。

定期的に『自身の毒濃度』を調べているから、異変に気付くとすれば一ヶ月後くらいだろうか。その時になれば、拝み倒してでもやめて

もらおう。最悪の場合、蝶屋敷の全員にバラして泣き落とし作戦でも決行すれば、思いとどまるかもしれない。

それでもなお復讐心が勝つというなら、もう言うことはない。実力行使でとめるまでだ。問題があるとすれば、実力が足りていないところだろうか。まったく、自分を大事にしない人ばかりでやんなっちゃうぜ。

——今もそうだ。任務に稽古、それだけでも疲れてるだろうに……夜も更けたこんな時間、実験室で毒の調査をしている。柱は確かに忙しいけど、ちゃんと休養日はある。疲労で実力が出せず死んでしまえば、それが一番の損失だと理解しているからだ。なのに彼女の睡眠時間は、上弦撃破の報からこつち、減ってばかりである。

耀哉が『兆し』だと言っていたのを、柱の人たちも感じているんだろう——上弦の鬼と戦う機会が、近い内にやってくるかもしれないと。産屋敷当主としての直感がそう断じたのなら、充分あてになる言葉だ。

「しのぶちゃん。体に障さわるぜ」

「…ええ、ありがとうございます。ですが——…せえいつ！」

「痛いっ！ いきなり何すんのさ！」

「こつちのセリフでしょう！ どこ触ってるんですか！」

「だって『体に触るぜ』って言ったたら、『ええ』って言ったじゃんか」

「……………はあ…」

「ほらほら、ため息は幸せが逃げるぜ」

「いったい誰のせいでしょうね——むぐっ…!?!」

プンスコお怒りなしのぶちゃんの、その口にお土産のキャラメルを放り込む。つい最近、森永製菓が発売したミルクキャラメルだ。『ポケットに入るお菓子』というフレーズが目新しい、そして僕にとって懐かしいお菓子である。

モゴモゴと口を動かすしのぶちゃんは、小動物のようで可愛らしい。まあ実際は熊でも突き殺せる女傑なわけだけど。しかし表情から険もとれて……うむ、甘味の偉大さがよくわかる。砂糖ってさ、人によつては麻薬よりも中毒性の高い成分だよな。



「美味しい?」

「…ええ、まあ。それにしても——今日はずいぶん遅かったですね」  
「柱の予定とかの調整で、あまねさんの手伝いしてさ。けどしのぶちゃんも、こんな時間まで起きて待っててくれるなんて……いやあ、本当にできた女性だぜ。僕にはもったいないね」

「そうですね」

「素っ気なっ」

「そうですね」

むっ……最近あの手この手で僕のからかいを回避しようとするしのぶちゃんだが、今日は『そうですね』作戦らしい。何を言われても『そうですね』と返すことで、僕を諦めさせようと考えてるんだろう。うーん……そっちがそうくるなら、こっちにだって考えがある。

「しのぶちゃんってほんと可愛いよね」

「そうですね」

「しのぶちゃんってほんと天才だよね」

「そうですね」

「自信過剰だね」

「そうですね」

「…」

「…」

「鬱うつの反対は?」

「躁そうですね——っ…!?!」

「なんと! しのぶ殿がくだらない駄洒落を!」

「くっ…!」

ふっ、反応してしまった時点で僕の勝ちだね。そもそも彼女は、売り言葉に対して買い言葉と皮肉で返すタイプである。つまり無視するよりも言い負かしたいという性格であり、レスバにはこれっぽっちも向いてない。悔しそうにしている彼女の肩をつついてみると、反撃に鳩尾みぞおちを突かれた。最近、手を出すのが早くなってる気がする。

「あ、そうそう。次の稽古は水柱さんが蝶屋敷にくるみたいだから、準備しといてね」

「富岡さんが……ええ、わかりました」

柱同士の稽古は、どちらかがどちらかの下へ赴く形になっている。僕はまだ水柱さんに会ったことがないので、時間が合えば是非お目にかかりたいものだ。ほんとに『ヘーイ!』とか言うんだろうか……いやまあ、小芭内の反応を考えると絶対に言わないだろうけど。

「…少し気になっていたんですが、訓練の相手はどうやって決めているんですか?」

「ちよつと前、鴉に色々と言われたでしょ? 大まかな戦い方とか、他の柱との個人的な付き合いとか。それを踏まえて、あとは呼吸の相性とか日程の問題とか考えて調整してるわけ」

しのぶちゃんは恋柱さんと仲が良かったり、岩柱さんに恩義があったりと、他の柱との関係は割と良好らしい。亡くなったお姉さんも柱だったらしく、その関係で天元や実弥とも多少の付き合いがある。

逆に水柱さんと言うと、限りなく人間関係が薄いらしいのだ。特に実弥や小芭内に嫌われているらしく、それを改善するための人員として、白羽の矢を立てられたのがしのぶちゃんだ。

水の呼吸と、その派生の派生である蟲の呼吸……相性も悪くはないだろう。何度か任務を共にしていることもあり、水柱さんの人見知りを改善する第一歩として、しのぶちゃんが適任と見なされた訳だ。

他の柱は戦力的な意味での稽古なのに、水柱さんだけはコミュニケーション能力の稽古ってどうなの。いやまあ、嫌ってる相手と息を合わせるのって難しいから、理屈としては間違っていないんだろうけど。

それはともかく、今回の件については耀哉も反省していたようだ。上弦の鬼を相手では、柱一人では厳しい——それ自体は理解していたのに、共闘するにあたっての相性を考えていなかったと。

自らが戦えないからこそ、戦闘に関する部分は柱任せにしていたのだ。最強たる彼等であれば、上手く息を合わせることなどお手のもの……と思ってしまうのも、ある意味仕方ないだろう。戦えない人間に戦う人間の気持ちはわからない。それは僕も一緒だ。

しかし反省した後は、それをしっかりと活かすのが耀哉だ。誰がどう

いう形で共闘するか不明な以上、長所を伸ばすことと、短所を補うことを最優先に目標を組んだ。

例えば杏寿郎と恋柱さん。二人は元々師弟の間柄であり、相性は非常に良い。炎の呼吸から恋の呼吸へ自分なりに昇華させたとはいえ、派生の呼吸だけあつて共闘しやすいだろう。『長所を伸ばす』とは、こういった関係の柱を積極的に共同訓練させることにある。

逆に『短所を補う』とは、小芭内や天元のような致命的に合わない二人でも、ある程度は共闘できるように擦り合わせてもらおうということだ。多少時間をかければ、互いを邪魔しない動きは掴めるだろう——そんな信頼に応えられるのが、柱というものである。

「——富岡さんの意思疎通能力強化？ …それは少し荷が重いですね」

「そんなに？」

「人と距離を置く方ですし……特に、柱に対してどこか壁を作っている節があります」

「うーん、柱に壁か……あとは床さえあれば家が建つね。なんちゃつ

——」

「なんでやねん」

「——つて……え、は……え？」

「つあ、い、いえ……なんでもないです」

「あ、いや……うん、屋根もいるよねそりや……ぶふつ……！ くつ、く……！」

「……つ!!」

まさかしのぶちゃんがこんな返しをしてくれるとは……これが深夜のテンションの恐ろしさというやつだろう。僕がずっとボケ続けてきた効果も多少はあるのかもしれない。しかしこれほど顔を真っ赤にしたしのぶちゃんは初めて見るな……うーん、とんでもなく可愛い。

「ゴホン……んんっ！ ……そろそろ真面目に話してもらえますか？」

「いや、今のはしのぶちゃんが……あっはい。オーケー、わかった。じゃあ——色仕掛けなんてどう？ しのぶちゃんに『好きっ！』なん

て言われたら、大抵の男はなんでも聞かぜ。きっと水柱さんも例外じゃないさ」

『真面目に』と言いませんでしたか?」

「いや、割と本心から言ってるんだけど——あ、そっか。僕以外の男に好きなんて、嘘でも言いたくないか……いやあ、気付かなくて申し訳ない」

「嘘でも本気でも、千里に好きとは絶対に言いませんから」

…むむ、そこまで言われると逆に言わせたくないな。男が告白する側なんていう固定観念は、もう古い。今はどっちが先に告白するかを競う、恋愛頭脳戦がブームってヤンジャンで言ってた。とりあえず、今日寝るまでに一回は好きって言わせてやろう。

「そういえばさ、しのぶちゃんは煉獄家みたいに何か書き残さないの?」

「なんですか急に」

『代々炎柱手記』みたいにさ、蟲柱もなんか残さないのかなって」

「あのですね……そもそもとして、代々柱を輩出している時点で煉獄さんの家系は異常なんです。血統が強さに影響しないとは言いませんが、それでもあの一族は特別に過ぎます」

「あー、まあ遺伝子強そうだもんね。弟さんもお父さんも杏寿郎と鏡写しだし」

「それに、鬼の頸を斬れない柱なんて私だけで充分ですから。技を残す必要ありません……だから蟲の呼吸には『型』がないんです。研究や実験の成果は資料に残してますし」

「そんな大仰に考えなくてもさ、日記みたいなもんだよアレ。僕も真似して書いてるんだけど、タイトル——表題はなんだと思う?」

「表題、ですか……ふむ……」

顎に手を当てて、考え込むしのぶちゃん。僕がわざわざ聞いたからには、なにか捻った感じのタイトルに違いない……と思ってるんだろう。さっきの返しもそうだけど、最近の彼女はちよつと落語脳になってきている感。僕が影響を与えているとすれば、なんだか光源氏の気分である。

「や、別になんの捻りもなくそのままだぜ？」

「でしたら……飛鳥手記、ですか？」

「惜しい！」

「……千里手記？」

「ちよつと発音が違うかな。もう少しゆっくり言ってみて」

「……？　せんり、しゆきい……はっ！」

「僕もだよ、しのぶちゃん。いやあ、まさか両想いだったとは——いだだだっ！」

よし、これでノルマ達成だ。ほつぺたがジンジンするのはアレだけど、しのぶちゃんの『しゆきい……』を頂けたのは大きい。後は表情と気持ちがあれば完璧である……うん、一気に難易度が跳ね上がった。

口を尖らせた彼女を『まあまあ』と宥めれば、ため息を吐かれた……が、呆れつつも笑いが零れている。少なからず会話を楽しんでくれるとは思う——もちろん僕も楽しい。こんな日常がずっと続けばいいとは思うんだけど、鬼がいる限り彼女の復讐は終わらない。

だから僕も頑張らないと……なんて、柄にもなく思う日であった。まる。

## 9話

水柱さんが来る予定の今日……残念ながら炭治郎くんたちは不在だが、僕がその分以上に彼を持って成す所存である。ちなみに不在の理由は、三人揃って刀鍛冶の里に滞在しているからだ。

発端は、炭治郎くんが里で仲良くなった『小鉄くん』という少年から送られた手紙である。炭治郎くんが前に里へ行った時、ちょうど小鉄少年の父が没した直後だったそうで——塞ぎ込んでいた少年を慰める内に、二人は仲良くなったらしい。その縁で、小鉄少年が管理する『縁壺零式』という絡繰人形を稽古に使用させてもらったそうだ。

炭治郎くんが前に見せてくれた刀は、その人形の内部から出てきたらしい……なるほど、それはテンションが高くもなるだろう。まあ『内部から出てきた』というところからわかる通り、その人形は壊れてしまったそうだけど……先日、遂に小鉄少年が修理を完了させたらしい。

絡繰の才能も鍛冶の才能もないと自嘲していたらしいけど、きつと物凄く頑張ったんだろう。炭治郎くんに励まされると、なんだか自分の実力以上に頑張れる気がするんだよね。まあそういう訳で、また訓練に使用するならいくらでも——という好意に甘え、炭治郎くんはまたもや刀鍛冶の里へ向かったのだ。

しかしそこに待ったをかけたのが伊之助である。最近炭治郎くんとの実力差が少しばかり開いていると感じたらしく、自分も連れて行くと駄々をこねたのだ。もちろん快諾した炭治郎くんだが、そこに何か善逸もくつついて三人旅となったわけだ。

最近炭治郎くんの強さも化け物じみてきたが、そんな彼の稽古に付き合える絡繰人形って意味分かんないよね。量産できたら鬼殺の剣士は不要になるんじゃないかな……いやまあAI搭載してわけでもないだろうし、稽古に使う以上のことはできないんだろうけど。

ま、それは置いといてそろそろ来てもおかしくない時間だ。小一時間ほど前から姿を現すのを待っているのだが——ん？ お、あの人がな。独特な柄の片身替わりかたみがに、寡黙な雰囲気かたみがの隊士……うん、間違い

ないだろう。

姿を見止めたと同時に、彼に向かって手を振りながら元気よく駆け出す。いわゆる炭治郎くんムーブである。今日という日のために、炭治郎くんと同じ装いを揃えたのだ。顔には特殊メイクを施し、兄弟だと言えば納得する程度の面影を作り上げた。体格がまるで違うが、成長期の少年だし大きくなったということにしておこう。

『富岡さん！』

「…？」

『お久し振りです！ 今日ごつちに来られるって聞いて、お待ちしました！ 手紙も返ってこないの、直接お礼を言いたくて——あの、お館様への嘆願書のこと……本当にありがとうございます！』

「…っ!？」

『…？ あの、どうかされましたか？』

「…炭治郎、か…？」

「いえ、飛鳥千里です」

「誰だ」

うむ、この瞬間のためだけに髪型まで変えた甲斐があった。まあ口ン毛も飽きてきたところだったし、炭治郎くんヘアも悪くない。作り物の傷痕を引つ剥がし、羽織を自分のものに変えると水柱さんが胡乱げな目を向けてきた。ちなみに特殊メイクの方は天元に教えてもらったものだ。忍者の技術って凄い。

「鬼殺隊の外部協力者、飛鳥千里と申します。お見知り置きを」

「そんなことは聞いていない」

「…？ ではなにを？」

「なぜ炭治郎の振りをしていた」

「暇だったので」

「…」

「他に聞きたいことはありますか？」

「…ない」

「では今度はこちらから。お名前を伺っても？」

「さつき自分で言っていただろう」

「初対面ですし、名乗られたら名乗り返すのが礼儀というものですよ」

「…富岡義勇だ」

「知ってますけど」

「…！」

「あ、それと年齢は二十三歳です。富岡さんはおいくつですか？」

「…」

「富岡さん？」

「…」

「もしかして怒ってます？..」

「…」

もうお前とは話したくない、って感じの雰囲気だ。からかいすぎたかな？ 『そもそもあの人は喋るのが好きじゃないんでしよう』とはしのぶちゃんの言だが、間違っではないようだ。でも『怒ってる』というよりは、相手をするのが面倒になってきたって感じっぽい。なるほど、意思疎通能力に難有りとはこのことか。

「富岡さーん？」

「…」

「富岡さん！」

「…」

「とっみおつかさーん」

「…」

「お夕飯は鮭大根よ、あなた」

「…そうか」

あ、一気に明るい感じに…..どんだけ好きなんだ。表情は変わっていないが、明らかに纏う空気が変わった。というか『あなた』には突っ込んでくれないんだ。当たり前のようにスルーされると悲しいよね。

ちなみに彼が鮭大根を食べるところを、しのぶちゃんが以前目撃したそうだが——それはそれは眩しい笑顔だったらしい。『ちよつと気持ち悪かったです』と言っていたが、今日は見れるのかな？

「あ、義勇って呼んでいい？」

「…」



ちえつ、そこは無視しちゃうんだ。確かに壁があるな……いやまあ僕の行動のせいだろうけど。微妙な雰囲気のまま施設案内を申し出ると、それはいいと拒否された。そう言えば柱の中でも古株らしいし、勝手知ったる蝶屋敷って感じなのかな。

そのまま彼の後ろに付いていくと、何回かちらりと視線を向けられた。何か言いたいことはありそうだが、その度に『やっぱいいや』って雰囲気で見線を戻される。なるほど、実弥がイライラする訳だ。

「義勇はしのぶちゃんと仲良いんだシャケ？」

「…」

「無視しないで欲しいんだアイコン」

「…」

「シャケエ……シャケエ……」

「…」

「シャケケケケケツ！」

「っ!？」

あ、ちよつとビクツとした。しかし、なんと言うか……難敵だ。小芭内に続く難敵だ。いったいどうすれば反応してもらえるのか考えていると、いつの間にか中庭に出ていた。縁側で待っていたしのぶちゃんが彼に挨拶をすると、それには軽く頷きを返している。

きいっ！ 憎らしいわあの泥棒猫っ！ ——という冗談はさておき、無視されすぎて辛いですけど。初顔合わせを失敗した感。ううむ、炭治郎くんではなくしのぶちゃんのコスプレにすべきだったか……？ いや、諦めてなるものか。押してダメなら怒らせろって昔から言うじゃないか。これだけ無視されたのなら、多少強く出ても許されて然るべきだ。

「富岡義勇！」

「…なんだ」

「——君には失望したよ」

「期待されるほど絡んだ覚えもないが」

「炭治郎くんから色々聞いて、僕は君を素晴らしい人物だと思つた。義に厚く、情に厚く、強くて優しくカッコよくて品行方正な正

義の人で、お洒落で頭が良くて話も上手くて何事にも一生懸命で……！」

「ぶふっ……！ くっ、くっ……！」

「っ!？」

「——あつ、し、失礼しまつ……ふっ……！」

しのぶちゃんめっちゃプルプルしてる。小芭内といい彼女といい、義勇に対して少し失礼じゃなからうか。しかし『心外!』といった風に眉をへの字にしている彼は、妙にチャーミングである……まあそれはともかく、話を続けるとよう。

「それなのに君はなんだ！ 人が仲良くしようとしてるのに、ずっと無視して……！ 義理も情もあつたもんじゃない！」

「お前が勝手に想像してただけだろう」

「君が『義』を失つたら！ ただの『富岡勇』になつてしまふぞ！」

「その理屈はおかしい」

「だけど、僕はそんな君でも友達になりたいんだ。さあ、この手を取つて……大丈夫、友達を作るなんて簡単だよ。ほんの少しだけ勇気を出して……！」

「そんな勇気はない」

「今度は『勇』を失つたな……これじゃもう『富岡』だ」

「何故そうなる」

「そして僕が手に持っているのは、さつきくすねた君の財布だ……これで『富』も失つたな。岡」

「財布を返せ」

財布に手を伸ばしてきた義勇から遠ざかり、不敵な笑みで煽る。不愉快そうな雰囲気だが、ここまで人を遠ざけるタイプなら実力行使もやむ無しだ。困惑するしのぶちゃんに視線で謝りつつ、僕は義勇へ一つ提案をした。自分の実力を理解していればいるほど、簡単に乗っくれるだろう。

「なら勝負といこうか、岡」

「俺は岡じゃない」

「四半刻、僕は君から逃げ回る……といつても、屋敷の敷地内からは出

ないけどね。その時間内に指一本でも触れられたら、負けを認めて財布も返す。金輪際、鬱陶しい絡みもしない……どうだい?」

「…鬱陶しい自覚はあったのか」

「僕は意外と常識人だぜ。けど、あえて非常識な振りをしてるのさ」

「狂人の真似とて大路を走らば、即ち狂人なり」という言葉がある」

「徒然草つれづれぐさかい? 賢人の言葉を引用するのは良いけど、本質を理解してないと滑稽だぜ。そういうのは賢かしこさじゃなくて、賢さかしさって言うのさ」

「…」

お……初めて明確な表情を見た気がする。言葉にするなら『ぐぬぬ』って感じだろうか。とはいえ、さっきの言葉はたった一つの側面を語ったものでしかない。『すなわち狂人』ってのは、あくまでそれを見た他人側の主観だ。『我思う故に我あり』という言葉からは、真つ向から反するものである。

「僕が狂人の振りをしたところで、しのぶちゃんやアオイちゃんが僕を狂人と見なすかって言ったら……その限りじゃないね。それはあくまで僕を知らない人間が、矢庭やにわに下した主観でしかない」

「…」

「例えばしのぶちゃんがさ、淫らでイヤらしい女性の振りをしたらどう思う? 阿婆あば擦すれだと判断するかい? ……少なくとも、僕は絶対にそう思わない。単に『十八歳にもなってまだ未通女おぼこだから、無理に経験豊富な振りをしてる可愛い見栄』って判断す——うおわっ!? 危なっ!」

「追いかけてっこ、私も混ざりますね」

「——ふふん、受けて立とうじゃないか。柱二人だけでどうにかなると思ってるなら、僕の脚を舐め過ぎだね。どっちかでも僕に触れたら、そこで勝負終了ってことでもいいぜ……逆に四半刻逃げ切ったら、僕の勝ち。義勇は僕の友達になるってことで」

「徒競走ならともかく、敷地内ですよ?」

返事代わりに、クイクイと片手を折り曲げ挑発する。ピキリと額に青筋を立てるしのぶちゃんを見て、義勇も目が真剣になった。今まで

はただの物知らずを相手にするような雰囲気だったが、同格の同僚が発した『徒競走ならともかく』という言葉は、直線においては僕の方が速いと認める発言だ。故に一切の油断も慢心もなく、僕の前方と背後に分かれてにじりよってきた。

「シツ……」

「——おおっと」

「くっ……！ このっ……！」

「惜しい！ ほらほら、もつと息を合わせなきゃ」

『鬼』とは、基本的にあちらから襲いかかってくるものだ。もちろん鬼殺隊を見れば脱兎の如く逃走する鬼もいるだろうけど——それはつまり『弱い鬼』であることの証明だ。たぶん僕くらいの身体能力を持つ鬼が、逃げの一手を打つことはまずないだろう。

しかし鬼舞辻無惨は、聞いた限りだと『誰よりも生に執着する鬼』だ。いざとなれば逃げ出すことも充分にありえる。だからこうやって『逃走を防ぐ戦い』も役に立つ時がくるかもしれない……まあ別にそれを意図して誘導した訳ではないが、どちらにしても息を合わせる訓練にはなってるだろう。柱の貴重な時間を有効に使ってもらうのも、協力者としての義務である。

「——はい、時間でーす。お疲れ様ー」

「むう……」

「……」

「約束は守ってくれるよね？ 義勇」

「……わかった」

「よーし、じゃあまずは『千里』ね。ちゃんとと言える？ はい、せーの——」

「俺は子供じゃない」

「子供より交流能力が低いから問題なんだよ。せめて嫌われてる状態から、普通ぐらいには戻せるよう頑張ろうぜ」

「俺は嫌われてない」

「……義勇」

「なんだ」

「君は柱の中で、少なくとも二人からは嫌われてる。まずそれを自覚しよう」

「…!!」

義勇の後ろに、幻影の電撃がピシャンと奔った。いや、シヨツク受け過ぎだろ……なんでそんなに自覚ないんだよ。地味に僕へ疑いの目を向けてきたりもしたが、しつかり見つめ返すと逸らされた。真実というのは、瞳を見ればなんとなくわかるものだ。

「…俺を嫌っているのは、誰だ？」

「知りたいの？」

「…」

「むしろ君は誰だと思ってるんだい？」

「…一人は、胡蝶か」

「喧嘩売ってます？ 富岡さん」

「まあまあ。ところで、なんでしのぶちゃんだと思ったの？」

「…隠し刃で斬られかけたことがあった」

「あれは鬼を庇う理由も話さず、鬼殺の妨害をしたからでしょう。説明してくれるいたら、理解はしましたよ」

「説明しようとしたら『嫌がらせか』と言って遮さへぎっただろう」

「簡潔に説明してほしい状況で、いちいち二年前のことから話す富岡さんが悪いです」

ううん……しのぶちゃんと義勇は仲悪くないって聞いてたけど、仲良しこよしって訳でもないようだ。いや、待てよ？ 彼女に関して言えば、ツンケンしてる方がむしろ気を置いてないとも言える。となれば、やっぱり仲が良いと判断していいのかもしれない。

「まあそれはともかく、上弦の鬼と戦った教訓は生かさなきゃね。耀哉は柱同士の息を合わせることが重要って考えてる。ならそれに応えるのが、柱たる者の務めってやつさ……だからね、義勇。君はもう少し他人に踏み込むべきだし、自分へ踏み入らせるべきだと思う。一人で出来ることなんて、たかが知れてるんだから」

「…必要ない」

「そんなこと言わないでさ。たった九人しかない柱の一人なんだから」

？ 水柱としての責任ってやつを…」

「——俺は水柱じゃない」

「そりゃあ君は水飛沫みずしぶきでも水柱でもなく人間だけど、僕が言いたいの  
はそんな言葉遊びじゃないんだよ」

「違う」

「なにが？」

「…」

「——もしかして……本当に人間じゃないのかい？ 水の精とか、  
そっち系の…」

「そんな訳があるか」

「じゃあ『水柱じゃない』ってどういうこと？」

「：俺は他の柱とは違う……いいや、そもそも柱ですらない」

「ちよつ——義勇！ どこ行くのさ！」

「富岡さん、いくらなんでも言葉が足りなさすぎます。それとまだ訓  
練途中ですよ」

ふいつと背中を向けて走り出す義勇。言いたくないことがあるに  
しろ、もう少し言い方ってのがあるんじゃないかなろうか。まったく……  
とはいえここで引くような僕ではない。無神経と言われようが、どこ  
までもどこまでもストーカーしてやろう。

「義勇！」

「…」

「待ってよ義勇」

「…」

「待ってって言ってるじゃないか」

「…」

「ぎゆうー」

「…」

「ねえ、ほらさ。僕の方が速いんだから撒ける訳ないだろ？」

「…！」

「おーい」

「…」

「はっはっは、この程度が全速力とはな。これじゃ確かに柱とは言えまいが」

「…っ！」

「おっと、今ちよつと怒ったね？ なら君には、少なからず柱としての自負があるってことさ。それに今までずっと柱としてやってきたんだよね。仕方なくイヤイヤやってたってこたないでしょ？」

「…」

「…はあ、わかったよ。僕も覚悟決めた。このまま無視するんなら、食事も厠かわやもお風呂も寝る時もずっと付き纏うから」

「……………わかった。話すからこれ以上は俺に付き纏うな」

「オーケー。じゃあいったん蝶屋敷に戻ろうか……………ん？ ——つてうおおおい!! 普通ここでまた逃げる!!」

ようやく素直になったかと思いきや、僕が後ろを振り向いた途端に逃げ出す義勇。意外と強したたかな男である。しかし、僕の視界に収まっている時点で逃げ切れる訳がない。足に力を込め、地面が爆ぜるほどに踏み込む。僅か数秒のタイムラグなど、無いに等しい……………ん？ え、ちよ、なんか川に飛び込んだんですけど。

「そこまでする!？」

「…」

「だが馬鹿め! ダイビングのプロを舐めるなよゴボツ! ゲホツ、水飲んだっ!」

「…」

強化された身体能力も相まって、河童もかくやという程の速度で義勇を追い詰める。シャチとまでは言わないが、サメくらいのスピードは出てるんじゃないか。グングンと近づく僕を見て、義勇は水底を蹴って地上に跳び上がった。ふはは、残念ながらそっちも僕の土俵——っ!?

「ぐへえっ!!」

同じように跳び上がった僕を待っていたのは、義勇渾身のドロップキックであった。な、なるほど……………あんまり追う側になったことなかったから、反撃の可能性がすっぽりと抜けていた。

空中じゃどうにもならないもんな……勉強になった。しかし義勇の『よつしや』って感じの顔がすつごい腹立つ。きつとあっちもフラストレーションが溜まっていたのだろうが、それはそれとして報復はきつちりせねばなるまいて。

「——せえいっ！」

「…っ！」

僕を蹴った反動で、そのまま逃走の態勢に入る義勇……しかし着地するかどうかの瀬戸際で、僕の投げたロープが彼の足に絡みついた。けれどそこは柱の面目躍如——僕が引つ張る動作に入るその刹那、剣先が霞む程の速度で刀が振り下ろされ、見事ロープは断ち切られた。

「——だが隙はできたぞ！ 殺人タツクルを食らえい！」

「…『風』」

「いや、ちよっ」

…人間相手に型まで使うのはどうなんだろう。一応刀身は返しているが、鉄の棒でボコスカに叩かれたら、人間って死ぬと思うの。せめてタケノコだよね。

「ぬっ——はっ、せいっ！」

「…っ！」

「ふっ……上弦の参が繰り出す超乱打に比べれば、どうということもない」

無数の斬撃の全てを避けきり、かぶりつくようにタツクルをかます。完全に胴体をロックしたので、流星にもう逃げられないだろう。全身ずぶぬれで気持ち悪いし、なぜか男に抱きつく形になっているのが悲しいが——兎にも角にも捕まえた。

「ふう……そろそろ観念しようぜ」

「…わかったから離せ」

「また逃げない？」

こくりと頷いた義勇を見て、僕も拘束を解く。もう逃げられないことは理解してもらえただろう。しかし絶対とは言えないので、服の裾だけはつまみながら蝶屋敷を目指す。ボタボタと水を垂らしながら帰ってきた僕たちを、しのぶちゃんは呆れながら迎えてくれた。



「着替えは用意しておきますから、先にお風呂へ入ってきてください」  
「はい……うー、寒っ」

「俺は後でいい」  
「そんなに狭くないから大丈夫だって。生娘じゃあるまいし、なに恥ずかしがってんのさ」

「……」  
「甲府からそう離れてないし、住血吸虫症なんかにかかったら最悪だぜ。ほら、脱いだ脱いだ」

この時代だと、日本住血吸虫病——いわゆる地方病が根絶されていない。特定の地方で川や湖に入るのは、実のところ割と危険である。呼吸が寄生虫にどう影響するのも不明な以上、気をつけておくにこしたことはないだろう。それに、ここでいっちょ裸の付き合いも悪くない。男性ならわかってくれるだろうが、一緒に温泉とか銭湯とか入るとなんか仲良くなるよね。

「ふー……それで、水柱じゃないってのは？」  
「……」

「うーん……まあそこまで話したくないなら、別にいいけどさ。でもほら、勝負して喧嘩して一緒にお風呂入って——これってもう友達だと思わない？ だったら悩みを聞くのも友人の務めってやつさ」

「……俺は……」

お、やっと話してくれるみたいだ。根負けしたというのが正しいかもしれないが、どっちにしても心の裡を話すことに変わりはない。理由さえ知れば一緒に悩むことだってできるし、なにか解決法を示すことだってできる。人の縁とは、そのまま力になるのだ。

……ふむふむ……なるほど、鬼殺隊の最終選別で錆兎という少年に助けられ……そのまま気がついていたら選別を生き残っていたと。一体の鬼すら倒していない自分は、柱はおろか隊士の資格すらありはしない。うーん……しかし隊士になってからの実績で柱になった訳だし、そこまで気にする必要はないんじゃないの？ ……などと気軽に思えば、こんな性格になってないか。

しかし錆兎……錆兎……どっかで聞いた名前だな。ええと——あ

あそうだ、炭治郎くんに聞いた『兄弟子』の話だ。ずっと前に死んだ筈の『錆兎』という少年、そして『真菰』という少女が、稽古をつけてくれたという話。半信半疑で聞いてはいたが、妙に真実味のあった……ああ、そっか。義勇と錆兎くんは同期になる筈だったのか。

…ううん、どうしたものか。励ます——つてのは少し違うよね。でも錆兎くんと会ったこともない僕が『彼が報われないよ』なんて口が裂けても言えない。だったら……僕に言えることだけ言おう。それしかできない。

「…炭治郎くんがね、鱗滝さんのところで訓練してた時……兄弟子にみっちり鍛えられたんだってさ」

「…？ あの時期、他には…」

「錆兎くんと真菰ちゃんって言ってるね。ずっと付きつきりで教えてくれてたんだって——っ痛……！」

——言い終わった瞬間、ミシリと手首の骨が軋んだ。大切な思い出を冗談で汚すつもりかと、凄まじい怒りの表情で睨みつけてくる義勇……まるで万力に締めつけられたかのように、僕の手首が鬱血し始めた。けれど、今は気にしていられない。

「鱗滝さんのところには、みんないるんだってさ。みんな鱗滝さんが大好きだから、魂だけになっても帰るんだって。還るんだって。僕は会ったことがないけど、炭治郎くんから聞いただけで、きつと優しい人なんだろうなって思えた」

「……！」

「弟子たちを死なせたくないって、鱗滝さんになにかできないかって……それでみんな、少しだけ力を貸すんじゃないかな」

「それ、は……」

「又聞きだからね。本当かどうかなんて僕にもわからない。だけど炭治郎くんが言ってた……みんなの思いを、錆兎の思いを紡いだから、紡がせてもらえたから——俺はここにいます、って」

炭治郎くんから聞いた言葉を、そのまま伝える。彼の言葉は、行動は、本当に心へ響くから。手首の力が緩み、義勇の顔が呆然とした表情に変わった。そのまま数分近くも俯いたままだったが、じつと顔

を上げるのを待つ。鬼殺隊の隊士は、誰も彼も心が強い。きっと一人でも立ち上がれる程に……だからこそ、二人三人になればもっと強くなる。

「…錆兎は」

ポツリと言葉が零れる。ぎゅつと握られた拳には、万感の思いが込められているのだろう。

「錆兎は……俺に怒っているだろうな」

「…そうだね。すつごく厳しかったって炭治郎くんも言ってたし……バシン、つてき。ほつぺた叩かれるんじゃない？」

「…ああ、そうかもしれない」

そう言って顔を上げた義勇の顔は、今までのどこか自虐的なものから、覚悟と責任感を秘めたものに変わっていた。他人を拒絶するような雰囲気も鳴りを潜め、なんとなく晴れやかな感じだ。表情筋にするといミリぐらい変化がついたと言えるだろう。

「元気出た？」

「…ああ」

「友達作る気になった？」

「…ああ」

「よし、じゃあ僕がとっておきのセリフを教えてあげよう。これなら君を嫌ってる小芭内もイチコロさ」

「伊黒だったのか」

「出会い頭にね、『へーい！』って言ってあげなよ。絶対笑うから」

「へーい…？」

「へーい！ もっと元気よく！」

「へーい…」

「もっと大きく！」

その後も風呂場でへーいの練習をしていたら、しのぶちゃんに『うるさいですね…』と怒られた。まあ彼女も義勇の変化に気付いたようだし、また柱が集まるようなことがあればフォローしてくれるだろう。さあて、お風呂上がりの鮭大根が楽しみだ。

## 10話

晩御飯も終わり、茶の間でお喋りタイムを堪能している蝶屋敷メンバー。カナヲちゃんは任務で外出中なので、三人娘とアオイちゃん、そして僕と義勇としてのぶちちゃんが一部屋に集まっている状態だ。義勇の人見知りを治すために、彼女たちにも来てもらった訳だが……逆に彼女たちの方が畏まっちゃってる。やはり柱とは恐れ敬われる存在らしい。

「妙だな……僕も重要さで言えば柱に近い筈なのに。アオイちゃんに敬われていない……何故だ？」

「普段の行いでは？」

「ああ、僕とは気安い仲でありたいと。なるほど」

「そうですね」

「む……アオイちゃんまでそんな……あのさ、しのぶちゃん。僕の対処法を共有するのはレギュレーション違反だぜ」

「そうですね」

「義勇、しのぶちゃんたちが虐めるんだ」

「そうだな」

「なにこの四面楚歌」

よよよとすみちゃんに泣きつくと、よしよしと慰めてくれた。昨日あげたキャラメルが効果を発揮したらしい。同じお土産を渡しているというのに、アオイちゃんはなんでこんなツンケンガールなんだ、まったく。まあ本気で嫌われているとは思ってないけど、もうちよつと態度を柔らかくしてくれてもバチは当たらないんじゃないだろうか。

——とまあ、こんな感じで団欒していると、義勇がふと気付いたように炭治郎くんの所在を聞いてきた。彼の拠点が蝶屋敷と知ってるってことは……手紙を返すことはないが、目は通しているらしい。「炭治郎くんは刀鍛冶の里へ訓練に行ってるんだ。あと手紙はちゃんと返そうね……ちよつとシヨンポリしてたぜ」

「会った時に話した方が早い」

「それはね、義勇。鮭と大根を適当に焼いて食べても、鮭大根を食べた

のと同じって言ってるようなもんだよ」

「……」

「効率だけ追い求めるならさ、どうせ人間最後には死んじやうんだから……生まれれた瞬間に死ぬのが一番効率良いじゃないか。でもそれは嫌だろ?」

「…お前は極論が多すぎる」

「君は言葉が少なすぎるぜ。伝えなくても解ってくれるなんて、妄想の産物さ。背中で語るのもいいけど、それは裏を返せば無関心みたいなもんだと思うよ」

「干渉が過ぎるのも問題だろう」

「やだな、僕は誰に対しても適正な距離を置いてるじゃないか。ね、しのぶちゃん」

「…」

『『そうですね』は?』

「…」

「なにこの虐め」

泣き真似をしながらなほちゃんに縋ると、頭を撫でてくれた。昨日あげた蝶の髪飾りが効果を発揮したらしい。幼いとは言え女性、贈り物は実に効果的である。幼い女の子や初老のご婦人あたりを味方に付けておけば、立場というものは盤石になるのが世の常だ。すみちゃんが『あんまり虐めちゃダメですー!』と叫んでくれているのがいい証拠だろう。

「義勇と友達になって……まだ会ってない柱は三人か。どんな人か気になるねえ」

「失礼のないように挨拶してくださいね。言っても無駄でしょうが」

「もうその言葉が失礼ってやつだよ」

「自分の言動を省みなさい」

「過去は振り返らない主義なんだ」

「…俺は、お前の過去に少し興味がある」

「えっ——や、その……気持ち嬉しいんだけど、僕は至って普通の性癖で……その、ね?」

「違う。お前の身体能力や、人を食った性格がどうやって形成されたか気になると言っているんだ」

「ああ、そっちなか。うーん……身体能力は生まれつきかなあ。いくら小さい頃から走り続けたって、普通の人はこんな体にならないしね。天賦の才ってやつ?」

「…そうか」

「性格の方はさ、なんと僕には前世というものがあって——」

「そうか。わかった」

「いや、まだ何も話してないんですけど」

「真面目に話す気になったら教えてくれ」

「むう……耀哉と炭治郎くん以外、誰も信じちゃくれないなあ。本当のこと言ってるのに……」

未来よりはまだまだ信心深い世の中だと言うのに、僕の素性を冗談以上に捉える人はほとんどいない。やはり切った張ったを生業なりわいにしている人間は、妙に現実的だ……いや、待てよ? 義勇だつて錆兎くんさびうのことは信じてたんだから、単に僕の言動がアレだからかもしれないな。

「確かに千里の医療技術は未知のものが多くですし、まったく信憑性がないとは言いませんが……」

「…言いませんが?」

「普段が普段ですから」

そう言ってお茶を一口飲んだ後、ほうと一息つくしのぶちゃん。美しい。しかしこんな美女や美少女たちと机を囲んでいながら、義勇はまったく楽しそうじゃないな。

いやまあ、それなりに楽しいとは感じているんだろうけど、テンションの変化がないのだ。僕がさつき彼を男色家と勘違いしたのも、女性に興味がなさそうな雰囲気を見てのことである。

「そういうえば義勇、実弥の——」

「カアアアア! 伝令! 伝令イイ!!」

「——つと、ごめんね。仕事みたい」

鬼を相手にしている都合上、緊急の任務は夜半が多い。突っ込むよ

うに窓から入ってきた近松を受け止めて、水を差し出す。嘴で器用に水を飲む姿は、羽毛のフカフカも相まって可愛らしい。ちなみに隊士へ付けられる鴉にはそれぞれ個性や特性があるが、基本的には相性の良い者同士が選ばれる。

一緒にいる内に感化される鴉もいるし、パートナーと似ていたりするのは愛嬌だろう。例えば天元の鴉は本人と同じく派手好きであり、鴉界のファッションリーダーを務めているそうだ。そして僕の鴉はと言うと、実は鴉界のスピードスターを名乗るほどに速い。もうね、鷹より速いの。

まあ僕の仕事内容を考えれば、鴉の方も速くなければ話にならないから当然だ。一に速度二に速度、三四に速度で五に安全くらいの勢いで、僕も近松も任務を負っている。

珍しく息を荒げているのは、それだけ急いでいた証なのだろうか――そういえば彼には炭治郎くんへの手紙を頼んでいたんだっただか。しかし返事の手紙は持っていないようだし……これは余程のことがあつたのかな？ 少し三人の安否が心配になってきた。

「刀鍛冶ノ里ニ上弦ノ鬼出現！ 柱ヲ連レテ急行セヨオ!!」

「……！ 了解。耀哉には？」

「他ノ鴉ガ向カツテイルウウ!!」

「オーケー、先にこつちに来てくれたんだね……良い判断だぜ、近松。しのぶちゃん、義勇」

「ああ」

「――ええ。アオイ、後は頼みますよ」

「は、はい……！ どうかお気をつけて……それと、お二人も」

一秒すら惜しいとでも言うように、支度を始める二人。アオイちゃんたちは不安そうな様子だが……それも当然か。上弦の鬼を相手にして生き残るのは、たとえ柱と言えども容易ではない。むしろそのほとんどが死んでいるのだから、死地へ向かう家族を見送るような心境なんだろう。よし……こういう時に安心させてあげるのが大人の役目だ。

「アオイちゃん」

「はい……あの、お気をつけて…」

「最後かもしれないから抱きしめさせようっ!!」

「ど・う・ぞ! お気をつけて!」

「ふあい…」

これから上弦の元へ向かうというのに、無駄にダメージを負ってしまった。しかしぶんぶん怒っているアオイちゃんへ、『しのぶちゃんと一緒に帰ってくるから』と約束すると、彼女は眉をハの字にした後——ぎゅつと手を握ってくれた。しっかりと握り返し、準備を終えた二人と外に出る。

「あ……そういえば、どちらを運んでもらいましょうか」

「いや、二人同時だよ。一人は背中中、もう一人はお姫様抱っこ」

「それはいくらなんでも…」

「言つとくけど、さっきの追いかけてこども本気は出してないぜ。二人抱えてても、君たちが一人で走るより圧倒的に速いさ……急ごう、時間が惜しい」

腕でしのぶちゃんを抱え、背中に義勇を乗せる。足に力を込め、深く呼吸をして——全力疾走を開始した。懐に潜り込んだ近松を勘定に入れると、二人と三羽を運んでいる計算になるが……まあ今更その程度を苦にする筋力でもない。柱の中には数トンもの岩を軽々動かす人もいるらしいし、それに比べれば、足して百キロあるかどうかの重りだ。

「…千里、道はわかるんですか?」

「僕の仕事内容は知ってるだろ。緊急時に誰よりも速く動く以上、鬼殺隊に関する拠点は把握しとかなきゃ」

「——そうですか。あなたは……私の想像以上にお館様から信用されているみたいですね」

「もし捕まったら、速やかに死んでくれなんて言われちゃったけどね」  
「それは仕方ありません」

鴉より速く移動できるから重用ちようようされているのに、いざという時に鴉の案内があるなんて本末転倒どころの話じゃない。だから柱ですら知らない情報もそれなりに知ってるし、耀哉の屋敷の場所も把握して



る。ただし、それはかなりのリスクを伴うと彼も言っていた。

鬼舞辻無惨はあらゆる手を尽くして産屋敷亭を探索している。そしてこの数百年、鬼殺隊が壊滅しかけることは何度もあり——屋敷が襲撃されかけることもあったらしい。

隊士の裏切りによって情報が漏れたこともあれば、鬼の異能で看破されたこともある。人の心を読む異能なんてものもあったらしいが、それでも当主の直感によって何とか危機を回避し続け、その都度対策を講じてきた結果が今の徹底的な秘密主義だ。

鬼殺隊士への明らかな説明不足は、組織としてどうなんだと言う意見もあるが——あれはそもそも意図的なものなのだ。人材の廃棄とすら言える過酷な試験も、要は覚悟のない人間を切り捨て、命よりも復讐を優先できるような……酷い言い方をするなら、『異常者』を剣士にするための篩だ。

だから今の鬼殺隊は、『鬼になれば見逃してやる』なんて誘いに乗る隊士はまずいがない。昔の鬼殺隊は、志願者と見れば猫も杓子も隊士にしていたらしいが、そうなるかどうかしても質は落ち、命惜しさに鬼殺隊を売る者もいたそうだ。

「近松、里を出発した時はどんな状況だったの？」

「上弦の肆と上弦の伍が同時に襲来してきた……炭治郎と善逸、伊之助……霞柱『時透無一郎』が応戦中……」

「そっか……上弦が二体も」

「あの、その鎧鴉……普通に喋れるんですか？」

「うん。耀哉の鴉もそうだし、上手い子は人間と遜色ないぜ」

「ですが、さっきの伝令の時は……」

「カアアア！ 様式美イイ！」

「そ、そうですか」

「さ、そんなことより——そろそろ到着だぜ」

山と森に囲まれた隠れ里……いったいどうやって漏れたんだか。まあどうしても狸々緋砂鉄しやうじょうひさてつが採れる場所の近くになるから、風潰しらみつぶししにされるとバレル可能性はあるけど。それに刀を作る際は高純度の炭が大量に必要となるし、住民の生活物資も自給自足では賅いきれない

い。流通経路から推理されたって線もあるだろう。

——今回もみんな生き残れるといいなあ。



戦闘の気配がいくつも感じられる。鬼は基本的に徒党を組まないが、たまに例外もあるらしい。もしくは血鬼術で配下を生み出すような鬼もいるらしく、可能性としては後者の方が高いとのことだ。

現状優先すべきは上弦の鬼ということで、到着してから三方に分かれ搜索中だ。発見次第、鴉を飛ばす手筈だが——義勇の鴉は最近ちよつとボケっぷりがひどいらしいので、微妙に心配である。

怪我人がいないかも気にかけてつ、とりあえずは里長の館へ向かっているのだが……なにやら珍妙な生物が空から落ちてきた。なんというか……壺の魔神とでも命名すればいいのだろうか？ いまだかつて見たことがないレベルの、気持ち悪い謎生物が地面にめり込んでいる。

顔のパーツはグツチャグチャで、目も口も訳のわからない場所に付いている——が、その瞳にはそれぞれ『上弦』『伍』と書かれていた。うーん……これを『鬼』って言うのは、日本古来の鬼に失礼ではないだろうか。百歩譲って『前衛芸術』とかそんな感じだろう。

「半天狗め……敵と味方の区別もつかぬ愚か者が——いや、しかしこれは不可抗力……戻るまでに奴が頸を斬られようと、私に責はない。ややもすれば共倒れになるやも……ヒョヒョッ！」

ううん……気持ちの悪い独り言をそのまま解釈するなら、仲間の鬼

に吹っ飛ばされてここに着地したということだろうか。しかし近くに仲間がいるようにも見えないし、もちろん炭治郎くんたちもいない。どんな威力で飛ばされたらそんなことになるんだろう。血鬼術かな？

「…ん？ ヒョツ——これはこれは、私としたことがとんだ失態……客に気付かぬ無礼を働いた。しかし今は作品を披露する時間もない……残念だが——」

「君は上弦の鬼なのかな？ 凄く気持ち悪いねえ」

「——これだから凡人は手に負えん。この体の尊さ、美しさ、芸術性の欠片も理解できぬ素人め……」

「いやいや、芸術ってのは素人の評価あつてこそさ。大多数が『芸術』だと認めるからこそ、芸術は芸術足り得るんだよ。作品を理解させられない、二流の芸術家がよく言い訳に使うよね。『素人』って言葉」

「知った口を利くな、便所虫めが。真の審美眼とは知性と教養あつて初めて養われるもの……能無しに芸術は理解できぬのだ。特に貴様のような間抜け面にはな」

「僕って割と金持ちのボンボンだから、芸術にも明るいんだよね。その僕が言ってるんだから間違いないよ。君の姿すがた形かたち全てが気持ち悪いし、壺の趣味も悪いことこの上ない。その辺に捨て値で売ってそうだし、価値らしい価値もなさそうだ」

「ヒョヒョツ……！ 馬鹿め、私の壺は高値で売買されている……！ 貴様の目が腐っている証明だ」

「へえ、鬼でも夢は見るんだねえ。でも現実との区別は付けたほうがいいぜ」

「的外れな挑発しか口にできんのか？ 貴様がどう評価しようと、私の壺には価値が付いているのだ」

「…」

「ヒョツ！ 言葉も出んだろう！ 所詮貴様程度の——」

「そういえばその壺の柄、見たことあるなあ……もしかして盗作？」

「——黙れはんかつ半可通がああ!!」

オーケーオーケー、自己顕示欲と承認欲求が強い芸術家ね。これほ

ど煽りやすい存在もない。なんか気持ち悪いタコの触手を出してきたので、余裕を持って回避する。そしてしのぶちゃんたちに状況を知らせるよう、近松に伝言を頼んだ。この鬼が飛んできた方角を辿れば、そこがもう一体の居場所の間違いないだろう。

安全を期すなら、人員を分けるより『一对全員』を二回繰り返したほうが安全だ。つまり僕の役割は足止めであり、こいつを戦線に復帰させないように動くべきだろう。

「いるよねえ。『影響を受けた』とか言い訳して他人の功績をかすめ取る人って」

「チツ……！ ちょこまかと鬱陶しい——しかしその動き、柱とお見受けする……ヒョツヒョツ！ さてはこの騒ぎで刀を受け取れなかったのだろう？ 苦し紛れの挑発で難をしのいでいるという訳か」

「僕が柱だつて？ やっぱ感性イマイチだねえ」

「どれだけ減らず口を叩こうと、貴様に私を倒す手段はなかるうて！」

「口を減らすべきは君じゃないかなあ。なんで二つも口あるの？

あ、もしかしてピカソの物真似？」

「この『玉壺』が仏蘭西小僧の猿真似などするものか……だが新進気鋭の芸術家の作風を知っているとは、存外に教養はあるようだな」

「うわ、名前もキモい」

「口を閉じろ馬鹿餓鬼が!!」

うおつ、魚の大群が空中に……！ 先程からの行動を見る限り、壺から何かを召喚するのが彼の攻撃手段らしい。どんな異能があるろうと、基本的には自前の肉体で攻撃してくるのが鬼というものだが——後衛型とは実に珍しい。まあ壺に入ってるから動きにくいというものもあるか。

「金玉の『玉』に、痰壺の『壺』で『玉壺』かい？ 親につけられたんなら可哀想……自分で付けたんならもつと可哀想……」

「いちいち神経を逆撫でする餓鬼めが……！ だがそこまで言うなら、貴様の名はさぞかし高邁と見える」

「……」

「……」

「…」

「さつさと名乗れ糞餓鬼がああ!!」

「や、君に呼ばれるとそれだけで汚れそうだし」

「こ、こんこ、こつ…!」

うーん…：やっぱり上弦ともなると、そう簡単に我を失うような精神状態にはならないな。激高はするけど、攻撃が雑になる程ではない。僕が『逃走』ではなく『回避』を続けているのも影響はあるだろう。

逃げる者を追いかけるつてのは、つまり追跡者に優位性があるということだ。少なからず油断も慢心が芽生える。しかしこの状況だと、僕が刀を持ちさえすれば対等に戦える——と勘違いしてしまうだろう。

「——速さが御自慢のようだが、私の真の姿を見ても同じ口が聞けるか? ヒョヒョツ…：見よ! この華麗なる変身を!」

「苦し紛れの変身つてだいたい負けるよね」

「やかましい! この姿を見た『柱』は、誰もが無様に屍を晒したのだ…!」

「何人くらい?」

「…二人だ」

「君みたいなのつて何かにつけて盛るよね。たった二人なのに『誰も』がなんて、聞いてて情けなくなってきたぜ」

「言葉の裏も読めんのか? 白痴<sup>はくち</sup>め。その二人以外は、真の姿を見せる必要すらなかったということだ」

「変身まだ?」

「ぐぬう…：! 腹立たしい小僧め…! ——だがそれも終わる。この美しき体から繰り出す、流麗なる一撃をもって…：我が作品の一部にしてやろう!」

「——っ!」

…速い! 猗窩座さんと遜色ない移動速度だ。変身した玉壺さんは下半身が大蛇のように膨れ上がり、上半身は人間…：人間? まあ人っぽい何かに変わった。あえて近いものを挙げるとすれば、ファン

タジーでいうラミアとかそっち系のやつだ。さっきの姿よりはキモさも薄れた気がする。

「へえ……ギリギリ見るに堪える姿になったね」

「ふん、もはや貴様は追い詰められた鼠……！ 窮したところで噛み付く歯も無い！」

「君の拳だつて掠りもしてないけどね。あ、そうだ……指一本でも触れられたら、僕の名前を教えてあげてもいいぜ」

「ヒョツ、愚か者め……！ 触れた時点で終しまいよ。この輝く鱗しんに包まれた拳は、触れる者すべてを魚に変えるのだ！」

「え、なんで言うの？ 馬鹿なの？」

「見えた結果に些少の油断は、芸術家の気質……作品に遊びを入れるのは、この玉壺が一流という証！」

「いや、僕より遅い奴が言うセリフじゃないでしょ」

「ヒョヒョツ……この体の真骨頂は柔らかく強靱なバネ——更には鱗の波打ちによる、変幻自在にして縦横無尽の動き……！ 貴様の小賢しい動きとは違う、真の『翻弄』というものを見せてやろう」

『陣殺魚鱗』と口にした玉壺さんは、尋常ではない動きで僕の周囲を跳ね始めた。なるほど、長い体に強靱な筋力……どこへ力を入れたか解りにくいから、軌道が読みにくい。まるでラグビーボールを蹴っ飛ばしたような騒ぎだ。

とりあえずの対処として、僕は手持ちの肥やし玉十個を全て地面に投げ落とした。あれだけ接地面積が大きいと、何個かは踏み潰すだろう。逆に踏み潰さないというなら、動きはかなり読みやすくなる。

「毒か？ ヒョツ、そんなものが上弦に通用するまいて……ぐあつ?!」

「うわ、エンガチヨ。これじゃ玉壺じゃなくてウニコだね」

「こつ、こ、この玉壺の美しき肢体に——貴様アアア!!」

「まあまあ。鬼なんだから吸収して分解すればいいじゃないか。よく見たら君の体、大腸にも見えるしお似合いだぜ」

「どつ、どど、どこまでも舐め腐った餓鬼があああ…!!」

一段階ヒートアップ……うーん、一応反撃の手段は一つだけあるけど——効果があるかも不明だし、なにより一度使えばおそらく終わり

だ。上弦の壺、式、参が残っている状態で使用するべきか……いや、使用するべきだな。そもそも人間側に余裕なんて一切無いんだから。とりあえず攻撃に当たろう。

「…っ！ くっ——！」

「ヒョツ——ヒョツヒョツ！ 大した口を叩いた割に、避けきれておらぬではないか！ さあさあ！ 次は手か足か！」

「服に掠っただけで大喜びって、惨めにならない？」

「惨めなのは貴様の心境だろう？ 触れたぞ触れたぞ……そうだ、興味はないが名も聞いてやろう。約束だからなあ」

「ああ、気にしてんだ」

「興味はないと言っているだろうが！」

「じゃあ言わない」

「ぐぬう…!!」

「——つてのは冗談だよ。僕は約束を守る男だからね」

「…」

「でも口にはしないだね？ 嫌いな奴には呼ばれたくないから。僕の

名前は『佐伯 武津地郎』」

「ヒョツ……！ 惜しみに惜しんで、どんな大層な名前かと思えば！

さえきぶつじろう！ 品性の欠片も感じぬつまらん名！」

「…」

「…」

「…」

「何か抜かせ糞餓鬼！」

「…体に違和感とかない？」

「ヒョツ、何を言うかと思えば……ん？ なんだ、体が、崩れ……？」

「ああ、良かった。上弦には効果ないんじゃないかって思ってたんだけど……『呪い』を解除しない限りは、全鬼共通なんだね」

「ちよ、ちよつと待て……なんだ、なん……はっ！ さ、さえき、き、きぶ……！」

「一応サンプルも取れたかな。言葉に意味を持たせなくても、『き』と『ぶ』と『つ』と『じ』を連続して言うてアウトなわけだ。『無惨』は

日常でも使うから対象じゃないみたいだし……ふむふむ」

「こっ——まつ、待て……待て待て待て待てエ!! こっ、こんなくならぬ死に方が! この玉壺がこんな死に方をしていい訳が! ……こっ、も、ガツ——あ、あり、ありえ……」

「…見てるかい? 鬼舞辻無惨。こんなくならない事で上弦を失うのは勿体ないぜ。君が直接くれば呪いだって任意で外せるだろう?」

どこまで自由に移動できるか知らないけど——ねえ、来ないのかい?

…臆病者め」

「…が……あ……」

…来ないか。まあ来るとも思ってたけど……でもこれで、多少は鬼舞辻無惨の限界も見えてきた。鬼を作る範囲や時期、頻度から考えて、距離を短縮できる移動手段は間違いなく持っている——つてのが耀哉の見解だ。とはいえ猗窩座さんの襲来や上弦の陸戦の状況を鑑みれば、自由自在に移動できる訳でもないし、右から左に鬼を動かせる力はない。

そしてある程度離れてさえいけば、鬼を制御することができないというのもこれで解った……まあ『間抜けは不要』と見捨てた可能性もなくはないけど、それでも上弦ほどの戦力を無駄に見捨てるとは思えない。

『視界の共有』は鬼舞辻無惨の能力の一つとしてこちら側も把握しているが、それはおそらく能動的なものだ。自分で『繋ぐ』必要があるのだろう。だから普段は使用していない可能性が高い——が、今回のように上弦を動かす時は間違いなく使っている筈だ。

同時に二体の視界を共有できるのかは不明だが、見られていたと考えて今後は動くでしょう。呪いを利用する戦法は、もう二度と通じないと想定しておくべきだ。もし見られてなかったとしたら、ジンの兄貴ばりに赤っ恥だけど。聞こえてるか? 毛利小五郎……いやまあ、それはともかく後は——ん……?

「カアアアアア! 急げエエ!」

——近松と……ザ・しのぶちゃんズのお出ました。多すぎでちよつと笑う。刀に『悪鬼滅殺』を刻んでいる人が……しのぶちゃんと義勇



を含めて四人。つまり柱が四人つてことだ。それに加え炭治郎くん、善逸、伊之助、モヒカンの隊士。『半天狗』と呼ばれていた鬼が可哀想なくらいの戦力である。そりゃあこれだけ速く駆けつけてくれるのも納得だ……おそらくフルボッコだったに違いない。

彼等の到着と同時に、塵と化していく玉壺さんの——最後まで残っていた瞳が崩れ去った。これで上弦の肆と伍が消えて、遂に上弦は半壊だ。下弦も壺と伍は倒してらしいし、補充されていない限りは相当な戦力を削ったと言えるだろう。耀哉が『兆し』と言っていたのは、間違いないらしい……ん？ なんかめっちゃ驚かれてる。

「え……と、せ、千里……？ その、一人で……倒したんですか？ 上弦の鬼を」

あ、そういうことか。成程、確かによく考えなくても相当な戦果である。しかも僕、武器らしい武器も持ってないしね。サブカルチャーに詳しい僕には解る——これ、アレだ。ドヤっていい場面だ。むしろどうドヤるか悩ましい場面だ。うーん……『僕なんかやつちやいました？』とかどうだろう。うむ、完全な嫌味だな。やめておこう。

ならば後は……『ふっ、ずいぶん遅いお出ました』とかどうだろう。ちよつとキザすぎるかな。海外ドラマ風になら、しのぶちゃんを抱きしめて『無事で良かった……！』なんてどうだろう。問題があるとすれば、抱きしめる前に殴られそうところだろうか。あとは……ん？ ——んっ!?

なんだ？ なんだ、あの乳を露出している柱は。あと数センチずらせば大事などころまで見えるじゃないか。触ってもいいの？ いや、むしろ触っていいからあんなに露出をしているに違いない……いやいや、待って待て。それは早計が過ぎる。女性の裸を見て男が欲情するのは、女性への人権侵害って誰かが言ってた。いや待て、それも無茶苦茶だ。待って待て……いや何回待つつもりだ。

——とにかく、ドヤっている場合じゃないのは確かだろう。僕は片膝をつき、息を荒げながら苦しげに呻く。

「千里さん！」

「来るな！」

「えっ…」

「毒を受けてしまったんだ……しかも伝染力の強い厄介な毒を…」

「そんな…!」

「ぐっ……はあ……はあ……伝染<sup>うつ</sup>らないのは……巨乳の美女だけらしいから、そこのお嬢さ——げべえっ!!」

「さ、解毒剤を打ちましようね」

「そこ静脈! 静脈! 冗談ですやめてごめんなさい! 無傷で倒しました!」

「あ、あはは…」

この多大な戦果に対して、あまりに無慈悲な仕打ちである。あ、嫉妬? もしかして嫉妬? なら僕も我慢しよう……いや、しかし見事なおっぱいである。おそらく『柱』という枠組みにおいて、男性のスケベ枠が実弥、女性のスケベ枠が彼女なんだろう。胸元も同じくらい開いているから、間違いない。

「——つてこんなことしてる場合じゃないんだった。おいで近松、耀哉に伝えてほしい事があるんだ」

「カアアア!」

「壺の売買……特に『銘』は有名だけど、製作者が表に出てこない作品を、頻繁に売りさばいている業者を調べさせて。特に輸入業者、貿易会社を念入りに」

頷いた近松を見送って、一息つく。なんだかんだで、上弦の鬼と対峙するのはプレッシャーだった。いくら自分の速度が上回っているとはいえ、触られた瞬間、今度は魚に転生とか嫌すぎる。木にもたれかかって水を飲むと、皆の視線が突き刺さる。

「千里さん、今のは…?」

「上弦の伍と戦ってる時、会話もそれなりにしたんだ。それでちよいちよい情報とか漏らしてたからさ」

「情報……ですか?」

「『私の壺には高値が付く』んだって」

「ええと…?」

「炭治郎くんたちも途中まで戦ってたんだろ? あんな気持ち悪いの

が、人に紛れて生活すると思う？」

ふるふると首を横に振る炭治郎くん。今気付いたんだけど、彼の横に立っている柱が超絶美少年な件について。いや、だからどうしたって訳でもないんだけど。被り物を外した伊之助と並んだら、さぞ人目を引くだろう。柱って強いだけじゃなくて、容姿のレベルもなんか高いよね。

「…なら、どこで売るんだって話だよね。それに売る必要は？ そう考えると——作品を流すにしても、然るべきところがある訳だ。あんな自尊心の塊が『然るべきところ』を、他の鬼に依存すると思えない。だったら人に紛れて生活してて、かつお金が必要な者——そして数少ない『目上の存在』に献上してる可能性はあるよね」

「…！——鬼舞辻、無惨…！」

「少し話ただけで、アイツが自己顕示欲の塊ってことは解った。なら必ず『銘』にはこだわってる筈さ。だけど人前には出られないから、名前だけ一人歩きしてるかもしれない。誰にも『姿を探らせない』ために手っ取り早い理由を作るなら、余程の偏屈者って設定にするか…：あるいは製作者が海外に在住してることにすればいい。なら輸入業者か貿易会社から追っていくべきだよね——うん、相当絞り込める筈さ」

啞然としている炭治郎くん…：の首筋を見ると、何やらリヒテンベルク図形が走っている。落雷を受けた患者に見られる放電形の火傷痕だが——まさか雷を操る鬼だったのだろうか？ よく勝てたものだ。彼の回復力なら、早晚傷も消えてなくなるだろうが…：ちよつと心配。あんまり意味ないかもしれないけど、塗り薬を塗っておこう。

「…千里。それはつまり…」

「え、義勇…：いま『千里』って言った？」

「…」

「いや、黙り込まなくても…：ほらほら、もつと呼んじやいなよ」

肘でグイグイすると、鬱陶しそうにそっぽを向かれました。なんか言いたかったんじゃないの？ 面倒になるとすぐこれだもんな…：義勇陽キャ計画はまだまだ長そうだ。そして彼の言葉を引き継

ぐように、しのぶちゃんが声をかけてきた。

「——千里。それはつまり…」

「…そうだね。決戦が近いかもしれない」

可能性は高いだろう。いや、切実にそうであって欲しい。ここ最近、耀哉の容態が急激に悪くなっているのだ……この掴んだ糸が、おそらく分水嶺ぶんすいれいになるだろう。

耀哉の病気が呪いだっただとしても、鬼舞辻無惨を倒した瞬間に全快するなんてことはないと思う。だから病の進行が止まったとして、体が回復を臨める最低限度を考えるなら……たぶんあと一月ひとつきが限界だ。だからそれまでに決着をつけたい。さっきの挑発に乗ってくれるのが一番だったんだけど、そこまでは上手く行かなかった。

…それでも尻尾は掴んだ、掴めた。鬼舞辻無惨がいる限り、僕の周りの人たちに幸せは訪れない。耀哉の寿命も、禰豆子ちゃんの運命も、しのぶちゃんの想いも、他にも沢山——数え切れない程の不幸を撒き散らすあの男だけは、友達になれそうもない。

——みんなで生き残って、夜明けを迎えたい。たとえそれがどれだけ困難だとしても。

## 11話

刀鍛冶の里と言う場所はその性質上、鬼殺隊の拠点としては見つかりやすい部類に入る。物流を最低限に抑えているとはいえ、あれだけの人数が暮らしている以上は当然だろう。そもそも刀の作成自体、かなりの物資が必要というのものもある。故に、里の場所が鬼に知られた際には、既に設備を整え終わっている『空里』に移り住むことになる。死者の弔いも半ばだが、既にほとんどの人間が移住を始めていた。

「あの、俺たちも移動を手伝った方が…」

「ダメだよ、炭治郎くん。新しい拠点だって場所は秘密にされてるんだ。出来る限り知ってる人数は減らさなきゃ」

「あ……そう、ですね…」

「手伝いたい気持ちもわかるさ。でも人には役割つてのがある……彼等は刀を打って、君たちはそれを使う。あの人達の頑張りに報いたいなら、鬼舞辻無惨の頸を斬ることが最大の恩返しだよ」

「…はい！」

うん、良い意味で切り替えの速い子だ。炭治郎くんの背中を軽く叩いた後、僕は里長の屋敷へ移ることを提案した。半数は傷を負っている状態だし、すつからかんになった里の設備を使わせてもらうくらいはいいだろう。それに、どのみちここが使われることはもうない。

全員の了承を得た後、屋敷へ移動し——治療に必要な物資をしのぶちゃんと取りに行く。専門的な設備は無いにしても、最低限の物は備蓄している筈だ。

まあ重傷者はいないし、そこまで急ぐ必要はないだろう。ぱつと見る限り、しのぶちゃんも無傷のようだし……途中から参戦した彼女と義勇は、その時点で八対一になったから余裕があったに違いない。

「…？ どうしました？」

「ううん。しのぶちゃんが無事で良かったなって」

「ええ、千里も無事で安心しました。それと——上弦にも毒が効くと確認できたのは大きいです」

「へえ……強い鬼には、まだ分解される可能性の方が高いって言って

なかつたっけ」

「今回は敵が分裂してましたから。強さも半端でしたし、おそらく毒への抵抗力も落ちていたんでしょう。本体は富岡さんが斬つてしまいましたので、効果の程は不明ですが……体を構成する細胞そのものは同質でしようから、大なり小なり効果はあると思います。つまり方向性は間違っていない」

「そっか……ところで炭治郎くんは？」

「……ええ。戦闘中、痣が発現していました」

むむ……なるべく出さないようにと炭治郎くんにはお願いしていたが、まあ上弦との戦いでそんなことは言ってもらえないか。短時間で火傷の痕が薄れていく程の異常な回復力——やはり黒い痣の効果だろう。

痣者が早死にするのは既に炭治郎くんへ伝えているが、それほどショックを受けたように見えなかつたのは……やはり覚悟の差だろうか。僕だったら、自室でゴキブリを見失った時の百倍は動揺する自信がある。

「まだ自分で切り替えが出来ないみたいだから、検証数が増えたのは助かるけど……複雑だね」

「…治しようがないかもしれないからですか？」

「諦めるつもりはないけどね。ただ、あれが寿命の前借りに近い状態だとしたら…」

「——ハイフリック限界、でしたか」

「仮説の一つでしかないし、それだけじゃ説明もつかないけどね」

二人で炭治郎くんの身を案じながら、みんなが待っている茶の間の衾を開ける。するとそこには、踏ん張った表情で全身に力を込め、額に痣を出している炭治郎くんの姿があつた。彼に怒りを感じたのは初めてのことである。

「あ、千里さあ、あああっ!？」

「なるべく出さないでって言ったよね？ いま出す必要ある？」

「か、感覚を忘れたくっ！ な、なかつたのでええええ！」

「千里が炭治郎に怒ってるの初めて見た…」

頭をグリグリしながらお説教をすると、ちゃんと謝ってくれたので解放してあげた。他人への気遣いは必要以上に癖に、自分の体にはまったく配慮しないのだ、この子は。

そのまま彼の頭を両手で引き寄せ、痣を間近で確認すると、すっと消えていく様子が確認できた。ううん、体温が異常に高い……だと言うのに汗はあまり出ておらず、しかし脈拍は極度の興奮状態を示している。

「あ、あの……本当にすみません……」

解つてない。全然解つていない。いま炭治郎くんが謝っているのは、僕から悲しい匂いがするからってだけの話だ。『千里さんを悲しませてすみません』だ。そんな彼だから好ましいんだけど、それでもやっぱり自分は大切にしてほしい。きつと何を言っても焼け石に水だろうから、彼が自分の身を案じない分は、僕や周囲がその分を案じるしかないけどさ。

「……もつと自分を大切にしてくれ、炭治郎くん。君が死んで悲しむ人間は、きつと君が思ってるより多いから」

「はい……でも、これに関しては無茶だとは思ってません」

「またそんなこと——」

「絶対になんとかするって、千里さんが言ってくれました。だから俺は信じてます！」

くっ……！ 一瞬抱きしめそうになってしまった。そうだ、僕がなんとかすればいい話だ……ん？ いやそれとこれとは話が別——ううっ、キラキラとした瞳が眩しい。

ため息をつきながら彼の頭を一撫でし、懐から注射器を取り出して採血する。痣を出してしまった事実は変えられないのだから、それならそれでやるべきことをやるだけだ。

「なあ、さつきから何のこと言ってるの？」

「ん？ ああ、えつと……さつきの痣のことさ。あれ出すと寿命が縮まるからヤメてって言ってるんだよ」

「ちよっ、千里さ——」

「えええええっ?! バカバカバカにしてんだよ炭治郎このバカ！」

半泣きで炭治郎くんをポカポカ叩く善逸。他のみんなも少なからず心配したり怒ったりで、彼の人徳が窺える……これで多少は変わってくれると嬉しいんだけどねえ。

痣については次の柱合会議でも言及すると、あまねさんが言っていた。今更隠すようなことでもないだろう……それにここにいるのは、半分近くが柱だ。『どうせ』などとは言いたくないが、寿命と引き換えに強くなれるなら進んで発現させる人間ばかりだろう。だからこそ痣の解明は急務なのだ。

それに一人でも痣者が出ると、それが引き金かのように発現し始めるという話もある。こちらは正直眉唾か、あるいは単にその一人から発現条件が共有されたからってだけの話だと思うけど。

「でもさ、千里……そんなの本当にありえるの？」

「前例はあるけど、資料が失伝しまくってさ。詳細は僕が研究してるけど……んー……」

「……？ なにしてんだよ」

「炭治郎くんの細胞を調べてるの。痣の出る回数で変化があるかどうか……ふむふむ……」

鬼殺隊の技術は、一部において数世紀も先を行っている。例えば隊服。耐熱、耐冷、耐刃、耐衝撃、その全てを兼ね備えつつ、服としての柔軟さを併せ持つ意味不明の素材と技術……これは二十一世紀の世界でも実現は不可能だろう。

例えば日輪刀。『鉄』としての強度はそのままだが、日光の性質を宿す謎鉄である。しかも握る人間の性質によつて色を変える機能も付いているのだ。そして呼吸を映し出す効果もある……要は炎や雷などのエフェクトは、この刀が映し出しているのだ。普通の刀である現象は確認できない。

いま使っている『簡易細胞観測キット』もその一つ。細胞の観察など、普通は蛍光顕微鏡でもなければ出来ないのだが——それが出来てしまうのが蝶屋敷の技術である。蝶屋敷って言うか超屋敷って感じ。

鬼殺隊超技術の要因の一つは、産屋敷家の財力による潤沢な研究費用だ。今も昔もそうだが、『研究』というのは金食い虫である。大企業



がスポンサーにでもならなければ、器具一つ買えやしない。

そして何故スポンサーが金を出すかと言えば、当然見返りがあるからだ。つまり研究成果が金にならないのなら、基本的にスポンサーは付かない。しかし産屋敷家は、鬼舞辻無惨を滅ぼすためであれば援助を厭わない。故に、世間には卸されないブレイクスルーがいくつかあったようだ。

そしてもう一つ……こちらの方が大きい『陽光山』の存在である。技術が爆発的に向上する要因は、いつだって『素材』によるものだ。

陽光山は日輪刀の材料である『猩々緋砂鉄』『猩々緋鉱石』が採掘できる山なのだが——年中陽が差し続けるこの場所は、環境が非常に特殊だ。

隊服の素材もこの場所から採れた奇妙な植物が原料である。そしてこの簡易細胞観測キットも、そこから産出される特殊な鉱石を使用して作られたレンズを使用している。しのぶちゃんが鬼の細胞を観察し、有効な毒を作れるのもこの技術あつてのことである。

「どうですか？」

「んー……ちよつと変化してる、かな？」

「……詳しくお聞きしても？」

……んのぶちゃんはこの研究にはあまり興味を示してなかった筈だけど……うーん……ははあ、きつと彼女も変わってきているんだろう。

自分の命よりも仇を取ることを優先していた彼女だけど、僕と炭治郎くんのやり取りで何か思うことがあつたのか、あるいは居住者が増えた蝶屋敷の生活で少しずつ変わってきていたのか。

どちらにせよ良い傾向だろう。炭治郎くんが死んだら、またカナヲちゃんが心を閉ざすかもしれない——そんな理由もあつたりして。

「さつきも言った『ヘイフリック限界』……これは——少し違うけど、解りやすく言うなら『細胞の寿命』だね。これはヒト細胞に限らず、単細胞生物以外に共通する細胞分裂回数限界の意味するんだ」

「ええ、それは知っています」

『回復』つてのは、その理論とは切っても切れない現象なんだよね。

そんなもって、呼吸を上手く使える人間ほど回復力は高い傾向にある……そして痣を出した時の炭治郎くんの回復力は、ちよつと異常だ。つまり痣の発現つてのは、呼吸という技術における一つの到達点なのかもしれない」

「ふむ…」

顎に手を当てて考え込むしのぶちゃんは、凛々しくて美しく可愛らしい奇跡の美女である。藤の花の毒を入れ替えたせいも、最近ちよつと血色も良くなってきた、その美貌にも磨きがかかっているのだ。とはいえ今はふざけている場合でもないので、話を続けよう。

「DNAの捻じれ——繰り返し返される配列と、複数のタンパク質から構成される構造そのものを指して『テロメア』って言うんだけどね。この長短が細胞の寿命を左右するっていう説があるんだ」

「ええ、あなたが特に気にしていたものでしたね」

「こそ。なんでかって言うと、ヒト細胞におけるテロメアの短縮は基本的に不可逆的なんだ。加齢や他の要因で短くなったテロメアは、一度縮むと元に戻らない」

「…ですが？」

「そう、『ですが』……だね。人の体にはほとんど存在しない、生成もされない酵素……こっちは『テロメララーゼ』って言うんだけど、これがテロメアの短縮を抑制する効果があるのさ。それどころか修復させた例もある……かどうかは証明されてないけど、まあ説としては一応存在してる」

「人の体で生成されない……ですが、確か以前に炭治郎君の細胞内で生成されていると言っていますませんでしたか？」

「うん。他の人と比較しても、呼吸を使うからって訳じゃない。となると…」

「『痣が発現すると寿命が縮む』という説の、むしろ逆を行っている……？」

「だね。つまりテロメアとテロメララーゼに関する学説そのものが間違っているのか——」

「あるいは炭治郎君が特別という可能性…」

「都合の良い考え方もしれないけど、炭治郎くんだけが特別なものかもしれない。そしてその裏付けとなるのが…」

「…『日の呼吸』ですね。復元された炎柱手記の内容が正しければ、適性はほぼ生まれる段階で決まる…『額の痣』も一致する。日の呼吸の使い手の痣だけが『生まれつき』という記述が真実ならば——炭治郎君だけが例外の可能性は否定できない…」

「一つの側面でしかないから、まだまだ多角的に見ていかなきゃならないけど…くん？」

しのぶちゃんと顔を突き合わせて議論していると、なにやら皆の視線が突き刺さっていた。もつと言うと、義勇の視線が凄いい勢いで僕に突き刺さっていた。なんなのさ、その眼は。その顔は。もしかして僕を馬鹿だと思っていたのか？ なんて酷い友達なんだ。

「凄いわ凄いわ！ 一人で上弦の鬼を倒して、しのぶちゃんみたいに頭も良くて——それに、それに富岡さんと下の名前で呼び合ってるなんて—」

「一番驚くのそこなんだ…あ、まだ自己紹介してなかったね。飛鳥千里です」

「わ、私、甘露寺蜜璃です！」

「うん、よろしくね蜜璃ちゃん」

『きやつ…！ 下の名前で呼ばれちゃった…！』などと呟いている蜜璃ちゃん。ずっとおっぱいばかりに目を奪われていたが、髪の色がちよつと有り得ない感じになっている。ピンクと緑って……なにごと？ 桜餅のような色合いで可愛らしいのは可愛らしいけど、人間の髪って考えたらファンキーすぎるぜ。まさか地毛じゃないよね…？

「それと、君は…」

「…時透無一郎です。よろしくお願いします」

「うん、よろ——」

「なんで!?!」

無一郎くと挨拶していると、善逸が謎の奇声を上げた。なんだなんだ、何が『なんで』なんだ。震える指先で無一郎くんを指差しながら憤っている。

「なんで普通に挨拶してんの!? 『どうでもいい…』とか『僕には関係ないから…』とかじゃないのかよ! はっ…顔!? もしかして顔で判断してるのかちくしょう! そう言えばお前らちよつと似てるもんな! 俺はお眼鏡にかなわなかった訳だぶげっ!」

「僕に突っ込ませないでよね、善逸。だいたい、こんな素直そうな子になんてこと言うのさ」

「うわああん! だってコイツ俺のこと無視するし小鉄君に酷いことするし人形壊すし俺より年下なのに柱だし美少年だし…!」

半分くらい僻みな気がするけど…というか、美少年に似てるって言われちゃったぜ。まあ自分で言うのもなんだが、僕の顔はそれなりに整ってるからな。

しかし無一郎くんからは、善逸が言ったような刺々しい雰囲気は感じないけど…? どれ、ちよつと頭でも撫でてみよう。よしよし…うむ、普通に受け入れてくれた。そしてそんな彼を見て、炭治郎くんが小首をかしげた。

「…? 時透君、雰囲気変わった?」

「…うん。ありがとう、炭治郎。君のおかげで思い出せたんだ…怒りも悲しみも——大切な思い出も」

「えっ? でも俺は何も…」

ふむふむ…二人のやり取りを聞いた限りだと、どうやら無一郎くんは記憶喪失だったらしい。そのせいか、善逸が言っていたように冷たい言葉や行動を繰り返していたそうだが…炭治郎くんと接していく内、徐々に頭の靄が晴れていったらしい。そして先の戦いで彼に庇われたことがきっかけで、完全に記憶を取り戻したそうだ。なるほど、炭治郎くんの怪我が一番酷い訳だ。

「善逸も、伊之助も…ごめんね、今まで酷いこと言って」

「ぎゃああああ! なんか謝ってるうう! 幻覚! いや幻聴が聞こえる助けて千里うげぶえっ!」

「だから僕に突っ込まないでっば」

「うう…まあ許すも許さないもないけどさ…というか柱だし…」

「ウハハハ! いまは三十戦三十敗だが! すぐに俺の方が強くなる

からな！　いままでの借りは勝ち越した時にまとめて返してやるぜ  
！」

「それは無理だと思う」

「んだとゴラア!!」

「やっぱぜんぜん変わってねええ！」

「あ、あはは…」

なんだ、普通に仲良いじゃんか。少年たちの友情とは見ていて気持ちが良いものだ……さて、次は最後の一人。世紀末の世界で火炎放射器を持っていそうなモヒカンくん……どう見ても実弥と血縁関係がありそうな彼だ。

彼の方へ視線を向けると、ちよつとビクツとされた。もしかして僕のことをお偉いさんと勘違いしてるのかな？　まあ今までの言動や行動、上弦の鬼を倒したという実績からすれば誤解するのも仕方ないか。まずはその誤解を解くでしょう。

「小僧、名を名乗れ」

「…っ！　し、不死川玄弥、です」

「なにいまの」

「ほう……もしや実弥の弟か」

「いや、誰の真似してんの？」

「…兄貴と知り合いませんか？」

「うむ、奴とは茶飲み仲間だな」

「おーい」

「ちよつと善逸。せつかく威厳ある感じで話してるんだからさ、邪魔  
しないでよね」

「ただの馬鹿にしか見えないけど」

「麻呂になんという口を利くでおじやるか！」

「もつと馬鹿っぽい！」

さて、自己紹介も終わったことだし……炭治郎くんの次に怪我が多い無一郎くんを診るとしよう。極度の興奮状態にあると、人間の体は痛みや傷を認識しにくくなる……殺し合いなんてのはまさしくそれだ。重傷に本人が気付かないってのは、意外とよくある。まあ柱に

限ってそれはないだろうけど、一応ね。

「…」

「…? どこか痛い?」

「いえ…」

「あ、僕のことは千里でいいよ。僕も無一郎って呼んでいい?」

「…はい」

じつと顔を見つめられると、なんだか変な気分になってくるな。サラサラヘアを手で梳くと、まるで絹糸のように流れて落ちる。炭治郎くんよりも更に幼いような気がするけど……下手したら、僕とは一回りくらい年の差あるんじゃないかなろうか。そんな感じでお互いに見つめ合っていると、脇から善逸が声をかけてきた。

「すごいや千里、なんで炭治郎みたい髪型になつてんの?」

「ん? ああ、炭治郎くんは鬼舞辻無惨の標的になつてるみたいだし……少しでも攪乱したくて僕はっ……!」

「そんな、千里さん!」

「いやいやいや。そんなんで間違える馬鹿いないから」

「だつてさ。馬鹿って言われてるぜ、義勇」

「…」

「いゝっ?!? あ、い、言われてみれば間違えるかも! いや間違える

! これは間違えても仕方ない!」

「…俺は間違っていない」

『炭治郎、か…?』って言ってたじゃん」

「違う」

うーん……よし、解説できた。『俺は(髪型で)間違つてい(た訳じゃ)ない。(服装や顔付きも)違(つていたから間違)う(のも仕方ないだろう)』と言いたかったに違いない。そろそろ義勇語も慣れてきて、親密さが増した感あるね。

「いやあ、柱に『馬鹿』とはね。善逸も偉くなったもんだ」

「きやあああ! 違う! 違うから! そんな気はまったく!」

「いちいち怖がらなくても、そんなことで怒るほど義勇は狭量じゃないよ」

「ほ、ほんとに?」

『俺を馬鹿にした報いは必ず受けさせる。覚悟しておけ』

「いぎやああ! めつちや怒ってるじゃんかああ!」

「…今のは俺じゃない」

耳が良い割に、僕の声真似にはよく騙される善逸。本当に見ていて飽きない少年である。素晴らしいポケとツツコミのキレ…誕生日にはハリセンでもプレゼントしてあげようかな。

「ま、そこまで怖れる必要ないってのは事実だよ。柱はみんな人格者だし…よっぽどのことしなけりや、大抵のことは許してくれるさ。しのぶちゃんだって普段はちよつとピリツとしているけど、こんな風に抱きついたって許してくれ——痛いっ! ほらね?」

「ほっぺた腫れてるけど」

「義勇もだよ。気難しそうに見えるけど、こうやって肩を組むくらいが丁度良いのさ」

「振り払われてるけど」

「くっ…そうだ、蜜璃ちゃん。一緒に温泉入ろうぜ」

「えっ!? え、えつと…は、はいっ!」

「やった——ぐへえっ!」

「まったく…私達は先に温泉に入っていますから、千里は皆さんの治療を終わらせておいてくださいね」

「ごふっ…見たかい? 善逸。今のが愛情の裏返しってやつさ」

「そうですね」

「遂に君まで!」

善逸まで塩対応になったら、誰が僕に突っ込んでくれると言うんだ。悲しみに暮れながら、消毒液を善逸の体に塗りたくった。すり傷だらけだからよく染みることだろう。悲鳴を上げながら逃げようとする彼を押さえつける…化膿したら一大事だからけして放さない。ははは、よいではないかよいではないか。

「さて、と…伊之助は問題なさそうだし、僕はご飯の用意でもしてくるかな——つとお! …なんだい? 善逸。師匠に刃を向けるとは、穏やかじゃないぜ」

「そつちは台所じゃねえよなあ……！」

「…なに、ひとつ風呂浴びてくるだけさ」

「待てコラアア！」

「ここは混浴の温泉だ！ 何もやましい事はない！」

「規則はなくても配慮はいんだろが！」

「…！ 君がそんなまともなことを言うなんて…！」

「どんだけ馬鹿にしてんの!? …シイツ——」

…！ これは——僕の知る『神速』よりも数段は速い。上弦との戦いでまた殻を破つたのだろうか…：百の修練より一つの実戦とはよく言ったものだ。この瞬間の速度だけで言えば、猗窩座さんや玉壺さんよりも更に速い。しかし僕にとってはまだ対応できる速度である…：むっ！ 伊之助が善逸の後ろから…！

「はっはあ！ かすり傷と言わず痣の一つでも付けてやらああ！」  
「根に持ってた！」

伊之助もずいぶん動きが良くなって…：そうか、そう言えば里には訓練しにきてたんだっけ。きつと絡繰人形との稽古は、とても価値あるものだったんだろう。しかしまだだ、まだ僕を捕まえるには足りない。稽古がどうのと言うなら、僕ほど走っている人間だって中々いないだろう。

「千里さん！ そういうのはいけないと思います！」

「いくら炭治郎くんに言われても！ 僕にだって譲れないものがあるんだ！」

「なら俺が止めてみせます！ 絶対に！」

「馬鹿しかいねえ…！」

炭治郎くんまで入ってきて、僕の行動を阻む…：が、しかし先に走り出したのが僕という時点で、結果は決まりきっているというものだ。彼等の方へ向けていた体をもう一度廊下の先へ向け、僕は再び走り出す。あの先には輝く栄光が待ち受けているのだ。

「それじゃ失礼——なにっ!？」

…っ!?! 何故か前方に義勇が…：まさか僕たちが喋ってる間に、別ルートで先回りしたと言うのだろうか？ しかしこんな茶番に自分



から関わるような性格じゃない筈——はっ！ あのうちよつと得意げな口元は！ 僕をドロップキックした時と同じものだ。くっ……伊之助といい義勇といい、集めていたヘイトがこんな形で返ってくるのは……！

「むう、挟まれたか……」

「大人しく捕まるんだな」

「ちいつ——……って、しのぶちゃん!? そんなかつこで歩き回っちゃ……!」

「——っ!」

義勇の背後に視線を向け、驚愕に眼を見張る……振りをした。これぞ飛鳥流視線誘導術の真骨頂だ。目論見通り振り返った義勇——意外とムツツリなのもかもしれん——の、その横を目掛け走る……ん？

——しまっ……!

「……その手は食わん」

これは……振り返ったのは背後を確認するためじゃなかったのか。『回転』と『捻じれ』の威力を増すためのブラフ……! まずい、これは“水の呼吸”の十個目の型……『生々流転』だ。

しかも初撃からほぼ最大速度——なるほど、そのための回転か。攻撃の度に速度と威力を増すこの技を、自分なりに改良し、初撃から最大値に到達させる荒業……流石は柱である。

そして背後の炭治郎くんも、合わせるように同じ技を繰り出している。その背後では善逸が霹靂一閃の構え……そして伊之助も爆裂猛進の体勢だ。

まるで水の大渦に巻き込まれたような錯覚——皮膚の表面すれすれを、嵐のように駆け巡る孫の手。アホらしくも楽しいやり取りである……しかしいくら木製とはいえ、当たったらバッチバチに痛いのは間違いない。

「——ここまで追い詰められるとは思わなかったよ。だけど、この動きについてこられるかな?」

「……っ!」

三角飛びの要領で壁を経由し、そのまま天井に張り付き……ゴキブ

りのようにカサカサと攻撃範囲から脱出する。ふふふ、まさか人間がそんな動きをするとは思って。ずっと練習していた蟲ゴキブリの呼吸が、遂に完成を見たのだ。ゴホッ、ホコリやべえ、ちゃんと掃除してよね——ん？

「…つとー！ どうしたんだい？ 無一郎」

「覗きは良くないと思う」

新聞紙を武器にして、僕を天井からはたき落とした無一郎くん。むむむ……本気で逃げている僕に触れたのは、彼が初めてだ。しかしなるほど、新聞紙とスリッパとママレモンはゴキブリへの特攻アイテムである。孫の手を武器として選択した彼等とは、ひと味もふた味も違うぜ。

「ふー……一発当てられたし、終わりにしよっか。それにしても無一郎は凄いな。義勇としてのぶちやんの二人がかりだって、僕には触れもしなかったんだぜ」

「う、うん……でも炭治郎たちが追い込んでくれたから」

「それでもさ。偉い偉い……そうだ、頭を撫でてあげよう」

「……」

下手人に褒められて嬉しがるのは、どういう心境なんだろうか……？ 僕に一撃を入れた彼に対し、伊之助は悔しそうに、炭治郎くんは手を叩いて称賛し、義勇は軽く頷いている。そして善逸は——なるほど、やはり彼だけは僕の行動を読んでるという訳だ。

「それじゃ二回戦開始！ ヨイドンツー！」

「やつぱりか teme ええ！」

よーし、最高のスタートダッシュを決められたぜ。もう誰も僕に追い付けはしない……勢いそのままに脱衣所の扉を開け、温泉への扉の前に立つ。ここを開けば、そこはもはや桃源郷。巨乳の美女がキャツキヤウフフしている素晴らしい光景が広がっているのだ。コホンと喉の調子を整え、期待に胸を高鳴らしながら扉越しに声をかける。

「しのぶちゃんーん！ 一緒に一緒にいいっ！」

「ダメです」

「そっか……」

無念だ……混浴の温泉ならワンチャンあるかと思っていたのだが、そんな希望は見事に切つて捨てられた。肩を落として振り返ると、無一郎くんから新聞紙を強奪した善逸が、僕の頭をスパンと叩いた。「それで諦めるの!?!」

「いや、当たり前でしょ。拒否されたのに侵入したらただの変態じゃないか」

「ここまで来た時点で変態だろうが!」

「ここまで来たら変態ってことは——義勇もつてこと? 柱を馬鹿にするどころか変態扱いまでするなんて、善逸は勇気があるねえ」

「…」

「ぎやああ! やめろ誘導するなああ!」

「ふつ——ふふつ……!」

「時透君?」

「善逸も千里も、面白いね…」

…脱衣所から複数名の男性の声が聞こえている状態って、女性からしたらちよつとアレだよね。自分で引き連れてきて言うのもなんだが、流石に申し訳ないな。混浴の夢も潰えたことだし、早々にお暇いそましよう。善逸と義勇の肩をペシペシ叩いて、退室を促す。ん? そう言えば伊之助は——

「——出遅れたぜえ! 猪突猛進だオラアアア!」

「うわっ!?!」

「炭治郎!」

「いのつ、ちよつ、ぼつ——」

「…っ!」

——脱衣所の入り口に固まっていた僕らは、凄まじい速度で突っ込んできた伊之助にまともに吹っ飛ばされた。みんな反応はできていたけど、一番前方にいた炭治郎くんは逃げ場がなく……それを咄嗟に庇おうとした無一郎と義勇が巻き込まれ、更にそれをフォローしようとした善逸も巻き込まれ、更に更にそれを受け止めようとした僕まで巻き込まれた結果である。恐るべきは伊之助の突進力だろう。だから結果的にもみくちやになって浴場へ突っ込んだのは僕のせいじゃ

ない……ないよね？

「うはははは！ 触ったぞ！ 触ったぞオラアア！ 千里触ったぞ！」

ギャフンと仰向けに倒れた僕の、そのお腹に跨がってきた伊之助。ペチペチと僕のほつぺたを叩きながら、嬉しそうにはしゃいでいる。

逃走の態勢に入った僕に触れたのは初めてだからなあ……めっちゃ喜んでる。僕から構おうとすると逃げる癖に、僕が逃げると追いかけてくる、まるで猫のような男の子である。あ、いや猪か。

…それはともかく、すぐ傍で仁王立ちになっているしのぶちゃんをどうしたものか。タオルを巻いているが、この角度だと中身が見えそうでドキドキしちゃうぜ。

というかお風呂にバスタオルまで持ち込んでるのは、もしかして僕対策なのか？ 信頼されてないみたいで地味にショックなんだけど。いやしかし、結果的にこうなってるのだから何も言えない……しかも少し離れたところでは、炭治郎さんと義勇が蜜璃ちゃんにラッキースケベをかましている。僕もあつちが良かった。

「あー……ごめんね、しのぶちゃん。ただ、不可抗力ってことだけは理解してほしいって言うか何ていうか……」

「ええ、そのようですね」

あ、よかった怒ってなかった……しのぶちゃんは僕に手を出すことはあっても、理不尽に怒ることはないのだ。凡百の暴力ヒロインのように、照れて殴ったり勘違いして殴ったり恥ずかしくて殴ったりはしない。

僕が悪い場合においてのみ、暴力を振るう女性である。混浴を断られて僕が諦めたのは、しっかり理解してくれてるんだろう。おふぎけで皆を連れてきてしまったのは、ギリギリでノットギルティと判断してくれたらしい。女神かな？

「きやあああつ!!」

むっ、蜜璃ちゃんの悲鳴……！ ——なにやら彼女のタオルが血に染まり、炭治郎くんが倒れている。ラブコメのような状況から一転、火曜サスペンスで土曜ワイドな様相を呈してきた。

すぐさま彼に駆け寄り、容態を確認すると……鼻から大量に血を流している様子がうかがえた。いやそんな、ラブコメの主人公じゃないんだから。確かに蜜璃ちゃんのおっぱいは凶器だけでも。

というかこれ、ギヤグ的な鼻血って判断していいの？ リアルに診断するなら、結構危ない出血量なんですけど。もつと言うと、人間の体って鼻を削ぎ落としてもここまで出血はしない筈なんだけど。なんかこの世界の人間って、たまに漫画みたいな現象が起きるよね……とにかく応急処置くらいはしておくか。

「誰かティッシュ——じゃない、タオル持ってきて！」

「は、はいっ！ どうぞ！」

「ありが——えっ？」

「あつ、や、わひゃあああ！」

「ええ……」

少しだけ焦燥感の混じった僕の言葉を聞いて、蜜璃ちゃんは思わずといった風に、体に巻いていたタオルを差し出してきた。当たり前だが、そうなるで一糸まとわぬ裸体を晒すことになる。手渡した瞬間に気付くというボケっぷりがまた可愛らしく、そしてその肢体はかくも素晴らしいものであった。

変な叫び声を上げながら、そのままぎぶんと温泉に飛び込んだ蜜璃ちゃん。顔まで湯船に浸かり、真っ赤になった顔と体を隠している。髪の毛だけがお湯にプカリと覗き、まるで巨大な桜餅が浮いているようだ。

いやあ、もう……僕も自分がちよつと変だという自覚はあるが、鬼殺隊の人はそれに輪をかけて変な人ばかりである。危ない職業だが、妙に居心地が良いのはそんな理由なのかもしれない。思わずしのぶちゃんの方へ視線を向けると、バチリと目が合い——そのあと、呆れたように笑いあった。

## 12話

洒脱しゃだつな雰囲ふんい気を纏まとった人々が、忙せわしく行き交う……僕は日本橋の欄干らんかんに寄りかかりながら、そんな人々を見ていた。郊外に比べれば華やかではあるが、ずっと未来に比べるとやはり野暮やぼったさがある。文明開化の真つただ中とはいえ、まだまだ発展途上ということなのだろう。

百年後に富裕国としての地位を確立させているのは、第一次世界大戦、第二次世界大戦を経ての結果だ。嫌な言い方をするなら、戦争特需の恩恵とも言える。侵略し、侵略され、得たもの失ったものと色々あるが——最終的には先進国に名を連ねているあたり、当時の日本には確かな強かさしたたがあつたに違いない。

——まあそんなことはどうでもいい……いやどうでもよくはないけど、庶民にとつては目先のことの方がよっぽど大事だ。つまり僕にとつては、近く起こるであろう戦争などより、鬼殺隊の行く末の方がよっぽど重要である。だからこんなところに居るのも、それなりの理由あつてのことだ。

「——お帰り、近松。どうだった？ ……そっか。じゃあ次は……」  
地図に印を付けながら、また飛んでいく近松を見送る。そして入れ替わるように別の鴉が欄干へと降り立ち、羽休めとでも言うように僕へと近付いた。耀哉とそっくりの理知的な瞳……鏖鴉の中でもっとも流暢りゆうちやうに人語を話すのが彼だ。めっちゃ可愛い。

「ふむふむ……了解。じゃあ後は——」  
すぐに飛び立っていった彼を、近松と同じように見送る。また地図に印を付け——そんなことを何度も繰り返していると、いつの間にか日も暮れて辺りは暗くなっていた。夜闇が濃くなるにつれ、この周辺は雰囲気ふんいが変わる。色街が近いこともあり、通行人もそれ相応の者が多くなるのだ。

「……ん？」

顎に手を当てながら地図とにらめっこし、手帳に書かれたいくつかの住所に棒線を入れる。頭の中で情報を整理しながら、次の『当て』を

どう探すかと思案していたところ——数メートルほど前で、橋の欄干を乗り越えようとしている男性が目に入った。ははあ、季節外れの水遊びかな……いやいやいや。もしかして自殺？

「——待った待った待った！ 考え直すんだ君！」

「放してくれ！ 俺はもうダメなんだああ！」

「いやでも、ここで飛んでもたぶん即死はしないぜ。水深から考えても精々が骨折くらいだろうし……痛くて寒くて苦しみながら溺死とか、自殺にしてもちよつと考えもんじゃない？」

「ふぐつ……」

「ほらほら、よかったら酒でも奢るよ。赤の他人の方が気楽に話せるもんさ」

「う、うう……」

ううん、僕も暇じゃないんだけどなあ……でも目の前で死のうとしてる人を見過ごすのは、流石に無理だ。俯く彼を屋台に引つ張り込み、話を聞くことにした。お酒でも入れれば、多少は気分も上向きになってくるだろう。過度な摂取は問題だが、少量のアルコールはストレス軽減に一定の効果があるのだ。

「ほい、まあ「献」<sup>いっしん</sup>」

「……」

「ちゃんと食事はとってる？ 人間の頭つてね、栄養を取らないと悪い考え方しちゃうんだよ。暗い気持ちになった時は、無理にでも食べた方がいいぜ」

ぱつと見た感じ、二十代後半つてところだろうか。体付きは良く、筋肉質な印象を受ける。人相は少々悪いが、アブナイ系が好きな女子からすれば受けは良さそうだ。着物の質は中々のもので、金銭的な面での自殺という線はなさそうだ。

「金が無えんだよおお……うおおおん……！」

あ、ぜんぜん違った。とりあえず僕に探偵業は無理ということが解ったな……今も人探しをしている最中だが、やっぱり向いてない感。

まあそれはともかく、ようやく話してくれる気になったんだから、

今はそつちへ集中することにしよう。ぐいっと猪口を傾けて、ポツリポツリと言葉を零す男性……意外と良い飲みっぷりだ。

「俺は女術ぜげんをやつてんだがよお……」

「女術ぜげんつて——ああ、人身売買の仲介人か。助けなきやよかつた」

「うおおおお！ 死んでやるうう！」

「待つて待つて待つて！ とりあえず最後までは話そうぜ！ それで？ なんで女術ぜげんなんてやつてたんだい？」

「くうう……！ ……そりゃあ世間様からはよ、褒められた職業じゃねえよ。だが俺ア仕事に誇りを持ってやつてたんだ！」

「ふうん……あんまり良い印象は持てないけどねえ」

「確かに人攫い同然の女術もいるさ。騙して娘つ子を買うなんてのも、日常茶飯事の世界だ……けどそんな中でも、俺んところは真つ当にやつてたんだ。証文だつてしつかり書いて、金もちゃんと払つてた」

「ふむふむ……」

彼の話を聞くと、女術にも色々とあるらしいことが解つた。特定の店に所属し、その店のためだけに女性を買い付ける割とまともな女術。犯罪まがいの方法で女性を買い漁り、適当に売り付けるフリーの女術。彼は前者であるらしく、『ときと屋』という店に所属しているらしい。

『人買い』などと言えば字面は最悪だが、それで救われる人間がいるのもまた事実らしい。身売りする場がなければ、家族揃つて首を括らなければならぬ状況など、この時代ならそれなりにある。

何もかも失つて、今日を生きることすら困難な人間の駆け込み寺——遊郭はそんな側面もあるとのことだ。売れっ子になればその辺の商売人など目じやなくらいに稼げるそうで、そのために自らを売りに来る女性もいるらしい……まあそれは現代とそう変わらないか。

「そつか……それで救われる人間がいるんなら、悪い側面だけじゃないんだね。ごめんね『女術ぜげんなんて』とか言っちゃつて」

「お、おう。いや、良い仕事じゃねえのは事実だ。結局は人買いだしな……」

人身売買は既に政府が禁止しているが、身売りの建前としては働く



期間『年季』を決め、その給金も先に証文で決める。見た目上はちやんとした労働契約である。しかしその金は女術から親に一括で支払われ、娘はそのまま遊郭で働くのだ。実質的には人買いだろう。

「……この前、遊郭に化け物が出てなあ。結局なにがどうだったかはわからねえんだがよ、人も建物もえれえ被害が出ちまって」

「……………うん、それで？」

「信じられるか？ 家ごと真つ二つになったり、人が一刀両断されたり……………そんな化け物と戦ってた剣士を見たって奴もいるんだ」

「へえ…」

「化け物が出たってんで客は来なくなるわ、遊女も小間使いも足抜けするわ、もう散々でなあ…」

「大変だねえ」

「しかもあの日うちで死んだ客が結構なお偉いさんでよお、そっちにも金引つ張られちまって…」

「わあ、弱り目に祟り目」

「稼ぎ頭だった鯉夏花魁こいなつおいらんの身請けも無くなつちまって、期待してた金も入ってこねえし…」

「泣きつ面に蜂だねえ」

間接的な被害もかなり出てるなあ…………『隠』がある程度の調整はするにしても、いちいち被害の補填まではしていない。そもそも鬼の説明なんてしないから、どうしようもないだろう…………ん？ そういえば炭治郎くんの文通相手に、遊郭の娘がいたような。確かその子も『ときと屋』だった筈——ということは、逃げ出した小間使いって炭治郎くんのことか。世間は狭いぜ。

「とにかく遊女の補充もしなきゃなんねえし、カツカツの中でなんとか支度金も用意して小川町まで行ったんだが…」

「ふんふん…………あれ、小川町ってちよつと前に大火事になつてなかったっけ」

「ああ、だからだ。あんだだけの火事なら、その後の死人もかなり出る」  
「その後…？」

「財産も何もかも焼けちまって、一家で首吊りなんてよくある話だ。」

だから俺らが誘うんだ……娘をうちで働かせる代わりに、こっちは纏まった金を渡す。客付きが良けりや仕送りだつて出来るしな」

小川町一帯の大火事……未来で言う神保町辺りのことだったかな。相当な範囲で焼けたつて聞いた覚えがある。なるほど……災害での死者は、直接的な被害を受けなくとも出るものだ。

震災の後などは心労が祟つて死亡する人も多いし、自殺も増える。それを僅かなりとも防いでいると言うなら、彼が女衞という職業に誇りを持っているのも頷ける話だ。

「二人連れてくる予定だったんだがよ、どつちも当座を凌げる金が入ったとかで契約が流れちまつて……いやまあそれはいいんだ。俺も人の不幸で飯食つちやいるけどよ、家族一緒にいられるんならそつちのが良いに決まつてる」

「うんうん。僕、君みたいな人が好きだよ」

「よ、よせよ。ええと、それで——支度金を持ってそのまま帰る筈だったんだが、どつかでスられちまつて……」

「うわあ……」

「下げる頭も無えくらい情けない話だけどよ、身銭切つてなんとかしようと思つて帰つたら……」

「…帰つたら？」

「前に俺が連れてきた遊女が、店の金持ち出して逃げたつて騒ぎになつててよ……ふぐうつ！ もう俺アどうしたらいいもんかと……」

「悪いことは重なるつて言うけど、散々だねえ……」

運悪すぎない？ 衝動的に自殺しかけたのもわからなくはないレベルだ。しかしだからといって、僕が『可哀想！ お金出してあげるよ！』などとは言えない。可哀想な人なんてそこら中にいるし、そんな人たち全てを救うことはできないのだ。耀哉に頼めばいくらでも出してくれるからこそ、逆に金遣いは慎重に考えなければ。

「それにしても、二人同時に金の当てが出来るつても珍しいねえ」

「ん、ああ……そつちは有り得るかも、とは思つてたんだが……」

「……？ なんで？」

「最近あの辺で……血を高値で買つてる女がいるらしくてな。何に使

うか知らねえがよ、気味悪い噂だ。鬼だ化け物だって騒いでる奴もいるぜ」

「……！ それ、詳しく教えてくれない？」

「え？ あ、ああ……」

情けは人の為ならずとは、まさに至言である。その情報が欲しかったんだ僕は……！ 耀哉に頼まれた『珠世』という女性の捜索——彼女は鬼舞辻無惨を滅ぼそうとしている、異端の鬼らしい。鬼でありながら医者でもあり、その知識と腕は長い時を生きただけあつて相当なものだろうと耀哉も言っていた。

しかし隠れるのが上手い彼女は、普通に探していても中々見つからない。それでもなんとか当たりをつけようとすれば、『血液の購入』という一点を探るべきなのだ。

曰く彼女は人を食べる必要がなく、少量の血を摂取するだけで生活ができるらしい。それも無理やりではなく、輸血のためと称し、金銭の授受で血を確保しているとのことだ。

そう——『輸血』。実はこの技術、歴史的には結構新しいものである。少なくとも、大衆へ一般的に広まったのは第二次世界大戦中期からだ。昔は動物の血を入れて死亡したり、血液型を無視して輸血の末死亡したりと、そもそも医療行為として疑問視されていた。

抗生剤の発展やらなんやらで死亡率も下がり、確かな技術として確立されたのは昭和から。つまりこの時代に『輸血』などと称して血液を集める人間なんてのは、激しく目立つ。というか一般市民はそんな技術知らないから、かなりヤベエ人扱いされるのは間違いない。信心深い者であれば『化物だ！』なんて噂を立てることもあるだろう。

とはいえ、そんな噂も人を伝う内に曖昧なものになってしまおうのが、ネットワークが未熟なこの時代の特徴である。結局は『鬼の噂』として紛れてしまうので、精々が一般隊員を派遣するくらいに留まってしまうのだ。

以前に炭治郎くんが鬼出現の報せを受けて浅草へ向かった時、それは彼女のことだったらしいが……つまりそんな偶然に頼るしか方法がないという訳だ。鬼舞辻無惨に遭遇するという偶然がなければ、炭

治郎くんも彼女と出会うことはなかっただろう。

「( )こと、( )こと、( )こと……それだと……ふーむ……」

「お、おい……?」

「……ごめん、僕ちよつと用事ができたから」

「お、おう……?」

「これで支払つといて。お釣りはいいから」

「……は? い、いや——なんだよこんな大金……!」

「情報料さ。苦しい時期かもしれないけど、頑張つてね」

「お、おい……つて速つ!」

『ときと屋に来た時は俺の名前を出してくれ』——という声が後ろから聞こえ、少しだけ振り向いて手を振る。そのまま暗闇を駆け、小川町へと向かった。あれ? よく考えたら彼の名前を聞いてない気が……まあ縁があればいずれまた会うこともあるだろう。

さて……先程は珠世さんを探すことは難しいと、そう言った。しかし『新しい拠点を購入する』という確信があれば、かなり情報は絞り込める。炭治郎くんと邂逅、鬼舞辻無惨の配下による襲撃、そのせいで彼女は潜伏先を変えざるを得なくなつた。そして人に紛れて生きる以上、家の購入方法は正式な手順を踏んでいる可能性が高い。

それを耀哉が人脈と直感を駆使し、かなり数を絞り込んだのだ。もう暫くもすれば確定できるだろうとのことだが、そんな悠長なことは言っていられない。

玉壺さんによる情報漏洩の結果、鬼舞辻無惨の『顔』の一つは特定できそうだと耀哉は言っていた。しかしグズグズしては勘づかれるかもしれないのだ。拙速にすべきか巧遅とすべきか……正解は解らないが、耀哉の命という期限がある以上、僕には前者の選択肢しかない。

だからこそ、僕も足を使って虱潰しに探っていたのだが——尻尾を掴めたのは実にありがたい。小川町付近で血の買取……男性が買う筈だった娘の住居……同業者の噂……出没の時間帯はマチマチ……帰る時は決まって『北』……耀哉が絞り込んだ百三十の物件……小川町の以北、三十キロ圏内で二つ。

「カアアア！」

「……！ お帰り、近松。どうだった？」

「湯島天満宮横、ハズレエ！」

「——そっか。じゃあ後は……ここだけだね」

「そうなの？」

「そうなの。さ、もう鳴き声は漏らさないようにね……夜中に鴉の声は警戒するだろうし」

「わかった……」

近松を懐に入れて、少し速度を緩めた。どんな異能があるかもわからないし、人外じみた速さで近付くのはまずいだろう。炭治郎くんに詳細を聞ければ助かったんだけど、今回の件に関して彼は一切関知していない。どうやら炭治郎くんの周囲には、姿の見えない猫が付きまわっているらしいのだ。たぶん珠世さんのことを問えば、すぐに伝わってしまうだろう——というのが耀哉の所見である。

「住所はこの辺だけ……ううん……助けてグーグルマップ先生……」  
なんと言っても大正時代。激動の時代であり、区画整理の頻度も凄まじいものがある。住所は『だいたい』で、あとは自力で探せて感じなのだ。しかも何かしらの血鬼術で建物を隠している可能性もあり、このままだと夜が明けても探索は難航するだろう。

あんまり使いたい手じゃないんだけど……仕方ないか。とりあえず伊之助の真似をして「空間識覚」……モドキを使用する。僕も彼と同じで山育ちだし、気配には敏感なのだ。とはいえあの技は伊之助の体質——超敏感肌に依るところが大きいので、僕が使っても同じようにはいかない。精度は精々が一割と言ったところだろう。

……だけど僕にだって『体質』はあるのだ。有効に使える場面はあんまりないけどね。

「近松、首飾り預かってて」

「ん……」

交換時以外で外すのは久々だ……って飲み込むんじゃないですか！ え？ 大丈夫？ いや、唾液でベチョベチョになるでしょ。まったく……まあいいけどさ。さて、あとは指先を針で刺して……と。ぷ

つりと皮膚に穴が空き、血液が玉のような形を作った。

——……後方、十五メートルで二人が反応した。血肉に飢えない鬼とはいえ、僕の稀血は強烈な誘引効果がある。多少の反応くらいはするだろうと当てにしていたが……間違いではなかったようだ。指先を口に含んで血を吸い取り、首飾りを付け直し……一足飛びで反応があった場所へ突撃した。おおよその位置しか掴めなかったが、後は勘だ。

「近松、上空から周囲見といて——あだっ!？」

「きやつ!？」

おそらくはこの空き地の向こうだろう——そう思って、少し先に見える塀ごと飛び越えようとジャンプする。しかし見えない何かにぶち当たり、思わず叫び声を上げてしまった。待て待て、なんでこんなところに孔明の罠があるんだ。スーパードアスカランドでも始まるのか？

ちよつと涙が出るほど頭が痛い……身長が何センチか縮んだんじゃないだろうか。不幸中の幸いと言えば、床に投げ出された際には大した衝撃がこなかったことだ。何か柔らかいものがクッションに……ん？

なんと、目の前に絶世の美女が……なるほど、勢い余って押し倒してしまったのか。まさか自分の身にラッキースケベが起こるとは、人生とはわからないものだ。しかしなんて美しい女性なんだろうか……しのぶちゃんに勝るとも劣らない。

「痛っ……失礼、ご無事ですか？ それと、歩く時はちゃんと前を見ましようね」

「は、はい……あ、あれ？ ここは私の家で……」

「それにしてもお美しい。よろしければお名前を伺っても？」

「は、はあ……珠世と申しますが……というか、その、どいて頂いても……」

「珠世様！ ご無事ですか——貴様アア！ 珠世様から離れろ！」

「——うわつと！」

危なっ。僕が一般人だったら割と危ない一撃だった気がするんで

すけど……いやまあ、姿を隠した屋敷の二階に、窓を突き破って飛び込んできた人間が普通とは思わないだろうけどさ。そういうえば『もう一人』いるらしいことは聞いてたけど、まさか少年だったとは。

「何者だ、お前は……」

「ああ、夜分に恐れ入ります。法務省の者ですが、実はこの家の登記に不正な処理が見られました……」

「ええっ!? で、ですが……正式に購入した筈で、その……」

「珠世様、落ち着いてください。確実に嘘です」

珠世さんの方も、しつかりしていて落ち着いた美女に見えるが……意外と天然らしい。少年の方が前に立ち、彼女を守るように僕を見据えている。うんうん、かつこいいぞ少年——ん? 待てよ……よく考えたら僕よりもずっと年上の可能性が高いのか。

シヨタ……シヨタジジイってことでもいいのだろうか。『ロリババア』の可愛い語感と比べて、なんか『シヨタジジイ』ってしっくりこないよね。

そういうえば珠世さんは相当にお年を召している筈だが、ロリではないからロリババアじゃない……どう言えばいいんだろう。何か他の特徴はないものか……うーん……鬼……鬼ババア? いや、それじゃただの悪口だ。

「では改めまして……鬼殺隊の協力者『飛鳥千里』と申します。鬼でありながら鬼舞辻無惨と敵対する珠世さんに、協力を仰ぎたいと産屋敷耀哉が申しております——どうか産屋敷邸にいらしてくださいませんか?」

「え……?」

「畏です、珠世様。今すぐ逃げましょう」

「畏ではありませんよ。もちろん証明しろと言われれば難しいですが……虎穴に入らずんば虎子を得ずとも言うでしょう? 鬼舞辻無惨の居場所が掴めそうな今、奴を殺す手段は多ければ多いほど良い。柱の一人に、鬼を殺す毒に精通している者がいます……あなたの知識と合わせれば、きっと良い結果が出ますよ」

「…… 鬼舞辻無惨の居場所が……」

「ええ。それに上弦の鬼も半壊しています。かつてない好機であるとご理解頂きたい」

「上弦が半壊……なるほど、最近になって鬼が増えているのは…」

「母数を増やし、十二鬼月に至る者を産み出そうとしているんですよね」

「…」

うーん、真面目に交渉をするのはいつぶりだろうか。ま、あんまりふざけると逃げられちゃうかもしれないね。珠世さんはこちらを疑いながらも、相当に揺れているようだ……それだけ鬼舞辻無惨を憎んでいるのだろう。その名を出した瞬間に噴き出した負の感情は、どの鬼殺隊員よりも大きく感じた。

そして少年の方——こちらはまったく僕を信用していない。珠世さんが迷ってさえいなければ、すぐにでも彼女を抱えて逃げ出しそうだ。めっちゃ睨んでくる……安心させるようにニコリと笑い返したら、シャーッと威嚇された。なんか猫みたい……ちなみ僕は猫派である。

「それに『人間化薬』の研究も進むかもしれない……あなた方も必要としているのでは？ 鬼舞辻無惨が死ねば全ての鬼も同時に滅ぶ可能性がある——その前に人間に戻る必要があるでしょう。私共は、一月以内に奴を倒す算段ですが」

「…今更、人間として生き永らえようなどと思っはけません。あれはあくまでも禰豆子さんのためです」

「…！」

「それに、おそらくですが呪いを外した者であれば…」

うーん、中々に難しいな……ずっとこちらを警戒している。炭治郎くんのようにはいかないか。『君ならきつと上手くやってくれるだろう』なんて耀哉に言われたけど、僕のコミュ力ってまずイーブンな関係あってこそなんだよね。敵対してる、警戒してる人間に対してはちよつと向いてない。

それに……そうだ、ちよつと急ぎすぎた。いきなり見ず知らずの人間——それも鬼を殺す組織から来た人間の頼みなど、どうして信用で



きるだろうか。まずはもう少し仲良くなることに重点を置こう。

「——鬼殺隊は鬼を憎んでいる者がほとんどですが、人を襲わない者を問答無用に殺したりはしな……する人もいますが、まあそれは置いていて」

「置くな」

「彌豆子ちゃんのこととは知っているでしょう？　少なくとも前例はあるとご理解頂きたい」

「…」

「私だつてそうです。あなた方が鬼だからといって、滅ぼすべきだとは思っていませんよ」

「言葉だけならなんとでも言えるだろう」

まあそれはそうか。となれば……僕の体質を踏まえて話をしてみよう。もう一度首飾りを外し、彼等の様子を窺う。これだけ近ければ、既に稀血だと解つてはいただろうが——消臭剤の効果が無くなれば、更に誘引効果は強くなる筈だ。

「…」

「私は稀血の中でも特に鬼を惹きつけます。異常な身体能力に生まれついていなければ、こんな年齢まで生きてはいられなかつたでしょう。つい最近、鬼殺隊の存在を知るまではまともな生活を送ることもできなかつた」

「…それでも、鬼を恨んでいないと？」

「直接襲つてきた鬼と、鬼舞辻無惨は恨んでいます。ですが……人間に襲われたからといって、人間全てを恨みますか？」

「ふん……胸の内ではどう思っているんだろうな」

「愈史郎、失礼ですよ」

「…疑うのであれば、どうぞ私の血を飲んでください。どうしようもなくあなた方を嫌悪しているならば、そんなことを出来はしない……それをもって証明とさせて頂きたい」

僕の言葉を聞いた二人は、流石に少し驚いたのか——軽く目を見開いた。貧しい人々から血を購入していると言うならば、味や栄養などきつと二の次だろう。食えば食うほど強くなるのが鬼と言うものだ

が、彼等からはあまり強さを感じない。

それこそが彼女達を信用する何よりの要因だが……僕の血であれば、少量でもパワーアップする可能性はある。取引としては上等だろうし、信用されたいのならばまずこちらが何かを差し出すべきだ。

僕は懐から針を取り出し、少しだけ唇を突き刺した。そして珠世さんに向かって唇を差し出し、瞳を閉じる。いわゆるキス待ちの格好である。

「死ねっ！」

「——目があああつ!? あ、危なっ……失明するところだったんですけど!? せっかく人が貴重な血を差し出したってのに！」

「情欲にまみれきつた穢れた血なんぞ誰が飲むか」

「愈史郎！ 言い過ぎです！」

「穢れた血だと……！ よくも——よくもそんなことを！ 許さないぞ

愈史フオイ！」

「愈史フオイ!？」

「珠世様に近付くな、下衆め」

ハーマイオニーに謝れ！ ……なんて言っている場合じゃないな。

珠世さんに対する愈史郎くんの愛が突き抜けすぎて、少々やりにくい。うーん……そうだ、将を射んと欲すれば先ず馬を射よつて言うじゃないか。きつと彼も血を飲みたかつたに違いない。私の血つたら、なんて罪深いのかしら。

「ごめんごめん、気遣いが足りなかったね。じゃあ愈史郎くんが先に飲んでいいよ……あ、指からね。指。やだ、期待させちゃったかしらぶげっ!？」

「俺と珠世様の間に入ってくるな」

「ぐうっ……大丈夫、僕は怒ってないとも。イエス・キリストはかつてこう言った……『右の頬を殴られたら左の頬を差し出せ』つてね。さあ、気が済むまで殴ればいい——痛いっ！」

「……次は右を出すんだろう？」

「もちろんさ。大丈夫、ほら怖くない……怯えていただけなんだよね——あばっ！」

「左」

「効かぬ、効かぬのだ…！——効くうっ！」

「右」

「繰り返す…：私は何度でも繰り返す——ぐふうっ…」

「左」

「あれ、これ無限ループというやつでは——えべっ！」

「右」

「もうやめて！ あなた！」

「左」

「——愈史郎！ やめなさい！」

「ですが珠世様…」

「止めるの遅くない？」

ほっぺたパンパンで、おたふく風邪みたいになっちゃったんですけど。いやまあ、鬼の力なら首を折ることもできるんだから、加減はしてるんだろうけどさ。しかし、いくらなんでもやりすぎではないだろうか…：僕だって聖人君子という訳じゃないんだ。流石にちよつとオコである。

「こうなりや力づくで飲ませてやるよ！ オラツ！ 啜えやがれ愈史郎！」

「——いだだだだっ!? 噛まないでっ！」

「ぺっ！」

「あーっ！ しかも吐き出した！ 数多の鬼が求めては死んでいった僕の血を…」

「ぺっ、ぺっ！」

「これ見よがしに！」

ぐぬう…：！ ここまで来たら、なにがなんでも飲ませたくない不思議。食べられたくないから逃げ続けていたのに、いったい何故こうなっているのだろうか。

「ふんぬう…：！」

「ぐっ…：!? なんだこの力は…！ お前、本当に人間か？」

「君は鬼なのに身体能力が低いみたいだねえ…：！」

「ぐ、ぐう…：！」

「へっへっへ……大人しく血を飲むんだなあ……！」

「あの、立場が逆になつていませんか……？」

あれ、そう言えばそうだな……そもそも何が目的だったんだっけ。ああそうだ、仲良くなるうとしてたんだった。うーん……まあ喧嘩するほど仲が良いって言うし、これもその範疇ということにしておう。掴んでいた腕を放し、無理やり握手する。

「喧嘩して仲直り……よーし、これで僕たちは友達だ——へぶっ!？」

「いったいなんなんだお前は……！」

「いやほら、敵じゃないってことを解つてほしくて」

「解つたのはお前が気色悪い奴だと言うことくらいだ」

「ちえっ……イケズだねえ、愈史郎は」

「気安く名前を呼ぶな」

うーむ、今までで最高の難敵だ。すぐに仲良くなるのは無理だなこれ……まあ多少は警戒心も緩んだっぽいし、時間をかければきっと友情も育めるだろう。珠世さんも珠世さんで疑念を緩めてくれたらしく、産屋敷邸へ向かうことを約束してくれた。よしよし、これで任務も達成だ。後は——

「カアアア!! カツ——」

…近松? 上空から周囲を警戒してってくれと頼んでいた筈だが……かつてない程に焦っている。こんなに取り乱した彼は初めて見た。物凄く嫌な予感がするんですけど。窓から入ってきた近松を両手で迎え、言葉を待つ。

「西方二キロ地点—— “上弦の壱” 出現! 一般隊士二接近中ウウ!!」

「……! 上弦の鬼か……なんて嫌なタイミング」

「……おそらく私の噂を聞きつけてきたのでしょう。そろそろ潮時だとは思っていましたが、予想よりも早い……いえ、鬼を増やせば配置外の『鬼の噂』は逆に目立つ——不覚でした」

「珠世さんを？」

「ええ。普通の鬼と違い、上弦の鬼は鬼舞辻無惨に直接命令を下されています。『産屋敷邸を発見し、滅ぼすこと』。『鬼殺隊と、その中核で

ある柱の抹殺』。そして……逃のがれ者である私の搜索。最後に『青い彼岸——』

「——話してる暇は無さそうなんでね。近松、珠世さんと愈史郎くんを案内してあげて。隊士との仲介もしつかりね……産屋敷の名において、二人を傷付けることは許さないって」

「カー……」

「……あなたは？」

「一般隊士が敵う相手じゃないだろうしね。対面する前に抱えて逃げられればいいんだけど……」

「人間を一人抱えて逃げられる訳ないだろうが。上弦の鬼を舐めるなよ」

「こう見えても上弦の伍を一人で倒してるのさ、僕は。逃げるくらいなら問題ないよ——なるべく時間は稼ぐから、君たちも早く逃げてほしい」

「……」

窓から飛び降り、西へと向かう。あのやり方で『倒した』と言うのはアレだが、二人を安心させる意味でも多少は誇張しておいた方がいいだろう。赤の他人のために命をかけるのは、正直僕の主義ではないのだが……助けられる誰かを見捨ててしまったら、後で皆の顔を真正面から見れる気がしない。命をかける理由なんてそれで充分だ。

月明かりを頼りに暗闇を駆ける……それにしても『上弦の壺』か。帯びた任務の関係上、仕方ないとは言え——流石に上弦に会いすぎじゃない？ これから会う壺に、参の数字を持つ猗窩座さん、伍の玉壺さんに、名も知らぬ陸の鬼さん。過半数超えてんですけど。

……ん？ あれか？ 凄まじい鬼気を纏った鬼と……それに恐怖し、膝を折ってしまっている隊士。どちらも刀を持っているが、もしかや上弦の壺って——元鬼殺の剣士か？ いや、とにかく今は隊士を助けることが先決だ。

「有難き血だ……一滴たりとて零すこと罷まかり成らぬ……」

「……っ……は、う……」

「零した時には……」

「…っ！」

「——お前の首と胴は泣き別れだ…」

「はっ、はい…」

「危なああい！ いま助けるぞおお！」

「はっ——…は？ ぐあっ!？」

颯爽と現れ、隊士を抱えながら転がる。気分は花嫁を奪う主人公だ……これで彼が美少女だったら良かったのだが、流石にそれは欲張りすぎか。兎にも角にも隊士を確保し、上弦から少し距離を取ることができた……ん？ なんか彼の手の平が真っ赤だ。なにやら地面にも血液が巻き散らかされている。

「あの御方の尊き血……零すこと罷り成らぬと……言った筈だ……それがお前の答えか…」

「ち、ちちっ、ちがっ——こっ、こいつが、こいつがああ！」

……えーと……ふむふむ……ほうほう……ははあ、ティンときた。命を見逃してもらう代わりに、鬼になるつもりだったのかこの子。

そんな隊士はそうそう居ない筈だが——とはいえ、責めるのは酷か。たった一つしかない命、何よりも優先してしまうのは人間の本能。むしろポンポンと投げ出す他の隊士が異常とすら言えるのだから。

「うっ、うわあああ!!」

「あ、ちよっ——」

止める間もなく逃げ出してしまった……が、それも仕方ないだろう。あんな化け物に殺気を向けられれば、逃げ出す以外の選択肢はない。

一瞬でも眼前の鬼から目を離せば、それが死ぬ時だと本能が訴えてくる。逃げ出した隊士に目をやる暇は、いくらもなかったのだ。むしろ彼を殺す気満々だった上弦の壱さんが、なぜ動かなかったのか気にかかる。あとめっちゃ僕の顔と体を見てくる。やらしい。

——このまま逃げ出すのは、おそらく可能だ。野生動物が敵の強さを本能的に測れるように、僕も相手が自分より速いかどうか……：……となく解るようになってきたから。

ただし、地面にへばりついている『鬼舞辻無惨の血』が、その選択を迷わせる。人間を鬼にできるのは鬼舞辻無惨のみ……そして鬼になろうとしていた彼があれを飲み干そうとしていたのだから、間違いなくそれだ。

珠世さんが持つ『血』のサンプルは、おそらく上弦の肆と陸のもの……炭治郎くんが採取して送ったその二つだろう。そしてしのぶちゃんが持つのは上弦の肆の血液のみ。僕も研究を手伝っているから解るが、血が濃いだけのものと、『そのもの』では全く異なるのだ。

地面に落ちている血を採取できれば——禰豆子ちゃんを人間に戻す薬も、上弦や鬼舞辻無惨に効果がある毒も、段違いに精度が増す筈だ。だからなんとしても手に入れるべきものなんだけど……そんなことを許してくれる相手には見えない。

しかしそのチャンスがあるとすれば今しかないのだ。僕を見てなにやら懐かしそうにしている、この瞬間だけが『隙』と呼べる最後の機会だ。そう、アレを懐の小瓶に入れるだけ、ただそれだけのこと――

「――がっ…!？」

「判断が……遅い……」

「痛っ……ぐっ……!」

……っ！ 避けた筈なのに……! いや、一応だけど目では追えた……通常の斬撃の他に、三日月型の刃が軌跡に纏い付いていたのだ。いやさ、エフエクトかと思うじゃん。エフエクトかと思うじゃん。なんであれだけ実際の刃なのさ。しかしまずい、まさか足に当たるとは……いや、あれは狙っていたな。本気でまずい状況だ。血は採れたが、僕が危ない感じ。

「その足では……もはや逃げることに叶わぬ……」

「……っ」

「花も折らず……実も取らず……欲をかいて身を滅ぼすか……」

「実は取ったさ。後は届けるだけだよ」

「それは叶わぬと……言った筈だ……」

動脈まではいってない……しかし『呼吸』という技術は、使用する

と血の巡りが速くなる。全速力で走るとなれば、失血死まで三十秒と  
いったところか。集中して傷口を閉じるのも、柱のみんなのように上  
手くはできない。そもそも怪我しない前提で立ち回ってるしなあ  
……多少時間をかければなんとかなるかもしれないが、それを待つて  
くれるようには見えない。

…いや待てよ？　なんか僕を見て色々と思うところがあつたよう  
な感じだったし、その辺の話を振ったら案外お喋りしてくれるかもし  
れない。彼もかなり長生きしてるんだろうし、お爺ちゃんというのは  
総じて長話が大好きなのだ。やってみる価値はある。それに、僕自身  
もなんだか――

「どこかで会ったことが……ありますか？　…あなたを見てみると、  
少し懐かしい気分になる」

「…名は……なんと……」

「飛鳥千里です」

「そうか……継国の名は……絶えたか……」

「……」

「だが……血は色濃く継いでいる……むしろ……肉体は極みに達して  
いるか……」

「えーと……」

「お前は……私が人間だった頃の……『継国』の子孫であろう……」

「つまり……お爺ちやま？」

「……」

見ただけで子孫って解るのは、どういうメカニズムなんだろうか。  
目が六つもあるから、その辺が関係してるのかな？　目が悪くなつた  
ら、メガネの調達に苦労することだろう。

まあでも――なんと云えばいいのか、僕も彼が血縁だというのを事  
実としてすんなり受け入れられる。血は水よりも濃いつてやつかな。  
「数百年……私自身を含め……それほど練り上げられた肉体を見たこ  
とはない……」

「はあ」

「特に脚部の異常発達は……興味深い……」



「あの、お爺ちやま。足太いの気にしてるから……ね？ あんまり言わないで」

「そうか……」

意外と付き合ってくれてるし、お爺ちやま優しい。このまま血縁のよしみで見逃してはくれないだろうか。無理かなあ……まあ無理だろうな。自力でなんとかするのは、正直なところ絶望的だ。だからといって増援を期待できる状況でもない。

希望があるとすれば——さっきの隊士の鴉が、伝令を飛ばしているかもしれないってくらいか。ただ、鴉も四六時中付いている訳じゃない。お爺ちやまと出会った時に鴉がいたかどうか……殺されていなかどうか……伝令が届いていたとして、間に合うのか……そしてそもそも、この人に勝てるのかどうか。

：僕は剣士じゃないから実際のところはわからないけど、お爺ちやまから感じる圧と、さっきの攻撃から考えると——少なくとも『5.5義勇』くらいは必要な気がする。もしかしたら、柱が勢揃いしないと倒せないかもしれない……そう思ってしまう、思わされてしまう雰囲気があるのだ。

「お爺ちやまは、なんで鬼になったんですか？」

「より高みへ近付くためだ……研鑽した力が、技術が失われる……私はそれを良しとしなかった……」

「……なんのために？ 力は手段であって、それそのものに意味があるとは思えません」

「戦わぬ者に……理解できる筈もない……」

「うーん、そう言われると弱いな……」

「宝の持ち腐れとは……お前のことだろう……至高の領域に至るであろう肉体……実に嘆かわしい」

「強さだけで人を測るのは、悲しいことです」

「議論する余地も無し……そろそろいいだろう……己が末裔との会話………思いの外しみじみと……感慨深きものであった」

「も、もう少しお話しませんか？ そうだ、お爺ちやまの上司の方のこととか！ きぶ、きぶ………なんでしたっけ」

「お前の詭弁に付き合う者は……もう居まい」

「あちやー、やつぱ共有されちやつてたか」

「あの御方の逆鱗に触れていなければ……お前を鬼とする道もあつたが……詮無きことか」

ふー……多少は回復したが、動けばすぐに傷は開くだろう。それにしても、お爺ちやまは僕の傷の具合を僕よりも把握してるようだ。目が特殊なのかな……？　なんか体の隅々まで見透かされているようで、ちよつと怖い。あと鬼舞辻無惨イライラでちよつと草。

——来る……！

「——『珠華ノ弄月』」

「……っ！」

「『常世孤月・無間』」

「つと、は、あ——ぐっ……！」

「見事……その足でまだ避けるか……『月龍輪尾』」

くそ、傷がもう開いた……だけど余力を残せるほど生易しい攻撃じゃない。刀を振るたびに巻き起こる月輪……それ自体も満ち欠けのように揺らぎ、効果範囲を曖昧にしている。鬼としてもほぼ頂点に位置し、剣士としても柱を凌駕する化け物……なんの冗談だ。

「はっ、あぐっ……！」

「——『兇変・天満織月』」

なん——っ個、型あるんだよ！　肥やし玉も気にしないし、ゴキ爆弾なんか一瞬で塵と化した。斬撃の度に手段が削り取られていく。猗窩座さんと二つしか数字が離れていないのに、実力が段違いだ。それに、技の効果範囲が異常すぎる。

「いっっ——ぐ、痛っ……！」

くそ、左足首……いや大丈夫だ、臆まではいっていない、まだ、まだだ。大上段からの振り下ろし、剣以外からの斬撃が三つ……大丈夫、大丈夫、大丈夫だ、僕は生き残る。みんなが戦う時、少しでも楽になるように型を把握しておこう……っ！　まずい、肩まで……あ——

「最後だ……『厭忌月・銷り』」

——まだだ、まだ死ねない。こんなところで死んでたまるか。耀哉の病気を治すんだ……炭治郎くんの寿命も、どうにかするって約束した。小芭内の手術だってまだ半端なんだ。守らなきゃいけない約束がいくつもある。死ねない、死にたくない。鬼舞辻無惨を倒して、本当の意味で夜明け前を手に入れるまで……!

「見苦しい……我が末裔ならば……生き恥を晒すな」

「はあつ、はつ、ぐつ——げうっ!」

「強靱な体とて……首を斬り落とせば生きていられまい……」

「ぐつ、こ、この……!」

「……然らばだ」

……ダメだ、もう避けられない。せめて鬼舞辻無惨の血だけはどうか届けたかったが、付け入る隙がなさすぎた。それどころか、こいつが僕を食べたら更に力が増してしまうだろう。

何かを紡ぐこともできず、ただただ迷惑だけ掛けてしまう。死にたくない……せめて大事な友達にさよならを言いたい。刃が迫る。死の軌跡が見える。命が……終わる。

——瞬間。轟、と傍らを熱い風が吹き抜けた。

「——玖の型　『煉獄』」

「……っ!?!」

「あ……」

炎に煽られた死の刃は大きく飛び退き、僕から離れていった。炎のような羽織が、僕を護るように目の前ではためている。

「仲間を巻き込めば……あるいは頸を斬れたやもしれぬ……お前は最大の好機を失ったのだ……」

「自らを礎いしずえにすることはあろうとも。友を斬る刃など——俺は持ち合わせていない!」

## 13話

杏寿郎……！　なんてカッコいい登場の仕方なんだ……！　物凄く嬉しくて頼もしい……頼もしいけど、お爺ちやまが相手だと考えれば、もはや柱が全員集合してもちよつと不安である。とはいえ、杏寿郎ならある程度は食い下がってくれるだろう。

一秒たりとも無駄にはできない——大きな傷口はぎっくり縫って、回復に努めよう。麻酔無しで縫合とか、死ぬほど痛いから嫌なだけ……死ぬよりはマシか。あと、なんだかお爺ちやまがまた懐かしそうにしておられる。

「今宵は……つくづく懐古の念が湧き立つものだ……お前達はいつ見ても変わらぬ……炎柱の血筋よ」

「…察するに、鬼殺隊を裏切った元剣士か。鬼となり生き永らえて得るものなど、いったいなんの価値がある」

「そうだそうだー。恥を知れ、恥を」

「それを理解できぬ事実こそが……弱者の証と知れ」

「Boo！ Boo！」

「継国の名も絶え……どれほど没落したのか……その品位なき野次……碌な生まれではあるまい……」

「いやあまつたく、先祖の顔が見てみたいぜ」

あ、ちよつとピキツたお爺ちやま。それにしてもまつたく、仲間が傍に居るこの安心感よ。一人だちよつとシリアスモードになったり暗い考えをしちやうものだ。効果的な煽りとは、こちらの余裕なくして生まれれないと言うのに。まだまだ余裕とは言えない状況だが、心に余裕はできた。やはり友達とは良いものである。

「炎柱は……道半ばにして剣を捨てる者が多い……お前はどうかだろうな……」

「俺の心が折れることはない。今までも——そしてこれからも！」

「——っ！」

「ちよつ、杏寿郎！　もうちよつと会話引き延ばせそうだったのに……！」

気炎を上げながらお爺ちやまへ剣を振る杏寿郎。瞬殺される程の実力差とは思わないが、いくらなんでも分が悪い気がする。柱に来て欲しかった状況ではあるものの、しかし杏寿郎には来て欲しくなかった——そんな側面があるのも事実だ。

性格的に、上弦の鬼を目の前にして逃走を選択できる柱は少ない。天元とかなら元忍者だけあって、退くべき時は退いてくれたと思うんだけど……いや、ないものねだりをしてもし方ないか。

それに、杏寿郎はたぶん柱の中でも上位の実力者だ。申し訳ないけど、しのぶちゃんとかだと時間稼ぎすら厳しいように思う。それを思えば、充分に運が向いてきたと言える。

…しかし回避だけに集中していればいい僕とは違って、杏寿郎は自分からも攻撃を仕掛けるのだ。その分、傷を負う可能性だって跳ね上がる。早く僕が動けるようにならないと……よし、傷口の縫合は済んだ。後は周囲の血管を繋ぐイメージで……ん？ 意外と善戦してるな杏寿郎。猥窩座さんの時より、格段に動きが良くなっている。

「痣を発現させた柱と見えるのは……いつ以来か……」

「杏寿郎ウー！ 痣出ちやってるよ!」

「……? 何のことだ?」

「胸部より首筋にかけて……炎型の痣が浮き出ているだろう」

「む……確かに! いったい何時の間!」

あ、戦闘が止まった。よしよし、そのまま時間を稼ぐんだ杏寿郎……じゃなくて! なんで出てんの!? くそ、痣者が一人出ると伝染するってのは真実だったのか。

ウイルスじゃないんだからやめてよね——それともシンクロニシティってやつだろうか。オカルティックなものは別にして、特定の状況下で、共鳴するように別個体の肉体が反応する現象は確かにある。

——だけど、そっか。杏寿郎がここまで強くなっているのなら、取る手段はもう一つある。というかたぶん、そっちの方が二人の生存確率は高いだろう。となれば早速準備だ……懐から注射器を取り出し、腕に打ち込む。

それはそうと、遂にお爺ちやまの『目』の秘密が解けた気がする。

さつきの僕の傷の然り、服で隠れている杏寿郎の痣を見抜いたこと然り、きつとあの目は『透視』を可能とするに違いない。そうなると、出会った時に僕の体をジロジロ見ていたことにも違う意味が出てくるな。ちよつとお、やだあ。

「お爺ちやま！ お爺ちやま！ ちよつと質問！」

「…なんだ」

「痣が出たら二十五歳で死ぬって本当ですか？」

「事実だ…私が鬼となった理由の一つに…それがあある」

「なにつ…！ なんともはや、衝撃の事実だ！」

衝撃の事実と言いながら、あんまりショック受けて無さそうなのがまたね。しかし長生きしてるだけあって、お爺ちやまの知恵袋は引き出しが多そうだ。葉が効き始めるまで少しかかりそうだし、時間を稼ぐついでに色々聞いておこう。

「何か回避する手段とかないですか？」

「無い…鬼となることが…唯一の手段だ」

「例外とかも？」

「…例外は…無い…」

めっちゃ間が空いたんですけど。めっちゃ間が空いたんですけど。どうやらお爺ちやまは嘘をつくのが苦手であられるようだ。まず間違いない、例外はあったと考えていいだろう。

それに…うーん…なんだろう…その『例外』に対しての複雑な想い…嫉妬、憎悪、嫌悪、怒り…ほとんどが負の念だけど、それだけじゃないな。ただ、赤の他人にこんな感情は絶対に抱かない筈だ。なら——

「なるほど、いるんですね。その例外の方…親しかったんですか？」

「…例外はないと…言った筈だ…」

「ふむふむ、親しくはないと…いや——断ち切れないのならむしろ…否が応でも見ずにはいられない存在…もしかして御身内の方ですか？ 兄上か弟御…ああ、後者か。やっとなが心が大きく揺らいだね」

「…！」

「弟に嫉妬する兄！ あはは、なるほどありがちだ」

「——黙れ」

「やだね。散々さんざんつばら甚振いたぶつてくれたし……僕は僕のやり方で仕返しするぜ、お爺ちやま。悪いけど、僕って敵には性格悪いから」

「…柱が一人増えた程度で……よくもそこまで調子に乗れるものだ……絶望的な状況は何一つ変わってはいまい」

「いや、仲間が来てくれたんだよ？ ……ま、孤独な鬼にはわからないか。上司が誰も信用しないクズだと、部下も染まっちゃうんだねえ」「過ぎた口は身を滅ぼすと……その身に刻んでやろう……炎柱が血に染まれば……希望が泡沫うたかたであつたと知るだろう」

「やだ、お爺ちやまつたら詩的」

…さて、切り口は『弟』か。あれ程の実力を持つお爺ちやまが嫉妬するような化け物なんて、ほんとにいるのか？

んん……炎柱手記から読み取れた鬼殺隊の歴史の一部……日の呼吸以外は全て紛い物だと言った慎寿郎さんの言葉……日の呼吸に適性がある炭治郎くんの体質……総合すれば、なんとなくお爺ちやまの過去も見えてくるな。

自分より遥かに強い実力を持つ存在、それが弟だった時の心境……痣が発現し、寿命が近付き、死を恐れた挙げ句に鬼となり……その果てに見たものは——死の運命を覆していた弟の姿。

恐れ、驚愕、嫉妬、虚無感……なんだろう、まるで自分の記憶のようにしっくりくる。推測でしかないと言うのに、それが事実であると僕は確信している。奇妙な感覚だ。

「なーんか違和感あると思つたら……そうか、お爺ちやまつて凄く人間臭いんだ」

「……」

「もう人間じゃないのにね。『私の血筋』だつて？ やめてよね。人間でいられなかった意気地なしの血なんて、僕には流れてないぜ。それに……もし僕に弟がいたら、きつと溺愛するさ」

「…黙れ」

「血筋にこだわる。子孫にこだわる。つまり自分と、自分の血筋の優

秀さを信じたことだよね。必死に自分へ言い聞かせてるみたい……もう人じゃないつてのに、劣等感丸出しでみつともないねえ」  
「黙れ……」

「さつき』どれだけ没落したのか』なんて言ってたから、つまり君は良いとこの生まれつてわけだ。家督を継ぐべき、優秀であるべき長男が、弟と比べて圧倒的に劣っていたら……くっ、ふふっ。昔が長男至上主義でよかったねえ」

「黙れと……言っている……!」

「憐れ憐れ——とつてもお勞いたわしい」

——ぞぶり、と……まるで重力が増したような圧が場に満ちる。身の毛もよだつ程の怒気が溢れ、お爺ちやまの表情が鬼の形相へと変化した。そして次の瞬間には、信じられない程の広範囲に斬撃が吹き荒れた。

速度も威力も更に増して……けれど、精彩を欠いている。心の乱れは技術の乱れ——剣士でない僕には、それがどれほど影響を及ぼすのかは不明だが、さつきより格段に避けやすいのは確かだ。

——今日は最初から選択肢を間違えてしまっていた。敵の実力を測り間違え、自分の実力を過信しすぎた。歴代の柱たちが敗れ去ってきた強大な鬼を前にして『僕の足なら逃げ切れる』なんて、どれだけ傲慢だったろうか。

隙について血を掠め取れるなんて、身の程知らずもいいところだった。上弦の伍を一人で相手取ったからという、そんな慢心に蝕まれていた。

だからもう油断しない。体中についたこの傷は慢心の対価だ。そして今から払うものこそが、この夜に僕が犯した失敗のツケだ。

もしかしたらこんなことはしなくていいのかもしれない。けれど、後悔は先に立たないと思いい知ったばかりなのだ。だからできること全てをやり尽くそう。

——患者が二十五歳で死ぬと言うなら、炭治郎くんのための研究は、十年近くの猶予があった。だけど今さつき杏寿郎が痣を出してしまったから、三年と少しでなんとかしなければならなくなった。そし



て今、一年と少しまで縮んだ……これが失態の埋め合わせ。甘んじて  
払おう。

「…っ！ …有り得ぬ……脚に痣など……！」

『呼吸の才能』に関して、僕は柱に劣っている。元々の身体能力がず  
ば抜けているからこそ、勝る部分も多いけれど。呼吸とは、肺に限界  
まで負荷をかけ、血液に対する酸素の保有量を大幅に上昇させる技術  
である。それを昇華させていくと、今度は心臓の機能が飛躍的に上が  
るのだ。

そうして血の巡りが速くなるにつれ、心拍数が人の限界ギリギリま  
で上昇し、次に体温が高くなっていく。要は車のエンジンと似たよう  
なものだ。

それが極みに達すると痣が発現する……炭治郎くんの体を診て、僕  
が出した結論だ。医学的に解明できない部分があるとすれば、『痣』そ  
のものが力を発揮させる点である。

技術の上昇が『力』となり、その証明が『痣』と言う訳ではないの  
だ。言い換えれば、痣を出しさえすればあらゆる身体機能が大幅に上  
昇するということになる。

とは言えそこに至るまでのプロセスは、どのみち呼吸の才能ありき  
になってしまう。体温、心拍数、血圧、そのどれもが死の一手手前で  
あり、その状態を維持する技術。

それを無意識に調節し、生存を可能にする技量を誇る者が『柱』、延  
いては痣を発現させる者の才能なのだろう。

——その領域に無理やり踏み込めないかと考え、理論上は可能であ  
ると僕は判断した。つまり、呼吸を使用している状態で『体温』『心拍  
数』『血圧』を痣者と同条件にすれば、同様の結果に繋がるといふ推測。  
それがいま証明された。

先程、僕が自身に投与したのは『β受容体遮断薬』と『アドレナリ  
ンβ刺激薬』である。交換神経を一部刺激、一部遮断し、カテコール  
アミンを調整する効果がある薬だ。要は心臓機能の強化、血管の収  
縮、それにおける脈拍の上昇、そして呼吸による血の巡りの激化を科  
学的に再現してみたのだ。

「さて、と……これでもう、誰も僕に追い付けない。じゃね、お爺ちやま」

「逃げられると……思っているのか……？」

「逆に聞くけど、この状態の僕に追いつけると思ってるの？」

一步。踏み込むと地面が大きく爆ぜた。杏寿郎を無理やり抱え、逃走の態勢に入る。一瞬だけ抵抗しようとした彼だが、ここでの衝突は敗北に直結すると判断したのだろう。すぐに身を任せてくれた。そして僕は杏寿郎の耳元にそつと口を寄せ、一言だけ告げる。

「さよなら、ご先祖様」

「……」

一步。たった一足で馬鹿げた距離を踏破できる確信が、今の僕にはあった。だから決めたのだ——ここでお爺ちやまを倒すと。傷は一応塞がったし、全速力も今なら出せる。けれど失った血と体力は、痣を出したからといって戻るものではないのだ。

夜明けまで逃げ続ける体力はないし、今の僕は血まみれだ。どれだけ距離を稼いだとしても、残り香は絶対に隠せない。

だからといって、こんな傷だらけの体で川なんかに入ろうものなら、シヨツク死する可能性だってある。正直なところ、距離を稼いだ時点で杏寿郎に血を託すのが、鬼殺隊にとつてはもつとも効率が良いとわかってる。

だけど、杏寿郎がそれを呑むとは思えないし……僕自身も、生き延びられるものなら生き延びたい。僕が死ぬと悲しんでくれる友達が、いっぱい出来たのだから。

それに今まで取った僕の行動と言動が、すべて布石になっている筈だ。お爺ちやまと出会ってからここまで、僕は一度たりとも攻撃を仕掛けたりはしていない。ずっと逃げ続けようとしていた。

——だから、この状況で僕が逃げないなんて、お爺ちやまは絶対に考えない。

「——っ!？」

剣の才能も格闘の才能もない僕だけ……実はたった一つだけ得意としている攻撃がある。初めて出会った時のしのぶちゃんも、初め

て出会った時の義勇も、これだけは回避できなかった絶技。

そう——かぶりつきタツクルである。なんとなくギャグ補正もありそうだし、僕が絶大な信頼を置く攻撃技なのだ。

「どっ……せええい!! 今だ杏寿——えっ……?」

全力でタツクルをかますから、きつと隙ができるであろうお爺ちやまの頸を斬ってほしい……それが杏寿郎へ伝えた言葉だ。だから僕は、たとえ斬られながらもしがみ続ける覚悟をしていた。だということに——ああ、こんなことってあるだろうか。

目の前で鮮血が噴き出す。内臓が飛び出し、脊柱がぬるりと引きずり出された。瞳に映った光景が、まったく信じられない。

……いくらなんでも、ここまで身体能力が上がるとは思っていないかった。タツクルを敢行した僕の両腕には、お爺ちやまのお腹から下がぶら下がっている。

グロ注意ってレベルじゃねえ。振り返ると、空中に上半身だけを残したお爺ちやまと目が合った……『は?』って感じの顔をしている。その気持ちわかる。

「——『壺ノ型』」

「……っ! 常世狐月——」

「『不知火』」

同時に振りかぶった刃が一閃——けれど、地を踏みしめられない状態で力が伝わる筈もなく——炎の煌めきが、月光の輝きを斬り払った。

お爺ちやまの首が、宙へと跳ね上がる……六つの瞳すべてが、自身の胸と下半身を見下ろしている。有り得ぬものが存在しているとでも言うように、ただただ驚愕だけを表情に貼り付けて。そして数秒ほど滞空した後、ドサリと地面に落ちた。

「ふへえ……やつと終わった。どうか安らかに、ご先祖様……ん?

——おああっ!」

「離れろ! 千里!」

「ちよっ、おま——頸切れたら死ななきやでしよ! お爺ちやま!」

あっ、下半身が走って行って上半身と合体を……! ちよっとシュー

ル。いや、そんなことを考えている場合ではない。そうだ、上弦の鬼はどいつもこいつも一癖あった。

単に頸を斬っただけでは死なない可能性も考えておくべきだったのだ。とりあえず今までであった例を参考にしてみよう。

「杏寿郎！ その辺にお爺ちやまの妹がいるかもしれない！」

「妹！」

「いや——もしかしたら小さいお爺ちやまが隠れてる可能性も！」

「小さい老人！」

「はっ……！ このお爺ちやまが四体のうちの一体つてことも……！」

「少し心が折れそうだ！」

「でも頑張ろう！」

「うむ！」

くっ——刀を振ってないのに三日月型の斬撃が体から……！ そうか、あれエフェクトじゃなくて血鬼術だったのか。しかしこの焦った心の動き……僕らを近付けさせないため、無茶苦茶に周囲を攻撃する姿……やっぱり頸は弱点なんじゃないか？ つまり、それをいま克服しようとしている状態ではなからうか。

「動きも鈍い！ 再生速度も落ちている！ 攻撃し続ければ——あるいは——」

「一番苦手なやつだよ！ っていうか武器とか無いし！」

うう、いまお爺ちやまは正気なのか？ まるで子供がぶんぶん腕を振り回しているような状態だ。でも首が少しずつ再生してるし……あ、上半身と下半身も完全に癒着した。しかし僕が攻撃というのも……いや、ここまで身体能力が上がればなんとかなる気がしてきた。

いや待て、そんな感じで調子に乗った結果がさっきの無様な姿だろう。だけど杏寿郎だけに任せつきりというのも……はっ！ お爺ちやまの無茶苦茶な攻撃で、大木が切れて丸太になっている……これなら技術もクソもない——離れたところからぶっ叩くだけだ。

「丸太が軽い……もう何も怖くない……！」

「……！ 右だ！」

「ぎゃああつ!? やっぱ回避に専念しないと無理！」

「むう……！　まずい、頭部が再生する……！」

「ああっ！　なんかお爺ちやまが怪獣みたいに……！」

　なんだかお爺ちやま、ドンドン人間から遠ざかっておられる。もしかしてゴジラ？　ゴジラになってしまうの？　背中からナマコみたいなの出てるんですけど。体もデコボコしてるし、気持ち悪い感じの角も生えてきた。目の焦点も合ってないし、本当にあれがお爺ちやまの望んだ『高み』なのか？

「…克……服した……もはや私は……誰にも負けぬ……！　…太陽の……光……以外……何者にも……！」

「……！　逃げろ、千里。俺が時間を稼ぐ」

「……」

「千里……」

　なんだろう、なんだろうこの感覚は。気持ち悪い。あの人の体がじゃない……心がだ。

　人の心は九分十分——どれ程の苦難を、幸せを重ねても『程度』というものがある。鬼だつてそこまでは変わらない筈なのに、あの人は違う。

　心に忌が積もって。消えずに澱んで。百年、二百年、三百年……泥のような感情が、溢れることもなく溜まり続けたのか。いつか死ぬ人間と違って、いつか消える人間と違って、消化できずにいる感情が幾重にも層をなせばこうなってしまうのか。

「あなたは……誰に負けたくなかつたんですか？」

「……！……！」

「そんな醜い化け物になつてまで。誰に勝ちたかつたんですか？」

「私……は……」

　動きが止まった彼の頸を、杏寿郎が刎ねた。けれどゆっくりと再生し始める。腕が、脚が、胴体が切断される。けれど死には至らない。化け物のような姿が——それがもう元の体なのだと言うように、再生を繰り返す。月の光に照らされた醜い体が、茫然と止まっていた。

　…彼はどうあつても憐れむような存在ではない。数多くの人から恨まれている、恨まれるべき存在だ。それなのに、顔を合わせた時の

あの懐かしい感覚が……僕の中の誰かの記憶が、あの人をどうしようもなく憐れんでいる。痛ましく想っている。

彼の弟として生まれ、兄の愛を信じ、わかりあえていると思いついてしまった誰かの記憶。兄の想いを何一つ理解できていなかったと悔い、剣士として何も成せなかったと嘆く『始まりの剣士』の記憶。すれ違うことしか出来なかった、悲しい兄弟の記憶。

「……なぜ強さを求めるんですか？　もう、剣すら持っていないのに」  
「……！」

「あなたは……いったい何者になりましたか……？」

「やめろ……！　……その顔で……その声で……私を憐れむな……！」

鍛えた技術を、強さを失いたくないと彼は言った。鍛練できる時間が残されていないから、鬼になったと彼は言った。本当にそうだったのだろうか。

刃を下ろした杏寿郎から刀を借り、微動だにしない鬼へと近付く。刀の柄を握り潰す程に力を込めると、刃が赤く染まった。

どうやればいいのか、何故かわかる。今の化け物じみた身体能力であれば、それができるのだとわかった。剣の振り方なんて解らないけど、これはきつとただの介錯かいしゃくだから。

——もう、彼の中には疑問と後悔しか残っていないから。

「……終わったよ、杏寿郎」

「……ああ」

彼が塵と化した場所を見ると、粗く削られた笛が遺されていた。鋭く切断され、酷く古ぼけているのに……ずっと懐に入れて持ち歩いていたのだろうか。

「本当は、あなたも——」

ああ、流石にくたびれた。血も流しすぎたし、体に無理をさせすぎた。緊張が解けたせいか、一気に疲労と痛みが襲ってくる。プツンと意識が途切れる直前に——杏寿郎の心配するような声が聞こえた気がした。

## 14話

——『千里さんは、なんで俺だけずっと“くん”付けなんですか?』



ボロボロに朽ちた家の前で、大きな石の上に座り込む。定期的にごへ来てはいるのだが、今回はもう半年近く間を置いただろうか。人が住まない家はすぐに傷むというが、それは事実らしい。三歳の頃に家を離れ、遠い山の中に適当な拠点を作り——もうここへ来る意味は何もない。それでも来てしまうのは……ああ、もう九歳になるとい

のに、我ながら未練がましいことだ。

『千里はすごいわねえ。まだ三つなのに、私よりもずっと速く走れちゃうの』

両親はとても良い人たちだった。現代人の基準からすると、あまり頭が良いとは言えなかったけれど。寺子屋で教育を受けることもなく、ましてや尋常小学校なんて存在すら知っているかも怪しい人たちだった。それでも、良い人たちだったのだ。

『未来の記憶とか、そういうのは私たちにはよくわからないけれど……きっと千里は前世で徳を積んだんだろうね』

幼くしてペラペラ喋っていたこととか、異常な身体能力だとか、そんなのは気にしない人たちだった。本来生まれてくる筈だった誰かの居場所を、もしかしたら僕が奪ってしまったのかもしれないと謝れば、悲しい顔をして怒ってくれる人たちだった。神様も仏様も一緒にたで、宗教や宗派の違いもわかっていなかったようだけど、とても信心深い人たちだった。

しかしいつからか僕が鬼に襲われるようになって……それから、色々と変わってしまった。今でこそ鬼からは逃げるようにしているし、遭遇が夜明けに近ければ畏にかけて炙り殺す時もある。だけど、それは僕が一人だからだ。家族がいた時は一人だけ逃げる訳にもいかなかったし、そうなれば必然的に戦いを強いられる。

金太郎か何かにも生まれってしまったのか——そのくらいに力も強かったから、夜明けまで鬼を殺し続けることもできた。そんな僕を見て、あの人たちはどういう心境だったのだろうか。決定的だったのはたぶん……鬼を陽の光以外で殺せないものかと、試行錯誤してしまっただろう。

人を食い殺そうとする化け物とはいえ。こちらが殺さなければ殺されるとはいえ。人の形によく似た鬼を、あらゆる方法で殺し続ける幼子がどう見えるかなんて、少し考えればわかることだった。

頸を斬ったり、磨り潰したり、燃やしたり。その場面だけを見れば、まさに悪鬼羅刹の所業だったに違いない。もしかしたら、あの人たちはその時初めて『生まれ変わり』なんてものの悍おそましさに気付いたの



かもしれない。

数日ほど留守にするといい残して、彼等は消えた。僕はできるだけ迷惑をかけないよう昼夜反転の生活をしていたから——翌朝、家に帰った時、愕然としたのを覚えている。およそ財産と言えるものが消え去り、家の中がガランとなっていた。調理道具や布団くらいだろうか、残っていたのは。

——仕方ない。こんな気持ち悪い子供、もつと早くに捨てられていて当たり前だったのだ。夜逃げのように……いや、夜逃げそのものか。そう、逃げられただけならまだマシだ。寝てる間に殺してしまおうとか、そんな風に思われなかっただけ救いなのかもしれない。

だけど……人間は落差に弱いのだ。捨てられるのを覚悟して自分の異常性を語った——その時に見放されたのなら、シヨックも少なかっただろう。だけどなまじつか良くしてくれたから、温かさを知ってしまったから、実際に捨てられたときに酷く苦しい思いをってしまった。

それからは少し離れた山で過ごし、偶にこの家を見に来ていた。もしかしたら帰ってきているかもなんて、とても未練がましく思いながら。体の成長も早かったから、七つの頃にはなんとか飛脚の仕事を受けることができた。もちろん、そんな小僧に依頼する奇特な人間は滅多にいなかったけれど、基本を山暮らしとしている身には小銭があれば十分だった。

飛脚の仕事をしていく内にわかったのは、東京付近を中心にして、地方に行けば行くほど鬼の出現頻度が減ることだ。もちろんまったく居ないということはないけれど、明らかに少ない。だけど、それでも生家から離れるのはなんとなく嫌だった。家を訪れる頻度も減つて、未練も少なくなったのに——それでも、だ。

ひとしきり家を眺めた後、椅子にしていた石から腰を上げる。今度はいつ来たくなるのか、自分でもわからない。既に自我が形成されている状態で生まれ落ちたのだから、普通の人間のように、親へ求める本能的な愛情は薄い筈なんだけど……やっぱり好きだったんだろうなあ、あの人たちを。

「…ん？」

「ひやつひゃ…うまそうな匂いがするかと思つたら、今日はついでるなあ…！ 稀血のガキが自分から来るなんてなあ…！」

「…そこ僕の家なんだけど。勝手に入らないでくれる？」

「ああ？ こんなボロ家に人が住んでる訳ねえだろお。ひひつ…！」

ほら、叩けば崩れつちまう。外よりやマシだから使つてやつてたがよお、もういらねえなあ——お前を食べばもつと強くなれるぜえ…！

良い餌場も奪えるからなあ…！」

「…」

扉が壊れた。壁が崩れた。大事な思い出が傷つけられた。こいつはいつたいたいなんなんだ？ 人を食おうとするのは、そういう種族だから仕方ないと思つてた。もちろん、捕食対象に返り討ちされることも含めて自然の摂理だ。僕がイノシシを食料にしようとして、逆に食い殺されるのと大して変わらない。だけど……だけど、今のはただの悪意でしかないだろう。

「おいガキ、聞いてんのか——がべつ!？」

「今日は…ちよつと気分が沈んでるんだ。逃げるのも億劫なくらい」

「ガッ——は？ ま、待て、なんだお前……ぎいつ！」

大人の胴よりも太い樹だつて蹴り倒せる、僕の脚だ。このまま成長すれば岩だつて蹴り碎けるだろう。鬼が怖いのは身体能力が化け物じみてるからであつて、あからさまに弱つちいこんな鬼……僕より弱い鬼なんて、逃げる必要もない。

それでも普段から逃走を選ぶのは、そもそも争いが苦手だから。そして会話の通じる相手を夜明けまで殺し続けるのが嫌だからだ。『一思いに殺してやる』という手段が取れない相手には、逃走以外に選択肢がない。

…まあこの程度の鬼なら、四肢をバラバラにして頭部を粉々にすれば夜明けまで再生できないだろう。本当に、最悪の気分だ。

家の近くへ置いたままにするのは憚はまかられたので、朝一番に日の当たる場所へ運んで砂利と混ぜておいた。異物が間にあると再生しにく

くなるのは把握済みだ。気分が晴れないままに、生家がある山を後にする。

——疲れたなあ。最近、何のために生きてるのかわからなくなってきた。



「おお、君か。随分と早かったじゃないか……いや早すぎない!? 本当にちゃんと届けてくれた!」

「ええ。返事も頂戴してきました」

「…ううむ、確かにあいつの字だ」

「ではこれで完了ということだ」

「あ、ああ……そうだ、これだけ短時間で配達してもらえるなら、知人の商家に紹介しても構わないが」

「お気持ちだけ有難く。あまり一つ所に留まれない事情がありました」

足の速さは、まだギリギリ金になる時代だ。僕の手速を知って正式に雇ってくれそうな人もそれなりにはいるが、基本的には断ることにしている。僕の何が鬼を惹き付けているか解らない以上、同じ場所に居続けるのも気が引けるし。ペこりとお辞儀をして、配達料を懐に収めた。

おじさんは早いと言ってくれたが、ちょうど生家が近かったこともあり、むしろ寄り道で遅くなっただけだ。あの鬼と遭遇していなけ

れば、朝には帰ってこれただろう。

もう太陽が真上に差し掛かっている……これから山を三つ超えて拠点に戻るとして、諸々を差し引いて睡眠時間は五時間とれるかどうか。気分が優れないだけに、なるべく寝ていたかったが——本当に忌々しい鬼だった。

暗澹あんたんたる心持ちで走り続けていると、一つ目の山が見えてきた。夜通し走り続けていたせい、少し息が切れてきた……既に人間の限界を超えている気もするが、そこは気にしないでおこう。山へ入って少し、適当な切り株を見つけたので休憩を取ることにした。先ほど買っておいた団子を頬張ると、かすかな甘さに口元が緩む。

山暮らしだと、いささか糖分が不足しがちになるのだ。暗い気持ち、を吹き飛ばすには、やっぱり甘味だろう。最後の一つを飲み込んで、竹筒の水を飲もうとしたところで——後ろから感じる気配に顔をしかめる。今日は本当に散々だ……実家は傷物にされるし、腹の立つ鬼に出会おうし、極めつけに山でクマさんとこんには。もしかして厄日かな。

背後から振り下ろされた右腕を軽く避け、そのまま飛び上がる。上手く血抜きをしても、熊肉は非常に臭いが——とりあえず味噌さえあればなんとか食えなくもない。少々デカイ獲物だが、脳天に蹴りを何発か食らわせれば、充分に仕留められるだろう。僕の蹴りは大木をもへし折ると言ったが……それでも一発で仕留めきれないのが、野生の獣の恐ろしいところである。

数トンものトラックに勢いよく轢かれても、平気で歩いたりするの  
が熊という動物だ。弱い鬼とかだと、普通に負ける奴だっているだろ  
う。

べらぼうに強い熊なんて熊ひぐまだけかと思っていたのだが、明治時代のツキノワグマはちよつと意味不明なほど強くて大きい。絶天狼抜刀牙でしか倒せなさそうな、巨大な熊も見たことがある。うん、やっぱり過去じゃなくて異世界な気がしてきた。

そうになると、北海道の熊はデフォルトが十メートル越えて可能性もあるな……試される大地すぎて少し笑える。おっと、考え事なんか

してたせいで死んでしまったらやり切れない。空中で思い切り脚を振りかぶり、そのまま脳天に振り下ろす——その直前、前方の茂みに隠れている二頭の小熊が視界に入った。

「あ……」

ここでこの熊を殺せば、小熊も親を失う……そんな事をふと思ってしまったせいで、脚の力が抜けてしまった。もちろんそんな隙が見逃される筈もなく、思い切り地面に叩き落とされた。爪だけはかろうじて当たらなかつたが、衝撃で肺の空気が全て吐き出される。くそ、自然界は弱肉強食……普段なら気にせず攻撃を続けてたのに。

家に帰ったせいで両親を思い返していたから。鬼憎しで、必要以上に苦しめて殺したから。理由をつけるならそんなところだろうか。迫る爪牙を見つめながら、なんとか回避しようと脚に力を込め……やっぱり面倒だ、なんて思ってしまった。

まったく人間関係が築けないとは言わないけど、この体質がある以上、誰かと深い仲になろうとは思えない。ずっと寂しい思いをして生き続ける意味はあるんだろうか。生来から……むしろ生前から樂觀的だったからこそ、数年もこんな生活に耐えられたけど。いつか報われるって信じてたけど。

…もう疲れた。

「——たどえ母熊であつても。すまないが、人を襲う獣は殺すことにしている」

目を瞑って最期の時を待っていると、こんな状況にまったく似つかわしくない、穏やかな声が耳に入る。思わず目を開くと、そこには頸と胸が泣き別れになった熊が倒れ伏していた。

そしてその亡骸の傍には、子供を背負った痩身の男が佇んでいる。ぱつと見でわかる程に、健康状態が悪い。だというのに、今まで見た誰よりも強く感じる……不思議な人だ。

「怪我はしていないか?」

「あ……はい、どうも」

「こんな山の中を、武器も持たずにうろつくものじゃない」

生き延びられたのか、あるいは死に損なつたのか。流石に自殺を考

えるほど病んではいけないので、惨めな人生はまだ続いてしまうようだ。もつと丁寧にお礼を言いたいのには、ほんの少しだけ『余計なことをしてくれた』なんて思ってしまった……自己嫌悪で眩暈が起きた。

「父……さん……」

「ああ、炭治郎。もう少しだけ我慢してくれ……すぐにお医者さんが診てくれるからな」

「うん……」

男性の背中側から、苦し気な声が聞こえる。三歳か四歳くらいの男の子だ……少し赤みがかった髪で、大事そうに背負われている。たぶん山に住居を構えている類の人種だろう。得てしてそういう人たちは、病にかかると自力で回復を待つものだが——病状が酷いのかもしれない。

「……病気ですか?」

「ああ、熱が下がらないんだ。急いでいるから、すまないけれど——」  
「少し診せてもらえますか?」

子供が何を言っているんだ……なんてことは言わずに、男の子を背中から下ろす男性。話が早くて助かる。辛そうにしている子供を切り株に座らせ、容体を診ていく。

額にあてられた布を剥がすと、少し膿んだ火傷痕が見て取れた。傷口の感じからして、ここ数日内に負ったものだろう。おそらく火傷を原因とした、軽度の感染症か。

「少し痛いけど、我慢してね」

「う……ん……」

「名前はなんて言うんだい?」

「炭……治郎……」

「わあ、いい名前だ」

会話で痛みを紛らわせてあげつつ、処置をする。山暮らしだと少しの傷口でも命取りになったりするから、消毒薬は常に持ち歩いているのだ。しかし薬は高いから少量しか購入できない……これで使い果たしてしまうけど、そこは仕方ないだろう。

「竹筒の水で傷口を洗い、消毒した後にアロエから自作した軟膏を塗る。カミツレを煎じた漢方薬モドキを解熱剤として飲ませれば、処置も完了だ。」

「家に消毒薬はありますか？」

「いや……情けない話だが、あまり裕福ではなくてね」

「では傷口にあてる布は、一度熱湯で消毒したものを使うようにしてください。それでも化膿するようなら、砂糖をすり鉢で細かくして、傷口に少量塗るようお願いします……もちろん、すり鉢も熱湯で煮沸を」

「ああ。ありがとう、助かったよ……君は医者なのかい？」

「……少し知識があるだけです」

……男性から漂う独特の匂い……たぶん、ガンを患っているんだろう。あんな動きができるくらいだし、そこまで進行はしていないようにだけど、転移する場所によっては余命数年といったところか。その割にはやせ細りすぎな気もするけど、おそらく元から病弱だったんだろう。なんにしても、僕が彼にしてやれることはもうない。

成人する前に父親を失うであろう男の子に、憐憫の情が沸き上がる……それともう一つ。ああ、本当に今日の僕はどうかしている。吐き気がする。自分の心の醜さにまいってしまいそうだ。同じ境遇の間ができることに……どこか暗い喜びを覚える自分がいる。

——口元を引き結んだ僕を見て、男の子は不安そうに手を伸ばしてきた。ああいけない、病気の子供を怖がらせてどうするんだ。

「お兄……さん……」

「怖がらなくて大丈夫だよ、炭治郎くん。すぐよくなるからね」

「ううん……お兄さんが……大丈夫かなって……すごく辛そうだから……そんな匂いがするから……」

「……っ」

……顔に……出ていただろうか？ いいや、出ていたとしても……こんな小さい子供が、自分だって苦しいだろうに……他人を気遣えるものなのか……？ 僕の両手を優しく包んで、安心させるように笑う男の子。こんな、立場が逆だろう。

——こんなに人から心配されたのは、いつ以来だろう。

「お兄さん……どこか痛いのか？」

誰かの体温を感じたのは何年ぶりだろう。透き通るように綺麗な瞳が、僕をまっすぐ見つめている。じわりじわりと心を蝕んでいた毒が、陽の光に照らされて消えていくような感覚……どうしてか視界がぼやけて、よく見えない。継り付くように小さい手を握りしめ、俯いていると——男性が優しく声をかけてきた。

「……よかつたら、家へくるかい？」

「いえ……でも……ありがとうございます」

たった二言三言を交わしただけなのに、見透かされている。誰かと一緒にいたいという気持ちや、家族が欲しいという気持ちが嗅ぎ取られているような気がする。裕福じゃないって言ったのに、どの誰とも知れない人間を迎え入れようとすることこんな人だから——子供も同じように育つんだろう。きつと彼の家はとても温かいに違いない……だから、なおさら一緒には行けない。

「タンパク質……お米よりも肉や魚を取るようにした方が、少しは持つと思います」

「……わかった。ありがとう」

「あまり、無理はされないように。今だってかなり苦しい筈です」

「妻が身重みおもでね。泣き言は言っていられないんだ」

僕の手を握ったまま、いつの間にか疲れて眠っていた男の子を、男性はよいせと担いで歩き出す。そんな彼の背中を見送って、僕もゆつくりと歩き出す。そうだ、泣き言なんて言っていられない。みんなそれぞれ事情があつて、その中で必死に生きているんだ。下を向いたまま歩いていれば、横に幸せがあつても気付かない。だから……もう少し、もう少しだけ頑張ってみよう。

——またね、炭治郎くん。



：懐かしい夢を見た。炭治郎さんと初めて会った時の夢。十何年も前の話だから、出会ってすぐには気付かなかったけど……彼は今も昔も僕の命の恩人だった。ちつとも変わらない優しさが、記憶にある幼い少年のまま——だから炭治郎くんだけはずっと“くん”を付けて呼んでしまう。

——いやあ、しかし危うく死ぬとこだったぜまったく。上弦の壱に会うのも予想外なら、それがご先祖様だったってのも驚きだ。まあ色々と思うところはあったが、決着はもうついたのだ。なんか謎の記憶が断片的にフラッシュバックしたが、もしかしてあれが『記憶の遺伝』ってやつだろうか。正直あんまり信じていなかったのだが、実体験を伴うと『なるほど』と唸ってしまう。

ともあれ、生き延びたことを喜ぼう。窓から見える太陽の角度からして、今は正午くらいだろうか。腹具合からして丸一日経っているとも思えないし、一晩明けただけかな。

炭治郎さんの体を見て知ってはいたが、やはり傷の治りが異常に早い。かなり大雑把に縫合した傷が、もう抜糸段階まで塞がりかけているのだ。というかめっちゃ綺麗に縫い直されてるな……外科に関しては、しのぶちゃんもここまで上手くない筈。となれば、おそらく――

「目が覚めたみたいですね。体の具合はどうですか？」

「珠世さああん！」

「きゃっ!? ひゃ、え、え……」

「痣が出て余命一年ちよいになったので！　どうか研究を手伝えばべっ！」

「珠世様に触るな抱きつくな縋り付くな殺すぞ」

見覚えのあるこの部屋は、おそらく産屋敷邸の離れだろう。実は一日以上寝込んでいた……なんてことがなければ、今日が柱合会議の日だ。無用な軋轢あつれきを避けるため、珠世さんたちはこっちに移されたところか。二人が無事に辿り着けて、僕としても嬉しい限りだ。

「…そうですか。あなたにも痣が…」

「ご先祖様は痣があっても長いこと生きてたみたいなんで、珠世さんは何か知りませんか？」

「ご先祖様、ですか？」

「ええ、継国なんちゃらって人です。上弦の壺の弟さんだったらしくて……ついでに僕もその血筋だったみたいで」

「——継国……！ ……もしや……『継国縁壺』、ですか……？」

「すみません、下の名前までは。ご存知ですか？」

「もう随分と昔、鬼舞辻無惨に従わされていた時に出会った剣士……あの方がいなければ、私の呪いが外れることもなかったでしょう」

「なるほど……つまり珠世さんは僕に多大なる恩がある——げふっ！」

「お前の先祖に、だ。そもそもその事実すら疑わしいがな」

「あのね、愈史郎。暴力だけでコミュニケーションを取るのはあんまり良くないよ。そういうのに慣れちゃうと、今度は好きな人にだってそんな態度をとるかもしれないし」

「俺が珠世様に暴力を振るう訳がないだろう！」

「えっ」

珠世さんが、愈史郎くんの言葉に目を見開いた。『好きな人うんぬん』という言葉に対して『俺が珠世様に暴力を振るうわけがない』という返答。つまり彼の好きな人は珠世さんということになる——いやまあ聞くまでもなかったけど。

しかしあんだだけ好き好きオーラ出してたのに気づいてなかったの……？ それはそれで、愈史郎くんがちよっと憐れである。というか長いこと男女が一緒にいれば、自然とそういう関係になるのが生物の本能というものだが……ふーむ……老化がないから子孫を残すための

本能が薄くなるのか…？ いや、鬼の特性を考えれば、そもそも妊娠しない可能性の方が高いか。

それはともかく、凄く微妙な雰囲気になったんだけど。どうしよう…いや、僕が悪い訳じゃないよね？ でも沈黙が痛い。

「…」

「…」

「…」

「…」

「——痛いっ！ だからなんで叩くの！」

「うるさい。お前が悪い」

「ちえっ…ひゅーひゅー！ ゆしろーはたまちゃんが好きなん——グエええ！」

ちよつと殺意の籠った感じで首を絞められた。こうなったら行くところまで行ってしまうとばかりに、クソガキムーブを試してみた所存であるが——悪手だったようだ。ギリギリと締め上げられて苦しい…しかしアヒル口で煽るのだけは忘れない。

他人の恋路とは、馬に蹴られながらも首を突っ込む価値があるのだ。まあ度を超すつもりはないけど、でも何十年も一緒にいて進展しない仲だとしたら、少しくらい突いてあげるのが優しさってものだろう。しかし酸欠で頭がボーっとしてきたな…ん？ 何やら部屋の扉が勢いよく開いた——

「…っ!？」

「——千里に何をしている、鬼め…！」

僕と愈史郎くんの間割って入ったのは、険しい形相をしたしのぶちゃんだ。剣を愈史郎くんに突き付けつつ、片腕で僕を引っ張りながら抱き込んだ。おっぱいが近い。

攻撃にまで至らなかつたのは、この二人が協力者だと耀哉に言い含められていたからだだろう。とはいえ普段のしのぶちゃんなら、こんな茶番なんかすぐに理解できた筈だ。彼女がもつとも憎む『鬼』の行動だったからこそ、冗談を冗談として捉えられなかつたのかもしれない。まあちよつと冗談の域を超えてたつてもあるか。

しかし本気で怒っているしのぶちゃんを見たのは初めてだが……『凛々しい』という言葉は、彼女のために存在しているんじゃないかと勘違いしそう。護ってもらっている状況を考えれば、気分はオタサーの姫である。

「やめて……！ 私のために争わないで……！」

「……」

「……」

うむ、二人とも呆れて矛を収めたようだ。しかし何故しのぶちゃんがこつちに……いや、おかしくはないか。そもそも僕が珠世さんに会いに行ったのは、しのぶちゃんと共同研究をしてもらうためだ。決戦もすぐそこに迫っている以上、顔合わせは早ければ早いほどいい。本格的に研究を開始するのは柱合会議の後になるだろうが、親交を深めておくに越したことはないだろう。

とりあえず緊迫した空気は緩んだし、僕もベッドから出ることにしよう。寝ている間に着替えさせられているが、もしや珠世さんがやってくれたのだろうか？ 起きていなかっただのが非常に悔やまれるというか、僕の一張羅がズタズタのボロボロかつ血まみれという無残な姿で、ベッドの横に置いてある。もう使い物にはならないだろうが、捨てるかどうかは僕に委ねてくれたらいい。

「…上弦の壱と戦闘になったと聞きました」

「いやあもう、成り行きとはいえ生きた心地しなかったぜ。心配した？」

「ええ、とても」

むむっ……！ なんと珍しい、しのぶちゃんがデレ要素を表に出した。まあ鎧烏の伝令って割と大雑把だから、『上弦の壱と戦闘』『負傷』とかのワードで心配してくれたんだろう。彼女の安堵の深さ、ほっとした心の動きを見れば、どれだけ心配をかけたのかわかると言うものだ。申し訳ないと思いつつも、ちよつと嬉しかったり。

「ふん……『逃げるくらいなら問題ない』だったか？ 随分な大言壮語だったようだが」

「はっはっは、返す言葉もないぜ」

「愈史郎！ …飛鳥さんは、私たちのために囹になってくださったんですよ」

「こいつが勝手に仲間を助けに行っただけです。それも、身の程も弁えずに」

「あのさ、僕はそういうの気にしないけど…しのぶちゃんの嫌ユシ感が高まるから、もうちょっと控えめに…」

「嫌ユシ感!？」

——前から思ってたけど、たまに入る珠世さんの可愛いツツコミがちよつと好きだったり。略してたまたまツツコミと呼んでおこう。

それはさておいて、しのぶちゃんと愈史郎くんの間に火花が散っている。たぶん僕の件を抜きにしても、こんな感じになったんじゃないかな。鬼への嫌悪感が隠しきれないしのぶちゃんに、その負の感情を読み取って苛立つ愈史郎くん。嫌悪感を自分に向けられるのはどうでもいいようだが、珠世さんへも向けていることが腹立たしいようだ。

「…それにしても、なぜ逃げなかつたんですか？」

「やー、出会い頭で脚に一撃もらっちゃってさ…ん？ あれ、なにか忘れてるような…」

「あなたが攻撃に当たる姿自体、想像できませんが…むしろそんな状態でよく勝てましたね。煉獄さんも一緒だったとは聞いていますが、それでも信じられない成果——」

「…っ！ 上弦の壺を倒しただと…？ 命からがら逃げ帰ってきたんじゃないのか」

「…そんなことも知らずに千里を罵倒していたんですか」

しのぶちゃんのボルテージが上がっていく。うーん…普段なら気にも留めないことや、さらつと聞き流すようなことにさえも突っかかっていく。

やはりどうしても憎悪が沸き立ってしまうのだろうか。僕は鬼に肉親を殺された訳じゃないから、想像はできても共感はできない…諫めるにしても、ちよつと気が引けてしまう。なにより、しのぶちゃん自身がどうにか自制しようと頑張っているのだ。頑張っている人

に『頑張つて』と言うのはよろしくない。

しかし何か忘れていている気がするな……そもそも何のためにここまで頑張つたんだっけ？　しのぶちゃんの言う通り、逃げるだけなら充分に可能だったような——あっ！

「に、荷物……は全部切り刻まれたんだった。そうだ、袖口に……」

「……？」

「ほっ……良かった、ちゃんとあつた」

「それは……？」

「鬼舞辻無惨の血液だよ。これがあれば禰豆子ちゃんを人間に戻す薬も、上弦や無惨に効く毒も作れるだろ？」

「……っ！　それは——本当ですか!？」

驚く珠世さんも美しいな……あつ！　しまった、もつと溜めつつ満を持して言おうと思つていたのに。ドヤ顔の用意もできてない……いやまあ、充分に驚いてくれてはいるけども。なんかこう、もつと『これ、なーんだ?』とか『オイオイオイ愈史郎。これを見てもそんな口が叩けるのか?』とか言いたかつた。なにさらつと出してるんだ僕は。

「これ、なーんだ?」

「いま言いませんでしたか!？」

「たまちちゃんって結構いいツツコミするよね」

「たまちちゃん!？」

「——千里。あなたは……」

「おっと、待つんだしのぶちゃん。愛の告白なら、もつと良いシチュエーションを——」

「……そのために、死にかけてたんですか?　そうでもなければ、先程も言つたように……あなたが怪我をするとは到底思えません」

「あー……うん、そんな感じ。というかしのぶちゃん、もう少しこう……喜んでほしいというか何というか。『キヤー！　素敵!』くらいは言つてもバチは当たらないと思うんだけど」

「あなたは……剣士ではないでしょう……！　……命をかけてまで戦う必要はありません!」

ちよつとお怒りしのぶちゃん。うーむ……僕が少年だったら『なんだよ！ 素直に褒められねーのかよ！』とか言っちゃいそうなセリフである。もちろんそんな未熟な感性は持ち合わせていないし、しのぶちゃんの心配を理解できないほど鈍感でもない。しかし何と云うか……意外と好かれてたのかな……？ 嬉しい限りである。

「ほらほら、しのぶちゃん。心配してくれるのは嬉しいけど、『隠』の人だって隊士と同じように遺書とか書いてるんだぜ？ 僕だって同じさ。いざって時の覚悟くらいはしてるよ」

「ですが、あなたはあくまでも外部の協……いえ……そう、ですね……失礼しました」

「どうかさ、自分の体に毒まで仕込んでる人間が言うセリフじゃないよね。今の」

「……！」

「ま、もうすり替えてたのには気付いてたみたいだけど。それでも偽の薬を飲み続けてたのって、僕に心配かけないようにするためだろ？

気遣いはお互い様ってやつさ」

「う……」

「だから、この話はこれでお仕舞い。『僕は、君が自分を大切にしてくれるようになって嬉しい』」

「……『私は、あなたが無事でいてくれてよかった』」

「そうそう。これでなんのわだかまりもなしさ」

「ふふっ……ええ、そうですね」

「最後に二人は幸せなキスをして終了——いだだだだっ!? あれ、なんか凄く良い感じだったのに……」

ふう……やっとしてのぶちゃんの雰囲気是和らいだ。仇敵である鬼との共同研究、そして僕の安否と、色々と張り詰めるものがあつたんだろう。珠世さんと愈史郎くんも、空気を読んで黙っていてくれたようでも有難い。というか、愈史郎くんの僕を見る目が割とマシになっている。

「……おい」

「人を呼ぶ時はちゃんと名前で呼ぼうぜ。なんだい？ 愈史郎」

「さっきの言葉は撤回してやる。よくやった」

「すつゝい偉そう…」

まあでも、褒めてくれただけで大きな進歩だ。とにかく状況も落ち着いたようなので、ある程度の情報を共有しておくとしよう。さつき珠世さんが言った『鬼舞辻無惨に従っていた時』というのも気になるし。

ふむふむ……今も昔も、鬼舞辻無惨は陽の光の克服を目的にしていると。薬学の知識があつた珠世さんを側に置き、研究を手伝わせていた。

そんな折に出会つたのが、僕のご先祖様だったらしい。いつだって傲岸不遜な無惨が、僕の大叔父様に瞬殺されかけたその時だけは、恥も外聞もなく逃げ出したらしい。珠世さんの語り口が凄く生き生きとしていたので、とても嬉しかった様子がうかがえる。

しかしなるほど、お爺ちやまが嫉妬するだけのことはある。お爺ちやまより強いであろう鬼舞辻無惨……そんな化け物を更に圧倒できる大叔父様は、いったいどうなってるんだ。

いや、待てよ？ そんなやべえ人の血筋だからこそ、僕も割と化け物じみているのか。長年の謎が解けてすつきりである。お爺ちやまの最後の言葉を思えば、顔も似てるんだろうし。

『そういえば顔立ちがよく似ています』とは珠世さんの言だが、なぜ最初に気付かなかつたのだろうか。そう思つて疑問を口に出すと『あまりにも印象が違つていたので…』との回答を頂いた。誉め言葉かと思つてお礼を言うと、何故か目をそらされた。

ちなみに耀哉の予想は当たつていたようで、鬼舞辻無惨は頸を斬られても死ななかつたようだ。それどころか、自分から体を弾けさせて千以上もの破片となつて逃げ、その過半数を斬られても死ななかつたらしい。どこから突つ込めばいいのかよくわからない話である。

それと珠世さんは、薬ができたなら無惨と刺し違えて死ぬつもりらしい。愈史郎くんと違って、彼女は少なくとも数の人間を食つた過去があるそうだ。自分に生きる資格など無いと考えつつも、ただただ無惨を殺すためだけに生き続け、それが叶えばどちらにしろ自死を選ぶ覚



悟だったと。なるほど……しかし悪いが、そんなの看過できない。

「鬼舞辻無惨が滅べば自分も死を選ぶ……？　——貴女は何もわかつちやいない」

「……っ！」

「患者の寿命問題をなんとかしないとさあ！　僕がいの一番に死ぬんだよ！　手伝ってたまちやああん！」

「きやあああつ?!」

「——ぐべえっ！」

「いま殺してやろうか？」

「ぐふっ……いや、本当に切実な問題なんだってば。たまちゃんほど医の道に長く携わってる人なんていないでしょ？　だから生きるか死ぬかを考えるより先に、僕を救うために研究を手伝ってほしい」

「……」

「そう、僕のために生きる珠世——おぐうっ！」

「ええ、そうです」

あ、愈史郎くんとしてのぶちゃんの間にあつた壁がちよつと薄くなつた。何かシンパシーを感じたのだろうか。まあ珠世さんも頷いてくれたことだし、とりあえずよしとしよう。

…夫と息子を食い殺し、赤の他人を食い殺し、どれだけの後悔が彼女を苛んだのか……僕には想像もできない。生き続けることそのものが、彼女にとって地獄に等しいのかもしれない。それでも僕は医者として、自殺を選ぶ人間を見過ごすなんてできやしない。

だから短い間だけど『生きる理由』を無理やり作ってもらつた。とはいえ僕にできるのは精々これぐらいだから、後は愈史郎くん任せよう。愛する人に死んでほしい人間なんて、いやしないのだ。声を届かせるまでの猶予はできたし……彼女を生き地獄から引つ張りあげられる存在がいるとすれば、きっと彼だけだろう。

「あと決戦は晴れの昼日中だから、たまちゃんも愈史郎も出てこれないと思うけど」

「えっ」

ガンとシヨックを受ける珠世さん。いや、こっちから仕掛けるのに夜を選ぶとか有り得ないと思います。

もちろん、昼は誰も知らない場所に隠れているとかだったら話は別だが、基本的に無惨は人として生活をしているらしい。それなら、日中とはいえまったく姿を現さないってことはない筈だ。『皮膚病』だとか言っただけに外に出ない理由を作れば、疑われることなく人の生活も送れるだろうし。

「とうにかまあ、できれば柱が出動する事態も避けたいんだけどね……」  
「……もう何か算段を立てているんですか？」

「うーん……まだ完全に居場所を把握してる訳じゃないから、それ次第かな。理想は建物ごと爆破して陽の元に引きずり出すとかだよ。二の矢があるとすれば、この血から作られる毒。三の矢が柱って形になるんじゃないかな……なんせ頸斬っても死なないらしいし」  
「なるほど……」

「問題は血鬼術で逃げられる可能性が高そうってことかな……本人が配下か知らないけど、瞬間的に移動できる手段を持つてみたいだし。いくら陽の光で死ぬって言っても、やっぱり強い鬼ほど死ぬまで時間がかかるだろうから……その間に発動されないための手段もどうにか——」

「最初に太陽の下に出せば問題はない筈だ。陽が照っている場所で、血鬼術を発動できる鬼はいない……空間系の術なら尚更にな」  
「そうなの？」

うーん、珠世さんたちが仲間になってくれたおかげで色々と捗るな。鬼殺隊側では知りえなかった、あるいは曖昧だった情報もほとんど正確になっていく。そんな感じで喧々諤々と議論を交わしていると、なにやらしのぶちゃんがいよいよと袖を引つ張ってきた。可愛い。

あ、そろそろ柱合会議の時間か……本来は柱と耀哉だけの集まりだけど、僕も参加させてもらうことになっているのだ。まあ会議の本質は『情報共有』なんだから、出席も当然と言えば当然である。たぶん耀哉や輝利哉くんを除くと、鬼殺隊の情報を一番知っているのが僕だ

……そう考えると、余計に無茶した事実を申し訳なく思う。

鬼舞辻無惨の頭が無残だったから事なきを得たが、殺害よりも捕縛を優先されていたらかなりやばかった。いくらなんでも、拷問に耐えられるような訓練は受けてないし。

……まあ反省はし過ぎても毒だ。教訓にして次に活かそう。とりあえず無惨の血液を珠世さんに託し、僕たちは離れを後にした。

新しい着物やら羽織やらを頂戴し、そのままぐるっと周って母屋の入り口へ向かうと、ちょうど義勇の到着とかち合った。相変わらぬ素っ気ない感じではあったが、最初に出た言葉が『無事だったか…』だったので、ちよつと感動。しかし肩をバシバシ叩くと振り払われた。

「やー、遂にこの日が来たね義勇。ちゃんと練習はしてきた？」

「…へーい」

「…っ!? くっ、く、ふっ…!」

義勇の『へーい』を見て、体をくの字に折り曲げて吹き出すしのぶちゃん。そんな反応に気をよくしたのか、義勇は口角をニヤリと持ち上げたが……今のは笑わせたというより、笑われたというのが正しい気がする。とはいえ、あの義勇が仲間に進み寄り姿勢を見せているのだ。これはもう、月面着陸並の大きい一歩である。

予定の時間までまだ少しあるが、柱は全員しつかり者だ。おそらくもう集まっているだろう。そのまま三人で部屋へ向かい、廊下を進む。そして途中でピタリと止まった義勇は、腕で僕としのぶちゃんを手で制した。なるほど、三人で入っちゃうと『へーい』の印象も薄れちゃうか。しかしどれだけ『へーい』に信頼を置いているのだろうか。部屋の手前数メートルで僕ら二人は止まり、義勇の動向を見守る。一呼吸の間を置いた後、彼は部屋の中へ消えていった。足音を立てないように、二人でこっそりと部屋に近づく。というかさっきの笑いが抜けきっていないのか、しのぶちゃんはまだ肩を震わせたままだ。

——さて、どうなるかな。耳をそばだてて、と…

『…へーい』

『あア? なんだテメえ……いきなりご挨拶だなア、オイ。馬鹿にし

てんのかア?』

『…っ! ぐうつ、ふつ、くつ…!』

『キヤーツ!? 伊黒さん、どうしたの!?』

『富岡殿が自分から挨拶とは珍しい! 息災のようで何よりだ!』

『うわあ…』

『おい時透…: 言いたいことはわかるが、口に出すな』

『はい、宇随さん』

『顔にも出すな』

…しのぶちゃんに僕にしがみつきのながら、それでも我慢できずに床へ崩れ落ちた。こんなに笑い上戸だったかな、この娘。まあ大人びてはいるがまだ十八歳だ。箸が転がってもおかしい年頃と考えれば、むしろ健全である。

とりあえず彼女の背中をさすりつつ、部屋の様子をちらつと窺う。すると義勇と目が合い…: 『話が違う』みたいな雰囲気で見まされた。いや、僕のせいなの? …仕方ないなあ、手本を見せればいいんですよ。手本を。

「へーい! みんな元気だったー? 僕は死にかけたぜ!」

「千里! …: 怪我は大事だいじないか?」

「うん、程ほどに…: 杏寿郎が途中まで背負ってくれたって聞いたぜ。ありがとね…: そっちの怪我は大丈夫?」

「うむ! 何故かわからんが、妙に治りが早くてな」

「わあ、わあ! 無事で良かったあ! 大怪我したって聞いて、私すっごく心配で…」

「あれ、蜜璃ちゃんまた可愛くなつた?」

「ひやつ…:! ぞ、そんな可愛いだなんて…: キヤーツ!」

おおう、みんな寄ってきた。なんて友達がいのある友人たちなんだ…: 義勇が『何故だ』という表情をしているが、何故もなにも、君がコミュニケーションを怠ってきた結果だと思うの。ムムと口元を真一文字にしている彼から目をそらし、心配そうな顔をして寄ってきた無一郎の頭を撫でる。

——不意に、お爺ちやまと出会った瞬間のあの感覚が沸き起こつ

た。そうか、そういうえばこの子も『始まりの剣士』の子孫だってあまねさんが言ってたな。前に会った時はそんな感覚しなかったんだけど……お爺ちやまのせいで変なスイツチ入っちゃったのかな？

「千里……大丈夫だった？」

「やー、あんまり大丈夫じゃなかったけど、なんとか生き延びたよ。僕らの血筋に決着もつけてきたぜ」

「僕らの……？」

「そそ。上弦の壱の弟さんが『始まりの呼吸』の使い手だったみたいでさ。僕もその血を引いてたつぽくて……無一郎とは遠い親戚ってことになるのかな？」

「……！ そ、そうなんだ……千里と親戚……」

「オイ待てエ。『そうなんだ……』で済ます情報じゃねえだろが」

「そうだ、鬼舞辻無惨を倒したら一緒に暮らす？ たった二人の血縁だしね」

「い、いいの……？」

「聞けやア！」

「実弥さあ……もつとかけるべき言葉があるだろ？ 『無事でよかつたぜなア……』とか」

「誰の真似だボケエ……！」

「また生きて再会できた、こんな時こそハイタッチさ。ほらほら！」

「しねえよ」

「ちえつ、イケズだなあ……」

「……チツ」

……ん？ わお、拳を軽く突き出された。俗に言うフィストバンプ、グータッチってやつだ。いつのまにそんなハイカラなコミュニケーションを覚えたんだらう。しかし正面からではなく、面倒くさそうに裏拳を出してくるあたりが彼らしい。コツンと合わせると、実弥の口元が少しだけ緩んだ。彼とは偶に甘味処の名店巡りをする仲だが、表には出さずとも友情は感じていくれたらしい。ちよつと感動。

さて、次は小芭内か……普段と見分けが付かない程度だが、心配する素振りが見て取れた——のがついさつきまでの話。僕が蜜璃ちや

んと仲良く話していたせいとか、ちょっと拗ねてるような気がする。と  
いうか一瞬だけ殺気を感じたし、僕が友達でもなければ実力行使で排  
除されていたに違いない。

ちなみに小芭内が蜜璃ちゃんにホの字なのは、柱の性別を全て把握  
した時点で自ずと知れた。以前の会話で柱の中に好きな人がいるの  
は知っていたし、尚且なわかつしのぶちゃんではないってことも解明されて  
いる。そして僕が会ったことのない岩柱さんは男性らしいから、消去  
法で蜜璃ちゃんになるという訳だ。

「小芭内は元氣してた？」

「…ああ」

「傷はもう大丈夫？」

「…ああ」

「口元、隠さなくなったんだね。そっちの方がカッコいいぜ」

「…ああ」

「蜜璃ちゃんのこと好き？」

「…ああ………——っ!？」

「わひゃっ!! え、え、え……!」

刀鍛冶の里でお泊り中、蜜璃ちゃんとは恋バナで盛り上がったの  
で、彼女の意中の相手は把握済みである。はつきり名前を口に出した  
訳ではないが、『伊黒さんと一緒にご飯を食べる時が一番ドキドキす  
るの……!』なんて言っていたのだ。これで好きじゃなかったら、とん  
だビッチである。

普段はこんなキューピッドと言う名のお節介オバサンみたいな真  
似はしないのだが、この二人つて外から何かしないと、死ぬまでくっ  
つかなさそうだし。主に小芭内のせいだ。

「さてと、あと挨拶してないのは……」

「爆弾だけ落として放置かお前……」

「天元! わー、元氣だった？」

「おかげさまでな。しっかりお前……くっつ、どんだけ上弦に会うつ  
もりだ?」

「ほんとにねえ。鬼を惹きつけるのは昔からだけど、こう……稀血つ

てこと以外でもなんかあるのかなあ……」

「ま、なんにしても無事でよかったじゃねえか」

「うん、心配してくれてありがとね……あ、そうそう！ 前に教えてもらった変装術！ 見事に義勇を騙せたぜ」

「あの精度で騙せたのか……さっきの挨拶もそうだが、アイツ大丈夫か？」

「……」

「しっ……！ そういうのは本人のいないところで言うのが礼儀でしょ！」

「ん、ああ……悪い……いやちよつと待て、お前の方が失礼だろ」

「ほつねんとこちらを見ている義勇。しかしここで『みんなー！ 義勇が仲良くなりたいたいんだって！』とか言うほど僕は無粋じゃない。そもそも対人関係の根幹とは、自分で作るものだ。何かしらの事情ですれ違っているなら、さつきみたいにお節介も焼くが——今回はまず『元』となるものがない。そこは自分で頑張らないとね。」

「さ、じゃあ皆で小芭内と蜜璃ちゃんしゅうげんの祝言を祝うためにも——鬼舞辻無惨を倒すための計画を煮詰めないとね」

「やつ、や、や、その、あのっ……！」

「……おい。甘露寺を困らせるな」

「えっ!? そ、そんな困るだなんてことは……」

「んん、コホン……『伊黒さんと一緒にご飯を食べる時が一番ドキドキするのー!』」

「ひゃあああ！ やめっ、やめてええ！」

「っ……！」

顔から火が出そうなほど真っ赤になっている蜜璃ちゃんに、耳まで朱に染まって俯く小芭内。微笑ましいというのは、正にこんな二人を指すのだろう。問題があるとすれば、彼らを見て微笑ましそうにしているのが杏寿郎としてのぶちゃんだけってとこくらいだろうか。そういうとこだぞ、他の四人。

「千里。計画を煮詰めるのは結構なことですが、悲鳴嶼さんがまだいらしていませんよ。それにお館様も」

「耀哉は絶対安静だから、今日はあまねさんが進行役だよ。あれ以上無理すると、治るものも治らなくなるし」

「…お館様の容態はどうなってるんだア？」

「点滴……あ……栄養状態の改善で、だいぶ進行は抑えられたけど——根本的には解決してないね。望みがあるとすれば、やっぱり鬼舞辻無惨を倒すことかな…」

内臓機能が衰弱したせいで、経口摂取での栄養補給が困難になってしまっているのだ。『呪い』があるとして、それに対抗しているのは耀哉の体である。栄養が取れなくなれば、余計に悪循環が進むのは当然の話だ。実際問題、ここ最近の進行具合は洒落にならないレベルだった。

『点滴』という概念は大正時代にもあったが、一般的でもなければ大して有用であるとも認知されていなかった。原理は簡単だし、器具もそう複雑なものではないから自作してみたが……もうちょっと早く用意するべきだったと後悔している。まだ起き上がれるくらいには元気なのが救いだらう。

「…ならば、一刻も早く無惨を倒さねばなるまい！ お館様の身命が我らの手に委ねられたと言うなら、是非もなし！ 邁進するのみだ！」

「まったくもってその通りさ。それで——ああそうだ、岩柱さんがまだなんだった。あまねさんは、たぶん時間ちようどに来ると思うけど…」

「いつもは一番に来てるんだがな……珍しいこともあるもんだ」

「最近鬼の出現頻度が高まっていますし……悲鳴嶼さんのことですから、きつとギリギリまで任務を続けていたんでしよう」

「まったくよオ、うじゃうじゃとそこかしこに居やがるからなア…！」

ゴキブリの方がまだマシだぜエ」

「実弥！　しのぶちゃんに失礼だろ——いだだだだっ！　ぼ、僕は君のためを思って…」

「蟲の呼吸にゴキブリは含まれていませんよ？」

くっ……差別だ。ゴキブリ差別だ。いま地球に存在する生物で、



もつとも生存と繁栄に適した生物と言っても過言ではないのに。まあ僕も嫌いだけどさ。

しかし聞く限りでは凄く真面目な人のようだが、大丈夫かな岩柱さん。柱ともなれば、滅多なことで殺されることはないだろうが……ここ半年、上弦の鬼の出張りっぷりは凄いからな。お爺ちやままで負けて激怒した鬼舞辻無惨が、猗窩座さんと上弦の弐を組ませて柱を襲わせるなんてこともないとは言えない。

「ちよつと心配だし、確認してくるよ」

「確認……ですか？」

「鎧烏と『隠』の連絡網、知ってる人少ないしね」

まあ倒したとはいえ上弦が出現したから、また変わってるかもだけど。どつちにしろまた把握しとかなきやだし、詰める情報が多くてやんなつちやうぜ。怪我の痛みにも顔をしかめながら部屋の衾を開けると、目の前にジャイアントな大男が立っていた。ホラーかな？

僕も百九十センチはあるというのに、そんな僕より三十センチくらいは高い。そして右手に誰かを抱えている……その人の首がぐらりと動いて顔が見えると、右頬がリングゴのように腫れ上がっていた。ちよつとギャグテイスト。

しかし男性の拳には血液が少量ながら付着している。なるほど、つまり……つまり——

「人殺しいい！」

……あ、よく見たらお爺ちやまに殺されかけてた隊士だ。

## 15話

生きているのかも怪しいほど顔が腫れた隊士……そんなものを抱えている大男。しかも拳に血が付着しているとすれば、もう『人殺しいい!』と叫ぶのも仕方ないだろう。しかしそんな僕の反応を見て、彼は懐から数珠を取り出し、じやりじやりと擦りながら涙を流し始めた。いや、もう……いや……え? 理解が追いつかないけど、僕が悪いのかな。

「え、ええと……」

「殺してはいない……」

「は、はあ……」

「君が飛鳥千里か」

「そうですけど……」

物理的にも精神的にも『圧』が凄い。気圧されるとは、正にこのことだろう。いやもう、熊のような大男がいきなり涙を流し始めたら誰でもこうなると思うの。後ろで『さすが悲鳴嶋さん』とか『千里が押されているな』とか聞こえるけど、君らは僕のことをどう思ってるんだ。

「ええと……初めまして、飛鳥千里と申します。あなたが悲鳴嶋さんですか?」

「悲鳴嶋行冥だ……よろしく頼む」

「ええ、こちらこそ。ところでその隊士は……?」

「ま、また涙を流し始めた……くっ、ペースを乱されっぱなしだ。何か一発芸でもすれば、この劣勢を覆すことができるだろうか。そう思って鼻眼鏡を懐から取り出そうとしたが、そういえば着物を新調したんだ。アイテムに頼れないこの状況……センスが試される場面である。」

……と、思っただけで少し悩んだのだが、悲鳴嶋さんが訥々と経緯を語り始めたので大人しく耳を傾けることにした。ふむふむ……こちらへ向かっている最中に古ぼけた御堂の横を通り過ぎようとしたら、変な気

配がしたので中に入って確認してみた。

そこにはガタガタと体を震わせているこの隊士さんがいて……ほうほう。事情を聞こうとしたら『俺を殺しにきたのか!』とか『俺は悪くねえ!』とか『鬼になろうとして何が悪い! 死んだらそこで終わりなんだ!』とか叫びだしたので、とりあえず殴って気絶させたらしい。

いや、何も殴らなくても……え? 時間がなかった? まあ確かに放置したままにはできないだろうし、裏切り者と言って差し支えない彼を、意識があるまま産屋敷邸に連れてくるのも問題か。というか話を聞くに、裏切りの剣士のことは誰も把握していなかったようだ。うーん……あ、そっか。彼がお爺ちやまに出会ってすぐ鴉が飛んだとして……その後の光景を見たのは僕だけだ。その僕がさつきまで意識を失っていたんだから、誰も知っている筈がなかった。

とはいえ、彼側からすればそんなこと知る由もない。となれば、お爺ちやまに脅されたから鬼側にも行けず、鬼殺隊側からも裏切り者として追われていると勘違いしたんだろう。

「おいおい、悲鳴嶼さんよ。そんな奴をここに連れてくるのはちよつと迂闊じゃねえか?」

「ああ? 別に問題ねえだろうが……腹切って詫びさせて仕舞いだ、仕舞い。鬼になろうなんてクソ野郎、介錯する価値もねえけどなア」  
「ちよつとちよつと、実弥。除隊は当然だろうけど、それは酷すぎない? そもそも未遂で終わってるんだし、上弦の壺と出会って『死か鬼か』なんて状況になったら、死にたくないと思っちゃうのも仕方ないよ」

「上弦の壺イ? ……説明しろやア、煉獄」

「俺が到着した時には、既に千里と上弦の鬼は戦闘に入っていた! その隊士については、俺の与り知るところではない!」

あれを戦闘中と言ってくれる、杏寿郎の気遣いよ。しかしどうしたものか……いやまあ、ありのままを話すしかないんだけどさ。生まれた時代の違いって、こういうところで感じるよね。

『侍』が消え、近代に入りつつあるとはいえ、腹を切ることで責任を

取るという観念はまだ現役だ。『そんなのありえない』という感覚は、第二次世界大戦後の話だろう。

「えーつと……なんて言えばいいかな。僕も最初から見てた訳じゃないから、詳しくはわからないけど……まあ上弦の壺と運悪く出会っちゃって、鬼になるって命乞いしたんじやないかな。もちろん、なりたくてなろうとした訳じやないだろうけど」

「だからなんだってんだア？ 未遂で終わろうが終わるまいが、鬼になろうとした隊士なんざ死んで当然だろうが」

「隊士の資格なし、つてことでしょ？ じゃあもう鬼殺の剣士じやないわけだ。一般人の生き死にを僕らが決めるなんて、そんなの烏漕おこがましいよ」

「示しがつかねえ、つってんだろが。鬼殺の剣士になった時点で、テメエの命なんざ捨ててるも同然なんだよオ。それが土壇場で怖くなっただア？ 巫山戯ふざけんのも大概にしとけや」

「死の恐怖なんて、いざその状況にならないと実感できないもんさ。それにみんながみんな鬼憎しで鬼殺隊に入ってる訳じやないんだよ、実弥。孤児だとか、飢えてどうしようもないとか、そんな子たちだって少数だけどいるじやないか。死にたくないから鬼殺隊に入ったってことは、死にたくなくて鬼になろうつてのもあり得るだろ」

「ハッ、死にたくねえから鬼殺隊に入ろうなんざ——端はなっから間違つてんだろがよオ」

「ならそういう子への間口を広げてる側にだって、多少の責任はあるんじゃないの？ そりゃあ覚悟のない人間が剣士にならないために、段階は踏んでるよ。呼吸を覚えるだけでも大変だし、それを乗り越えただって入隊試験がある。生きるためだけに剣士になろうとした子なんて、九割以上はそこで消えるさ。変に才能があつたせいでそこを突破しても、剣士を続けてたら、鬼との戦いが割に合わないなんてすぐ気付く。気付く間もなく死んじやう子だっているだろうし」

「…何が言いてえんだア？」

「命をかけられない剣士が、ごく少数とはいえ上にあがれる仕組み——そこにも責任の一端はあるんじゃない？ もちろん完璧な仕組み

なんて存在しないし、違うやり方があるかって言ったら無いけどさ……でも全部が全部、彼の責任つてのはおかしいんじゃないかって話。あの子がどういう経緯で鬼殺隊に入ったかは知らないし、裏切ろうとした報いは受けさせるべきだと思うけど、それが『命』つて点には同意しかねるね」

「…そいつはお前を見捨てて逃げたんだろがア。庇う価値なんざ微塵もねえよ」

「実弥。誰かの罪を問おうとする場合、私情を入れるのは厳禁だよ。もし君が君の都合だけで、主観だけで彼を殺すつて言うなら……自分都合で人を食う鬼と何が違うつてのさ——痛っ……！」

「殺すぞテメエ……！」

「——罪を問うなら、功も問うべきだろ。どれだけ彼が利己的な人間だとしても、鬼殺の剣士だった以上……救われた人間が絶対にいるじゃないか。たった一度の失敗がそれを覆すのかい？ そりやあ世の中、取り返しのつかない過ちだってあるさ。だけどその子は結果的に何もしてないし、今回の件が命でしか償えないほどの失敗だなんて、僕にはどうしても思えない」

「テメエがどう思おうと知ったこっちゃねえよ。刀も持つてねえ奴が正論並べて聖人氣取りかア……？ 気楽なもんだなア、オイ……！」

『命』だよ？ 無くなつたらそれで終わりなんだ……かけがえのない大切なものだろ！ 君だって、そんな大切なものを奪われたから——だから剣士になったんじゃないのか！ 軽々しく『腹切つて詫びさせる』なんて、それこそふざけるな——！」

「上等だテメエ……！」

「け、喧嘩はダメだよ！ 二人とも落ち着いて——」

実弥が拳に力を込めた瞬間——耳をつんざくような破裂音が響いた。空気が強く震え、銃声のような音が室内に反響する。どうやら悲鳴さんが両の手を強く打ち鳴らしたようだ……まるで雷が落ちたような衝撃と共に、僕は床の上を転げまわった。いや、のたうち回ったという方が正しい。何故なら耳のほぼ真横で音がしたからだ。

「——耳があああ!! こまつ、鼓膜破れっ……!？」

「せ、千里……大丈夫ですか…？」

「…すまない」

ちよつと加減を間違えた、とでも言うように涙を流す悲鳴嶼さん。やたらと泣く人だけど、ぜんぶ本気の涙だから怒るに怒れない。しかし耳が痛いな……鼓膜は破れていないようだが、左耳はしばらく麻痺して聞こえないだろう。さつきから調子を外されっぱなしで、めっちゃ敗北感。

——とはいえ、先程の発言を改める気は一切ない。あの子の罪が許せないと言うなら、珠世さんの罪だつて咎めないとおかしいだろう。過ちを犯しかけた人間が死ぬべきだと言うなら、多くの人を食い殺した彼女の罪なんて、何百回地獄に落ちようとも許されないことになる。

何百年も人を治療し続け、少しずつ少しずつ罪を雪いで、新たな被害者を作らないため鬼舞辻無惨を滅ぼすことに心血を注ぎ、最後は自ら果てる心積もりだった彼女。そんな人でさえ永遠に許されないなんて、僕にはどうしても思えない。

「不死川……お前は何をここにへ来た」

「…っ……はい、すみません」

「飛鳥千里……鬼殺隊は夥しい数の死者の上に成り立つ組織だ。多数が死ぬと理解しているながらも過酷な試練を隊士に課し、若き命を浪費させている……だがそれ故に鬼殺隊は今なお健在でいられるのだ。一般的な価値観を当て嵌めようとするのは、そもそも間違ではないか」

「…はい、すみません」

「だが慈悲の心もまた尊いものだ……忘れるべきではない」

「…！ ……ありがとうございます。実弥もごめんね、ちよつと熱くなっちゃつて」

「…」

「うん、僕も許してあげる」

「何も言っただけだよボケエ！」

「喧嘩して仲直りするほど、友情って強くなるもんさ。あらやだ、そろ

そろ親友って感じ?」

「勝手に言つとけや」

「やったぜ。みんなあー! 実弥が僕の親友でいいってえー!! ——  
ぐええっ! 勝手に言えって言ったのに…」

「叫べとは言つてねえだろがア…」

ふう……危ない危ない、空気を悪くしてしまうところだった。いや悪くなったけど、ある程度は戻っただろう。価値観の違いとは、やはり厄介なものである。悲鳴嶋さんが言ったように、情けや甘さを優先してしまえば、鬼殺隊はすぐに消滅してしまうだろう。だからと言つて僕の主張が間違つているとは思わないけど、難しいものだ。

「悲鳴嶋さん。その隊士は、そのままにするおつもりですか? 会議の内容を聞かせるのも問題があるかと」

「目の届かぬところで覚醒した場合……私達以外に取り押さえられる者がいない。縛るだけでは不安が残る……階級は乙きのと——元鳴柱の継子だと、鏖鴉が言っていた」

「おいおい、それでその醜態かよ。嘆かわしいこつた」

「そういえば音の呼吸って雷の呼吸が元だっけ? ということは天元の責任問題に…」

「おい待て」

「だが悲鳴嶋殿、会議中に目が覚めた場合はどうされるおつもりか」

「うむ……起きる度に気絶させるべきか…」

「そ、それだと死んじやいませんか? 私も、その、殺すのはあんまりよくないんじやないかと…」

「しのぶちゃん、睡眠薬とか持つてない?」

「いえ、流石に持ち歩いては……先程の離れにでしたら、確かあつた筈です」

「じゃあ僕が取つてくるよ。縄は僕が持つてるから、誰か縛つといて——ん…」

あ、たぶん目を覚ましたな……気配が変わった。僕が気付いたということは、皆も気が付いただろう。しかし起き上がる気配はない——周囲の様子を窺いつつ、隙を見て逃走するつもりだろうか。

でも皆めっちゃ見てるしなあ……まさか柱に囲まれてるとは、彼も思うまい。当然だが刀は取り上げられてるし、如何ともし難い状況だろう。

——あ、飛び起きて衾へ一直線に向かった……仕方ない、僕が取り押さえよう。実弥や小芭内だとそのまま斬りかねないし、悲鳴嶼さんはさつき言ったように殴って気絶させそうだし。

「……っ！」

「ほら、殺したりしないから落ち着いて」

「ぐっ、がっ……！」

回復が早まるから、痣を出したままにしておいて良かった。自転車の乗り方や逆上がりのやり方と一緒に、一回発現させてしまえば感覚は体が覚えてくれていた……もう薬に頼る必要はなさそうだ。その辺に関しては炭治郎くんよりも才能があるらしい。

まあお爺ちやまとたまちゃんの話を総合すると、発現した時期にかかわらず二十五歳で死ぬみたいだし、出せば出すほど寿命が縮まるものではなさそうだ。出し惜しみする技能ではないと考えていいだろう。というか、始まりの剣士たちは常に出っぱなしだったみたいだし。

それはさておき、先に縛っておくでしょう。炭治郎くんの時も然り、何故か産屋敷邸には荒縄が常備されているのだ。もしかしたら耀哉の趣味なのかもしれない。

藻掻く彼を抑えながら、芋虫のようにぐるぐる巻きにしていく……階級が乙だつて言うなら、力もそれ相応だろうし。縄の一、二本程度ならぶちつと引き千切れるのが上級の剣士である。

——そんな僕の行動を見て、天元が呆れたように声をかけてきた。

「もうお前、柱でよくないか？　どんな速度だ今の」

「いやいや、鬼の頸を斬れない人間が柱だなんてそんな……」

「千里。もしかして喧嘩売ってます？」

「頸を斬れねえだア？　上弦の壱は——千里よオ、テメエが斬ったつて聞いたがなア」



「そりやあ相手に生きる気がなかったしね。杏寿郎に一度斬られた時点で、もう勝負は着いてたよ。僕はお爺ちやまの介錯をしてあげただけさ」

「——とはいえ、俺の剣では殺しきれなかった。なぜ千里が振るった刃で死んだのか、目下のところ気になっているのだが！」

「近いよ。杏寿郎、近い」

「ちよつと待てやア。頸を斬っても生きてただと？」

「報告を聞いていないのか不死川。上弦はただ頸を斬っただけでは死なない鬼もいる」

「だが伊黒殿。あの鬼は純粹に頸の弱点を克服したように見えたが……」

「鬼舞辻無惨は頸を斬っても死なないって話だから、上弦の上位ならあり得るんじゃない？ 残った式と参に関しても、その可能性は視野に入れとくべきだね」

「んだとオ……！ どこ情報だオイ」

「そりやあ、たま——……」

「……？」

「たま……あー……たまたま、小耳に挟んでさ」

「挟んでたまるかボケエ」

「まあ無惨の首に関してはそのうちのことだし、前々から耀哉もそう言ってる……ん？」

縛り終わった彼を床に転がすと、まるで恐怖を押し殺すように喉を鳴らした。ようやく柱に囲まれている事実を認識したのか——と思っただけ、彼の目は一点に集中したまま動いていない。悲鳴嶼さんの顔を見たまま凍り付いたように、あり得ないものを見たように唇を震わせている。

……ん？ 二人の顔を見比べていて気付いたのだが……悲鳴嶼さんってもしかして盲目？ いや……ないよな。心眼で戦うなんてのは、創作だけの話である。気配や音だけで鬼と渡り合うなんて、ティンバーとローチンの人じゃあるまいし……いやいやいや。嘘だろ？

「なっ……なんで、なんで生きて……ひっ……！」

それにしても、二人は知り合いだったのかな？ でも殴られる前にも会ったんじゃない？……ああ、古びた御堂で見つけたって言ったな。光源なんかある訳ないし、彼からは鬼殺の剣士ってことぐらいしか判らなかつたんだろう。

しかし『なんで生きて』とは穏やかじゃないな。かつて崖から突き落とされたとか、生き埋めにしたとかだろうか。ううむ、サスペンスの気配がしてきた。

「う、恨んでるのか！ 俺を！」

「…」

「あいつらが、あいつらが悪いんだ…！ ちょっと金をくすねたくらいで俺を追い出そうとして…！」

「…！」

「逃げればよかっただろ…！ 全員バラバラに逃げれば、二、三人くらいは生き延びられただろうが…！ 武器を取りに行くだの、人を呼びに行くだの…！ 足りてねえんだよ頭が！ そうだ、あんたが…！ あんたが真っ先に逃げてりや、あいつらだつて死ななかつたんだ——げうっ！？」

自分から心証を悪くしていくスタイルは頼むからやめてくれ。せつかく人が庇おうとしているのに、台無しってレベルじゃないんですけど。話せば話すほど切腹ルートにまつしぐらつて感じだったので、とりあえず殴って気絶させたが…！ 悲鳴嶼さんがまた涙を流している。ただ、なんて言えばいいんだろう——悲しみだけでは…！ ないように見える。

「そうか…！ あの子たちは…！ 私を守ろうとしていたのか…！」

ボロボロと涙を零す彼に近付いて、その肩にそつと両手を置くのぶちやん。他の皆に視線を向けても首を振るばかりだったので、どうやら詳しい事情を知っているのは彼女だけらしい。とはいえここで問うのも不躰ぶしつけだろうし、人の過去なんて不用意に触れるものではない。

「この隊士の処遇は…！ 私が預かる…！ 元より裁くために連れてきた訳ではない」

…あの子の言葉はただただ責任を認めず、それを転嫁するだけの酷い有り様だったけど——それでも悲鳴嶼さんにとっては、何か救われる事実があったのだろう。それだけでも、お爺ちやまから彼を助けた甲斐があったというものだ。

「失礼致します……え……？」

と、そんな状況の中であまねさんが部屋に入ってきた。後ろには女の子の装いをした輝利哉くんもいて、これで場が一気に華やかになったと言えるだろう。男児が一定の年齢まで女装をするってのは、古い仕来たりを持つ家だとよく聞く話だけど——あの子は似合いですぎだと思ふの。

二人して整った顔であるが、今は揃って困惑の表情を見せている。まあ隊士が一人縛られていて、柱が涙を流していれば戸惑うのも当然か……とりあえず先に挨拶をしておこう。

「お久しぶりです、あまねさん」

「二日前にもお会いしませんでしたか？」

「いやあ、たった二日で益々お美しくなられて。無一郎がまるでカバの精だと褒めていましたよ」

「僕、白樺しらかばの精って言ったような……」

「ああ、それにしても——前回の柱合会議より、誰一人欠けることなくこの日を迎えられた事実、我がことのように嬉しく存じます」

「テメエこの前はいなかっただろうが」

「この飛鳥千里、彼等をまとめる者としてこれほど喜ばしいことはありません」

「千里にまとめられた覚えはありませんが」

「甘露寺蜜璃、そして伊黒小芭内の両名に付きましたは、比翼連理ひよくれんりの仲に至ったことをご報告いたしま——」

「わきやああつ！ あーっ！ あーっ！」

「…っ！」

「前口上はここまでにして、そろそろ本題に入りましょうか。柱の貴重な時間を、無駄に消費するべきではない」

「誰のせいだ、誰の」

僕たちのやり取りを見て、輝利哉くんがくつくつと笑った。耀哉の容態が思わしくもないのもあって、既に当主としての覚悟を決めているようだが——それでもまだ八歳の男の子だ。

これで張り詰めたものが少しでも緩んでくれれば、多少なり気が休まるだろう。ハツとして真顔に戻ったが、皆の視線を感じて少し顔を赤くしているのが微笑ましい。

悲鳴嶋さんも落ち着いたようだし、そろそろいいだろう。いつのまにかしのぶちゃんも睡眠薬を取ってきてくれたので、隊士の子に飲ませた後、本格的に会議は始まった。

ここ半年での十二鬼月討伐実績、その確認と共有。痣が発現する条件、そしてデメリット。鬼の増加に伴う被害の増加、隊士の減少、その対抗措置。

それと珠世さんとの会話で判明した諸々……こちらは情報源についてかなり訝しがられたが、だいたいお爺ちゃまのせいにしておいた。『口の軽い間抜けな鬼だ』などと言われていたが、すまぬお爺ちゃま。一応、死にゆく僕への手向けだったとフオローはしておいたから。

「後は……そうそう、刀が赤く染まったことについてだね。あれは技能とかそんなんじゃないかって、たぶん日輪刀の特性だと思う。あの時は僕もいっぱいはいだったから、ちゃんと覚えてないんだけど……あの状態の刃は、元々刀に宿ってた『日光の性質』が更に強く表面化したんじゃないかな。だから頭の弱点を克服した鬼にも効果があった……とか？」

記憶の断片とあの時の状況から考えると、おそらく『圧力』……あるいは『衝撃』。加えて『熱』、そのあたりだろう。元より『太陽の性質を持った鉄』とかいう謎素材だ。特定の条件下において、何かしらの性質を発現させる可能性は大いにある。まさか僕の超能力で赤くなったなんてことはないだろうし。

「熱と衝撃か……じゃあなんで俺の刀はそうならねえんだ？ 爆発で熱も衝撃も入ってると思うんだが」

「んー……ただの熱と衝撃だって言うなら、気付く場面も多いだろう

し、失伝なんてしないと思うんだよ」

「……つまり？」

『特定の温度』じゃないかな。数度の違いで性質を変化させる物質なんていくらでもあるし……日輪刀の場合は『痣が発現した人の体温』と、それに加えて衝撃とか圧力つてことじゃない？　そうでもなければ、そもそも鍛冶師さんたちの方が先に気付きそうなもんだし」

なるほど、とばかりに試そうとする杏寿郎。というか君も普通に痣出せるんだね……まあ炎の呼吸つて明らかに最適性な感じするしな。

皆が見守る中、僕がやったように思い切り柄を握る杏寿郎。威圧感と静謐せいひつさを持ち合わせた重厚な空気……うねる炎のようなオーラ……あれ？　僕あんなカッコいい感じにならないんだけどな。

「すごい……！　赤い刃だ……！」

「元からだボケエー！」

「うーん、いいツツコミ。杏寿郎、たぶんもつと強く握らないと変わらないと思う」

「全力で握つてはいるんだがな……むう……！」

更に深く集中し、片手から両手に持ち変えた杏寿郎。手首の骨が軋むような音が聞こえ、その状態が続くこと数秒——日輪刀が鮮やかに色を変えた。透き通るような赤色から、輝くような濃い赫色へと変化したのだ。

力を抜いた杏寿郎の額に、少しばかり汗が流れる。百メートルを全力疾走しても息を切らさない柱が、ただ柄を握っただけで汗をかき……その事実だけで、どれほどの握力が必要かわかるだろう。

「千里は片手で変化していたが……ふむ。まだまだ精進が必要のようだ！」

「ふっ…… “上” で待つとるで。杏寿郎」

「煉獄さんでもあれ程までに力を込めなければ変わらない……となるど、かなり使い手を選びますね」

「あれ？　ちよつとみんな、無視しないで」

「前に腕相撲した時、煉獄さんより上だったのは……」

「この俺だ。派手にな！」

「おーい。ねえつてば……むう……無一郎、ちよつと刀貸して」  
「うん、いいよ」

「ふぬっ……！ 見て見てー！ 片手で色が変わったぜ」

「わあ、すごいや」

「おい時透、面倒なら無視していいぞ」

「天元ひどい」

ちえつ、みんなツレないなあ。もうちよつとこう、『うおおおー！』とか『すげえええ！』みたいな、IQ低い感じに誉めてくれていいのよ？

…そうだ。この身体能力に加えて鮮やかな赫刀。目にも止まらぬ一振りをもって、彼らを魅了してやろう。コホンと咳をしてみんなの視線を集め、大上段に刀を構えながら——神速とすら言える一撃を振り抜いた。

「いっただあああつ!! 足が切れたああ!!」

「振りきるからだボケエ！ 怪我増やしてんじゃねえよ!」

「素人がよくやるやつだな」

「なんと憐れな……才能の一欠片も感じられぬ一閃……肉体に全てを奪われたのか……」

「悲鳴嶼さん酷すぎない!？」

まったく。というか僕だつて鬼殺隊への貢献度はかなり高いんだから、もうちよつと持ち上げてくれてもバチは当たらないと思うの。しかもなんか力試しとか言つて腕相撲大会始まったし。意外と仲良いね君ら。

…待てよ？ ここでぶつちぎりの優勝を果たせば、皆の目も尊敬一色に変わるんじゃないだろうか。よーし……さっきの汚名を返上するためにも、前回優勝者の悲鳴嶼さんに挑むとしよう。

前回の腕相撲大会で二位だった天元を、悲鳴嶼さんは余裕で下したらしい。ならば相手にとって不足はなしだ。まるでこのために詠えたような丸机が部屋の真ん中に置かれ、僕は最強の男と対峙した。というか、この腕相撲にかける情熱はなんなんだろう。柱の伝統だったりするの？

「負けた方は、勝った方の言うことを一つ聞く……どうですか？ 悲鳴嶼さん」

「…ああ。いいだろう」

おっ、乗ってくれるのか。意外と茶目っ気もあるのかな？ ふふふ、ならば礼儀として全力でお相手しよう……とはいえ痣を出したままだと流石に卑怯だし、解除しとこう。まあお爺ちやまがあれだけ褒めた僕のフィジカルだ。もはや勝利は疑いようがない……なんか負けフラグ立った気がするな。

岩のように固い手を握り、僕は彼と向かい合った。互いに大男と言えるような体格だ……そんな重圧もあつてか、場に緊張感が満ちている。腕相撲協会が定めるような複雑なルールはないようだし、机の端は持たせてもらおう。そんな僕を見て、悲鳴嶼さんも同じように机の端に手をかけた。

——空気が軋む。

「三……二……一……ハイッ！」

蜜璃ちゃんの可愛らしい掛け声がかかった瞬間、腕に全力を込める。仮に腕力が同じだとすれば、勝敗を分けるのはタイミングに他ならない……勿論あちらもそんなことは承知しているだろう。刹那の狂いもなく、力と力がぶつかった。

——ちなみに机を持って腕相撲をした場合、拮抗する力の作用はほぼそこに向かう。

「ぐあアッ！」

「…っ！」

スタートの合図とほぼ同時、机は真つ二つに割れ——勢いよく真横に飛んで行った。そして机の右半分が義勇の顔面にぶち当たり、左半分が実弥の顔面に直撃した。ギャグマンガかな？

しかし顔面に張り付いた机の片面がゆっくりとずり落ちていくにつれ……鬼気迫る般若の相貌が、鼻血と共に顔を出した。怖すぎワロツツア。

まるで夜叉か阿修羅か不動明王か……なんか背景に満月が揺らめいている気がする。『ポン、ポン、ポン……』と鼓の音が聞こえてきそう

な緊張感だ。お爺ちやまよりこわーい。

……………逃げ——あつ。

「あゝあゝ ああ！ 僕だけじゃないのに！ 僕だけじゃないのに！」

「いっぺん三途の川でも拝んでこいやア……！」

「しのぶちゃん！ しのぶちゃん！ 取りなして！」

「不死川さん。左脚と右肩は傷が深いので気を付けてください」

「おう」

「ごめんって！ ほんとごめん！ 助けて義勇うう！」

「俺は謝られていない」

「そういうとこだよ嫌われてるの！」

「……！」

「はっ……ご、ごめん、言い過ぎたぎやあああ！ やめて実弥いい！」

「…不死川」

「あア？ 止める気かテメエ」

「…俺も手伝う」

「ハッ……おいおい、初めて気が合ったんじやねえかア？」

「いやこんなことで友情感じなくていいからあゝ ああ！」

みんな僕が怪我人だってこと忘れてない？ あと悲鳴嶼さん、数珠を擦りながら念仏を唱えるのはあまりに無慈悲じゃなからうか。肩震えてるし。肩震えてるし。さっきの涙どこ行つたの。

「…飛鳥様。もう息休めは充分かと思われませんが」

「はい、あまねさん。ほら二人とも、どいたどいた」

流石に彼女の言葉は無視できなかったのか、大人しく元の場所へ戻る義勇と実弥。あまねさんの真剣な雰囲気を感じ取り、僕を含めた全員が襟を正して言葉を待った。共有すべき事柄はほぼ話し尽くしたというのに、いったい何事か……という心の動きが、数人から感じ取れる。

まあここ最近の情勢と、調査の進み具合からして推測は容易だ。会議の最初に言ってくれなかったのは、おそらくそれ以降の話に身が入らなくなってしまうからだろう。なにせ鬼殺隊の目的そのものなんだから。



「――鬼舞辻無惨の居場所が判明いたしました」

## 16話

鬼殺隊のブレインは誰なのかと言えば——言わずもがな、耀哉である。輝利哉くんやあまねさんも重要な位置を占めてはいるが……しかし輝利哉ほど隊を上手く動かし、尊敬の念を一身に集める男はいないだろう。当主としての直感などは輝利哉くんにも受け継がれているが、それでもまだ八歳の男の子だ。知識や経験を培うための時間が足りていない。

「うーん……やっぱり爆破は無理かな？」

「準備段階で確実に気付かれるだろうね。建物の中心まで剥き出しにするような爆発、相当な量の火薬が必要になる。そんなものを設置しようとして、気付かないほど鈍い男ではないだろう」

とはいえ、あまねさんと輝利哉くんが優秀な頭を持つのは確かである。だと言うのに、その二人を差し置いて僕と二人きりでの会話を耀哉は望んだ。真剣に考える場にあって、僕との会話はそれに欠けてしまおうそうだが——その方が思考に幅が出るらしい。けなされているのか褒められているのかよく判らないが、耀哉がそうしてほしいと言うなら付き合うのみだ。

「じゃあ……ちようど港のすぐ近くだし、タンカーでも突っ込ませるのは？ 質量的には充分だと思うけど」

「船が陸に上がってからの制御は運任せになるね。なにより、巨大な何かを突っ込ませてもそれ自体が影を作ってしまう」

「爆弾を積み荷にして、突っ込むと同時に爆発させるとか」

「出来なくはないだろうけど、不確定要素が多すぎる。広範囲に影響を及ぼす手段を取る際、一番の問題は『一般市民と鬼舞辻無惨を引き離す』方法だよ」

「鬼殺隊の剣士と『隠』全員で、周囲一帯の人間を拉致するなんてどう？ 常人との身体能力差を考えれば、不可能じゃないと思うけど」

「…建物外に限って言えば可能かもしれないね。けど建物内の人間はどうするんだい？ 少なくとも十から二十は常駐している筈だ」

横浜港近くに本社を構える貿易会社『五辻貿易』が、鬼舞辻無惨の

居場所である。『五辻』の名は元『華族』らしいが——平安の頃は貴族だったらしい無惨がそこを選んだのは、何か意味があるのかもしれない。数年ほど前に会社を所有する男性が死亡事故に見舞われているから、恣意的な選択でないことは確かである。

事故で夫を亡くした上、経営のことなど解らず右往左往する未亡人……そんな彼女へ上手く取り入って後釜に収まった『色男』が鬼舞辻無惨だ。口さがない者には『逆玉の輿』『陰間』などと揶揄されていたが——経営に本格的に関わり始めてからは、そんな風評も鳴りを潜めたようだ。

とにかく優秀であった無惨は、後夫としても経営者としても良き人間を演じているらしい。まあ平安の頃から生きていれば、そのくらいはできるだろう。鬼は睡眠の必要もないから、実質的には更に二倍近く生きているようなものだし。

「近くに剣士の気配がすれば、何を置いても逃げを打つだろう……昼間であれば尚更に。さつきも言ったけれど、鬼舞辻無惨は『鈍さ』と対極に位置するような男だ。建物内の人間が拉致されて気付かない筈がない」

「難しいねえ……せつかく居場所がわかったつてのに、優位に立っている気がしないや」

「どんな犠牲も気にしないと云うなら、それなりに手段はある。しかし私たちがやっていることは、あくまでも私怨による復讐だということとを忘れてはいけない。これから先の被害者を増やさないために、今の被害者には目を瞑る——そんな欺瞞は許されないんだ」

「僕には正義の味方にしか見えないけどね」

「剣士の選別のために、犠牲者を出し続けているような組織だと言うのには？」

「……！ ……実弥とのこと、誰に聞いたの？」

「鴉も一緒に聞いていただろう？ 喧嘩はいけないよ、千里」

「喧嘩って訳じゃないんだけどね……やっぱり生まれた時代が違っていると、価値観の違いも大きいや。僕が間違ってるとは思わないけど、実弥が間違っている訳でもないから」

「白黒はつきり付けるべきではない問題もある。君の優しさも実弥の責任感も、大切なものだ。私は思っているよ」

「…ありがとう」

——昼間に仕掛けるのは前提条件だと思っていたけれど、議論を重ねるにつれその難しさが浮き彫りになってきた。耀哉の言う通り、犠牲を気にしないとゆうならやりようもあるんだけど……それをよしとしないからこそその鬼殺隊である。正義の組織ではないけれど、善性を軸にした集団なのは間違いないと僕は思っている。

「しかし手が届きそうになればなるほど、厄介さがよくわかる。逃げることに躊躇せず、その上で瞬間的な移動すら可能とする存在……」

「しのぶちゃんとかたまちゃんの毒に全てをかけるのは……流石にちよつとあれだよねえ」

「ああ、やはり『餌』が必要だ」

僕たちが鬼舞辻無惨を滅ぼしたがっているのは当然として、あちらはあちらで鬼殺隊を疎ましく思っているのは確かだ。しかしその事実が『餌』にまでなるかと言えば少々疑問である。

産屋敷邸の所在を明るみに出したところで、わざわざ出張してくるとは到底思えない。自身の危険を押し付けてでも出てくるとすれば、やはりそれ相応の理由が必要になるだろう。

珠世さん曰く、無惨はそもそも己以外の鬼など信用もしていなければ、増やしたくもないらしい。実際問題、鬼を増やさなければ非常に大きいメリットがあるのは確かだ……『鬼殺隊の弱体化』という、鬼舞辻無惨にとってはかなりのメリットが。

そもそも無惨一人分の食人衝動を満たすだけならば大した量は必要なく、となれば犠牲者の数もごく少数となる。それが何を意味するかというならば、『鬼殺隊の存在意義の消失』である。

隊を構成する大部分が『復讐』によって成り立っている以上、被害者の減少は、長期的に見れば戦力の減少と同義だ。無惨が鬼を全て破棄して雲隠れすれば、早ければ十年、遅くとも五十年程度で鬼殺隊は瓦解するに違いない。

『怒り』とは、その対象がいてこそ持続するのだ。拳を振り上げたと

ころで落とす場所がなければ、激情も長続きはしない。産屋敷の血筋が『呪い』を理由に無惨を狙い続けたところで、矛となる剣士がいなければ打つ手など限られる。

——そんなメリットを排してなお無惨が鬼を増やし続けるのは、『太陽を克服した鬼』が生まれる可能性を信じているからだ。そしてその鬼を取り込めば、自分も同じ性質を得られると考えているからだ。カービィかお前は。

「たまちゃんがさ、無惨が十二月鬼月に命じてるのは『産屋敷邸の発見』『鬼殺隊の殲滅』『逃れ者の搜索』って言ってたんだけど……ん？」

「どうしたんだい？」

「…そういや途中で遮って、最後まで聞いてなかったっけ……ちよつと聞いてくるよ」

そう言えば、お爺ちやま出現のせいで会話を無理やり切ったんだっけか。先程の三つに加え、確か『青い彼岸…』まで聞いた覚えがある。

青い彼岸……なんだろう。ぱつと思いつくのは彼岸会、彼岸花、彼岸桜、彼岸団子あたりかな。もし無惨が青い彼岸団子を探しているなら、青カビまみれの団子を食べさせてやりたいところだ。

そんな益体もないことを考えながら歩いていたら、いつの間にか離れに到着していた。玄関を開けると、愈史郎と若い男性が何やら話し込んでいる。

というか男性からも鬼の気配がするんだけど、いったい何者なんだろうか。挨拶もそこそこに事情を聞くと、どうやら炭治郎さんと無惨が浅草で出会った時の一件で、巻き添えをくった方——不運にも鬼にされてしまった人らしい。

たまちゃんの家に行った時や僕がここで起きた時も、近くの部屋にはいたらしいけど……ぜんぜん気付かなかったぜ。たまちゃんも愈史郎もそうだけど、人を食わない鬼は『鬼としての気配』が希薄なのだ。更にこの男性は血液の摂取もまだ一度きりらしく、そのせいか鬼の気配がほとんどしない。

…話していて気になったんだけど、『呪い』の方は大丈夫なんだろうか。たまちゃん自身が言っていたが、鬼舞辻無惨の呪いを外さない限

り、『鬼』は生殺与奪の権利を失うのみならず——大まかな居場所や表層意識すら読み取られるらしい。産屋敷邸が知られたら洒落にならないんだけど……いや、よく考えたらたまちゃんたちが捕まっていなかったんだから、大丈夫に決まってるか。

しかし懸念が表情に出てしまったのか、愈史郎が踏ん返りながら軽く説明し始めた。彼が狐耳の少女だったら、すごく様になるのになあ……そんなことを思いつつ話に耳を傾ける。

要約すると、禰豆子ちゃんの血液は『鬼の力を高める』効果があるらしい。とは言っても稀血などとは方向性が違い、それは鬼を『個』として確立させる、謂わば鬼の始祖になれる才能とも言える。

つまり鬼の細胞を——鬼舞辻無惨の細胞を支配し返す程に、強靱かつ独善的な細胞という訳だ。そんな彼女の血を使用して、この男性を無惨の支配から解放したらしい。

禰豆子ちゃんの細胞が特別……そして炭治郎くんの細胞も、常人とは一線を画している……となると、その特異さは血筋からくる同質のものと考えの方が自然だ。

禰豆子ちゃんが鬼となり、それ以外の家族は皆殺しにされた以上、現状で確認する術すべはない。しかしほぼ間違はなく、炭治郎くんにも『鬼としての才能』があると考えていいだろう。

……まあそれがなんだって話だけど。そんなことよりたまちゃんだたまちゃん。教えてもらった部屋の方へ進み、ノックしながら扉を開ける。何故か着替え中だったりしないかな。

「たまちゃん、しのぶちゃん」

「…人間に戻す薬だけでは足りない？」

「ええ、頑固な染みよりもしく生き汚い男です。人間へ戻す効果と……ああ、いよいよとなれば細かい破片になってまで逃げる卑怯な生物でしたね。分裂阻害も加えて……そうですね、ついでに老化現象なんてどうですか？」

「え、ええ……」

「あと細胞破壊の効果も付けましょう」

「は、はあ……あ、千里。どうしたんですか？」

なんかたまちゃんがマッドサイエンティストみたいになっておられる。蝶屋敷の器具を持ち込んだのか、既に共同研究を開始しているようだ。

ちなみに『薬や毒の研究開発生産なんて年単位になるんじゃないの？』などという疑問は、鬼殺隊には当てはまらない。前にも言ったが、一部の技術においては本当に未来を超越しているのだ。

「なんか<sup>はかど</sup>捗<sup>はかど</sup>ってる感じ？」

「あなたのおかげですよ、飛鳥さん。どうしても推測でしか見えなかった部分……特に細胞の変異速度と傾向が、この血液のおかげで十分に判明しました。そこからわかるのは、禰豆子さんが投与された血液は上弦の鬼に比肩する程の量ということ……これまでも短期間の間で相当に変異していましたが、通常の鬼、上弦の陸、無惨の血液と比べて観察するとはやはり常人では耐えられない筈の血液量を克服しています……！ どんな上弦であっても、そこへ至るまでに無惨の血液を『複数回』与えられているのは間違いありません。それは一度に大量の血液を摂取すると細胞の変化に耐えられず体が自壊してしまうからなんです、禰豆子さんは一回の過剰投与に耐えて鬼となっている……もちろん、自力で呪いを解除していることを踏まえれば、『鬼』としての才能は凄まじいものがあると認識はしていました——これはもう……あるいは無惨本人すら……」

「あっはい」

テンションが上がっているたまちゃんも美しい。しのぶちゃんもちよつと引いているが、鬼にも角にも順調なようでは何よりだ。毒で殺せる見通しが立つならば、日中にこだわる必要もなくなるし頑張っしてほしいところである……それはそうと、聞きたいことがあるからお話ストップしてたたまちゃん。

「前に話してくれた青い彼岸団子についてなんだけど……」

「初耳ですが」

「あれ？ そうだっけ」

「もしや青い彼岸花のことですか？」

「あ、彼岸花だったんだ——そうそう、それぞれ。無惨が十二鬼月に探

させてるんだよね？」

「ええ。まだあの男が人間だった頃、病気の治療に使われていた生薬の名だそうです。実際に青い彼岸花が使用されている可能性もあると聞いています……それがどうかしましたか？」

「うん——つて、人間だった頃の病気の治療に……？　なんで今も探してるの？」

「真偽は定かではありませんが、そこそが日光の克服に必要なだとあの男は考えているようです。一度詳しく尋ねようとしたのですが、顔色が危うい方へ変化したので聞けず仕舞いでして……ただ、心ならずも同じ時を長く過ごしましたから——おおよその見当はついていません。鬼舞辻無惨のあの状態は、おそらくまだ治療途中なんでしょう」

「治療途中……？　病気から完治のプロセスに『鬼』つて、また突っ込みどころ激しいな……医学に喧嘩売ってない？」

「どこまでが医者わいの業で、どこまでがあの男の体質だったのかは不明ですが——少なくとも薬の作り方や材料の在り処を知っている者が、途中で消えてしまったのは確かなようです。あの激しやすい男のことですし、案外自分で殺してしまったのかもしれないですね」

「いや、流石にそんな馬鹿いないでしょ」

しかしなるほど、これは十二分に価値のある情報だ。邪魔者の排除などとは違い、自身の目的に直結する『青い彼岸花』……餌としては十分に機能する。耀哉に良い報告ができそうではなかったぜ。

そのままたまちゃんにお礼を言って研究室を後にした。しのぶちゃんも彼女と話すのに慣れたのか、もう敵意はほとんど感じなかった。良い傾向である。

「ただいまー」

「お帰り、千里……何か良い情報が聞けたみたいだね」

「また無駄な直感の使い方を……」

「勝手に閃くから直感と言うんだよ」

「耀哉はサプライズキラーだねえ」

すまし顔の彼に、たまちゃんから得た情報を伝える。すると耀哉は少しのあいだ思考に耽ふけり、顎に手を当てて瞳を閉じた。なんとも頭の



良さそうな動きだが、僕が同じことをしても様にはならないだろう。邪魔をしないように黙ること数分——ようやく耀哉は手を下ろした。

「…千里はどう考える？」

「んー……鬼殺隊の長い歴史の中で、無惨が『青い彼岸花』を探していることを把握できてないってことは——末端の鬼には一切を伝えないってことだよ。あれだけ配下がいるのに人海戦術を駆使しない理由……幾つか思い浮かぶけど、『鬼殺隊にその情報を利用されたくない』ってのは、割と比重が高いと思う」

「ああ、そうだろう。正に私たちがそうしようと考えた通り、罠に嵌める上で最高の情報だ」

「鬼舞辻無惨の居場所を掴んでいること。たまちゃんがこっち側について、かなりの情報が流れたこと……そしてそれを無惨が知らないってこと。明確なアドバンテージだね」

「だからこそ青い彼岸花については、一手目を有効に使わねばならない。一度罠に使えば、それ以降は警戒させてしまおうだろう」

「でもどう使う？　ただ『在った』って情報を流すだけじゃ、たぶん上弦の鬼が先に確認にくると思うけど」

「ふむ…」

鬼舞辻無惨に自ら確認させるための作戦か……うーん、中々に難しいな。昼間にしろ夜間にしろ、どんな作戦の上でも難関が付きまとう。鬼殺隊が数百年をかけても滅ぼせなかっただけはあるね。とにかく『逃げるのに躊躇しない』というのは、それだけで厄介なのだ。僕自身もそうだから、余計に実感するぜ。

「…五辻貿易会社——か。その線から攻めてみるのも手かな」

「パーティーでも開いて招いてみるかい？　結構な規模の会社みたいだしね」

「ふふ、意外とありかもしれないね……そうだ、無惨の会社は清国しんこくが主な取引先だったと資料には載っていたかな」

「今は『中華民国』だけ」

「ああ、そうだったね。ふむ……少し華僑の伝手ついでを当たってみるか」

華僑の伝手って……簡単に言うなあ。今も昔も、華僑は身内同士の

繋がりが強く非常に排他的なコミュニティだ。それは他国の地で生きていくための術であり、そして民族的な特徴でもある。中国人や韓国人の『姻族の絆』<sup>いんぞく</sup>というのは、日本人が想像する以上に強固なのだ。そのあたりの慣習は、日本人の目線から見れば悪い部分が目立つが——単に文化が違うだけの話である。メリットもあればデメリットもある。しかしそんなコミュニティと繋がりがあつてのは、やはり産屋敷家の歴史と格は相当に高いのだろう。

「今は華人も華僑も結構忙しいんじゃない？ 辛亥革命もまだ終わつたばつこだし、本国の影響がゼロって訳にもいかないだろうし」

「詳しいね、千里」

「こう見えても高学歴なんでね。記憶力も割と良い方だし、歴史は得意だぜ」

東洋の『眠れる獅子』と謳われた清国も今は昔。イギリスにアヘン密輸されるわ、それを咎めたら戦争になつて負けるわ、追い打ちでフランスにボコられるわ、拳銃の果てに日清戦争でも負けてえげつない額の賠償金払わされるわ。

負ける度に不平等条約やら賠償金やらをせびられて、清国は瀕死状態となつたのである。そして欧州列強はパイを奪い合うように、今も虎視眈眈とかの国を狙っているのだ。

まあその辺の兼ね合いもあつて清国内部で革命が起こり、政権も代わり『清』から『中華民国』になつたという訳だ。そしてそんな動乱の時代にあつて、国民はどう思うか……沈む船から逃げようと、不法移民が増えるのは流れとして当然だ。日本にも大きな影響があつたし、こちらに在住している華人や華僑も無関係ではいられない。

「貿易会社……中華との盛んな取引……そこに紛れ込ませるとして……ふむ……禁制の品という事にすれば、罨の匂いを後ろ暗さで隠しやすくもなる……さて、どうしたものか」

「…そう言えば、なんで貿易会社なんだろうね。上弦の鬼<sup>玉壺さん</sup>から辿つて判つた居場所だけど、まさか配下のためにわざわざ潜り込んだ訳でもないだろうし」

「……」——確かに気にしていなかった部分だ。もしかすると……青

い彼岸花の在り処を、海外に見出したのか？」

「今更？ 千年近くもそこに手を付けなかったって、頭悪いってレベルじゃなくない？ 流石にあり得ないと思うけど」

「…」

「…」

「…ピンとくるものがあつた」

「ええ…」

「日本の歴史を紐解けば、交易が盛んになった時期は何度かあるが…今ほどに交流があつた事はない」

「まあ鎖国も長かつたしね」

「つまり奴が愚かだつたと言うよりは——千年も前に日本という国で処方された薬、という点を重視していたのかもしれない。最近の日本の情勢をきつかけに、考えを改めた可能性は充分にある」

「なるほど…いや、だからこそかな…？」

「どういうことだい？」

「たまちゃんに聞いた時からちよつと違和感だつただけだね。平安の頃でしょ？ 『薬』って言えるほどの技術や文化があつたかつて言う…：…まあまつたく無かつたとは言わないけど、主流はたぶん祈禱きとうとかそつち系だと思ふんだよ。ただ、その時期にちやんと効果がある薬を作つてるのは事実だ——なら、その人はたぶん唐とうの医学を学んだ医者だつたんじゃなかったさ。あの時代の最先端医療は、間違いなく中華だつただろうし」

「——だからこそ、中華民国を主要な取引先に置いている五辻貿易を狙つたと」

「うん。それに青い彼岸花の方はともかく、普通の彼岸花はあつちが原産だつた筈だよ。いつ頃こつちに分布し始めたかは知らないけど」

「どうしても推測が多くなつてしまふな…：…しかしそこは産屋敷耀哉という直感お化け。何かしらの情報さえ示せば、何の根拠もなく正しい道を選ぶのだ。」

鬼舞辻無惨という人知を超えた存在を相手にして、鬼殺隊を存続させ続けた血筋は伊達じゃない。普通なら完全に詰みの状況を何度も

ひっくり返してきたからこそ、無惨もこちらを敵として認識しているのだから。

——またもや考え込んだ耀哉を待つこと数分。そして一つ領いた彼を見て、作戦が決まったのだと悟る。

「…成功しそう?」

「ああ、きつと…それに、私は最初から鬼殺隊の勝利を疑っていないよ」

「直感?」

「いいや千里。君と出会えたからこそ、私は確信できたんだ」

「…?」

「だってそうだろう? ——君のいた未来に、鬼はいない」

…なるほど、そりやそうだ。



鬼舞辻無惨を滅ぼすにあたって必要なものは、『毒』ではなく『薬』である。とは言っても、それらは違うようで同じものだ。病人が飲めば薬でも、健常者が服用すれば毒になる——そんな成分などいくらかでもある。害になれば毒、有効になれば薬というだけの話だろう。

無惨にとって『人間化薬』は毒なのか薬なのか。『鬼』という体質を病だと考えれば、そして食人衝動を病だと考えれば薬だろう。しかし不老ではなくなり、超人的な身体能力を失うと考えれば毒かもしれない。

この人間化薬を無惨に取り込ませるのが、奴を滅ぼすための最重要課題なのだが……その難易度は非常に高い。剣や矢に塗布したとしても、それはごく少量となってしまう。ある程度の量を吸収してもらわねば、薬の効果は現れないのだ。

加えて、確実を期すならば——吸収させてから二十秒は足止めが必要になる。どれだけ効果が強力でも、本腰を入れて分解されると厳しい……というのがたまちゃんの所見である。

僕も無惨の細胞を観察してみたが、本当に生物とは思えない異常さだった。まるで古典的なスライム……間抜け面をした有名なアレではなく、原典に乗っているような恐ろしい怪物のスライム。何でも取り込み、我がものとする粘体。変形も自由自在、STAP細胞など比較にもならない程の万能細胞である。

だからこそ、それに抗った彌豆子ちゃんの異常さもまた際立つのだが……まあそれは置いておこう。既に彼女は人間に戻り、炭治郎くんと涙の再会を果たしているのだから。僕もどさくさに紛れて抱き着いたら、善逸に小一時間ほど追いかけられた。

……正直なところ、実験も兼ねてのことで申し訳ない部分もあったが——そのおかげで多少なりとも『予測』がついた。彌豆子ちゃんに人間化薬を飲ませた時、完全に人間へ戻るまでの所要時間は約十二秒。彼女は鬼としてかなり上位の存在と考えられるため、鬼舞辻無惨への効果を測るにあたって、充分に推測要素の一つとなるだろう。

ちなみに鬼というのは強くなればなるほどに細胞の万能性が上がり、わざわざ口から『食事』する必要もなくなる。人間の時の感覚が残っているからこそ経口摂取という形態をとるが、実のところ鬼の食事とは人間のそれとまるで違う。

無惨の細胞が元になっているゆえに、他の細胞を取り入れる際は元の動きと同様……つまりスライムのように『取り込む』のだ。

要は胃に到達してから分解される訳ではなく、途中で既に吸収され始めているという事になる。細胞の変異速度、吸収速度が速い鬼……つまり再生速度の速い上弦の鬼等であれば、体表から無理やり『食事』をすることさえできるだろう。

——つまり鬼の始祖である鬼舞辻無惨ともなれば、食道に達するかどうかのところで既に摂取したものを吸収している筈だ。

……ここまで言えばわかるだろうが、鬼舞辻無惨に対しては『毒殺』という作戦をとることになった。人間化薬を無理やり吸収させるのは難しくとも、自分から飲食物として摂取させれば何も問題はないのだ。つまるところ、重要なのはシチュエーション作りということになる。

まずは『青い彼岸花』が禁制の品として取り扱われているという情報を、華僑の伝手からそれとなく貿易会社へ流す。そこへ至るまで多少面倒な手順を踏ませつつも、遅すぎてもいけないという、バランス感覚の問われる手腕が必要だったが……やはりここでも耀哉無双。

最終的には、無惨をチャイニーズマフィアとの取引に引きずり出すことが狙いだ。取引そのものを違法であると誤認させれば、人目に付かない場へ誘い込むにしても疑念が薄れる。そして実際に調整、交渉、その他を本物のマフィアに依頼することで真実味を増してやる。後は奴が、あるいは配下が持っているであろう『移動手段』について。瞬間的な移動手段と一口に言っても、種類は多岐に渡る。

文字通りに『瞬間移動』なのか、それとも『ルーラ』なのか、実は『どこでもドア』なのか。似ているようで結構違う……特にほんの一瞬が命運を分かつ状況で、移動に『何手』必要かはとても重要だ。

念じればすぐに使える類であれば、かなり厳しいと言わざるを得ないが——とは言え、そこまで使い勝手の良いものだとは思えない。誰であつても何処であつても、自由自在に運用可能であれば、鬼殺隊はもうとつくに滅んでいいるだろう。無惨が今までにとつた行動から考えても、それなりに制限はあるに違いない。

——何度も何度も、あらゆる方向から議論を重ねた。二度と訪れるかもわからない、千載一遇の好機なのだ。失敗の可能性など微塵も残

せない。

例えば作戦に参加する人数だが……今は無惨がせつせと鬼を増やしており、通常よりも遥かに出現頻度が上がっている状態だ。そんな状況の中、隊士が一斉に姿を消してしまえば、否が応でも何か感付くだろう。故に、最低でも全隊士の半数以上は通常の任務を遂行してもらわねばならない。

他にも考えるべきことはいくらかでもある。どこまでいっても『完璧』はありえないが、しかし近付けることはできる。計画を実行しつつ、無惨の行動を見て都度修正し——そして遂に、決戦の日が訪れた。



杯さかずきを交わすという文化は、かなりの国で共通する友好の手段だ。その意味合いは各国によって多少なり変化するだろうが、大抵の場合において『仲が深まった』とお互いに了承を得るためのものである。

実際にそうである場合、もしくは形式的なもの、あるいは儀礼的な意味ということもあるだろう。まあどちらにせよ、取引を前にして出された酒を飲まないなどという、そんな非礼を無惨は犯さない筈だ。特に、排他的な華僑が見せた歩み寄りの合図であれば尚更に。

「我が国の上等な古酒だ。よく味わってくれたまえ」

「……ええ。ありがたく」

振る舞いとしては、あからさまにチャイニーズマフィアの方が上段から物を言っている。実際問題、彼は幹部であり組織においては偉い

のだろうが——目の前の男むねんが恐ろしい鬼だとは伝えているのに、流石の胆力だ。

作戦の最終局面に至っては、耀哉も彼らの協力を断つたらしいのだが……危険を理解しつつも、最後まで付き合ってくれる義理深さには脱帽である。

実際、そういった『特有の雰囲気』というのは簡単に出せるものではない。ギリギリまで本職に任せた方が成功確率も上がるだろう。死地とすら言える場に留まる三人の男性に感謝しつつ、僕たちは息を潜め続ける。

人気ひとけのない寂れた漁港に、潜む剣士が総勢三十六人。これは『柱』から『丙』までの、上位の剣士を集めた数字である。鬼殺隊の全剣士の数がおよそ三百五十人ほどであるため、およそ一割といったところだ。

数は力だと言うが、『丁』以下の剣士がいてもほとんど無駄死にする  
と耀哉は判断したらしい……加えて、多くの剣士を集結させる訳には  
いかなない事情を鑑みてのことだろう。

ちなみに炭治郎くん、伊之助、善逸はギリギリで『丙』に滑り込んでいる。あれだけ上弦の鬼と出会っていれば、スピード出世も当然と言えば当然だろう。カナヲちゃんは一つ下の『丁』であったが、実力的には彼らと近いため特例として組み込まれたらしい。『柱』の継子というのも大きな要因と思われる。

——これだけの剣士が近くに潜んでも気付かれていないのは、愈史郎の血鬼術のおかげだ。土壇場でたまちゃん達を味方に付けられたのは、本当に幸運だった。異能の鬼が常識外れだと理解はしていたが、貼るだけで透明人間になれる札を作れるって凄すぎる。

……とはいえ、気配まで消してくれる訳ではない。故に『漁港』だ。潮の香りと波の音が、消しきれない気配を誤魔化してくれる。裏取引きには絶好のシチュエーションというのも好都合だろう。

「では、乾杯といこう」

薬を混ぜた酒を、特に疑いもせず呷あおる無惨。仮に何らかの毒だったとしても、特に問題はないと考えているのだろう。慢心とも言えな



い、鬼であれば当然の思考だ。

——しかし次の瞬間、奴の表情が歪んだ……ここからの二十秒が、鬼殺隊の行く末を決める。

「……っ！」

一秒。体の異変に対する下手人が、目の前の人間たちであると確信し……無惨は爬虫類のような瞳をぎらつかせた。

「——っ……!?!」

二秒。無惨の頸がずり落ち、四肢が切断される。四方八方からの見えない斬撃に、明らかに困惑している……が、事ここに至り、ようやく何が起きたか理解したのだろう。憎々しげに言葉を漏らした。

「塵<sup>チリ</sup>どもめ……！ すべて貴様らの書いた絵図か……！」

三秒。まるで斬撃が幻だったかのように、腕も足も元通りに繋がった。いや、そもそも切断とすら言えない程の再生速度である。斬った瞬間にはもう傷口が閉じていた。しかし杏寿郎の赫刀による頸切りだけは、明らかに再生が遅い。

「——鳴女<sup>なきめ</sup>！」

四秒。この場にいる剣士全員が、札を剥がして姿を現す。できればずっと付けていたところだが、この後の行動を際立たせるためにも必要な流れだ。加えて、鬼の鋭敏な感覚に対して効果が長続きするかも怪しいところである。

「この程度で私を罫に嵌めたつもりか！ 貴様ら如きの……っ?! なっ……!」

五秒。何かを叫んだ無惨が、体中から触腕を生やして範囲攻撃をしようとしたが……その瞬間、僕もお札を剥がして姿を見せる。

赤茶けた羽織に黒い袴、カツラで長くした髪を結び、額に痣をメイクして——要は大叔父様そっくりの姿を取った僕が、無惨の視界に入った訳だ。

たまちゃん曰く、真面目な表情をしていれば、大叔父様と僕の顔立ちはほぼ同じらしい。彼女の記憶通りの服装と痣を演出すれば、無惨のトラウマを刺激するんじゃないかなろうかと画策した訳だが、見事に成功したようだ。周囲の剣士には目もくれず、限界まで目を見開いて固

まっている。

「——鳴女！ 何をしている早く開けろ！」

六秒。どうやら移動手段は本人ではなく、配下の血鬼術のようだ。『開けろ』ということは、どこでもドア方式の可能性が高いだろう。というか脳内会話できるんじゃないの？ わざわざ情報を垂れ流しているのは、何か意図があるのか……いや、あの必死な表情は本心に違くない。素でウツカリさんなのかもしれないな。

薬の効果が徐々に現れ始めたのか、明らかに焦りが見える。しかしそれで手を緩めるような愚は誰一人として犯さない。上下左右、どこへ逃れようが絶対に移動は許さないと警戒し——そのせいで、自身の足元が疎かになってしまっていた。

無惨を移動させるのではなく、剣士を移動させて安全を確保しようとして判断したのか……！ 剣士たちの足元に『衾』が出現し、回避不能の落とし穴とも言える血鬼術が発動した。全てが上手くいくとは思っていなかったが、こうきたか。

「墜ちろ馬鹿どもが……！」

無惨の移動を警戒しすぎて、自分たちが移動させられる可能性を失念していた。急に足場が消えて反応できる人間はそういない……まあこの場にいる人間はだいたい人外しかいないから、反応はしてたけど。しかし反応できたからといって、空中を移動できる手段があるかといえどそんな訳もなく。

——この局面においてロープを持っている人間など僕くらいである。痣の恩恵は反射機能にも表れる……コンマの判断で無惨に投げ縄を巻き付け、思い切り引き寄せた。しかし数本の触腕が地面に固定されていたらしく、逆に自身を無惨に引き寄せる結果となった。あれ？ ちよつと待って、これ、死ぬのでは……？

「……！」

無惨へ引つ張られるまでの滞空時間……一秒にも満たないとはいえ、鬼の頂点とも言える相手に対し、あまりに無防備な姿を晒してしまった。

正直、奴のところへ到着するまでに五体満足ではいられないと思っ

ていたが——しかし予想に反して、無惨は攻撃を仕掛けることもなく僕の隙を見逃した。というか、物凄く必死に逃げようとしている。どっただけ大叔父様が怖いんだ。というかそろそろ気付こうよ。

剣士全員が消えたところで無惨の足元にも入口が開いた。明らかに僕を引き剥がそうと、壁やらなんやらが蠢いて邪魔をしてきたが——天井を這いずることすら可能な僕に、そんなものは通じない。

十数メートル程の落下で地面に辿り着き、こちらを睨みつけている無惨と目が合う。流石に僕が別人だと気付いたのか、コケにされた怒りが表情から読み取れる。そして縄はいつの間にか千切られてしまったようだ。

「ぐうつ、こつ、カツ……」

十秒。瞳孔の収縮、指先の痙攣、外頸動脈付近の蠕動が確認できた。禰豆子ちゃんに薬を投与して、四秒程のタイミングで見られた反応と同様。経過時間と以降の反応が比例するかは不明だが、少し上方修正すべきか——どちらにせよ、限界まで時間を稼がなければならぬ。

「——もう何かする余裕もなさそうだね。これなら僕だけで充分かな？」

「……っ！」

油断するつもりはないが、この段階までくれば反撃する余裕もないだろう。もう勝ったって言っていないんじゃない？ いや、もう言うてやろう。言霊ってのは口にした時点で効果を発揮するものだ。死亡フラグもなんのその！

「勝った……」

「——つとと。今回はまた乱暴な招集だなあ……おや？」

「……琵琶女。呼び出す時に一々落下させるなど言った筈……——っ！

貴様あの時の……」

「オワタ……」

無惨と僕の間になんかが落下してきたと思ったら……今はもう懐かしい気さえする猗窩座さんと、名前は不明だが上弦の式さんが姿を現した。

フラグ回収早すぎない？ いくらなんでも、彼ら二人を突破するのは厳しい気がする今日この頃。なにより、合流された事実が非常にマズい。

人間化薬と銘打ってはいるが、要はこの薬——細胞の退行を促す薬なのだ。分解された場合は効果が反転して老化を促進させるのだが……まあそれは置いて。

つまり無惨を『鬼化する前』の状態へ強制的に戻す薬という事になる。故に、鬼ではなくなったからといって日光まで克服したりはしない。それは無惨が元から持っていた体質だからだ……そしてそれが何を意味するか。

そう——また鬼になる可能性だ。青い彼岸花がなければそんな状態にならないだろうと、樂觀視はできない。元より『そういった体』になりやすい細胞だからこそ、鬼となったのだから。

そしていくら無惨本人が人間へ戻っても、『変化した無惨の細胞』はまだいくらでもある……そう、配下の鬼の体内に。それを摂取すれば、また鬼へ変化する可能性は大いにあるのだ。

無惨が人間に戻った時点で、全ての鬼が死んでくれるなら問題は無いのだが——それはないだろうとたまちちゃんが言っていた。おそらくは呪いそのものが消滅し、現存する鬼は無惨という軀くびきから逃れることになる。

そもそも『無惨が死ねば全ての鬼が死ぬ』という事実は、『そうなるてしまう』のではなく『そうしている』からにすぎないらしい。どこまでも『鬼が自分を殺せない理由』を、奴は作り上げているという訳だ。

しかしどうしたものか……考えている間に、もうほとんど人間に戻ってるように見えるけど。というか君ら、主人が苦しうにしているんだからもうちよつとなにかないの？ なんて人望のない男なんだ無惨。

「猗窩座……奴を殺せ……」

……！ 機先を制された。こういった時の、判断力の欠如が悔やまれる。色々と考えすぎて、行動が遅れちゃうのが僕の悪い癖。考えるよ

り先に行動していれば、二人が落下してきた瞬間に無惨に攻撃できていた筈なのに。

——いや、今からでも遅くはないか？ お爺ちやまでさえ反応が遅れた僕のタックルだ。散々に『逃げようとした布石』が効いていたとはいえ、上弦の鬼にも通用する速度というのは間違いないだろう。不意を突けばなんとか——

「シィッ——」

「…ぐっ!？」

地面を踏み砕くと同時に突っ込み、彼らの間を駆け抜けようとしたが——完全にタイミングを合わされた。顔面へ迫る脚撃を既のところで防御し……しかし左腕に激痛が走る。腕越しですら頭に衝撃が響くこの威力……！ 飛びそうになる意識に無理やり活を入れ、追撃を避ける。そして後ろへ飛び退いた——その瞬間、脳天から踵かかとが降ってきた。くそ、行動が先読みされ続けている……！

「ぐっ……！」

無理やりに体を捻り、更に不利な体勢になるのを承知でまた回避を選択。互いの位置が逆になり、無惨の姿が視界から外れてしまったが……今は目の前のことで精一杯だ。

歯を食いしばりながら、無理やり重心を整え蹴りを放つ。いくら攻撃が不得手とはいえ、それでも昔から熊や猪を狩ってきたのだ。子供の頃だって、弱い鬼ならこれで充分に対処できていた。今の身体能力なら、ただの蹴りだって必殺の威力がある筈だ。

そう——僕だって充分に戦えるくらい、強くなっているのだ。ただし上弦の鬼が相手でなければだったが。

「馬鹿が……！」

こんな状況にあつて、最初に思ったのは『凄い』という感想だ。力も速度も、猗窩座さんの蹴りを凌駕していたであろう僕の一撃。そのままいけば、側面からの上段蹴りで彼の頭を砕けただろう。

防御されたところで、まず間違いなく腕ごと持っていけると確信した攻撃だったが……猗窩座さんの左腕に脚が触れ、右の手の甲が添えられた瞬間、完全にいなされた。

刹那の狂いも許されない、流水のような防御。避けるだけの僕なんかとは違って、瞬時に次の攻撃へ移るための、針に糸を通すような繊細な技。

それをさも当たり前のように行い、完全な隙を晒した僕へ拳を突き出す猗窩座さん。どれだけ身体能力が上がるかと、永く研鑽し磨きぬいた技には敵わないと思いきや知らされる——ダメだ、完全に死んだ。

「……っ！………ん？」

胴体ごと心臓を貫く軌道。回避しようもない状況に死を覚悟し、思わず恐怖で目を閉じてしまったが——しかしいつまで経っても痛みを感じない。

もしやピッコロさんが盾になってくれたのか？ 恐る恐る目を開けると、寸前で拳を止めている猗窩座さんの姿が映った。そしてその瞳は限界まで見開かれ、僕の背後を見詰め続けている。

なんだ？ まさかこの状況でカエルパンチはないだろうけど……更なる隙を晒すと理解しつつも、僕も後ろへ振り向く。ここで『馬鹿めフェイントだ！』とか言われたら、ショックで人間不信になる自信がある。

——それはともかく、後ろを振り向いたら無惨が死んでいた。無惨が死んでいた。もう一度言うが、無惨が死んでいた。

上弦の弐さんが、無惨の首から上を鉄扇に乗せて、しげしげと観賞していたのだ。とても良いことをしたとでも言うように、穏やかな笑みを浮かべて。

…あれ？

## 17話

えっ……と、どうすればいいんだろう。『支配から逃れた鬼が反旗を翻す』……これは充分に予想された行動だ。『無惨が人間に戻った時点で全ての鬼の呪いが解ける』……これもほぼ前提として作戦に組み込んでいる。でなければ、愈史郎の血鬼術を頼りにするやり方なんて取れないし。

しかし無惨との繋がりが断たれたとして、すぐにその事態を呑み込めるものだろうか？ 間違いなく初めての事態だろうに、呪いが外れたと即座に判断して無惨を殺すなんて……まさか千載一遇のこんな好機を、虎視眈々と狙っていたのかな。それにしても、思い切りが良すぎやしないだろうか。

「——何をしている貴様アア!!」

隙だらけの僕を完全に無視して、猗窩座さんが上弦の式さんへ突進していく。あ、ちゃんと忠誠心を持つてる鬼もいるのね……いや待てよ？ 『俺が殺そうと思ってたんだぞゴラア!』という意味で怒っている可能性もくはないな。

そして無惨の頭部をかき抱いて泣く鬼は、怒りのままに振るわれた猗窩座さんの拳を、いとも容易く扇で受け流した。まるで猗窩座さんが暴れ牛で、上弦の式さんがマタドールといった風だ。しかし何と云うか、上弦の式さんの戦い方……攻撃をする意思があまりに薄弱というか、無機質だ。いかにも避けにくそうである。

……というか、なんで自分で殺したのに泣いてるんだ。達成感で涙を零している訳でもなさそうだし。というより、もしそうだとしたらあんな大事そうに頭を抱えていないだろう……そもそも、あの慈しむような動作さえもなんだか嘘臭い。猗窩座さんへの対応に入った途端、真顔に戻ったのが良い証拠だろう。

「邪魔をしないでおくれよ、猗窩座殿。俺はいま、とても悲しんでいるのに」

「どの口がほやく……!」

「俺たちくらいに血が濃いと、互いの生死や気配の変化くらい感じ取

れるよね？ それは無惨様を介して根つこの部分で繋がってるからさ。だから猗窩座殿にもわかった筈だよ——その繋がりが、ついさつき消えたことに」

「…っ！」

「俺はすごく悲しかった。目の前であの御方が、あれほど蔑んでいた人間になってしまふなんて…！ あんなに憐れで惨めなことはないよ、本当に心苦しい…だから俺が救ってあげたんだ」

むむ…：：：皮肉で言っている訳ではないようだ。殺すことが救いになると、本気で思っているように見える。今まで会った誰よりも異質な思考形態。猗窩座さんも、理解できないものを見るように顔を歪めている。

そんな彼を気にも留めず、上弦の式さんは無惨の頭部を腕の中に収め、壊れ物を扱うように、慈しむように——胴体で呑み込んだ。やはり想像していた通り、上弦クラスの鬼ともなると口以外でも『食事』ができるようだ。細胞を取り込む速度、そして変質速度が尋常ではない。

「これで無惨様も俺の中で永遠に生き続ける…：：：ああ！ こんなにも悲しいのに、心地よくもあるんだ。可哀想な人達を救う手段を、俺に与えてくれた——その御方をこの手で救えたからかな？」

「黙れ…！ お前の声、表情、全てが心底…：：：癪に障る！」

「となれば、ここは弔い合戦だね！ さあ、君の手で無惨様の無念を晴らすんだ猗窩座どの——わわっ！ 拳圧飛ばすとかいうファンタジーやめてよね」

「貴様も俺が殺す…！」

「そうだ猗窩座殿！ 無惨様も黒死牟殿も死んでしまった以上、残った鬼を導く指導者が必要だと思うんだ。幸い俺には教祖としての経験があるし、猗窩座殿には新たな上弦の壺になってもらって、俺の下で——つとど。何をそんなに怒ってるんだい？」

「塵共が…！」

「ちよつとちよつと、先に猗窩座どのへ声をかけたのは僕なんだ。横入りはやめてほしいなあ——わ、危なっ！ …でも回避に専念すれば



僕の方が上だよ？ さっきの攻防で勘違いさせちゃったかなあ……  
ごめんね」

「わあ、凄いね君！ 猗窩座殿の拳も中々の速さなのに、かすりもしないねえ——おっと、ごめんよ猗窩座殿。気に障ってしまったかな」

「こっつ、の——……！」

「凄いねえ、速いねえ」

「速いなあ、凄いよねえ」

「——殺す……！ 必ず俺の手で殺してやるぞ貴様らアアア！」

上弦の式さんも中々の煽りっぷりだ。よしよし、ここで僕が離れてしまえば後は勝手に殺しあってくれるだろう。

しかしまあ……やはりと言うべきか、先程の悲しみは演技でしかなかったようだ。もうニコニコと笑っているあたり、何一つとして感傷を抱いている様子もない。

阿修羅と化している猗窩座さんを前にしても、まったく意に介しないのが凄いよね。それと彼、嫌味を言ってる感じがしないんだよね……本当に心の動きがない。まったくのゼロとは言わないけど、まるで出来の良いAIでも見ている気分だ。

「破壊殺・乱式——っ……!?!」

「あれ？」

「えっ」

それとなくフェードアウトしようとした矢先、突如として現れた袈に猗窩座さんが消えていった。ちよ、いや、困るんですけど。首をかしげる上弦の式さんは、数秒ほど考えたあと手をポンと打った。イケメンだから様になっっているが、心の動きが全然読めなくて怖い。本当に生物なのか？

「鳴女ちゃんの方、忙しそうなの心配してたもんねえ……もう無惨様からお叱りを受ける心配もないのに、律儀だなあ彼女。でも助けを求めらるなら、猗窩座殿より俺の方が適任じゃないかな？ 君もそう思わない？..」

「どうだろ。君のことよく知らないから、なんとも言えないかな」

「おっと、まだ自己紹介をしていなかったね。俺は童磨って言うんだ

「……君は？」

「ご丁寧にも。僕は飛鳥千里だよ……というか、無惨に聞かされてるだろ？」

「そっか、君が！ 君が飛鳥千里……」

「……姿は教えられてない、のか？ そんな非効率なことする理由もないけど……いや、待てよ？ 鬼から視界をジャックするのはともかく、無惨から鬼へ脳内動画配信サービスをするのは、意外と手間がかかるのかもしれないな。わざわざ配下へ配慮する性格でもないだろうし、口頭で伝えただけの可能性も充分にある。なんか感慨深げに見られてるのは謎だけど。」

「でも嬉しいなあ。ほとんどの剣士は問答無用で斬りかかってくるし、名乗り返してくれる人なんていつ振りだろう！ たとえすぐにお別れするとしても、挨拶は大切だよな」

「うーん……鬼殺の剣士は侍じゃないし……今から殺すか食われるかの相手に名乗るほど、奇特な人間は少ないだろうね」

「悲しいなあ。会話は人間と鬼だけに許された、相互理解の手段なのに」

「……君は本当に他人を理解しようとしてるのかい？」

「勿論だよ！ でも、さつきも言ったけど——みんなすぐに剣を向けてくるからさ。敵わないと知ってるのに立ち向かうなんて、本当に愚かだと思う。でもね、それこそが人間の尊さ……そして儂さなんだよ！」

「……そう」

「適当に会話をするだけで時間稼ぎに付き合ってくれるとはとても有り難い。何一つとして共感や同意はできないが、逃げる手間がかからないのは非常に助かる。もし逃げ込んだ先が乱戦状態とかだったら、現状で最強の鬼をそこへ連れていくことになってしまおうし。鬼は同士討ちの心配をせずともよいが、人間は違うのだ。多対多の戦闘で有利になるのは鬼の方である。だからここで増援を待つのがベターだろう。」

「僕もお喋りは好きだから、君が満足するまで付き合ってもいいぜ」

「わあ、本当かい？ 優しいね。だけど……俺に優しくしてくれる人は、いつも俺を憐れんだ目で見ているのが不思議だなあ。君もそう」  
「…そう、かな？」

「うん。前にお喋りに付き合ってくれた娘もそうだった。いつだったかなあ……ああ、思い出した！ 確か花の呼吸を使う、優しくて可愛い娘だったよ。彼女も俺を不憫そうな目で見てたなあ——そういうえば朝日が昇ったせいで食<sup>救っ</sup>べてあげられなかったんだっけ」  
「…」

…本当に、なにもかもが理解できない。どんな考えに至れば、食人が救いに繋がるんだ？ こちらの神経を逆撫でするためとか、皮肉で言っているならまだ解る。しかし彼は、真実それが救いだと信じているのだ。

鬼の精神構造は、植え付けられた衝動やらなんやらを除けば人と大して変わらない筈……ならば彼の思考は、鬼だからという訳じゃないだろう。

『精神病質』——いわゆるサイコパス、サイコパシー。

人の精神は複雑怪奇で、精神障害の診断方法や線引きも割と曖昧だが……とは言え、そもそも百人に一人はサイコパスの気ぐらいあるし、予備軍も含めれば更に多い。

漫画やアニメに影響されたファクションサイコパスもいるだろうし。だから実際のサイコパスのほとんどは、普通に社会生活を送っている『一般人』である場合が多い。

しかし、ここまで極度の精神病質ともなると話は別だ。恐ろしい程の共感性の欠如……そして、自身の行動を絶対的な正義として疑わないエゴイズム。心にもないことをつらつらと並べ立てる虚言の傾向。鬼としての性質も相まって、最悪としか言いようのない存在に成り果ている。

そうだ、彼の言う通りだ。これが『憐れ』じゃなかったらなんなんだ？ 悪事を悪事と認識できず、罪悪感というものをどうしても感じられない。『鬼』と『人』の差よりなお遠い、本当の意味で違う生き物なのだから。

得てして、こういった性質は先天的な遺伝によるものと、前頭葉の異質な構造に由来するものが多い。育った環境による後天的なものだと主張する人も多いけれど、僕にはそう思えない。

「さて、と……お喋りに付き合ってくれるのは嬉しいんだけど、俺も猗窩座殿の方へ行かなくちゃいけないんだ」

「そんな寂しいこと言わないで、もつと話そうぜ」

「ごめんね。無惨様がいなくなった以上、鬼を増やす手段は限られるから……残った鬼の保護は急務だよ」

「…なんで？　今まで聞いた君の言葉が真実なら、無惨と君の目的は違ふよね。鬼を増やす意味も、残す意味も——童磨、君には無いと思うけれど」

「確かにあのお方には、俺のように『人間を想う気持ち』がただの一片も無かった。でも鬼にして頂いた恩もあつたし、優先すべきは俺の使命よりも無惨様の命令だったよ」

「…」

「だけど、悲しいことに無惨様はもう死んでしまったんだ。だったらもう……俺の使命を優先していいよね？　——今までよりもずっと多くの人々を救う使命を」

「…じゃあ質問を変えるよ。そもそも、なんで食べることが救いなんだい？」

「死ねば人は救われるだろ？　悲しみも苦しみも、痛みや空腹とも無縁になる。そして俺の血肉となり、永遠を共に生きられるんだ」

「でもそれじゃあ、きつとあつた筈の嬉しさや幸せも無くなってしまう」

「まさか、幸せな人を食べたりなんかしないさ！　俺は、俺のところにも悩みや苦しみを打ち明けてくれる人を救うこと食にしているんだ。『万世極楽教』って言うてね、俺はその教祖なんだよ」

「…鬼殺隊の剣士だって何人も食ってるよね」

「怒りや復讐に囚われた可哀想な人達も、救う対象さ」

「…そっか。でもね……一緒に泣いてあげたり、一緒に悲しんであげるだけでも人は救われるよ。苦しみや悲しみが無い人生も、嬉しさや

幸せがない人生も、どっちだって不幸さ。相談された時点でその人が不幸だったとしても、殺してしまうのは間違ってる。少なくとも、君へ救いを求めた人間は——幸せになりたくて君の元へ訪れた筈だ」

「うんうん、わかるよ！でも人は幸せを感じるために不幸を知らなくちゃいけない。そして幸せを享受し続けると、今度は幸福を幸福と認識しなくなる。つまり……どう生きようとも、人は不幸になる運命を背負ってるんだ。そんなの可哀想だよな？だから俺が救わなくちゃ」

…ああ、やつとわかった。彼は負の感情こそある程度理解しているけど、嬉しいとか楽しいとかいった感情がほとんどないんだ。それはサイコパスとはまた違った疾患。不幸を乗り越えた時の達成感や、不幸を塗り潰すほどの幸せを感じたことがないんだ。そうになると、『救う』という考えに至るのもある意味当然といえる。

「そろそろいいかな？」

「うん、応援も来てくれたみたいだし……防戦に徹しても、時間は僕たちに味方しそうだからね。この速度はきつと柱——」

「ウハハハ!! 強え鬼の気配がビンビンするぜえ!!」

「——あ、ごめんやつぱりもう少し待って」

「やあ、面白い子が来たね」

伊之助エ……いやまあ、彼も善逸も凄く強くなってるけどさ。毒を使わないしのぶちゃん相手なら、十分に勝ちの目はあるくらいに成長してる。だから戦力的な意味では心強いんだけど、問題は性格の方だ。攻撃主体の戦い方と防御主体の戦い方では、生存率が大きく違う。

しかし伊之助に『仲間が揃うまで待て』と言って、やってくれるかといえば……うーむ。できれば義勇か小芭内あたりが来てくれれば良かったんだけどな。

水の呼吸とその派生の呼吸は防御に秀でているし、全体的な生存率も高い。というか水の呼吸以外は『やられる前にやれ』って感じの呼吸ばっかだし。まあ鬼の再生能力や体力を考えると当たり前前の戦法なんだけどさ。

「伊之助！ 戦力が揃うまで無茶は——」

「上弦の弐！ 上弦の弐だなテムエ！ 相手にとって不足なしだオラアア！」

くっ……！ 仕方ない、一緒に頑張ろう。それに僕が最も呼吸を合わせられるのは、実のところ伊之助なのだ。訓練に付き合った時間は炭治郎くんや善逸と同じくらいだが、そもそも呼吸の系統からして、三人の中で伊之助だけが僕と同じだし。

『獣の呼吸』も『避の呼吸』も、突き詰めると『風の呼吸』に近い性質を持つ。山育ちつてのも一緒だから、動きがとても合わせやすいのだ。

「どらア!!」

「——どわあっ!? なんで僕に攻撃すんの!?!」

「不用意に近付いてんじゃねえよ！ なんかヤベエのが漂ってんだろうがー！」

「わあ、よく気付いたね。人の目に見えるような術じゃないのに」

「えっ……ああ、なるほどね。見える見える、見えるわー、めっちゃ見える」

「本当かい?」

「うん。でも気付いた以上は効果なしだぜ！」

「そっか。でも一応解除はしないでおうかな」

「くっ……!」

むむ、僕も目はかなり良い方なんだけど……カナヲちゃんレベルなら視認できるのかな? どちらにせよ、僕にはうまく感じ取れない。伊之助は肌で感じているようだが、僕にはそこまでの技能もない。とはいえ、気にせずその周辺へ突っ込んでいる伊之助の様子を見れば——効果範囲と対処法はわかる。

要は薄い毒煙のようなものを張っているんだろう。伊之助のように上半身裸の状態で平気なことを考えれば、経皮毒でもない。術者の近くで呼吸をしなければ問題はない……と見ていいかな? しかし数秒とはいえ上弦の弐と斬り結ぶ程の技量——伊之助の成長は、僕の想像の更にも上を行っているようだ。

「あはは、強い強い。でも攻撃役が一人だけじゃ厳しいんじゃない?」  
「生憎と、僕は援護専門なんだ」

「そうかな? 何か狙ってるように見えるけど……うーん……あ、もしかして無惨様に使った毒とか?」

「わお、鋭いね。掠っただけで即死の毒だぜ!」

「…本当かなあ? …演技にも見えるし、そうでもないような……隠すのが上手いね、君」

「よそ見とは余裕じゃねえかオラア!」

「おつと危な——えつ?」

おつ、あれは確か開発中の新技……腕の関節を外してリーチを伸ばすとかいう意味不明な技だ。あまりに意味不明すぎて僕も触られかけた覚えがあるし、もちろん童磨さんもしっかり食らっっておられる。しかも瞳に傷——千載一遇のチャンスだ。一秒もせずに治るだろうが、視界が戻る前に毒を打ち込めればあるいは……!

「ちっ! 頸は外したか!」

いや、充分だ伊之助。致死量を打ち込む時間はないが、無惨の血液を研究して作製した強力な毒だ……少量でも分解に多少の時間はかかる筈。動きが鈍れば頸を斬る際は十二分にできるだろう。

人間化薬はもまだ残ってはいいるが、あれは効果を発揮するのにそれなりの量が必要になる。あまり攻撃には向いてないし、サポートに使うなら毒の方がいい。

「——っ! おい!」

「えつ? えつ……いや、ちよつ」

いや、ちよつ、なにこれ百式観音? 奈良の大仏? ドデカイ氷の観音さまが瞬く間に出現し、僕と童磨さんの間を塞いだ。しかしタイミング的にもう止まれない——考える間もなく、飛び上がって大仏の頭を蹴り砕く。その勢いそのまま特製のアンプルを投擲したが、弾かれってしまった。

…まずい、肺が妙に痛い。

「わあ、もしかして吸っちゃった? だったらもう無理しない方がいいよ。呼吸を使えば使うほど肺胞が壊死していっちゃうからね」

「……っ！」

肺胞が壊死……？ それは——まずいなんてもんじゃなく、ヤバい。呼吸の生命線が肺ってのは言わずもがな、『肺胞が傷付く』『呼吸で傷を回復させる』というプロセスは、肺という臓器にとって致命的なダメージを与える。

人間の臓器というものは基本的に再生力が高く、ほんの一部からでも元通りになったりするが……肺は再生しない臓器の代表である。

もちろん多少の傷であれば回復はするが、負傷と回復のサイクルを繰り返すと肺は『繊維質化』して機能不全に陥るのだ。

正に呼吸を使う剣士を殺す最適解だ……仮に殺し損ねてしまっても、確実に再起不能にする血鬼術。上弦の弐に相応しいエグイ技。

「ぐっ……！」

「おい！ 無理すんな！」

「それにしても凄いねえ。俺の氷、鉄並に固いんだけど……まさか蹴り碎くなんて！ 君って本当に人間？」

……呼吸を使用すればするほど、痛みが強くなっていく。しかし呼吸を使わずに上弦の攻撃を回避できる訳もない……このまま使用し続ければ、五分と保たないだろう。まさか『時間が味方する』とか言っていたのがフラグだったのか？ くそ、どうしろって言うんだこんなの。

五分……正確には『呼吸』の精度を保てるのが五分といったところだろうか。そこから身体機能の強化も質が下がり始め、日常生活にも支障をきたすレベルの損傷になると予想できる。

——どう足掻こうが、『戦場に出る人間』としての僕はこの時点で終わってしまった。仮にこの戦いを生き残っても、元通りに呼吸が使えないことはないだろう。なら、後はもう……

「可哀想に。なんて憐れなんだ……君のその目。俺に向かってくる剣士のほとんどが、最後にその目をするんだ。自分の命に代えてでも、って瞳——でもね、その願いが叶ったことはないんだよ」

回避を一切考えず、タツクルと同時に毒を打ち込む……できるだろうか？ お爺ちやまの時は、完全に予想外の一手だったからこそ成功



したようなものだ。『今から攻撃します』と宣言しているような状態で、どこまで食らいつけるか。動き自体は僕の方が速いだろうが、相手の動きが非常に読みにくいのだ。

動く意思が薄いと云えばいいのか、動きに意思が乗っていないと言えばいいのか。猗窩座さんは相手の意識を読んで攻撃をするのが得意だったようだが、それ故に童磨の後塵を拝していたのだろう。

「伊之助。最低でも動きは止めてみせるから、頑張つて頸を斬つて——いっだっ!？」

頭突きっ！　なぜ僕に！　というかこんな隙を見せたら危なすぎでしょ！　いま攻撃されていたら、二人とも死んでいたんじゃないだろうか。なんだか興味深そうにこちらを見ているが、何に對してどう考えるか想像もつかない相手だ。いつ気が変わつて攻撃してくるか、わかつたもんじゃない。

「お前は逃げんのが仕事だろうが！　…役に立てねえんならさっさと逃げやがれ！　あんな雑魚鬼、俺一人で充分なんだよ！」

「いや、だから役に立てる内に立とうと……」

「うるせえ！　あいつの頸は俺が斬る！」

「いや、だからその補助を——っ！　伊之助、待つ……」

……っ！　いつもいつも僕の言葉の反對に走つて……　たまには言うこと聞けよう。僕の心配なんて、君の柄じゃないだろ。こんな場面で成長を見せないでくれよ……！

「美しい思いやりだねえ。けどごめんね、君の毒は危なそうだし——」

先を走る伊之助のサポートをしようと走り出したが、小さい氷人形が僕の行く手を塞いだ。形は童磨さんそっくりで、技も速度もオリジナルに近い動きをしている。この人形からも冷気の毒が出ているようで、凍るような空気が更に肺を蝕もうと、薄く漂い始めたのがわかつた。

「——来るんじゃない！」

「あはは、君一人じゃ無理だよ。その変な動きにも慣れてきたし……」

ほらほら

「がっ……!？」

…！ 血鬼術にしても、体術にしても、まだ本気を出してはいなかったのか……僕が一瞬だけ躊躇してしまっただけに、伊之助が攻撃をまともに食らってしまった。逸はやって動きに精彩を欠いていたのは、僕の負傷と無関係ではないだろう。蹴りによる一撃だったのが救いだが——骨の折れた音が耳に響いた。

「わあ、この被り物よく出来てるねえ！ 手作りかい？」

「ご、ぼつ……テメえ、返しやがれ……！」

「無茶したらダメだよ。あばら骨、二本は折れた感触だったし……？ 君の顔、どこかで見たことあったっけ……？」

「伊之助！」

「……あれえ？ また肺を傷付けてまでこっちにきたんだから、俺を攻撃した方が良かったんじゃないかなあ」

「……」

口から血を吐き出しながら、盗られた被り物に手を伸ばす伊之助。振りかぶられた扇が一閃する前に、僕が彼を抱えて離脱したが——これで頸を斬れる人間がいなくなってしまった。

吐血したということは、折れた骨が何らかの臓器に刺さってしまったのだらう。呼吸で回復を早めたとしても、すぐに動けるような傷ではない。

ここで追撃でもされれば、完全に終わりだったが……しかし目の前の彼は、伊之助の顔をじっくりと見ながら何かを思い返している。先程の『どこかで見たことあったっけ』という言葉通り、記憶を掘り返しているのだろう……いや、実際に脳みそをほじくり返している。キモッ。でもいま突撃したらいけるかな……？ あ、やめちゃった。

「そっか！ 君の顔、母親にそっくりなんだ。確か名前は『琴葉』……頭はよくなかったけど、歌が上手くて心の綺麗な女の子だったなあ」  
「がっ、ふ……俺に母親なんかいねえ……！ 俺を育ててくれたのは猪だ……！」

「伊之助、喋っちゃダメだよ。敵の言葉なんか気にしないで」

「猪から人間は産まれないよ？ 育てたのは猪でも、君を産んだのは人間の母親だよ」

「…っ！ だからなんだ…！ テメエには関係ねえだろうが！」

「まあまあ、そんなこと言わずにさ。こんな巡り逢い、ちよつとした奇跡だよ？」

感慨深げに、伊之助の母親の過去を語りだす童磨。彼にとっては単なる昔話なのだろうが、受け取る側にとつては聞くに堪えない昔語りだ——息子からすれば、尚更だろう。

無理に動くと思死んでしまうような傷なのに、伊之助は体を小刻みに震わせて立ち上がろうとする。恐れによる震えでもなければ、痛みによる震えでもない。殺意の籠もった、怒りによる震え。

…ああ、僕に足りないものだ。鬼殺の剣士は、そのほとんどが怒りと復讐を胸に秘めている。『復讐は何も生まない』などとよく言うが、実際に彼らを目にすればそんな理屈は彼方へ吹っ飛んでしまう。人が絶望から立ち上がる原動力は、剣を取る理由は、希望ではなく『怒り』なのだ。

「…っ、はっ、ぐ…」

「苦しそうだねえ。そろそろ限界でしょ？ そつちの子も威勢はいいけど、上手く呼吸が出来てないね。もしかして肺に骨が刺さっちゃったかな？」

「…っ、伊之助…：…行ける？」

「あゝ、たりまえだろうが！」

もう逃げることはできそうにないし、時間が経てば経つほど不利になるのも間違いない。神風特攻も玉砕アタックも柄じゃないが、死ぬまでに来ることをしなければいけない。もう外部協力者なんかじゃないんだ…：…鬼殺隊の一員として、少しでも後続に繋がる何かを考えないと——

「無理したって苦しいだけなのに、頑張るねえ。破れかぶれが実ることなんてないよ？」

「っ、どうだろう、ね——…っ！」

もう近付かせる気もないのか、彼は氷人形を二体繰り出してきた。だけど、もう冷気も何も今更だ。気にせず近付き、蹴り碎いた後で改良型ゴキ爆弾を投げつける。どうにも攻撃が当たらないし、ここは突

拍子もない手段に頼れば突破口も見えるかもしれない。

「…」

「…」

「…」

「触れただけで鬼を崩壊させる毒虫…！　これが僕の奥の手だ——ゲホゴホツ！」

「いや、流石にもうちよつと信憑性がないと……っ!？」

改良型は本物のゴキブリすら使っておらず、全てが精巧な玩具である。しかしその一匹一匹に、天元仕込みの火薬を忍ばせてあるのだ。上弦の陸だって怯むぐらいはしてたし、多少の効果はある筈だ……まあ問題があるとすれば、結構な衝撃を与えないとそもそも爆発しないところだろう。

でも微妙に性格悪い彼のことだから、扇で全部叩き落すくらいのこととはやってくれるんじゃないかと期待して投げてみた。そして目論見通り、童磨の眼前で弾けまくるゴキたち。伊之助は——ダメだ、氷人形を突破できていない。

手持ちのアンプルは残り三本。そのうち二本を直接刺そうと試みるが、上手く避けられた……それどころか、扇で叩き落とされる有り様だ。

「…君って、何かちぐはぐだよね。氷を砕く時は凄く良い動きをするのに、攻撃する時は途端に鈍くなる」

「…っ」

…そんなの自覚してる。だけど、自覚してようがどうにもならないことだつてあるだろう。それがすぐに修正できるんなら、僕はとつくの昔に柱になつてる。

「…、のっ…！——うゝわっ!？」

「あはは、自分で爆発させちゃ意味ないよ？　火薬は取扱いに気を付けなくちゃね」

「ぐっ…」

…少しずつ解ってきた。この鬼はその気になれば、もつと攻勢に出ることが出来る。だけど、基本的には『見』に回ることを戦略として

いるのだ。その慎重な気質が生存率を上げ、彼を上弦の式にまで至らしめたのだろう。慢心や油断をしているように見えて、その実どんな状況でも対処できるよう冷静さを保っている。

新しい技や道具を見せればまず退いて、じつくりと観察してくる。不可解な動きをした時も同様に。僕がわざと自分の近くでゴキを爆発させた時も、チャンスと見て押してくるようなことはなかった。

「うーん……そんなにポンポン爆発させて、何か意味があるのかな？」  
「さあ……どう、かな。っ、ぐっ——」

「あ、肺から直接空気が漏れだしてきたね。そろそろ『呼吸』使うのやめないと、本当に死んじゃうよ?」

「使う」のやめたらやめたで——ぐう。っ、殺される、からねえ!」

「うん、それはそうかな。でも苦しむ時間が少なくてすむよ?」

「——そう、かな?」どっ、ちも、一緒くらい。さ。伊之助の時も……そうだったけど、耳は僕の方が良いみたいだし」

「……?」

わざわざ大袈裟に動いて壁際まで移動してきたのも、ポンポン爆発させて騒がしくしたのも、彼女が近付いてくるのがわかったからだ。鬼はとても鼻が利くけれど、耳に関してはそうでもない。そして何より、僕がしのぶちゃんの気配を間違える訳もない。

——壁まで追い詰めた彼に、最大限に力を込めた蹴りを放つ。もちろん当たるとは思っていないけれど、鉄並みの硬度を持つ氷だって碎ける僕の脚……木製の壁に大穴を空けるくらい簡単だ。そしてここまです隙を晒せば、まず間違いなく扇で斬りかかってくるだろう。

敵の攻撃直後こそ、反撃のチャンス。そのセオリー通り、彼は僕を攻撃して——当然そこにも数瞬の隙が生まれる。もちろん攻撃を受ける僕には反撃なんて出来やしないが、もう一人いれば別だ。

そしてしのぶちゃんは柱の中でもっとも頭の回転が速く、状況判断も速い娘だ。いきなり壁が壊れても思考を止めず、即座に冷静な対応を……つまり敵を攻撃してくれるだろう。それに、しのぶちゃんが仇を討とうとしてる鬼はたぶん——

「——しのぶちゃん! 剣を——」

「…っ！」

成功率も怪しい、策とも言えない策だけど……これが僕にできる限界だ。元々が詰みのような状態だっただけに、上出来と言えるだろう。後は伊之助が無事でいてくれれば言うこと無しなんだけどねえ。しかしこの土壇場で、最善のタイミングを掴めたのは僥倖だった。

童磨さんにとって、もう攻撃を止められない絶妙の瞬間。僕の声が耳に入り、それを理解するまでは刹那の時間だろう。だけど……しのぶちゃんは鬼の頸を斬れない柱ではあるが、突きの速度だけは全剣士中最速だと断言できる。この状況にあって、最も適した人間に違いない。

——予想していたより軽い衝撃に、薄く目を開ける。死にかけて毎回のごとく瞳を閉じてしまうのは——もう癖と言うか、人間の本能だから仕方ないだろう。僕は訓練された剣士じゃないのだ。

そしてまず目に入ったのは、飛び散る鮮血。斬られると『痛い』じゃなくて『熱い』というのが、お爺ちやま戦での経験則なのだが……氷で出来た扇だから、瞬時に冷やされて感じなかったとか？ というか、童磨さんが遠い。しのぶちゃんが視界に入っていない。

懐が少し重く、温かい。思わず視線を下げると、しのぶちゃんが僕を押し倒すように覆い被さっていて……そして、右肘から先が消えていた。

「あつ、はは……！ 少し驚いたけど……せつかく色々と考えて策を練ったのに、台無しになっちゃったねえ。でも仲間を庇う自己犠牲の心——すごく美しいと思う」

「…っ」

……しのぶちゃんの優しさまで計算に入れなかった、僕のミスだ。彼女を抱え、伊之助の所まで後ずさる。あの大怪我だったのに、氷人形を倒したのか……だけでも限界だろう。しのぶちゃんも利き腕を斬り落とされた上、剣は鬼の足元だ。この状況で彼を倒す手段は、たった一本残ったアンプルのみ。正直、勝てる気がしない。

「…っ、すみません、千里」

「ううん。助けてくれてありがとね、しのぶちゃん」

「…おや？ 君のその羽織…：さつき話した、花の呼吸を使ってた娘と同じだね。もしかして姉妹かな？」

「…っ！ お前が——姉さんの仇…！」

怒りに震えるしのぶちゃんの腕を、縄でキツく縛る。早く処置をしないと失血死する…：というより、このままでは三人共死んでしまう。増援はまだ来ないのか？ 想像以上にこの建物は広いのだろうか。

とにかく、ギリギリとはいえまだ動けるのは僕だけだ。伊之助の刀を一本だけ借りて、二人の前に立つ。

刀で斬る振りしてアンプルを刺す…：いやあ、お猿さんでももうちよつと知恵を働かすだろう。しかし他に取れる手段が、本当じゃないのだ。呼吸をまともに使えるのも、あと一分といったところだ。もうデウスエクスマキナ都合のいい神様でも出てきて、全てをパーツと解決してくれたりしないものか。なんか凄い力を与えてくれるとかでもいい。

…いや、凄い力はもう持つてるんだ。僕が使いこなしていないだけで。つくづく情けない…：こんなことになるんだったら、実弥が稽古を付けてくれようとした時に断るんじゃないやなかつた。

『剣は苦手だア？ 巫山戯たこと言ってるんじゃないやねえよ。テメエみてえな奴を遊ばせとく余裕なんざ、鬼殺隊にねえだろうが』

『いやもうほんと、才能がないの。悲しいほどに』

『あア？ …オラアツ！』

『おあ、あっ!? 何してくれてんの!?!』

『避けれただろうが』

『避けるのは得意なんだってば!』

…僕たち三人を見て、涙を流す童磨さん。またぞろ『憐れ』とか言い出すのだろうか？ 実はやっぱり嫌味だったりしない？ 鬼でもサイコパスでもなければ、悲鳴嶼さんと気が合いそうな御仁である。できればずっとそのまま置いてくれないかなあ…：増援が来るまで。

『テメエの避け方はなア、完全に相手の動き見切ってるんだろが』

『…？ だから?』

『見切った上で、自分の動きも完璧に制御できてやがる』

『まあ、そうじゃないと避けられないし』

『才能なんてもんはなア、そんな曖昧じゃねえんだ。頭で考えた動きと、実際に体を動かした時の差異が少ねえ奴のことを言うんだよ。少なくとも、剣士の才能はなア』

『…』

『敵の動きも読めて、自分の動きも完全に制御できてる奴が、剣だけ振れねえ』なんてこと、有り得ねえよなア？』

『それは…』

ああ、まったくその通りだ。そんなの言われるまでもなくわかった。だからそれは体の問題じゃなくて、きつと心の問題なんだ。刀で、鉈で、斧で鬼を殺そうとしていた子供の時分…：…剣が苦手だなんてことはなかった。いや、今だって本気で苦手だなんて思っちゃいない。

精神的には、刀を持ったり振ったりすることに抵抗はない。だと言うのに、実際に刃物を扱うと感覚がズレるのだ。それに理由があるとすれば…：…たぶん、両親のことがトラウマになっているのだろう。

彼らが僕を置いて、ほとんどの財産を持って夜逃げした理由…：…それは間違いなく、鬼を殺そうと試行錯誤していた僕の姿を見てのことだ。

当たり前だ。当然だ。化け物を切り刻む我が子<sup>化け物</sup>を見て、正常でいられる方がおかしい。だけど僕だって人間だから、完全に感情を制御できる訳でもない。怖がられて当然だと頭で理解していても、やり切れなかったし悔やみきれなかった。そもそも鬼を殺そうなんて考えなければ、家族一緒に暮らせていたんじゃないかって。

もちろん現実的なことを考えれば、鬼を退治しなければ自分が殺されるだけだ。逃走が主だったとはいえ、罠にかけて殺してきたりはしたんだから、別に大層なトラウマを持っている訳ではない…：…と自分では思っている。ただ鬼に対して攻撃をする際、微妙に感覚がズレてしまうだけだ。拳や蹴りであればまだマシだが、刃物となると本当に酷い。

——きつと、両親が消えた直接の原因だからだろう。あの時…：…僕



を見つめた、両親の『恐怖の目』の記憶がそうさせるんだろう。ただ僕がそう思っただけかもしれない。本当は恐怖の目なんてしてなかったかもしれない。実際、彼らが消えてしまうまで夜逃げなんてされるとは思ってもみなかったのだから。

「ああ、本当に……神様はいるのかもしれないね……！」

「…千里。あいつは何を言っているんですか？ 率直に言っただけで気持ち悪いです」

「さあ……僕も彼の言うことは、理解できない部分が多いから」

「ひどいな。でも俺はね、本当に感動してるんだ。俺の前に現れた三人……全員が全員、ただならぬ因縁があるんだよ？ こんなの、奇跡なんかじゃ説明のつかない——そうだ、神様が巡り合わせた運命かもしれない」

「…君が人を食う鬼で、しのぶちゃんや伊之助が鬼狩りの剣士である限り、運命じゃなくて宿命じゃないかな。それに、僕は君なんて知らないよ」

「うんうん、直接は会ったことがないからね。俺が言っているのは君の両親——飛鳥万里子と飛鳥彩善のことさ」

「え……？」

「…なんだ？ 何を言っているんだアイツ。もしかして僕の前から消えた後、両親は……あの鬼と出会って、殺された、のか……？」

「俺の両親はね、とても愚かな人間だったんだ。父親は色狂いで、次々と女信者に手を出して……母親はそんな父親をめった刺し、それで自分も服毒自殺。年端もいかない俺を教祖に祭り上げた挙げ句、自分勝手に死んじゃって……本当にどうしようもない人たちだった」

「…」

「けどね、君の両親は本当に素晴らしい人間だった。『これが私たちの全財産です』って。『どうか鬼に魅入られた息子を……千里を救ってください』って、教祖である俺に救いを求めてきたんだ」

「…っ！…っ、な……」

「…なんだ、それ。そんなの、そんなふざけたこと——」

「俺はそれを聞いて、感動で打ち震えた。一人息子とは言え、全財産を

差し出してまで助けようとしたんだよ？ それを——鬼である俺の元へ頼みに来た愚かさが、とても悲しくて……！ 俺はね、普段は女しか食べないんだけど……その時だけは父親の方もちゃんと食べてあげたんだ！ 救われるべき存在がいるなら、きつと彼等のような人たちだからって——」

「——もう黙れ」

……そうか。これが……しのぶちゃんや炭治郎くん、実弥や剣士のみんなが胸の内でも燃やしていた感情か。どうしようもなく込みあがる、狂った獣のような衝動。理不尽に対する怒り。大切なものをあつけないで奪われた時の、それを知ってしまった時の感情。

「……怒らせちゃったかな？ ごめんよ、苦しいよね悲しいよね……すぐに俺が救ってあげよう」

……呼吸の仕方は知ってる。そもそも『呼吸の才能が無い』というのは、『避の呼吸』の才能がないってだけの話だ。炭治郎くんのやり方を見て。大叔父様の記憶を見て。自分にもできるだろうことは解っていたけど、それは戦うための呼吸だったから……刀を振るうための呼吸だったから、使えるけど使えないと知っていたから。

「まだ呼吸を使う気かい？ なんでそんなに頑張るの？ それに、復讐は虚しいだけだよ」

「……ここに、父さんと母さんが、い……たら……ゲホッ、女の子一人守れないのかって……怒り、ながら、応援してくれ、そう……だから、ねえ」

「痛々しい姿だね……大丈夫、俺がすぐに救ってあげるから。もうそんなに苦しい呼吸を使う必要なんてないんだよ」

「……大丈夫だよ。人生最初で、人生最後の『呼吸』だから」

刀を振るう大叔父様の姿……寸分たがわずイメージできる。イメージできたなら、その通りに僕は動ける。もう剣を振る自分への抵抗なんて無い。満身創痍の体で、今にも倒れてしまいそうなのに——誰かが両肩を支えてくれている。

薬に頼って出したまがい物の痣が消える感覚……額に熱がこもる。

日常生活に戻るかも怪しい肺の損傷具合だけど……この瞬間だ

けは、まるで大叔父様が乗り移ってくれたように自然と呼吸ができた。

『日の呼吸』拾式ノ型——『炎舞』

「…えっ？」

上段からの振り下ろしと、下段からの振り上げ。まったく反応ができていない彼が、間の抜けた声を上げたと同時に…頸が真上に跳ね、胴体が袈裟懸けにずり落ちた。勝利の確信と共に、肺の激痛が襲ってくる。めっちゃ痛い。

「千里！」

「ゴホッ…しのぶちゃん、右手は大丈夫？」

「あまり大丈夫とは言えませんが、縄と呼吸で止血はしています」

「伊之助は？」

「だい」じょうぶにぎまつでんだろ…！ がふっ！

「ぜんぜん大丈夫じゃなさそ——ごっ、げほっ」

「どっちも大丈夫ではありませんね。早く処置をしないと…っ！

これは——」

まったく…やつと倒したつてのに、一息入れる間もなく事態は続くようだ。建物全体が軋みを上げ、揺れ始める。これは…血鬼術が解除されようとしているのかな？ ということは、この空間を操る鬼を誰かが倒したのだろうか。

猗窩座さんがそちらに強制召喚されたことを考えると、彼も誰かが倒したのかもしれない。これは鬼殺隊の大勝利ってことでいいのかな？

「千里…姉さんの仇を討ってくれてありがとうございます」

「え？ ああ、うん……どしたの、急に」。お礼なん”て後でも”…」

「いえ、これが最後かもしれませんから。どうしても言っておきたかったんです」

「えっ」

「異空間を操る類の血鬼術は、術者が死ぬと崩壊します」

「…崩壊すると?」

「巻き込まれて死ぬ確率が半分、外に投げ出される確率が半分といったところですよ。出口を知っていれば話は別ですが…探している暇はなさそうですね」

えっ、聞いて…聞いてないよ? 誰か言ってた? 責任者出て来てプリーズ。頑張って生き残ったと思ったら、そこから更に生存確率五十パーセントとか酷すぎるってばよ。

なんでそんなに落ち着いてるのしのぶちゃん! 燃え尽き症候群? 燃え尽き症候群なの? 仇は死んだんだから、次は自分の人生を生きる番でしょ! そんなやり遂げた表情してないで!

「ああ、あああ! 震度七! 震度七くらいある今! ううう…! せめて——せめてその腕の中で死なせてしのぶちゃん! …ああっ! 片方しかないっ!」

「少しは気遣いなさいっ!」

「——げふうっ! じゅ、重傷者になんてことを…」

「いゝがいとへいゝきぞうだなオイ…」

床が傾き始め、いよいよヤバい感じになってきた。木片やらなんやらがバラバラと舞い散り、上下左右の境界もあやふやになってきている。上に吹き上がるのか、下に叩き落されるのか…どちらにせよ、今の体では強い衝撃に耐えられそうもない。なんとか穩便に終わってほしいものだが…うわっ! まるで洗濯機の中にいる気分だ。床、壁、柱、床、木片、首無し死体。

…ん? 死体? 童磨さんの頭はさらっと消えていった筈…と  
うか、胴体は袈裟斬りにした…え、ちよ、まさか——

「飛鳥…千里いい…」

「ギヤアアア! キモいキモいキモい!」

童磨さんの腹から無惨の頭がニョッキして…! 溢れ出る彼岸島感…っ! 誰か丸太持って来て丸太! ひいつ、こっちに向かってきた——

## 最終話

…はて、僕はいったいどうしたんだっけか。周囲は一面見渡す限り海。特に忍術を会得した覚えはないが、何故か水面に立っている。風もないのに波が音を立てていて、なんだか懐かしい気分になる。海の音って何故か郷愁を感じるよね。

しかしなんでこんな場所にいるのか……そもそもどういう状況だったんだっけ？

…うーん……はっ！ そうだ、確か倒したはずの無惨が童磨さんの体に乗っ取って生きていて……崩れる空間のさなか、僕へと覆いかぶさってきたんだ。腹部に感じた激痛と、何かが流れ込んできた感覚。

…！ 男に抱きしめられて……痛みを感じて……何かが流れ込んできた……？ まさかケツを……慌てて自分の体を確認してみると、特に暴行を受けた形跡はなかった。いやあ、一安心——ん？ いや待て、肺の痛みやらなんやらも無くなってるないか？

そしてこの奇妙な世界に立っている状況……ははあーん、もしや死後の世界ってやつか？ ……え、マジ？ 死んじやった感じ？ 鼬いたちの最後っ屁とは、まさに無惨の性格が出てるぜ。いや、最後っ屁ではなくあのまま生き延びてる可能性もゼロではないか。本当に生き汚い男だ。

きつと皆ならどうにかするとは思うけど、近くにいたしのぶちゃんのぶちゃんと伊之助だけが心配だ。もう戦える状態じゃなかったし、どうにか味方と合流できてればいいんだけど。

「…ん？」  
…なんだ？ 目の前にポツンと黒い影が形作られて、段々と大きくなっている。不定形の靄もやのように蠢もよほいて、数秒ばかり経過した後——それは人の形を成した。

「…つくづく気味の悪い男だ。『精神の核』が自我を持っているとはな」

「…！ 鬼舞辻無惨……！」

どういうことだ？ 一緒に死んだから死後の世界でも一緒にとか？

いや、流石にそれは……そう言えば、いま精神の核がどうか言ったな。もしや割とありがちな『精神世界』とかいうやつか？ 炭治郎くんが下弦の壺と戦った時、そんな感じの血鬼術を使用されたらしいが、似たようなものだろうか。まさか実体験できるとは思わなかったぜ。

「よど 澱んだ海色、果てのない不気味な世界……君の心に相応しい情景だね、無惨」

「ここはお前の精神だ」

「深く澄んだ海、広大で優しく包まれるような世界……まるで僕のことを表しているようだ」

「黙れ」

うーん……奴の言っていることが真実ならば、僕の精神に無惨が入り込んでいるということになる。きもつ。というか、もしかして乗っ取られかけてるとかそんな感じ？ 首だけになっても他人を乗っ取るうとか、どこの奇妙な吸血鬼だお前は。カリスマが足りてないぞ、カリスマが。

「復讐、使命、果ては正義感だのと——どれだけ代が変わろうとも、常に愚か極まる鬼殺の剣士共だった。しかし結果的にこうなるのなら、最早それすらも私のための犠牲だったということだろう」

「独り言なら一人の時にお願いできる？」

「お前たちが私の血を研究し、せっせと作り上げた薬……実際にどう作用するかも理解しないままに使用した結果がこれだ。くくっ、お前と言う体を、あの化け物をも超える肉体を、私が手にする……！ 貴様らにとってこれほどの絶望があるか？」

「乗っ取れること前提で話さないでくれる？ それに、さも自分が凄いみたいに言ってるけど全部偶然だよね」

「それがどうした？ …お前たちがよく口にする『報い』という言葉に、蚊ほどの力もないと証明されたのだ。童磨が私を取り込まなければ、お前が童磨の頸を斬らなければ、そしてお前が類を見ない程に上質の稀血でなければ——こんな結果にはなっていない。些細な因果の全てがお前たちを苦しめ、私に追い風をもたらしている」

「ふーん……ならさつさと僕をどうにかすればいいのに。ほんとにできるの？」

「ここが最後だ。精神の核を破壊すれば、この体は私のものになる」

『普通は精神の核に自我などないがな』と呟く無惨。いやあ、僕って転生しても記憶を保つぐらいに自我強いからね。

しかしまあ、なんとさえいいの……童磨さんとは似ても似つかず、心情がわかりやすい男だ鬼舞辻無惨。目の前の彼は僕を恫喝するように、あるいはもう詰みだと諦めさせるように嗤っているが——僕への恐怖が隠しきれない。

いや、僕へと言うより……大叔父様への、か。どうやら『継国縁壺』という存在は、僕が思っていた以上に無惨の心的外傷になっているようだ

そうでもなければ、こんな悠長に話さずさつさと乗っ取っている筈だろう。だから僕にもまだ手段はある……と、ポジティブに考えよう。もしどうしようもなければ、煽りの嵐を言い残す準備だけはしとくか。

「…何が可笑しい。ここに至ってまだ笑うとは、気でも触れたか？」

「君の、生存に対する強い欲求が可笑しくて——かな。もう千年も生きただら？ 有終の美を飾ろうって気はないのかい」

「そんなものは、老いた人間が死を迎え入れるための言い訳に過ぎん。諦観を飾り立てただけの、虚飾と欺瞞だ」

「それが人間ってもんさ。だいたい、それは諦観じゃないね……いつか死んでしまおうとわかっているからこそ、自分の役割を果たすために準備をしてるだけだよ。意思や想い、紡いできた絆をまた繋ぐために」

「とんだ自惚れだな。たかが人間如きに大層な役割など存在するものか。そこらの獣と変わらぬ、ただ生きて死ぬだけのつまらん命でしかない」

「見解の相違ってやつだね。ま、君の思想と相容れるとはまったく思っていないけど」

「…人に役割があるとすれば、それは私のような『人を超えた存在』—

—『完全な生物』に至る可能性を持った存在こそにある。そもそも、貴様のような若輩が人間を語ること自体、烏澁おじがましい」

「さて、こう見えて意外と歳いつてるからねえ。『人間五十年、化天のうちをくらぶれば』……なんて、織田信長に言わせりや僕はもう充分に生きてるしね」

「人間じんかんではなく人間じんかんだ。そもそもとして、人のことではなく『人の世』という意味だ」

「…」

「…」

「続く『一度生を享け、滅せぬもののあるべきか』——この言葉ほど、君に贈りたいものはない」

「何事もなかったかのように続けるな」

くっ……さすが長生きしてるだけあって、知識と教養がパないな。しかし前にお爺ちやまに対して『人間臭い』と言ったものだが、無惨はそれに増して泥臭いというか……なんて言えばいいんだろう。『鬼の祖』という恐ろしい印象が先行していたが、考えていた人物像からは少々違つて見える。

何を置いても、誰を差し置いても、どうしても生き続けたい生物。そのためならば手段を択ばない……本当にどんな手段も厭わない、ただそれだけに見える。いや、実際にそうなのだろう。ただブレーキのかけどころが人とあまりに違うだけだ。

『自分の死か、全人類の死か』。そんな選択を迫られれば、大抵の間は苦悩するだろう。悩んだ末にどちらを選ぶかはともかく、無惨という男はたぶん「悩まない」。ただそれだけのことなのだ。

「——さっさと諦めて体を明け渡せ。鬼にならなければ、どのみち貴様は死ぬ」

「そうかな？ 肺はギリギリなんとかかなりそうだったけどねえ」

「私は『私を構成する全て』を、貴様の腹を抉えぐって送り込んだ。人のままで無事に済む傷ではない」

「一々説明臭いねえ……僕は医者だぜ？ どの程度の傷で人間が死ぬかくらい知ってるさ。あのくらいなら、輸血が間に合えば死にやしな



い。近くにはたまちゃんだって控えてる」

「…」

「だいたいさ、もう『詰み』なの自覚した方がいいと思うよ。童磨も死んで、空間を操っていた鬼も死んだ。君が僕を乗っ取ったところで、すぐに万全な状態で動けるのかい？」

「その程度、数秒とかかるものか」

「この戦いに来てるのは全員が優秀な剣士だぜ。その数秒未満が命取りになる——それだけの時間があれば、誰かが僕の頸を刎ねるさ」

「…私は童磨とお前たちの戦いを見ていた。いま貴様の近くにいるのは、柱の女と猪頭の剣士だけだが…：本当にそれができるか？ 判断を鈍らせるには充分すぎる『情』があったようだがな」

「他の柱も近くにいるだろ？ …ああ、だから焦ってるのか。僕が耐えれば耐えるだけ、君にとつては不利だもんねえ。まあ蜜璃ちゃんとか無一郎なら躊躇しちゃうかもだけど、悲鳴嶼さんや実弥ならきつと斬ってくれるさ」

「こちらに人手を割く余裕があるか、甚だ疑問だな…：猗窩座はまだ生きているぞ」

無惨の歪んだ嗤いと共に、空中に外の様子が浮かび上がる。いや、なにその謎技術。どういう理屈なの？ 僕で精神で変なことしないでほしいんだけど。というか僕の姿まで映し出されているということは、少なくとも僕の視界をジャックしている訳じゃないよね。なんだこれ。血鬼術？ いや、まだ僕の体は鬼になってないし…

「——どうやら猗窩座がお前たちに気付いたようだな。どこまでも、お前たちには逆風だ…：満身創痍の剣士二人で、食い下がれると思うか」

「あのさ、いま僕が殺されたら君も死ぬよね？」

「…」

考えてなかったんかい。というか猗窩座さん死んでなかったのか。ううむ、非常にまずい状況だというのは確かだな…：しのぶちゃんも伊之助も、僕を置いて逃げるような人間ではない。現に、迫りくる猗窩座さんを前に立ち向かおうとしている。

いや——しのぶちゃんが前に出て、僕を抱えて逃げるよう伊之助に指示しているようだ。そしてそんなしのぶちゃんの前へ出て、お前こそ逃げやがれと気炎を吐く伊之助。

しかしそれを認めず、更に前へ出るしのぶちゃん。邪魔だボケ、と更に押しのける伊之助。コントやってないで早く逃げてほしいんですけど。

ああ、数秒後には物言わぬ骸が三体出来上がってしまう——しかしそんな絶望を断ち切るように、霞がかった速度で一人の剣士が姿を現した。

『破壊殺——……っ!? ——ククツ……！ 生きていたか！ 嬉しいぞ無一郎！』

『馴れ馴れしく呼ばないでくれる？ あと僕はぜんぜん嬉しくないから』

キャー！ 無一郎くーん！ なんてカッコいい登場の仕方なんだ……！ しのぶちゃんが惚れてしまわないか心配である。彼は二人を守るように猗窩座さんの正面に立ち——そしてその瞬間、どこからかトゲ付きの鉄球が現れ、猗窩座さんの顔面へ投げつけられた。まさか、ガンダム！ ……ではなく、悲鳴嶼さんだった。中々にツツコミどころの多い武器である。

すんでのところで奇襲を躲した猗窩座さんであったが……しかしこれで形勢は二対一。俄然こちらが有利になった。だというのに、そんな状況を嘆く様子はまったくくない。むしろ笑顔が増したように見える。

『才ある若い剣士……そして技、肉体ともに練り上げられた至高の剣士……！ これほどの戦いを経験したことは、未だかつてない！ 崩壊に巻き込まれての幕引きなど、味気ないと思っていたところだ！』

めっちゃ楽しそう猗窩座さん。妙だな……僕と童磨さんへ攻撃していた時には、こんな嬉しそうじゃなかったのに。僕たちの実力は、彼ら二人——オジシヨタコンビにだって負けていなかった筈だ。もしかして僕らが好みじゃなかったのかな？もしかしたら猗窩座さんはオジコンかシヨタコンだったのかもしれないな。

「悲鳴嶼さんが来たならもう大丈夫かな……正直、一人でも猗窩座さんに勝ちそうな気がするし」

「…腐っても上弦の参だ。柱数人分の实力は備えている」

「自分に言い聞かせてるように聞こえます」

「黙れ」

「ところで、そろそろ出血をなんとかしないと僕が死にそうなんだけど」

「ならばさっさと体を明け渡せ！」

「ならさっさと体に乗っ取れば？」

「…っ！」

「…さつきから思ってたんだけどねえ、無惨。君、僕が怖いんだろう？」

「…っ」

「ここが最後だって言ってたね。それが本当なら、君は僕の精神の大部分を掌握してることになる。実際、人の精神の中で好き勝手に生きてるしね……でも、いま喋ってるこの僕が“核”だって言うなら、なぜ何もしないんだい？」

「…時間の問題だ。少しずつ染まっている事にも気付いていないのか？」

「この局面で時間をかける意味はないね。臆病者なのは知ってたけど、まさかここまでとは思わなかったよ」

「——貴様……！」

「今の僕は大叔父様にだって負けてないと思うけど——所詮は夢の中さ。泡沫みたいな精神如きに臆しちゃってさ、どのへんが完全な生物なのかな？」

「…っ！」

「ここで君を斬って意味はあるのかなのか……臆病なお前が、わざわざ弱点を晒す筈はないとも思うけど……躊躇はしてる。一回くらい細切れにしてみれば、何かわかるかな？」

「逃げるしか能のない臆病者が、よく吠えるものだ……！ それ程に死にたいなら——」

「ぶっつー！」

「!?」

…くっ…！ 柄にもなく吹き出して笑ってしまった。でも彼に臆病者扱いされるとか、豚に『豚野郎！』って罵られた気分になっちゃうぜ。ブーメランつてレベルじゃないんですけど。

——ぶっちやけ今がどこまでヤバイ状況かなんてわからないけど、とにかく一秒でも稼げば奴の不利益になるのは確かだろう。何が効果的なのかは不明だが、どんな時であろうとも、精神を乱した奴が負けないのは確定的に明らかだ。口八丁手八丁でなんとか……ん？ おや、外の様子が…

『歓喜で体が震えてくる…！ 柱二人、相手にとって不足な——』

『テメエが最後の上弦か？ クソみてエな迷路で散々走らせやがつてよオ……俺が直々に引導渡してやるぜエ…！』

『…！ その刀の色……風の柱か。だが一人増えたところで、所詮は極みにも達していない半端者の——』

崩れた家の残骸に立ち、目を血走らせて啖呵を切る実弥。これで三対一だ、余程のことが無い限りこちらが負けることはないだろう……とか考えてると敗北フラグになりそうだからやめとこう。頑張れ三人共…！ そしてさっさとこっちに来てくれ。

…おや？ 遠くから何かが近付いてくる。暑苦しいとまで言えそうな熱気と共に。

『ううむ！ 彷徨い歩いて鬼にも出くわさず！ 挙句の果てに建物が崩れて放り出されたが！ ——よもやよもや、それが最短距離だったと言う訳だ！ …あの時の雪辱を果たそうか！』

『…！ 痣を出したか杏寿郎！ …いいだろう、たとえ柱が四人揃おうとも俺の頸は斬れんと——』

杏寿郎の精悍な顔つきと溢れ出る鬪気は、戦場にあつて仲間の士気を上げる。しかし猗窩座さん、いくらなんでも四人の柱を相手にするのはキツくないか？ 虚勢を張るにも限度つてものが……ん？ あっ…

『おおっと、この俺を忘れてもらっちゃ困るぜ。テメエの頸はこの宇

随天元様が頂いてやるよ!』

『…鬨気も薄い、出来損ないの柱が増えようと——』

天元の登場によって、ほんの一瞬だけ『逃げ』の思考が猗窩座さんの顔に張り付いた。刹那とすら言える時間だったが、僕の目は誤魔化せない。そろそろお爺ちやますら相手取れる戦力になってきたが、本当に大丈夫か？ 猗窩座さん。

あつ……近くの瓦礫が上に吹き飛び、下から何かが這いずりだしてきた。きつとまた柱ですれ解ります。もう諦めればいいのに猗窩座さ……ん……つ!?

蜜璃ちゃん……! あれだけの質量の下敷きになって、ボロボロになるだけで済んでいるのはともかく……ポロリッ……圧倒的ポロリ……! きつと彼女はスケベ要員の業を背負っているに違いない。

『キヤー! もう、もう、ぐわあつて! ドガンつて! みんなは大丈夫かしら!』

『…甘露寺。言い辛いんだが……瓦礫が引つ掛かって前がはだけている』

『きやあああつ!』

あ、いつの間にか小芭内まで。しかし上弦の参を目の前にして目を瞑るのは、あまりにも危険ではないだろうか。確かにあれは目の毒ではあるけども。

——真夜中であるというのに、いつそ恐怖を覚えてしまう程に白く美しい肌。そしてあれだけの大きさだというのに、重力のくびきから完全に逃れ得ている豊かな双丘。

作り物は別として、天然物が垂れるか垂れないかは胸の筋力がモノを言う。その点、彼女は女性としては有り得ない程に強靱で良質な筋肉を備えている……あの美しく見事な張りが、大きさと同居できているのはそのためだろう。

たゆんと揺れるバストの先端、桜色の突起は、彼女の独特な髪色より少し濃く——それでいて染み一つない清純さを保っている。ううん、エチ案件にも程があるぜ。

ん、流石に猗窩座さんの顔色が曇った。まあ柱七人は無謀を通り越

して自殺だろう。彼の前に立って『強者と戦いたいんだろ？　ん？』とか言ってみたい。

『くっ……！』

『……へーい』

『!?!』

あ、義勇……もう何も言うまい。猗窩座さんの勇気が世界を救うと信じて、敗北を祈っておくでしょう。しのぶちゃんと伊之助が僕を抱えて離れたので、戦いの結末は分からなくなってしまうが——猗窩座さんがあと三回くらい覚醒したところで、あの状況だと無理ゲーだろう。グツバイ猗窩座さん、フォーエバー猗窩座さん。

——つと！　遂に無惨が攻撃を仕掛けてきた。

「やつとその気になったのかな？　でも人がおっぱいに目を奪われている隙を突くなんて、なんて卑怯なんだ……！」

「ゴミクズが……！」

「あ、自己紹介どうもです」

「クソがああ!!」

うおっ、なんか体が変形した。しかもセンス悪っ。背中から九本の触手と、足から八本の触手……ラスボスがしていい変身じゃなくない？　もつとこう、もうちよつとなんかあると思うの。

とはいえ避けるのに支障はないし、なんか無惨の体が透けて見えるのも相まって危機感あまり覚ええない。というか心臓が七つに脳が五つあるんだけど、キモすぎない？　タコは心臓が三つ、脳が九つあると言うが……鬼舞辻無惨タコ説、あると思います。

「へいへい！　ナゾナゾいくぜー！　脳が五つに心臓が七つ、これむーざん？」

「こっ、の……！」

「しかし考えたもんだねえ。脳や心臓を潰されたら、再生するまでの一瞬だけは思考に空白ができる。それを補うために数を増やしたって訳か……しかも常に体内で流動させて、狙いを定めないようにしてる。あつ、いま脳が股間を通り過ぎた——まさか、チ○コ脳は実在したのか……!?!」

「ガアアア！」

僕のペースになつてきた……と言いたいところだが、周囲がなんだか暗くなつてきた。曇天模様に時化気味の海。僕の世界そのものが深い闇に染まつていく。やばたん。

「くっ、くっくっ——無駄な足掻きだったな。もうじき貴様の意識も消えてなくなる……周囲にいるのは貴様を斬れぬ輩のみだ！」

「猗窩座さん粘るなあ……」

しのぶちゃんに伊之助、たまちゃんに愈史郎……僕の周囲にいるのはこの四人。しのぶちゃんは利き腕と共に剣を失くしてるし、伊之助はもう体を動かすことさえ厳しいだろう。たまちゃんと愈史郎は、そもそも鬼を殺す手段を持ってないし。

「終わりだ、飛鳥千里」

周囲全てが闇に染まり、泥に沈み込むような感覚が体を襲う。襲い来る睡魔——あるいは自分が自分でなくなる強烈な違和感。浸食されているのか、もしくは混ざっているのか……自分以外の記憶が脳内に流れ込んでくる。前みたいな記憶の断片ではなく、まるで体験したかのようなリアルさがある。

死産一步手前でこの世に生まれ落ちた鬼舞辻無惨の記憶。

病気で何度も死にかけながら、それでもなんとか成長し、治る兆しが見えたところで医者をしてしまった鬼舞辻無惨の記憶。

向かうところ敵なしで、自信満々にたまちゃんを従えていたが……しかし大叔父様から逃げるために、弾けたポップコーンと化した鬼舞辻無惨の記憶。

…塗り潰される、塗り潰されていく。千年を生きた圧倒的な歴史の重みが、たった数十年しかない記憶を押しつぶそうとしている。いま僕は飛鳥千里であると同時に、鬼舞辻無惨になりかけている。そして鬼舞辻無惨は僕になりかけている……しかし最終的に食われるのは僕の方だろう。ああ、記憶も近代のものに変化してきた。

とある製薬会社の情報を求め、子供に成りすましてぶりっ子する鬼舞辻無惨……ん？

とある男性の財産、家、権力の全てを乗っ取ろうと、女体化して男

性を誘惑する鬼舞辻無惨……ん？

え？ いや……え？ あまりに衝撃的過ぎてちよつと自我を取り戻した。あ、別の記憶では十二鬼月の下弦が可哀想なことに……お前が殺ってたんかーい。しかも女体化して制裁とか、意味不明すぎて草。

これは……これは、無惨が僕を乗っ取るために晒した、一瞬の隙だ。いまこの時だけは、彼の記憶も、口調も、仕草も、考え方も、そして黒歴史も僕の手のうちにある。

——こんなの煽るしかないじゃないか。

「さあ、消え失せる飛鳥千里……！」

『なぜ私がお前如きの指図に従う必要がある？ 甚だ凶々しい、身の程を弁えろ』

「っ!？」

『男に生まれながら女の振りをし、媚を売った気分はどうだ？ 完全な生物というのは、もしや雌雄同体を指しているのか？』

「——貴様……！ 私の記憶を……！」

乗っ取られかけているこの一瞬だけに許された、刹那の煽り。ここに全身全霊を尽くそう。記憶の全てが見通せるとは、もはや飛鳥はレスバにて最強だ。物真似の精度もほぼ100%で披露できるし、今から奴の黒歴史フルコースを真似していくとしよう。

『お、っ♡ 女体の絶頂とは斯様かようなものか。これは癖になるな鳴女』  
「捏造するな貴様アア!!」

『パパ、ママ、ボクおひさまがこわいの』

「こっ、がっ……！」

『逃げなければ……！ 継国縁壺、あの化け物が寿命で死ぬまで逃げ続けなければ……！ あわわあわあわわ』

「かつ、くかつ、こっ……！」

めちやめちや効いてて草生える。負ける気がしないってばよ。煽り文句を考えれば考える程に、頭が冴えていく……脳内の靄を一筋の光が斬り裂き、暗闇を晴らしていく。そうだ、草とは生命の息吹そのもの……！ 意味合いはまったく違うが、とりあえず草を生やしまくろ



う。

「こっ、の、氣狂いがっ…！ くだらぬ悪足掻きを…！」

『細切れになっても悪足掻きをしたのは何処の誰だ？ 滑稽という言葉は貴様のためにあるようなものだな』

「っ！」

『珠世が戻ってきたら許す、許さない、許す、許さない、許す、許さない、許す……許すが出たぞ鳴女！』

「クソがアア!!」

楽しい…！ こんなに良い反応をしてくれる存在、未だかつてあっただろうか。こんな時間が永遠に続けばいいのに……しかし現実は無惨だ。無惨の言う通り、これは悪足掻きでしかない。流石にそろそろ限界が見えてきた。

「鬱陶しい…！ さっさと——消え失せろ！」

「…っ」

何とも言えない倦怠感に、体の力が抜けていく。もう周囲の景色も見えないし、輸血が間に合ってるのかどうかも不明だ。どっちかかっていうと間に合わないで死んじゃう方が、しのぶちゃんたちの安全的にはいいんだろうけども。

最後に見るのが無惨の歪んだ嗤いというのは業腹だけ……あとは皆が上手くやってくれるのを祈ろう。腕と脚、胴体が闇に呑まれていく。首筋、頭の天辺、顔……右目。最後に残った左の瞳が、完全な暗闇を認識して——なんだか温かいものが、僕の周囲を駆け巡った。体を食い尽くそうとしていた闇が、一気に振り払われる。

「なっ…!!」

…炭治郎、くん？ やだ、カッコいい……じゃなくて、なんでこんなところにいるんだ。ピンチに駆けつけてくれるのはヒーローのお約束だが、もう少し場所というものを考えた方がいいと思うの。たとえばヒロインのピンチと言えど、女子トイレの個室に助けにくるヒーローは見たくないものだ。

翻って、ここは女子トイレの個室よりもプライバシーな僕の『精神』である。もうこれ精神的BLでは？ 無惨はまだ女体化という手段

があるけれど、炭治郎くんは完全無欠に男の子なのだ。開いてはいけない扉ってあるんだよ、炭治郎くん。

「馬鹿な……！　なぜ竈門炭治郎がここにいる！」

「それな」

「貴様の精神だろうか！」

「そう言われても……ん？」

おや……？　炭治郎くん目え怖っ！　爬虫類みたい——というか、鬼みたい。というか、鬼になりかけてないか？　なんか周囲の闇を吸収するように取り込んで……

「——ぐうっ……!?　なんだ、何が起こっている……！　ふざけるな、ここまできて……！」

うーん……？　炭治郎くんらしき人物が僕の精神の中に居て……なんか鬼っぽくて……しかし鬼舞辻無惨は苦しんでいて……ふむふむ……仮説を立てるとするなら……？　そもそもとして、鬼舞辻無惨が僕の体に乗っ取ろうとしている事態だけでも、いくつもの要因が奇跡的に絡み合っただけ偶発的に起きたもんだしなあ。

……待てよ？　そういえば僕と炭治郎くんの血液型は同じだったな。僕の容態を考えれば、病院に運ぶ暇はない………というか、そもそも輸血用の血液を保存する技術が、まだ確立されていない。となると、あり得るのは人から人へ直接輸血する原始的なもの。もしこの状況で炭治郎くんが駆けつけてきたのなら、僕へ血を提供するのに何の躊躇いもないだろう。あの子はそういう子だ。

その推測が当たっているのなら、いま僕の血中に存在するのは『鬼舞辻無惨の血液』『炭治郎くんの血液』『無惨が分解しきれなかった人間化薬の成分』………そして、僕自身は最高クラスの『稀血』。酷すぎるカクテルっぷりである。

「………これは………僕の仮説は当たってたのかな？」

「——ぐ、うっ………何を………言っている……！」

「やー、禰豆子ちゃんの体質の話。鬼にさせられた身で、鬼の祖を凌駕しかねない才能………突然変異か遺伝的なものかって。検証はできなかったから、考えても意味はないって思ってたんだけど——いま結果

が出たね。たぶん炭治郎くんには、禰豆子ちゃんすら凌駕する「鬼の才能」がある」

「ふざけるな……！ そんなことがあつてたまるか！」

『そんなことがあつてたまるか』って話ならさ、そもそも君が僕の体を奪いかけてるのも、あつてたまるかつて話じゃない？ 奇跡はそう都合よく続かないってこともかね」

——さて。この仮説が正しいのなら、正直なところ助かったとは言い難い。要は「鬼の力」の主導権を、炭治郎くんの細胞が奪おうとしている状態な訳だ。だとすると、無惨が消えて次の標的になるのは僕だろう。より強力な鬼が誕生しかねない。

「本当に『精神世界』なんてものはあるのかな……？ 僕が話しているのは本当に鬼舞辻無惨なのか……興味深いねえ。細胞を乗っ取ろうとする『無惨細胞』に、それを助長させる『稀血』。抗う『人間化薬』に、混じった炭治郎くんの血。ウイルスと抗体と薬と細胞。ミクロな世界の攻防を夢で見ているだけだとしたら……今の僕はなんなんだろうね？」

「飛鳥千里……飛鳥千里!! 私を助ける！ 貴様の言っていることが事実ならば、私よりも強い鬼が現れることになるぞ！ ——陽を克服しかねない最悪の鬼だ！」

「頑張れ♡ 頑張れ♡」

「こっ、の……クソカスがぁぁー!!」

絶叫と共に無惨が消えていく。『見事なり……！』とか言っただけで消えてくれれば少しは格好もつくだろうに、最後まで小者臭の隠せない男だ……なんて、そんなこと言ってる場合じゃないんだけど。獣のような瞳をギラギラさせて、炭治郎くんが近付いてくる。しかし先程浸食されかけた影響か、僕の体は動いてくれない。

——とはいえ。こんな状況でどうすればいいのかなんて、わかりきったものである。

「ふっ……僕は陽キヤだが、オタク文化にも詳しいハイブリッドだぜ。こんなよくある展開、ノータイムで答えを導き出せるんだよ炭治郎くん。ズバリ「絆」こそが！ この窮地を救うたった一つの手立てに

「違くない！ さあ、今まで育んだ友情やらなんやらを思い出すんだ！」

うん、歩みが止まらないね……馬鹿な、いったい何が足りないというんだ。僕は炭治郎くんのが大好きだし、自分で言うのもなんだが炭治郎くんからも結構好かれてる自信があるぞ。

「…そうだ。ゴテゴテと言葉を飾り立てるなんて、僕たちの信頼関係には不要だった……なら『答えは沈黙』だ！」

——馬鹿な、なぜ効かん！ くそつ、薄汚ねえクルタ族が考えたセリフなんて使うんじゃないか。えーと、どうしようどうしよう……そうだ、こんな時にこそ『家族の絆』が有効なんじゃないか？ 幸い、僕には鍛えこんできた物真似のセンスがある。禰豆子ちゃんの真似などお手の物だ。

『むー！ むー、むーむー！ むむつ、むーむー！ むううー！』

「…」

しまった…！ 僕の記憶にある禰豆子ちゃんは、九割九分『むー』だった。『むー』じゃ心に響かない、流石に響かない。くそつ、最後は仲間に殺されるとかいう鬱展開なのか？

足が上手く動かないせいで、どうにも逃げられない。脚の動かない僕とか、飛べない豚と変わりないぞちくしょう。流石にもうダメかと思ひ、目を瞑って観念すると——くるりと背を向けて、炭治郎くんが目の前に座り込んだ。

「炭治郎くん…？」

「…」

「——ああ、そっか」

「…」

「『約束』、してくれたっけ…」

『もし千里さんが逃げられなくなったら、俺の後ろに隠れてください！』なんて、惚れ惚れするほどカッコいい約束を。骨の髄まで、細胞の一つにまで彼の優しさは染み込んでいるのかな。

命を救われるのは、いったいこれで何度目だろうか。膝立ちで炭治

郎くんの背中に近付いて、その肩に手を乗せる。こんな小さな両肩に、目一杯しよい込んで……それでも潰れない、立ち止まらない強さが彼にはあった。

……でも、やっと終わったんだ。取り戻せないものは沢山あるけれど、歩き続ければ新しい出会いがある。頑張り続けてきた背中をねぎらうように、僕は炭治郎くんの体を引き寄せて——わき腹を突ついた。

「——ぐふうっ！ た、炭治郎くんの初ツツコミ……！」



…はっ！ 知らない天井……いや、知ってる天井だ。慣れ親しんだ産屋敷邸の病室の天井。どのくらい寝込んでいたのかは不明だが、体の調子は意外と悪くない。腹部には包帯が巻かれているが、上体を起こした際に走った痛みは、想像よりもかなり緩かった。肺の方も、あれだけきつかった痛みが綺麗さっぱりなくなっている。これなら呼吸も使えるかも——

「いっつ——……っ!! ごほっ、ぐっ……」

「飛鳥さん!?!」

「あ……たまちゃん」

流星にそう都合よくはいかないか……予想していた通りではあるが、たぶんもう『呼吸』は使えないだろう。まあ日常生活に支障はなさそうだし、あの状況で生き残れただけで御の字だ。たまちゃんが心

配そうに覗き込んできたので、少しふらついて胸元へ倒れこむ。うーん、柔らかい。

「——ぐべっ!？」

「ゆ、愈史郎! 飛鳥さんは重傷だったんですよ!」

「こいつは死んでも大丈夫です」

「ぐうう…! 愈史郎お…! 無惨を討った立役者に何と恩知らずな…!」

「そうか。よくやった」

「軽っ! もっとさあ、嗚咽交じりに『本当に…:よくぞ、よくぞ無惨を…!』とか、言葉も出ない感じで感謝してくれると思うじゃん?」  
「そういうのはお前が寝ている間に終わった」

「ええ…」

周囲を確認してみると、看護婦さんの一人が僕の目覚めを伝えるためか、足早に退室していった。いやあ、重要人物ってのもつらいぜ。

たまちゃんに色々聞いてみると、やはり僕は一瞬だけ鬼になりかけたらしい。なるほど、怪我がマシになっっているのはそういうことか。産屋敷邸も事後処理やらなんやらで慌ただしいそうで、柱を含む隊士たちも、そこそこの人数が任務についているらしい。

鬼舞辻無惨を人間に戻し、全ての鬼の呪いが解け、その後に無惨が死んだ——そんなプロセスを踏んだせいかな、はたまた無惨死亡で全部の鬼が死ぬという予測が間違っていたのか、どちらにせよ鬼の全てが駆逐された訳ではないのだ。鬼が増えることは無くなったもの、もうしばらくは隊士も任務が続くだろう。

「たまちゃんも愈史郎も、人間に戻ったんだね。おめでとう…:つて言ってもいいかな」

「…:祝意も感謝も、私には受け取る資格がありません。命尽きるまで償い、命尽きても地獄で贖罪を果たさなければ、私が食い殺してしまった人達へ謝罪する資格すら得られない」

「…:そっか」

「それでも…:人としての死を迎えられるのは、貴方のおかげです。私にできることがあれば、何でも仰ってくださいね」

「えっ？ いま何でもするって——ぐああつ！ 愈史郎！ 僕まだなにも言っていないよ!？」

「なら何を言うつもりだった」

「…罪を償っている最中だって、ずっと不幸でいなきやいけない訳じゃない。幸せになる権利はきつと君にもあるから——だから幸せになる努力をしてね、って言おうとしたんですけど」

「…」

「…」

「…すまん」

「まったくう…」

まあ珍しく謝ってくれたからいいけどさ。それより、皆は無事だったのが心配だ。二人は負傷者の手当てで忙しかつたみたいで、鬼殺隊の動向をすべて知ってるって訳でもないみたいだ。とりあえず重傷者の中に柱はいなかったそうだが、死者がここに運ばれてきたりはしないだろうし、みんなの安否が気になるところだ。

「動くのに支障はないし、僕はとりあえず耀哉のとこ行ってくるよ」

「…っ、はい。あまり無理は……なさらないように……あ、その、飛鳥さん…」

「珠世様」

「…っ！ すいません……では、お大事に」

…なんだ？ 物凄く何かを言い難そうにしているが……なんだか嫌な予感がする。耀哉の容態は戻ってないのか？ 確かに病気が無惨のせいだというのは半信半疑だったが——それでも、そんな希望に縋って今まで彼を診てきたのだ。今更ただの病気だったなんて、そんなのやりきれない。

急いで退室すると。さつき僕のことを伝えにいった看護婦さんが、顔を伏せて横を通り過ぎた。感じるのは……『憐憫』の雰囲気。なんで僕が憐れに思われるんだ？ まるで今から悲劇でも訪れるみたいじゃないか。やめてくれよ。そうだ、耀哉だけじゃない……僕と親しかった誰かが死んだ可能性だって、もちろんあるんだ。まさかしのぶちゃんが——

「——千里！」

「っ、しのぶちゃん……！」

よかった、無事だったんだ……！ 正にいま最悪の可能性がよぎっただけに、安堵で体の力が抜けた。うおおおんと大袈裟に涙を零して抱き着くと、もちろん鉄拳が飛んで……こなかった。基本的に僕の行動はツツコミを入れられる前提なのだし、本当に受け入れられるとドキドキするんですけど。

心臓の鼓動が大きくなるのを感じる。腕の中のしのぶちゃんを見ると、それはもう嬉しそうに——いや、ぜんぜん嬉しそうじゃないな。むしろ泣きそうなんですけど。

「千里、お館様が……」

「……っ！」

……先程の『嫌な予感』が明確な胸騒ぎとなつて、違う意味で心臓の鼓動が跳ねる。足早に案内してくれるしのぶちゃんの背中を追い、耀哉の部屋へと向かう。背中に嫌な汗がじんわりと滲み、呼吸が少し乱れるのを感じた。ぶり返すように肺がズキリと痛み、額を伝う汗を手で拭う。

襖を勢い良く開けると、そこには……瞳を閉じて眠っている耀哉の姿があつた。眠っている——そうだ、眠っているに違いない。胸が上下していないし、ピクリとも動いていないけど……彼が死んだなんて、認めない。けれど死者を悼むように、柱が三人……実弥、小芭内、天元が布団を囲んでいる。

——嘘だ。

「耀哉……冗談だろ？ 無惨に呪われてるからって、だから病氣なんだって言ってたじゃないか……！ あいつはもう死んだんだ、だから——」

「デケえ声出してんじゃねえよ。お館様が……安らかに眠れねえだろうがア……！」

「……っ！ 実弥、でも……」

「お館様から伝言だ。『ありがとう、君がいてくれたおかげだ』だってよ」



「天元…」

「お前は全力を尽くした。それでも——どうにもならないことなど、この世にごまんとある」

「…小芭内……」

「千里。本当に君のおかげだ……私の代で決着をつけられたことが、何よりも喜ばしい」

「耀哉……—ん？」

「ぶふっ……」

しのぶちゃんの吹き出した音が、静かな部屋に響いた。後ろを振り向くと、体をくの字にして震わせる彼女の姿があった。そしてもう一度耀哉の方を振り向くと、申し訳なさそうに眉を下げた彼の顔が見れた。ほおーん……ふーん……初めてだぜ、ここまでコケにされたのは。

「いくらなんでもさあ！ やつちやいけない冗談とやっていい冗談があるだろ!? 僕がここまでタチの悪い冗談言ったことある!？」

「ごめんね、千里。どうしても頼まれてしまった」

「——実弥い！ 小芭内に天元も！ 事によつちや僕だつてブチ切れるぜ！」

流石の僕でもこれはちよつと怒る。人が傷付けば、それは冗談じゃなくてイジメだ。人が不快になれば、それは冗談じゃなくてデリカシーがないだけだ。こんなに酷いおふぎけをされるほど、彼等に何かをした覚えなんてないぞ。こんなの、あまりに非常識だろう……！ 先程しのぶちゃんが抱擁を受け入れたのも、僕を動揺させて心情を読み取らせないようにしたつて訳か？

僕は怒りの表情で実弥たちを糾弾しようとして立ち上がり——なんだか皆ちよつと怒っているようなので、やつぱり座った。僕の逃げ足はもはや永久に封印されたのだ。慎重さというものを覚えねば。いやでも、ここは流石に怒っていいところだろう。そうだ、正義は僕にある。『事によつちや』……か。こんなことされる覚え、本当にないつてのるか？ 千里さんよお」

「な、なんだよ天元。僕がなにしたつてのさ」

「……この前、あいつらに本を送ってくれたらしいな」

「え？ ああ、奥さんたちのこと？ いやほら、実際に変装術を教えてくれたの須磨ちゃんとききをちゃんだったからさ。雛鶴ちゃんにも色々お世話になっちゃったし、単なるお礼だよ」

「ほう。ちなみにどんな本を送ったか覚えてるか？」

「えーっと……夏目漱石の『それから人妻不倫もの』と、『門略奪婚もの』と、『こころ三角関係もの』だったかな……」

「オラアツ！」

「——がふうっ！ ぐ、ぐう……た、他意はないのに……」

「悪意しかねえだろうが！」

ち、違うんだ！ 美女が三人もお嫁さんなのが妬ましいから、一人くらい火遊びに興味を持ってほしいなんて思ってたから……！ うう……じゃあまあ、天元についてはお互いさまって事で納得しようじゃないか。しかし実弥に小芭内、君らにこんなことされる覚えなんてないぞ。申し開きがあるなら言ってみやがれ、こんちくしょうめ。

「申し開きだア？ ——テメエ、俺の『遺書』持ち出して玄弥に見せやがったらしいなア……！」

「ギクツ」

「形式上はどうあれ、結構な部分テメエも実権握ってるからなア……！」

隊士の遺書くらい簡単に持ち出せるって訳だ」

「い、いやその……玄弥が『兄ちゃんに嫌われた』って悩んでたし……どうせ君のことだから、本心なんて遺書ぐらいにしか書かないだろうなって。実際そうだったし——いだだだっ！ すれ違う兄弟を慮る僕の気持ち！ わかって実弥いい！」

ぐうう……！ わ、わかった。実弥についても、感謝のツンデレということで、お相手つてことにしておこうじゃないか。しかし、しかしだ。小芭内！ 君に何かされる筋合いなんて、これっぽっちもないぞ！ 手術の恩も忘れおって、言い訳の用意はできてるんだろうな！

「鍛冶師の里で……甘露寺に恥をかかせたそうだな」  
「えっ」

「婦女子の入浴中に浴場へ押し入り……あまつさえ、甘露寺にタオル

を脱げなどと命令したと聞く。言い訳の用意はあるか？」

「解釈が悪意に満ちてるよ!?! ——ギャアアア! 誰だ喋つたの!」  
くうう……! これが因果応報なのか……? だとしても、しのぶちゃんまでこんな企みに手を貸すとは。そんな心当たりなんて……:ううん……:ちよつとエツちな服をダンスに忍ばせておいたのがバレたのか?」

それとも毒の代わりにビタミン剤を置いた時、ガラナエキスを混ぜたのに気付いたのか……? いや、グアラニンの興奮催淫作用なんて微々たるものだ。滋養強壯としての意味合いの方がずっと強いし、やましい気持ちなんてちよつとしかない。

というか、君ら耀哉のことめっちゃ敬つてただろうが。僕への意趣返しなんかに使つてんじやないよまつたく。

「ふー……:もう呼吸使えないんだから、無茶はやめてよね……:」

「……! どういうことだオイ」

「え? ああ、えつと……:上弦の弐の血鬼術が結構えげつなくてさ。肺がズタズタで、もう呼吸は使えないと思う」

「……普通に呼吸する分には大丈夫なのか?」

「今のところはね。まあ鬼がいなくなれば呼吸なんて必要ないし、そんな深刻になるほどでもないでしょ。むしろしのぶちゃんの腕の方が深刻だよ」

「ええ。私も一線を退く形になります」

あんまり深刻そうじゃないな、しのぶちゃん。でも彼女の腕は、僕を庇つた際に失つたものだ。今ついでに謝るようなものでもないし、少し後回しにさせてもらおう。

「僕は研究の方にかかり切りになるから、どっちにせよ今までみたいな任務は——あ、研究費は……:まだ出してもらえる? 無惨は死んじやつたけど……:」

「そんな質問をされるとは思わなかったよ。千里はあまり私を信頼してくれていないのかな」

「いやほら、僕と杏寿郎と炭治郎くんだけだろ? 痣が出てるの。たつた三人の人間のために、バカ高い研究費かけるのも申し訳ないと

「どうか——たぶん流用できるような技術でもないだろうし、生産性は皆無だからさ」

「たとえば産屋敷の身代が傾いたとしても、費用は捻出するとも。千里、君だけじゃない……隊士一人一人に対して、産屋敷家は報い切れないほどの恩がある」

「…ありがと、耀哉。それじゃあ全てが終わった後も好き放題させてもらえる——そういうことでいいかな？」

「そういうことではないね」

「痛いっ！　痛いっ！　やめて三人共！　僕は耀哉とマブなんだよ！　まったく……そういうえば他の柱はどこに行つたのかな？　まさかこんな茶番を用意しておいて、誰か死んでるということもないだろう。」

「現状、鬼の噂がある場所の数に対して、隊士の人数はかなり多い……だから今までは違って、一体の鬼に対して複数の隊士を編成しているんだ。柱の子たちも頑張ってくれている」

「つまり実弥たちはサボっている」と

「んな訳あるかボケエ！　油断して本丸落とされちゃ世話ねえだろうがア」

「そう、まだ完全に終わった訳じゃないんだ。実弥の言う通り、今が一番油断しやすい状況だからね……勝ち戦の処理に死人は出したくない。今後の課題は、鬼が完全に根絶できたことをどう確認するかなが……」

「あ、それなら任せてよ。乗っ取られかけた時に無惨の記憶を見れたから、大まかな配置と数はわかると思う」

「とんでもないことを聞いた気がするよ」

「いやあ、危うく最強の体を持つ最悪の鬼が誕生するところだったよ」

「危うすぎだろオイ……」

「ま、もう強い鬼はいない筈だよ。十二鬼月の下弦も無惨が自分で殺してたから、心配しなくて大丈夫」

「馬鹿なのか？」

「僕もそう思う」

——おっと、話が長くなつたせいかな耀哉に疲労の色が見える。とはいえ、自分でもわかるほどに体調が良くなつたらしく……やはり無惨の生死とリンクしていたのは確かなようだ。楽観視するにはまだ早いが、きつとこれからは快方にむかつていくことだろう。それに無惨の膨大な記憶の中には、相当な医学知識も存在した。耀哉の体を診るにも役立つし、痣の解明にも多少は貢献してくれることだろう。

「じゃ、とりあえず僕は鴉に指示して隊士を動かすから……いや、先に鬼の数と場所を書き起こした方がいいか」

「私も手伝います」

「…腕、大丈夫？」

「ええ、珠世さんに処置をしてもらいましたから——っ、とっ……」

大丈夫と言いつつ、ちゃんと立ち上がれずにふらつくしのぶちゃん。変化した重心に昨日今日で慣れるのは難しいだろう。僕も慌てて立ち上がって、彼女を支えた。

耀哉たちに挨拶をして部屋を退室し、しのぶちゃんと二人で廊下を歩く。謝罪も感謝も、彼女は必要としていないだろうけど——だからといって、何も言わないという選択肢もありえない。僕の方から立ち止まって、しっかりと彼女の方を向いた。

「ごめんね、しのぶちゃん……その腕」

「お気になさらず。柱として当然のことをしたままでです」

「それでもだよ——助けてくれてありがとう」

「いえ、本当に気にしなくて結構ですよ。かたわの女なんて貰い手もないでしょうが、自己責任ですから。気にしないでくださいね、本当に」

「…」

「…」

「——オツケー！　じゃあこの件はこれでお仕舞い！」

「神経を疑います」

「女心って難しいぜ……！」

「人の心に聡い筈では？」

「しのぶちゃんの心はわかりにくくてねえ」

「それは重畳。他の方とどう違うかは気になりますが」

「そりやあまあ、読みやすい感情と読みにくい感情つてのがあるのさ」  
「…それは初耳です。何がどう違うんですか？」

「怒りとか恨みは割とわかりやすいかな？ 恋心なんかは複雑でわかりにくいし——いやあ、しのぶちゃんの心はわかりにくいぜ、まったく」

「見当違いも甚だしいですね。自意識過剰では？」

「おや？ 別に僕への恋心だなんて言った覚えはないけど」

「…っ！ くっ…」

おっとお。これは本当に脈ありと判断してもいいんじゃないかなろうか。告つちやう？ 告つちやおうか？ まあ僕の気持ちは常々から行動で示してるけども。しかしこの状況…人の気配のない廊下、二人きり、そして長きに渡る戦いの終わり——絶好のシチュエーションと言っても過言ではないだろう。よし、ここは妙にオタク人気が高い告白文句でも使ってみようか。

かつて夏目漱石が英語教師をしていた時、生徒が『I love you』を『我君を愛す』と訳したのを見て、彼はこう言った。『日本人はそんな無粋な伝え方をしない。月が綺麗ですね、とでも訳しておきなさい』と。遠回しな告白のセリフとして、自称『粋』な方々が使う文句である。

「月が綺麗ですね」

「真っ昼間ですが」

「太陽が綺麗ですね」

「直視しろと？」

くっ…失敗か。NTR大好き文豪の言葉なんか信用するんじゃない。ま、いくらでも時間はあるんだからその辺は追々——ん？

あ、いくらでもどころか、いくらもなかったんだ。研究が実を結ばないと一年ちよつとの命だったわ。いや、なんとかするつもりではあるけども。

「しのぶちゃんは全部片付いたらどうするの？」

「蝶屋敷をそのまま診療所にしてしまおうと考えていましたが…」

の腕ですからね。手術もできませんし、薬剤の知識はあっても資格はとれません」

「なら僕の名義で登録していいよ。資格ならすぐ取れるだろうし、耀哉のコネがあれば諸々の手続きは端折れるしね」

「それは助かりますが……よろしいのですか？」

「君がどう思おうが、僕にとって君は恩人だぜ。右腕以外についても」  
「…ふふつ、では遠慮なく受け取っておきます」

「なら手続き上、土地と建物の名義は僕にしておいた方がいいと思うけど……変更してもいいかい？」

「え？ ええ…」

「へへっ、騙されやすい女だぜ…！」

「千里」

「冗談です」

——残った鬼を根絶するのにそう時間はかからないだろうし、鬼殺隊のために働いてきた人たちは、各々身の振り方を考える必要が出てくる訳だ。喜ばしいことではあるものの、身もふたもなく言ってしまうばもうすぐ無職ということである。もちろんその辺のお世話は耀哉もしてくれるだろうが、鬼殺の隊士というのは何気に高給取りだ。

同じように稼げる就職口など、いくら産屋敷とはいえそう紹介できるとは思えない。金持ちになりたいと言う隊士はそんなにいないと思うけど、生活レベルを落とすのって意外と苦勞するからな。蝶屋敷にいる娘たちだって、今はしのぶちゃんが養っているが……彼女が柱でなくなれば、資金源はなくなる。さっさと稼ぎ口を見つけないと、そのうち困窮することになるだろう。

しのぶちゃんって今までお金に困ったことはなさそうだけど……これからは節約する必要も出てくるだろう。そして節約術については、僕に一日の長がある。前世では金持ちのボンボンだったが、今世は貧乏暮らしも山暮らしも経験済みだ。色々と教えてあげることしよう。

「これからはお金の使い方も考えなきゃだぜ？　しのぶちゃん」

「ええ。千里に関しては『恩返し』ということですから、給金は払わな

くていいでしょうが……アオイ達とも今後のことを話し合う必要が  
ありますね」

「え？ いや、ちよっ……えーと……いつまで恩返しすればいいの  
かな？」

「失った右腕の恩ということですから——腕が生えてくるまで、とい  
うことでどうでしょう」

「百年後でも腕の再生は無理なんですけど」

「おや、長生きしなくちゃいけませんね」

「…しのぶちゃんのひねくれ者め」

「『厭味つたらしい女』ですから」

「それ、死ぬまで言われ続けるのかな？」

「死んでも言い続けますよ？ 生まれ変わりはあると、貴方が言いま  
したから」

「また会えると決まった訳でもないだろうに」

「——きつと会えます。来世も、そのまた来世も」

「…そつか。それじゃ、その時はまたよろしく頼むよ」

「ええ、こちらこそ」

「それと、これからもよろしく……しのぶちゃん」

「…はい。こちらこそ」

くすりと笑ったしのぶちゃんの瞳を覗くと……出会った時に感じ  
た、深く沈んだ憎悪はもう感じられない。腕を失ったというのに、失  
う前よりもずっと前を向いている。そのせいか、今までよりもずっと  
ずっと美しく輝いて見える。この美しさを来世も、そのまた来世も見  
れるというなら、嫌味も小言も甘んじて受け入れるとしよう。

——止まっていた歩みを再開し、二人で歩き出す。差し出した手か  
ら感じ取れる体温は……まるで太陽のような温かさだった。



## 後日譚 1

桜咲く季節——春風が心地いい今日この頃、日向ぼっこが捗りまくるお昼時。蝶屋敷の縁側でお茶をすすつてのんびりしていると、台所の方からアオイちゃんの声が聞こえてきた。ここまで響いてくることは、誰かを叱ってるんだろう……そして僕以外に彼女から怒られる人物というのは、割と限られている。

寝そべっていた体を起こして台所へ向かうと、ハムスターみたいに口をモグらせている伊之助と、それを呆れた表情で見ているアオイちゃんがいた。

「や、伊之助。今日も元気そうだねえ」

「ウハハハ！ 今日朝から山のボス熊をぶつ倒してきたからな！」

「あんまり生態系を狂わさないようにね……あとつまみ食いも程々にしとかなないと、伊之助の分だけ作ってくれなくなるぜ」

「——伊之助さんの分はつまみ食い分まで作ってます！ それなのに他の人の……もう、盗み食いはダメって言うてるでしょ！」

「してねえ！」

「口元に食べかす付けて何言ってるのよ……ほら、じっとして」「むぐ……」

ジト目で睨みつつ、手拭いで伊之助の口元をふきふきするアオイちゃん。春は恋の季節だというが、二人がもしそういう関係になるとしたら、どうもしっくりこないよね。

今までそんな雰囲気じゃなかったのに、最終回だからって無理やりカップリングされたキャラでも見ているような気分である。まあまだ恋仲という訳ではないが、ちよつと意識しあっている心の動きは見て取れる。

「炭治郎くんたちは一緒じゃないの？」

「炭を売ってから来るみたいです。伊之助さんは、ほら……」

「ああ、人に物を売るのは無理だろうね……」

「んだとゴラア！」

「んー……じゃあ僕がお客さんになるから、売り文句をどうぞ」

「炭だオラア！ 買え！」

「いえ、間に合ってます」

「買えつつってんだろが！」

「じゃあ背中にある十六本の炭の内、半分を売ってもらって……おまけで一本付けてくれたら買います！ さて、残りは何本でしょう？」

「ドラア!!」

「——ぐぶうっ！ な、なぜ腹を……」

「学のない人を<sup>からか</sup>揶揄うからそうなるんです。趣味が悪いですよ」

「ああん？ 学ぐらいあるに決まってるんだろが！ コイツの百万倍はあるぜ！ ゲハハハ！」

「はいはい」

なんだ？ なんて惚気を見せられているんだ僕は。まったく、口から砂糖でも吐き出しそうだけ。しかし二人が並んでいるのを見ると、ぱっと見は美少女が戯れているようにも見えるな……美少女顔の伊之助ならではのお得感。

少年少女の甘酸っぱい恋を見ている気分にもなれるし、美少女同士の禁断の恋を見ている気分にもなれる。

キヤツキヤウフフしてる百合に割り込むのっていいよね。百合雑誌で唐突に出てくる空気の読めない陽キャ男子になりきって、僕は伊之助とアオイちゃんの後ろに回り込んだ。そして二人の間に割って入りつつ、両方の肩に手をかける。

「へへ、俺も混ぜてよ——げぶうっ！」

「何をなさってるんですか……」

ぐうう……今のは僕がアオイちゃんに触れた嫉妬か？ 単にうざかっただけか？ どっちにしても、そろそろ腹筋の耐久が限界だし揶揄うのはやめておこう。

——今日は炭治郎くん一家が蝶屋敷に来る日である。定期健診のついでではあるが、炭治郎くんたちが来る時は、この家も賑やかで楽しい日になる。ちなみにアオイちゃんが張り切って料理の腕を振るう日でもある。

……鬼もほぼ全てが根絶され、鬼殺隊も解隊されてしばらく経った。

患者の寿命に関しても解決し——本当に解決したかは僕の誕生日が来るまで不明だが——ひとまず日常を取り戻したと言つてもいいだろう。

隊士たちもそれぞれの道を歩き出している。復讐に染まった人生から放り出され、戸惑う隊士もそれなりにいたが……きつと時間が癒してくれるだろう。ちなみに炭治郎くんと禰豆子ちゃんは生家へと戻り、善逸と伊之助はそれについていった形だ。楽しそうに何よりである。

「ん……炭治郎くんたちも来たみたいだね」

「お出迎えはお願いしてもよろしいですか？」

「おいおい、院長たる僕に向かって言うじゃないか。こりやあ立場つてもんを体にわからせる必要があるなあ、へへへ……！」

「しのぶ様——！」

「冗談です。やめて、アオイちゃん。やめて」

なんて恐ろしいことをするんだこの娘は……！ ジト目のアオイちゃんから仕方なく退散しつつ、玄関へと炭治郎くんたちを迎えにく……すると、途中でカナヲちゃんに出くわした。トテトテと足早に玄関へ急ぐ様子は、ようやく待ち人が来たとても言うような雰囲気だ。

『カナヲ、会いたかったよ』

「えっ……！」

『カナヲは今日も可愛いね！ 手を繋いでもいい？』

ドキツとした様子で振り返ったカナヲちゃんは、僕の姿を見てちよつと冷たい目になった。うーん、ぬか喜びさせたのはまずかったか。恋する乙女は揶揄うべきではない……馬に蹴られて死んでも文句は言えないものだ。

「……炭治郎はそんなこと言いません」

「いやいや、男の子には意外な一面があるもんさ」

「……言いません」

「じゃあ賭けようか？ 今日中に炭治郎くんが、カナヲちゃんに可愛いつて言うかどうか」



いう情動が、僕を突き動かす。やましい気持ちは一切ない。

「っ、ぐっ……！」

「あ……だ、大丈夫です、か……？」

さて、という訳でまずは仕込みから始めるとしよう。カナヲちゃんの言う通り、何も無い状態で炭治郎くんが『可愛いよカナヲ……』なんて言う筈がない。となれば、『恋愛を発展させるフアクター』その一、『焦り』を誘発させてみるのはどうだろうか？ 恋愛漫画のお約束と言えば、恋のライバル出現で焦る主人公の図である。

嫉妬という感情が恋愛感情を自覚させ、取られたくないという感情が行動へと変わる。まあ恋愛感情はどちらも自覚しているだろうが、いま一步踏み出せていないのが二人の現状だ。

だから僕が当て馬になることで炭治郎くんを焦らせるという作戦——そのために今、ちよつとふらつきかけたのだ。肺が傷付いた後遺症もゼロじゃないし、このくらいの演技なら見抜かれることもないだろう。優しいカナヲちゃんなら、当然のように僕の体を支えてくれる。

ん……炭治郎くんたちはもう玄関に入ってきてるな。大正時代ならではの無遠慮である。さてさて、タイミングを見計らって——よし、いまだ！

呼吸を使えずとも、体の扱い方まで衰えた訳じゃない。角度と見え方を考慮してカナヲちゃんへ上手く体重をかけ、見た人によってはちよつと勘違いしそうな体勢を演出する。ああ、なんだか悪役令嬢にでもなった気分だ。さあ、どう出る？ 炭治郎くん。

「千里さん！ 大丈夫ですか！」

キヤツ、僕のこと心配してくれてる！ ……ってなんでやねん。素早くこちらへ駆けつけ、心配そうに僕を支える炭治郎くん……うう、純真な瞳が眩しい。

うーん、彼に妬みや嫉みを期待する方が難しかったか。特に効果はなかったので、ため息をつきながら立ち上がり、もう大丈夫だからと感謝を述べた。

『良かったです』と笑顔を見せる炭治郎くんの後ろを見ると、禰豆子

ちやんと善逸が並んで立っていた。相も変わらずフアンキーな金髪で、ちよくちよく会ってはいるのに違和感を覚えてしまう。鬼がいなくなつて色んな人と関われるようになったが、それでもやっぱり黒髪一色大正時代。善逸と蜜璃ちゃんは異彩を放ちまくりだ。

…面白いやこの二人の関係はどんな感じなのかな？　あまり下世話なものかどうかと思ひ、特に聞いてはいないが——しかし禰豆子ちゃんも相変わらず、僕へ熱い視線を向けてくるもんだぜ。

「や、こんにちは禰豆子ちゃん。今日も美人だねえ」

「あはは、千里さんも美味し——あつ！　…こ、こんにちは！」

…ちなみに熱い視線というのは恋愛なものではなく、美味しそうなのを見る目である。頭の天辺から爪先まで、間違いなく人間へと戻つた彼女ではあるが、鬼だつた時の記憶もしつかり残っているらしい。しかしその『認識』は鬼だつた時の影響がそこそこ出ているのだ。

炭治郎くんの師匠である鱗滝さんの暗示のおかげか、人が食べ物に見えていた認識は残っていないようだが…：特上の稀血であつた僕のこと、『巨大な金平糖』に見えていた記憶が臃げにあるらしい。ちよつと物申したいところではあるが、たぶん僕の体質のデータ取りに何度も付き合ってもらつたせいだろうから、文句は言えない。

…ちなみに善逸のことは『珍妙なタンポポ』に見えていたらしい。こそつと話してくれた、二人だけの秘密である。

「タンポポも元気そうで…」

「タンポポ！」

「せ、千里さん！」

「あ、ごめんごめん。僕と禰豆子ちゃんだけの秘密だつたね」

「なに!?　なんなの!?　二人だけの秘密ってなんなの禰豆子ちゃんあああん!!」

半泣きで禰豆子ちゃんに縋りつく善逸…：まるで三行半みくだりはんを突き付けられた、うだつの上がない男である。

…もう戦うことなんてないだろうし、あの凜々しい善逸を見ることは二度とないのだろうか？　ちよつと残念。

「ま、みんな元気そうで何よりだね…：晩御飯は食べてくでしょ？」

アオイちゃんが朝から張り切ってるぜ」

「いつもありがとうございます。定期健診は今からですか？」

「うん。先に炭治郎くんの方を終わらせちゃおうか」

「…というかさあ、炭治郎だけでよくない？　なんで俺たちまですんの？」

「あのね、善逸。大病つてのは大抵兆候があるし、初期の段階で適切な処置をすれば大事に至らないことが多いの。公的な保険制度が整ってないから、誰でも気軽につて訳にはいかないけど…本音を言えば、数か月に一回くらいは健康診断に来てもらいたいとこだね」

「ふーん…？」

いまいちわかっていない風の善逸。まあこの辺の認識の差は、時代がというより個人差だろうか。しかし定期的な健康診断というのは、意外と重要な問題である。

現代の日本——この時代からは未来だが——では、幼少期から社会に出るまで、そして社会に出てからも頻繁に健康診断を実施しているが、世界的に見ればかなり珍しい部類だ。

しかし日本が長寿大国であるという事実を鑑みれば、その重要性がわかるだろう。とにかく健康でいたいなら、定期的に人間ドックを受けておくべきというのが医者意見である。

「今ちよつとしのぶちゃん出てるから、禰豆子ちゃんの検診は後で…いや、もう僕が見ちゃおっかな！　…ごめん、やっぱ後で」  
「情緒不安定か！」

「いやほら、あんまり信用されちゃうと僕の心が苦しくなるから…」  
「なんだかんだで炭治郎くんや禰豆子ちゃんからの信頼は篤いのだ。『医療行為だから脱いで』と言ったら見せてくれるだろうが、ちよつと罪悪感がね。」

元がベテランの医者だつてならともかく、僕は臨床経験も浅い若造だ。手術の腕——特に器用さには自信もあるが、若い女性の体を機械的に見る境地には至っていない。

…まあそんな医者の方が少数だし、医者なんだから性欲を消せというのは無茶を通り越して無理な話だが。要はエロい感情を表に出す

なという話である。

「じゃ、炭治郎くんはこっちにおいで。カナヲちゃんは皆のおもてなしをよろしく」

「…わかりました」

期待と不安が緋い交ぜになった目で、僕と炭治郎くんを見送るカナヲちゃん。僕が何を言うのか不安で、しかし結果的に『可愛い』なんて言われたらどうしよう……って感じだろうか。任せたまえ任せたまえ。既に一つのカップルを成立させた僕の腕に、隙はないとも。

楽しそうに近況を語る炭治郎くんと一緒に、検査室へ向かう……鬼殺の隊士だった頃と比べて、幾分か雰囲気や和らいだように見える。責任と義務を背負い続け、義侠心に突き動かされていた、強く優しい少年……根つこの部分は変わっていないけれど、殺伐とした環境に居続ける必要がなくなつて、元あつた柔和な部分が強く出てきたのだろう。

そんな彼を見ていると、僕も自然と笑顔がこぼれてしまう。何度も命を救われたからというのもあるが、やはり炭治郎くんの気質や雰囲気そのものが心地良い。

そんなことを思いながら検査を進めていくと、なんだか炭治郎くんがソワソワとし始めた。ソワソワっていうか、もじもじ？ ちよつと頬が赤いようにも見える……おつとお。

もしかして恋愛相談？ こちらから水を向ける必要もなかったよ。うだ。まあ一番身近な大人つて言う僕だろうし……よしよし、何でも聞きたまえ炭治郎くん。

「え、ええと……その……」

「みなまで言うな、炭治郎くん。カナヲちゃんのことだろ？」

「……！ はっ、はい！」

「あの娘はね、しのぶちゃんが妹のように大切にしている娘なんだ。だから僕にとつても大事な妹か……娘むすめみたいに思ってる」

「千里さんも……」

「——君にお父さんと言われる筋合いはない！」

「言つてませんが！」



「はい。ではまず、カナヲちゃんに相応しい理想の男性とは？ ……一般的な価値観を語るなら、これは『三高』を基準とするべきだね」

「三高……ですか？」

「そう、三つの『高』……いわゆる『高血糖』『高血圧』『高尿酸値』のことだね」

「千里さん」

「冗談冗談。三つの『高』とは——いわゆる『高身長』『高学歴』『高収入』のことだね」

「えっ…」

僕の言葉に、ガンとショックを受ける炭治郎くん。バブリーな価値観に打ちのめされているようだ。『高身長』に関しては、まあこの時代だと平均身長がかなり低いから……百六十五センチの彼なら、たぶん平均より数センチは高いだろう。

しかし鬼殺隊においては割と低い方である。なんだかんだで、結局モノを言うのはフィジカルなのだ。体格もない、力もないだとまず試験に通る確率が低い……結果的に鬼殺隊はフィジカルエリートの特団になる訳だ。

『高学歴』に関しては、言うまでもない。そもそも今は義務教育を国が推進している真っ只中……ちようど過渡期である。炭治郎くんの年齢だと、尋常小学校が無償化を始めた時期と——ギリギリ被るか被らないかくらいだろう。学歴なんてものは無くて当たり前前の時代だ。『高収入』に関しては……どうなんだろう？ お金に困っている様子はないが、裕福とまで言えるかは微妙なところである。

隊士の中でも上位クラスの三人がいるのだから、木を伐るのも炭を焼くのもお茶の子さいさいに違いないが……かと言って急に炭の需要が増える訳もなし。少なくとも金持ちとまでは言えない筈だ。

「どうなんぞます！ あーた、うちのカナヲと釣り合う男なんぞます？ 苦勞をかけるのは許さんぞんすよ！」

「なぜ急に廓言葉を……！」

ん？ 廓言葉？ ……ああ、ざますの語源はそっち方面だったかな。そう言えば炭治郎くん、遊郭で小間使いとして潜入していたんだっ

け。

現代の感覚で言えば、金持ちを鼻にかけた人間をわざとらしく表すような語尾だが——遊女が現役の今はそうでもないらしい。僕としては、おフランス帰りの出っ歯イメージが強いけど。

「まあそれは冗談として、カナヲちゃんが好きならズバツと告白すればいいんじゃない？ 悪い返事は返ってこないと思うけど」

「そ、そうですか……？」

ううん……一度決めたら突っ走るタイプの少年だと思っていただけ、意外と恋愛に関してはそうでもないようだ。察しの悪い子ではないし、カナヲちゃんの想いに気付いていてもおかしくはないが——まあそれでも躊躇してしまうのが恋というものか。

「それに、その……カナヲはここで働き続けたいのかなって……」

「二応、カナヲちゃんも看護婦として働いてもらってるけどねえ……それにこだわってはないと思うよ。しのぶちゃんと離れるのは嫌だろうけど、別に今生の別れって訳じゃないんだから。今みたいにちよくちよく来れるんなら問題ないさ」

看護婦が職として成立したのは、本当につい最近だが——試験も何もない、本当にお手伝いさんのような立ち位置だ。キッチンと専門職として制定されるのは、確か第二次世界大戦以降だったと思う。だから仕事そのものに執着するなんてことはないだろう。

「まあでも、結局は自分の経験でしか語れないからねえ——僕としては、恋愛なんて押してなんぼだと思うけど」

「押す……ですか」

「そう、男の方からグイグイ押してくの。雄<sup>オス</sup>だけに」

「……」

「……」

「……」

「……めん」

「いえ」

ほらほら、そんな微妙な顔しないでさ。とりあえず、僕のやり方を余すことなく伝えようじゃないか。それに僕からしのぶちゃんへの

アプローチなんて、蝶屋敷で日常として見てきただろ？ あんな感じでいけば問題ないって。

日本人というのは兎角『奥ゆかしさ』を尊ぶが、女性という生き物は、自分への好意を露わにしてくれる男性の方が好きだったりするもんだ。

「とにかく、僕のやり方を参考にすれば成功は間違いなしさ」

「千里さんのやり方……ですか？」

「そうそう。例えば——ほら、善逸に『モテ』のなんたるかを語った時のこととか覚えてる？ あの時、僕はしのぶちゃんになんて言ったわけ」

『えっと……』って感じで、人差し指を顎にあてて思い出そうとしている炭治郎くん。ちよつとあざと可愛い仕草が妙に似合う少年である。

ちなみにしのぶちゃんへ向けた言葉は『ねえしのぶちゃん、僕のこと好き？』である。炭治郎くんもそれを思い出したようで、手をぼんと叩いた。

「つまり君が言うべき台詞は——『カナヲ、俺のこと好き？』だね」「無理です」

「じゃあちよつと捻って……『カナヲ、俺のこと好きだよね？』とか」「もつと無理です」

「奥手だなあ……なら『カナヲ、俺のことが好きなのは匂いでわかってんだぜ？』とか」

「真面目にお願いしますー」

ええ……？ こんなに真面目にやってるのに。というか実際に僕がやった行動に対して『真面目にやれ』って、それじゃあまるで僕が不真面目みたいじゃないか。

まったく、そんなに無理だと言うなら……うーん……『月が綺麗ですね』作戦は——ああ、あれは失敗したんだった。他に成功したものと言えば……そういうや『しゅきしゅき大作戦』があったな。

「じゃあ炭治郎くん、まず手記を書いてみようか」

「手記……ですか？」

「そう。表題は『炭治郎手記』にしてね」

「ええと…?」

「その表題をカナヲちゃんに“ゆつくり”読んでもらえば、『たんじろー、しゆきい…』と愛の告白を受けることができるって寸法さ。そこですかさず『俺も!』……これで相思相愛、みんな幸せ大団円!」  
「嫌です」

「ああ、『無理です』から『嫌です』に…」

仕方ないなあ、じゃあもうシンプルに褒め殺し作戦でいいじゃないか。褒められて嫌な気持ちになる女性なんてそうはいない。ましてや、好きな人に褒められれば最高の気分だろう。

『そんな感情を直接口にするのは軽薄だ』という、典型的な日本男児の考えはもう古い。胸に秘めたる思いを感じ取れなんて、相手に求めすぎである。そういうのは長く続いた夫婦に生まれるものであって、最初から望むものではないのだ。高じればストーカーになる類の押し付けがましきだよな。

「褒め殺し、ですか…?」

「そうそう。はいじやあ練習いつてみよう! 相手の良いところを先に十個挙げた方が勝ちー!」

「えっ? え…」

「炭治郎くんの良いところはー、優しい、カッコイイ、気遣いができる、芯が通ってる、家族思い、友情に篤い、正義感が強い、真面目、ご飯を炊くのが上手、礼儀正しい!」

つらつらと早口で炭治郎くんの良いところを並べ立てると、彼はあわあわと両手を振って焦り始めた。怪しい自己啓発セミナーでやってそうなやり取りだが、意外と面白いなこれ。

人間、こんな面と向かって褒められることはそうないだろうし、炭治郎くんも顔を赤くしながら照れている。うむ、これは先手必勝が鍵だな……受け手になるとかなり恥ずかしそうだ。

「あ、その、ええと…! せ、千里さんの良い——」

「はいダメー。二回つかえた時点でダメー。悲しいなあ……炭治郎くんは僕の良いところがすぐに出てこないんだ…」

「ええっ!? そ、そんなことありません! その……ええと、とにかく

千里さんは——俺にとってすごく大切な人ですから！」

「あ、そ……そう？ それは嬉しいけど……勘違いされるから、もうちよつと表現を……ん？」

——カタン、と音がして部屋の扉が静かに開いた。二人してそちらに視線をやると、驚愕を顔に貼り付け両手を口に添えたカナヲちゃんがいた……昔の少女漫画にでも出てきそうなシヨック顔である。

炭治郎くんが気になりすぎてこちらへ来たのだろうか、あの表情から考えると、まさにジャスト勘違いな感じで炭治郎くんのセリフを聞いたに違いない……タイミング良すぎで草生える。これは乗ってやらねば無作法というもの……

「炭治郎くん、僕も同じ想いさ。嬉しいよ」

「あつ、あ……うううう!!」

「えっ？ あ、待つてカナ——」

瞳をグルグルさせて、脱兎のごとく駆け出したカナヲちゃん。炭治郎くんはそんな彼女の後ろ姿と、僕の顔を何度か見返しながら、あわあわと焦っている。B.L的な意味なんてまったく含んでいなかったからこそ、炭治郎くんは彼女が逃げ出した意味を理解できなかったのだろう。

「炭治郎くん！」

「は、はい！ あの、なんでカナヲは……」

「今すぐ追いかけて抱きしめてカナヲちゃんの良いところを十個言えば絶対に上手くいくよ」

「え、え……？」

「むしろそうしないと、下手すりやこのまま帰ってこないかもだぜ。気付いてないなら言うっておくけど——いま！ 恋の成就がかかっている！」

「——っ！ い、行つてきますー！」

おつ、迷いのない表情……これは上手いきますね間違いない。追いかけて野次馬したいところだが、残念ながら今の僕ではあの二人に追いつくことはできない。まあでも、カナヲちゃんの良いところ十個に『可愛い』が入らない筈ないし……もはやナーズ服の権利は頂いた

も同然だろう。

備品入れからナース服のサンプルを引つ張り出し、再確認をする。いやあ……エチエチにも程があるぜ。スカートとかなにこれ、ワカメちゃん？ 胸元はもちろん恋柱リスペクト。

これを着たカナヲちゃんが患者の血圧を測ったら、全員高血圧待つたなしである。これはもう……流石に炭治郎くんが悪いかなあ。いやしかし約束は約束だし……そうだ、むしろ二人にプレゼントしてーん？ 後ろから恐ろしい気配が……あっ……

「……やあ、お帰りしのぶちゃん」

「ただいま帰りました、千里。ところでその手に持っている不埒な衣装はなんですか？」

「えーと……看護婦用の制服のサンプルなんだけどね。こんなお使いるかって、苦情の手紙をね、うん。書いてたところなんだ、そう。まったく、何を考えてるんだか……」

「そうですか。では焼却処分しますから、預かりますね」

「そんな雑用、しのぶちゃんがやることないさ」

「なら私の目の前で燃やしてください」

「あのね、しのぶちゃん。今の時代だとまだ問題になってないけど、なんでもかんでも燃やすのは環境に良くないんだよ。ダイオキシン類に代表される難分解性物質が大気中に……」

「千里」

「すみません」

さよならナース服……迂闊に晒した僕を恨んでくれ。ジト目で睨んでくるしのぶちゃんをなんとか宥めすかし、服を燃やすために外へ出る。縁側の方へ回ると、炭治郎くんとカナヲちゃんが両手を握りあい——真っ赤な顔で見つめあっていた。初々しい様子がどうも心をくすぐってくるぜ。

どう転んでも二人は一緒になるだろうと、そう考えていたからちよつと揶揄ってみたが……まあ予想通りだ。僕もしのぶちゃんも純情とは程遠いので、あんな甘酸っぱい感じはちよつと憧れる。チラツと彼女の顔に視線を向けると、こてんと首を傾げられた。

「…なんですか？ 人の顔をまじまじと眺めて」

「――相手の良いところを、先に十個挙げた方が勝ちね。はい、よいスター…」

炭治郎くんと同じように照れさせてやろうと、いきなり勝負を持ちかける。急にそんなことを言われて反応できる人間など、そうはいないだろう――つまり僕の勝利は確定的に明らかである。

…しかし、しのぶちゃんは即座に人差し指を僕の口に当て、くすりと微笑んだ。そして僕の耳元へ口を寄せ、甘いひそひそ声で睦言むつごとチツクな言葉を囁き始めた。

――うん、これ…めっちゃ恥ずかしいな。ごめんよ炭治郎くん、僕が悪かった。

## 後日譚 2

春にしては太陽の日差しがキツイ、五月の半ば。目的地に向かつて黙々と登山しているのだが——そろそろ到着かといったところで、妙に猫の姿を見掛けるようになった。猫の生活圏ってかなり人間と被ってる筈だし、いくら大正時代とはいえ山の中で野生として生きてるってのは違和感がパない。

近くの民家で飼ってる半野良かな？ …となればこんな山奥に居を構えている人間は、目的地である屋敷の主くらいのものだろうか、つまりはそういうことなのだろう。そういやしのぶちゃんが『悲鳴嶼さんは猫が好きなんですよ』って言ってたっけ。

岩属性の大男にして猫好きとか、ギャップ萌えを狙っているのかな。女性だったらキュンとくるのかもしれないが、生憎と僕は男である。同性に対して胸キュンするとすれば、伊之助が女装した時くらいのものだろうか。

ちなみになぜ僕が悲鳴嶼さんの屋敷へ向かっているかというならば、それは半月ほど前の話に遡る……しかし遡るのは面倒くさいので、とりあえずさっさと屋敷に向かおう。猫の行動範囲って実はかなり狭いから、この子たちが悲鳴嶼さんの屋敷を拠点としているとすれば、もう目と鼻の先だろう……おっ、見えてきた見えてきた。

『柱』の住居ともなれば大抵はザ・屋敷って感じだけど、悲鳴嶼さんの家はそこまで広くないようだ。まあ他の柱も別に贅を尽くしたって訳じゃなく、それまでの柱の屋敷を受け継いだだけだったり、修練場の広さに見合った建物を用意したっただけの話だけど。そして悲鳴嶼さんの場合は、山を修行の場に使っていたから道場は不要だったに違いない。

…おや？ 誰か家の前に……むむ、あれはもしや……かいがく 嶺岳くんではなからうか。お爺ちやまを前に逃げ出し、逃げた先で悲鳴嶼さんにとっ捕まり、マジで切腹五秒前だった嶺岳くん。うん、たぶんそうだろう。

…よほど変化がない限り、僕は人の顔を忘れないタチだが——なぜ



彼が獺岳くんであると確信を持ってないのか。それはひとえに、髪の毛が無いからである。頭クリンで草。それに服装からしても、まるでお坊さんの弟子って感じた。

未遂とはいえ、色々やらかした責任を取らされたのだろうか？ まあ腹切りだ切腹だとうるさかった実弥の手前、お咎めなしとはいかないのはわかる。頭を丸めるだけで済んだのは、むしろかなりの温情だろう。

お坊さん見習いになったのなら、獺念とか岳念とかそんな感じに改名した可能性もあるな……まあ何はともあれ、声をかけてみよう。

「や、空念くうねん。久しぶりだねえ」

「誰が空念だ」

「…珍念ちんねん？」

「違う」

「じゃあなんやねん」

「…ねん」から離れるクソが！

「あ、はい」

「俺から離れるんじゃねえよ!!」

雷の呼吸を使う子は、みんなツツコミのキレがいいなあ。しかし『俺から離れるな』とは、中々にカツコイセイリフである。表情とシチュエーション、そして性別さえ違っていれば胸がトウクしていたかもしれない。

「それはともかく、悲鳴嶼さんはご在宅——」

「引っ付くな！ 気色悪いんだよ！」

「だって『俺から離れるな』って言うから…」

「適切な距離をとれつつってんだ！」

「つとと、ごめんってば。そんなに怒るとは思わなかったんだ…」

うーん、申しわけ毛無ない」

「…おい、いま発音がおかしくなかったか」

「流石にそれは疑心暗鬼が過ぎるんじゃない？ 無理やり剃髪させられたのは、そりゃあ同情するけど…うむむ、どうハゲましたものか——げふうっ!!」

「死ね!!」

ぬう……まったく、助命を嘆願した恩も忘れて僕を殴るとはね。まあ流石にからかいすぎたか。普段なら敵以外にここまでおちよくることはないんだけど——何と言つても、いまだに彼は『お札』のおの字すら言つてこないのだ。ちよつとばかし毒を吐いても許されると思うの。せめて手紙くらい送つてきてよね。

お爺ちやまから助けてー、柱を説得してー……これはもう、僕に足を向けて寝られないくらいの恩だろう常識的に考えて。炭治郎くんとかなら善意に見返りは求めないのだろうが、残念ながら僕は割とみっちいのだ。年賀状の返事が二年続けてこなかったら、もう送らないくらいにはみみっちいのだ。

「…誰か来たのか、獺岳」

「あ、悲鳴嶼さーん。お久しぶりです、千里です」

相変わらずおつきいなあ……僕も人のことは言えないけど。でも少し威圧感が減ったかな？ まあ悲鳴嶼さんに限らず、鬼殺隊の剣士だった人たちは殺伐とした雰囲気がどんどん剥がれていつているように思う。非常に良い傾向と言えるだろう——……っ!? 悲鳴嶼さんまた泣いてるウー!!

「そうか、生きていたのか…」

「この前の誕生日に『生きてた』って報告しましたよ!? 鏖鳥まで送つて!」

「四月馬鹿かと…」

「そこまで不謹慎に見えますか?」

「…」

返事してよね。というか、エイプリルフルってこの時代にもう伝わってたのか…? 僕が子供の頃には、一般的じゃなかったと思うけど。少なくとも、四月一日が誕生日だったのでネタにされたことはない。

——ともあれ、悲鳴嶼さんもお元気そうで何よりだ。獺岳くんは『死ねばよかったのに』という表情だが、まあツンデレということにしておこう。

「なんにせよ喜ばしいことだ……獺岳、茶の用意をしてくれるか」

「…はい」

「雑巾のしぼり汁とか入れないでね」

「入れるか」

「ネコの糞とか入れないでね」

「お前は俺をなんだと思ってるんだ？」

「ちなみに世界最高級の珈琲は、ジャコウネコの糞から取れるんだぜ」  
「!？」

『マジかよ…』みたいな表情で離れていく獺岳くん。彼も頭髪以外は元氣そうで何よりだ。でもやっぱりお礼はなかったな……他人に感謝できない人間って、あんまり幸福に生きれる感じしないよね。

実際問題、初めて会った時から今の今まで、彼の心は荒み<sup>すさ</sup>つばなしだ。承認欲求が強すぎるのかな？ 今度、なろう風の小説でも書いて送ってあげてみようと思う。『俺を正当に評価しなかった奴らが今さら後悔してる件』とかどうだろうか。

「そうそう悲鳴嶼さん、これお土産です。炊き込みご飯が大好きだと聞いたので——」

「む……」

「日保ちする焼き菓子を作ってきました！」

「…」

「…」

「…炊き込みご飯のくだりは必要だったか？」

「いえ、特には」

「…そうか、有難くいただきます」

んもう、ツツコミが弱いぜ。とはいえ悲鳴嶼さんが『なんでやねん！』とか言い出したら、それはそれでなんかヤだけど。彼とドツキ漫才などしようものなら、舞台が血に染まりそうである。

——さて、茶の間に案内されて近況など語り合うこと十数分……そろそろ此処へきた用件を話してもいい頃だろう。悲鳴嶼さんにとってはあまり踏み込んでほしくはない部分だろうが、色んな意味で必要なことなのだ。

「先日、とある商家の旦那さんのところへ往診に行った際……ついでに小間使いさんの病気を診てやってくれないかと頼まれました」

「……？」

「詳しく聞いてみるとその女中さん、どうやら声を出そうとしても出ないらしく。いわゆる失声症というやつだったんですね」

「……ふむ」

「……勘違いされがちですけど、失声症つてのは喉や声帯の損傷じゃないんですよ——心の病なんです」

精神病なんてのは、未来でも定義が曖昧な分野である。ましてや今の時代だと心療内科なんてものすら存在しないし、心に傷を負った人たちへの風当たりは強い。そして精神的に不安定な患者にとつて最大の毒は『無理解』からくる中傷である。

失声症を例にすれば……患者がなんとか声を出そうとして、吃音や変な声が出たでしょう。それに対しての嘲笑や叱責は、大きなストレスとなり更なる病状の悪化を招く。そういった経験が悪循環して積み重なると、本当にまったく声が出なくなってしまうのだ。

「読み書きもあんまりで、事情を把握するのに随分かかっちゃったんですけど……どうやら幼い頃、鬼に襲われたせいで心神喪失状態になったらしく。その後もあまり良い生活を送れていなかったようで、気付いたら会話できなくなっていたそうです」

「鬼が消えたとはいえ、その爪痕まで全て消え去った訳ではないか。なんと不憫な……」

「それで、その子の名前なんですけど……沙代ちゃんって言うんです。鬼に襲われたのは十年ほど前だと」

「……」

悲鳴嶼さんの過去——身寄りのない子供達と暮らしていたことや、それを鬼に引き裂かれたことは既に聞いている。沙代ちゃんがその生き残りだと判明した時点で、しのぶちゃんが説明してくれたのだ。

悲鳴嶼さんが夜明けまで鬼を殺し続け、沙代ちゃんを守り切ったこと。しかし当の沙代ちゃんの証言により投獄され、処刑されかけたこと。それを耀哉が察知して、鬼殺隊に勧誘したこと。

耀哉本人にも確認を取り詳細を聞いたが、とても悲しい事件だ。当時の沙代ちゃんも四歳の子供で、シヨックが重なったこともあり上手く証言ができなかったらしい。

とはいえ、状況的に悲鳴嶼さんが逮捕されたのは必然でもあったと思う。そもそも幼い子供の証言など、法的に『証言』として扱われることはない。たとえ彼女の証言がなくなるとも、『多数の子供の死体』と『両手が血まみれの悲鳴嶼さん』を見れば十二分に疑わしい。

そんな疑わしい人物が『鬼が出た』などと世迷言を言えば、犯人待ったなしだろう。

しかし悲鳴嶼さんからしてみれば、守った本人から『あの人は化け物』『みんなあの人が』『あの人が殺した』などと証言されたのだ。その言葉にどれだけ傷付けられたのか、僕には想像すらできない。

けれど、沙代ちゃんの言葉はすべて鬼に対しての言葉だった。死体が残らない鬼への証言は、その場に居たもう一人に集約されてしまった訳だ。

成長し、自分が発した言葉の結果を真に理解した時、彼女もどれだけ傷付いたことだろうか。そしてその心の傷は、今もなお失声症という障害となって彼女を苦しめている。

——鬼を招き入れ悲劇を引き起こす一因を担った獺岳くんは、常に自分が正しいと、間違っていないと意固地になっている。その悲劇の被害者で、言葉足らずな証言により冤罪を強固にしまった沙代ちゃんは、自分の罪を背負いきれず声を失った。

誰が悪いとか、こうすれば良かったとか、言葉にするだけなら簡単だ。鬼さえいなければと憐れむのも。だけど、それでも彼等は今を生きている。

『真つ当に生きろ』とか『前を向いて歩こうよ』とか、他人がおいそれと助言するようなことではないと僕は思う。どれほどの悩みや後悔も、過去を変えられない以上、それは彼等を形成する要素の一つなのだ。

獺岳くんは決して善人ではない。自分の命のために家族を売り、鬼殺隊を裏切ろうとしたのは確かな事実だ。しかしそれを悪というの

は、少し違うような気もする。

誰にだって大切なものがあって、それを優先するのは当然だ。彼の場合はそれが『自分』で、生き延びるためなら他者の犠牲を許容できるのだろう。でもそれって悪なのだろうか？

たとえば家族のために他者を犠牲にしてしまった——なんて話なら共感する人は大勢いるだろうし、仕方なかったと同情する人もきつと出てくる。

けれどその『犠牲』が仮に数万人だったならば、いくら家族のためとはいえ、その行動を悪だと責める人はずっと多くなる。ましてや日本国民全員が犠牲だったなんて話になれば、極悪人というレッテルは確実だ。

本質はさして変わらない筈のそれは、どこからが『善』で、どこからが『仕方ない』で、どこからが『悪』なのか。

獺岳くんは……生贄を差し出したから、裏切ったから彼は悪なのだろうか？ 誰かにそう問いかければ、それなりの人数がすぐに頷くと思う。けれど、じゃあ彼はそのまま死ぬべきだった？ と聞けば即答する人は少ないんじゃないだろうか。

世の中の出来事の半分くらいは、見る方向を変えれば印象も変わる。人が主観を除いて物事を判断するには限界があるのだ。僕は獺岳くんじゃないし、沙代ちゃんでもない。彼等の心を理解できる訳でもなければ、ずっと寄り添って励まし続けられるほど親密でもない。

僕にできるのは、もしかしたら良い方向に向かうんじゃないかっていう——その可能性のお手伝いをするくらいだ。悲鳴嶼さんへの義理でもあり、沙代ちゃんへの同情でもあり、そして獺岳くんへは……何と言えばいいのかはわからないが、応援したい気持ち少しある。

自己愛が激しいし、不義理の極みのような人間だとは思う。でも彼は鬼殺の剣士だったのだ。鬼に殺されかけ、家族を売ってまで生き残りたいと思った彼の進んだ先が——鬼殺隊だなんて、そんな矛盾があるだろうか。

人の上に立ちたいだとか金や力が欲しいだとか、そんな欲望があったとしても、鬼殺隊という選択肢は悪手も悪手だ。自分の命を大事に

している人間が入る組織では、絶対がない。

知らずに入ったとしても、階級の高い剣士になるまでに『割が合わない』と気付くタイミングはいくらでもある。そもそも鬼殺の剣士となった時点で、普通に寿命を迎えて死ぬことはほぼない。死亡以外での引退はたぶん1%を切っているだろう。

なのに鬼殺隊に居続けたのは……少なからず、自分が仕出かしたことに後悔があつたんじゃないかと——鬼に対しての怒りがあつたんじゃないかと僕は思う。

もちろんそれだけではないだろうし、人の感情なんてのは常に揺蕩たゆたってるものだ。命というチップを差し出しても、剣士でいるメリットを見出しただけかもしれない。結局はお爺ちやまにくだろうとしたのだから、鬼への怒りがあつたとしてもちっぽけな気持ちだったのかもしれない。

それでもやつぱり、僕は彼の……ん？ あ、ちよつと思考に沈んでたせいで悲鳴嶼さんを無視してしまっていたようだ。なにやら僕目の前で両手を叩——

「——耳があ、ああ!!」

「……大丈夫か」

「大丈夫じゃないです!」

両手を打ち鳴らす必要つてあつた? というかなんで手を叩くだけで衝撃波みたいなのが出るんだ。まったく……悲鳴嶼さん相手だと、僕がツツコミ役になるのが困りものだ。

「沙代の件についてだが……おそらく、私ではあまり役に立てないだろう。あの子は私のことを化け物だと思っている。会えばむしろ恐怖が甦るのではないかと思う」

「あ、いえ……あの子の病気は、鬼への恐怖からではありません」

「……? それは……」

「事が起こった直後は話せていたでしょう? だから原因はたぶん——自分の言葉が原因で悲鳴嶼さんを殺してしまったという、罪の意識だと思われれます」

「……!」

「悲鳴嶼さんもご存知でしょうが、耀哉は裏から手を回して貴方の処刑を無かったことにしました。しかし『撤回』ではありません」

「ああ、そうだ」

「権力者が法を捻じ曲げる……たとえそれが正義に基づくものだとしても、法治国家としてはあつてはいけないことです。だからこそ悲鳴嶼さんの処分に関しては、かなり曖昧な状態となっています。戸籍上で死亡扱いにはなってはいませんが、一般の人間が貴方を調べようとすれば、既に処刑済みだと知らされるでしょう」

「…ああ。沙代は私が死んでいるものと思っている筈だ」

「ですね。ただ悲鳴嶼さんの了承なしに生存を伝えることは出来なかったのです、今日はその了解を取りにきたんです。それと、できればあの子に会って頂きたいと」

「…！」

「彼女にとって貴方との思い出は『十年前のこと』ではありません。そんな風に割り切れていないからこそ、声を失ったままなんです」

「…」

「あの娘は——叶うのならば、悲鳴嶼さんに一言でも謝りたいと……そう言っていましたよ」

「…声は出ないのだろうか？」

「失声症は、喉や声帯の損傷じゃないと言いましたよね。咳やくしゃみは出ます……それに、おえつ鳴咽も」

「…！ ……そうか……わかった。すぐに支度をしよう」

…たとえ自分が会いたくなかったとしても、沙代ちゃんにとってそれが必要ならば悲鳴嶼さんは会ってくれるだろう。そう思つて僕はここに来たし、事実その通りになった。ただ一つ懸念があるとしたら——冷めたお茶を持ったまま、扉を開けずに聞き耳を立てていた獺岳くんの事くらいか。



——隣の部屋から聞こえる、涙交じりの謝罪。何度もごめんなさい、ごめんなさいと、か細い声が聞こえる。ようやくの再会、そして沙代ちゃんが声を出せたこの状況……僕もちよつと涙腺が緩んできた。年を取ると涙脆くなるというが、意外と事実である。

僕の近くには、表情を曇らせたままの獺岳くんがいる。二人の再会をどう思っているのか——あるいは自身ですらよく解っていないのかもしれない。

「…会っていかないのかい？ 沙代ちゃんは君も死んだものだって思ってるぜ。まだ小さかったから……君が追い出されたことも、鬼を引き入れたことも知らなかったんだね」

「…」

「悲鳴嶼さんも、わざわざ真実を話すことはないだろうし。知らない方が幸せなことってあるからねえ」

「…テメエはよお、俺にどうしてほしいってんだ？ 道中も説教じみたことをクドクドと……ああ？ 改心しろってんならお門違いだぜ。なにせ悪いことをしたなんて、欠片も思っただけだからなあ！」

「あのね、獺岳。『俺は悪くねえ！』ってのは、自分の罪悪感と折り合いをつけられない人の言葉だよ。本当に悪いと思っただけなら、『俺なんかやつちやっただ？』とか『ごめんごめん、でも俺が生きるためだったから仕方ないよね』くらいにしか思わないもんさ」

「…」

…うーん。言ってる思ったが、童磨さんが吐きそうな言葉だな。まあでも、本当に悪いと思っただけ人間はもつと堂々としてるもんだ。『自分は悪くない』と自分に言い聞かせてる時点で、罪悪感が存在していることの証明だろう。

「…正義とか悪とかって、考えると難しいもんだよね。結局は感情でしか決められないものだから」

「…」

「有罪か無罪かってなら簡単なんだけどね…：法的に言うなら、君は無罪だろうし」

「…なに？」

「他者に害を与える行為を強要された——自分の命を脅かされた状態で。これは緊急避難の対象として十分な根拠があるし、ましてそれが十やそこらの少年なら罪に問われる可能性はほぼゼロだよ」

「…っ」

「鬼になろうとしたことが罪になるかどうか…：専門家に聞いたら『お前は頭がおかしいのか？』って言われるだろうね」

「…だからなんだ」

「——だけどね、やっぱり君は一つの罪を犯してた」

「…っ…：いきなり矛盾させてんじゃねえよ…！——いったいどんな罪だつてんだ！ 言ってみろよ！」

「廃刀令違反だ」

「おい」

真面目に頷く僕の首を、ギリギリと締め上げてくる獺岳くん。いやでも、刀を持つのは完全に違法だもの。僕の言っていることは間違っていない筈だ。肩をタツプすると緩めてくれたので、マジギレはしていないみたい。

「そう、廃刀令違反…：鬼殺隊の剣士はみんな帯刀してた訳だから、罪人と言えば罪人だね。でも誰か自首したかい？」

「ああ？ 誰がするかそんなもん」

「でしよ？ 鬼殺隊の人は『正義』寄りの人が多いけど、帯刀に関しては仕方ないと思っただけだし、罪の意識がある訳でもない」

「…何が言いたいんだ」

「法を犯したからといって悪とはいえない。だけど、法を犯していないから正義って訳でもない。獺岳…：君は自分の行動を『間違っただけ』って言っただけよ？ それはそれとして、後悔はしてるように見

えるな」

「っ、何を——」

「その二つは同居できる感情じゃないかな。正しいことをして後悔するのも、悪いことをして後悔しないのも、どっちも間違っていないと思う」

「…っ、うぜえんだよ…！ 小難しいことをらしく言っつて、坊主気取りか？ いかにも『悟ってます』ってなあツラ見ると虫唾が走るぜ…！」

「…」

「…」

「…」

「何とか言えよ！」

「ナントカ」

「死ねクソが！」

アイアンクローで僕の顔を握りしめてくる獺岳くん…：…今度は手首をタツプするも、中々放してくれない。痛い痛い…：…あつ待つてこれ本当に痛い——いだだだっ！ くそっ、こうなりや髪の毛を引っ掴んで…：…はっ！ 一本もない！

「あーもう！ じゃあ面倒くさい言い回しはやめてはつきり言おうじゃないか！」

「…言ってみろよ」

「僕まだお礼を言ってもらってないんだけど！」

「俺が知った事か！」

「人に感謝できないから君は成功できないの！ わかる!？」

「んだと…！」

「誰かに認められたいなら、他人へ気を遣えっつて言ってるの。仲良くするのと媚びへつらうのは違うんだよ？ 認めさせるんじゃない——認めてもらうんだ。それに気付けないなら、もし成功したつていつか蹴落とされるよ」

「ハッ、テメエも爺みてえなこと言いやがる…！ 蹴落とされる前に

蹴落とせば、ずっと成功したままだろうがよ！ ああ!？」

「確かに…！」

「納得すんじやねえよ!!」

「…納得はしてないよ。だって、ずっと強いままでいるなんて不可能だろ? 弱ってる時に助けてくれる存在は必要だよ……そんな打算すら考えられないから、君は未熟なのさ」

「っ……!」

「最初は打算でもいいんだよ。その内『これはこれで悪くない』とか考えだして……なんやかんやあって『俺が間違ってた、ごめん先生』とか言いだして……最後に『この俺が安らかに逝けるとはな…』なんて感じで死にそうだよね君って」

「お前はふざけないと死ぬ病気か何かなのか?」

んまあ、僕に言えるのはこれぐらいか。彼と関係の薄い僕の言葉じゃ、どうしても芯までは届かないだろう。見知らぬ他人に『嫌い』って言われるのと、好きな人に『嫌い』って言われるのじゃ訳が違う。『誰に言われた』かで心のありようは変わってくるもんだ。

「んじゃ、あとは三人で」

「ああ? ——っ!」

「…かいがく…?」

「…っ、沙代…」

隣の部屋でこんだけギヤアギヤア騒いでたら、そりやあ気付くつてもんだろう。ドアを開けて姿を現した沙代ちゃんが、わんわん泣きながら獺岳くんへと抱き着いた。

真実を語るのか、黙するのか。それは彼らが決めることであり、僕が口を出すことではない。沙代ちゃんに泣かれる資格なんて、獺岳くんにはしらないと——きっとそう言う人もいるだろう。

それでもやっぱり……あの三人が、いつかの団欒を取り戻せたらいいなと思ってしまう。